財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第526集

横壁中村遺跡⑿

― 縄文時代の集落内埋没河道と配石遺構 ―

八ッ場ダム建設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書第37集

2012

国　　土　　交　　通　　省

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

横壁中村遺跡(12)

― 縄文時代の集落内埋没河道と配石遺構 ―

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第37集

2012

国　土　交　通　省
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

1　遺跡遠景（北東から）　中央の丸岩の下、橋の右手が遺跡地で、代替地として埋土が終了している。手前の橋を架けているのが吾妻川で、遺跡地付近では30ｍ以上の断崖を形成している。平成20年５月撮影。

2　発掘以前の遺跡地遠景（北東上空から）　左手の集落の中を流下するのが東沢。その右手が横壁中村遺跡。平成６年撮影。

1　18区１号埋没河道調査状況　上が東、左手の吾妻川が北にあたる。

2　18区４号列石確認状況　上が東、左が北。中央を横切る暗色部が18区１号埋没河道で、４号列石はその中流部にある。

1　18区 4 号列石全景（上空から）　上方が南。斜めに横切る暗色部が埋没河道。

2　18区 4 号列石全景（北から）　上方が南。斜めに横切る暗色部が埋没河道。

1　18区４号列石を東から見る。　左上は堀之内１式期の19区27号住居で、その主体部の東西中軸線上に25号・26号配石が配置されている。右上で作業中の様子を見ると、埋没河道の状態がよくわかる。

2　同上。　中央部に25号・26号配石が直線で並び、その奥に19区27号住居がある。配石群から埋没河道の下流側（右手側）に下っている状況がわかる。

1　18区25号配石北側（下流側）の遺物出土状況。　配石上から投げ入れられたように大型土器が出土。手前の石の下にも土器が見える。土器はいずれも堀之内１式期。

2　18区４号列石の主要部を北から見る。　左手前が28号配石、中央が27号配石、その奥が26号配石、右手奥が25号配石。全体の形状は潰れた二等辺三角形状のように見える。

1　加曽利E1式浅鉢（第192図 4 ）

2　同 1

3　加曽利E1式浅鉢（第192図 6 ）

4　加曽利E1式浅鉢（第193図 9 ）

5　加曽利E3式浅鉢（第189図 5 ）

6　同 5　内面の大柄な渦巻文

7　加曽利E1式浅鉢（第192図 1 ）

8　加曽利 E 式浅鉢（第196図 9 ）

序

八ッ場ダムは、首都圏の利水および治水を目的として計画され、現在は吾妻郡長野原町を中心に工事が進められています。

八ッ場ダムの建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、当事業団が平成６年度から実施し、本年度で18年目を迎えます。横壁中村遺跡は平成８年度から発掘調査が開始され、平成18年度に至るまで継続された長期にわたる大規模な調査となりました。また調査された遺構や遺物は、本遺跡が縄文時代を中心とする、非常に大きく、また長く続いた集落であることを示しております。これらの膨大な資料を整理し報告する作業は平成15年度から開始され、今回は縄文時代早期から晩期終末の遺物を包含する埋没河道と、そこに残された中期から後期の列石・配石遺構に関する報告を纏めることができました。本書は縄文時代の集落の構造を考える上で、また長野県、新潟県地域との広域な交流を考える上で重要な資料となると考えております。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、国土交通省八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会、および長野原町教育委員会をはじめとする関係機関や地元関係者のみなさまには、多大なるご尽力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり、衷心より感謝申し上げます。

また本書が吾妻郡内、ひいては群馬県の歴史を解明する上で末永く活用されることを願い序といたします。

平成24年２月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　須　田　栄　一

例　　言

1　本書は、八ッ場ダム建設工事に伴う事前調査として、平成８年度から実施されている『横壁中村遺跡』の発掘調査報告書である。横壁中村遺跡の発掘調査報告書は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第319集『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』を第１冊目として、既に11冊が刊行されている。本書は、横壁中村遺跡で検出された縄文時代の集落内埋没河道と配石遺構および出土遺物を掲載しており、横壁中村遺跡の発掘調査報告書の第12冊目である。

2　横壁中村遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字横壁字観音堂530他に所在し、長野原町教育委員会と協議の結果、本遺跡名が決定された。

3　本発掘調査は、群馬県教育委員会の調整に基づき、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が国土交通省関東地方整備局（平成13年１月までは建設省）の委託を受けて実施した。平成14年度からは、八ッ場ダム地域埋蔵文化財調査を目的に設置された、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団八ッ場ダム調査事務所が担当している。

4　発掘調査は平成８年４月１日から平成18年３月31日まで実施しており、今回報告する遺構の調査年度はおもに平成13～15年度に調査されたものである。

5　発掘調査体制は以下のとおりである。

調査担当　阿久津聡、池田政志、石田　真、小野和之、関　俊明、藤巻幸男、松原孝志、諸田康成、
渡辺弘幸、綿貫邦男

6　整理期間は平成21年４月１日から平成23年３月31日である。

7　整理体制は以下のとおりである。

整理担当　藤巻幸男（上席専門員）、遺物写真撮影　佐藤元彦（補佐）

8　本報告書作成の担当

編　　集　藤巻幸男
執　　筆　石田　真（群馬県教育委員会文化財保護課指導主事）－第１章
藤巻幸男（上記以外）
石材同定　渡辺弘幸（甘楽町新屋小学校教諭）、藤巻幸男
遺構写真撮影　各調査担当者
委　　託　遺構測量および空中写真　株式会社測研
遺構図デジタル編集　株式会社シン技術コンサル
整理補助　石村千恵美、吉田豊子、黒岩扶美枝、富澤友理、篠原了子、唐澤美恵子、鈴木理佐、
安ヵ川京美、川津えみ子、山口郁恵、中嶋公江、日野亮子、関　裕子

9　出土遺物及び記録図・写真などの記録類は、すべて群馬県埋蔵文化財センターで保管している。

10　発掘調査および報告書作成には、次の関係機関、諸氏にご助言をいただいた。記して感謝いたします。

国土交通省関東地方建設局八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会文化課、長野原町教育委員会、
大竹幸恵（長門町立黒曜石体験ミュージアム）、金子直行（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）、小池岳史

（茅野市教育委員会）、佐藤雅一（津南町教育委員会）、白石光男（長野原町教育委員会）、大工原豊（國學院大學）、寺内隆夫（長野県埋蔵文化財センター）、富田孝彦（長野原町教育委員会）、能登　健（前橋市教育委員会）、平林　彰（長野県埋蔵文化財センター）、福島　永（辰野町教育委員会）、松島榮治（元嬬恋村郷土資料館館長）、綿田弘実（長野県埋蔵文化財センター）、渡辺清志（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）

凡　　例

1．挿図中に使用した方位は、座標北を表している。本書で使用する測量図の座標はすべて、2002年４月改正以前の日本測地系を用いている。
2．調査範囲には４ｍ×４ｍのグリッド網を設定し、各グリッドの呼称は南東隅の交点を当てている。
3．遺構図の縮尺は、列石にかかる図は1/80、配石にかかる図は1/40を基本とした。
4．遺構番号は、調査時の番号を用いている。当遺跡では調査中あるいは整理段階で各遺構の再検討を行っており、他の遺構に組み入れられたものや、遺構認定から外されたものもあるため、遺構番号は連続しない。
5．遺構図面中における遺物番号は遺物実測図の番号と一致する。また、●は土器、▲は石器を表し、図示した遺物でこの表示のない遺物、遺構図中に番号のない遺物は出土位置を記録しなかったものである。
6．遺物図の縮尺は土器実測図は1/4、土器拓本は1/3、石器1/3を原則としたが、これ以外の縮尺を用いている場合も多い。その場合は各遺物実測図に記した。
7．石器実測図では、自然面を点描、磨り面と欠損面を白抜きとしている。
8．写真図版中の遺物の縮尺は、概ね遺物実測図と同縮尺とした。
9．遺物観察表の記載方法は下記の通りである。
　（１）土器の計測値の単位は㎝である。
　（２）石器の計測値の単位は㎜である。
　（３）石器類の重量はすべて残存値であり、単位はｇである。
　（４）色調については、農林水産省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の新版標準土色帖に基づいている。

目　次

序

例言

凡例

目次

挿図目次

写真目次

表目次

第１章　調査の方法と経過

第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・ 1

第２節　調査の経過・・・・・・・・・・・・ 1

第３節　調査の方法・・・・・・・・・・・・ 4

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・ 5

第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・ 7

第３章　発見された遺構と遺物

第１節　遺跡の概要・・・・・・・・・・・・ 14

第２節　基本土層・・・・・・・・・・・・・ 16

第３節　18区１号埋没河道の調査

1　埋没河道の位置と確認の経緯・・・・ 19

2　埋没河道の形状と埋没過程・・・・・ 23

3　調査経過と遺構・遺物の概要・・・・ 23

4　河道内の遺物出土状況・・・・・・・ 27

第４節　縄文時代の配石遺構

1　18区４号列石の調査・・・・・・・・ 43

2　18区４号列石を構成する配石の調査・ 43

3　18区４号列石出土遺物・・・・・・・ 46

4　その他の後期配石遺構の調査・・・・136

5　中期配石遺構の調査・・・・・・・・136

第５節　18区１号埋没河道内出土遺物・・・155

第４章　発掘調査の成果とまとめ

第１節　集落内埋没河道と配石遺構・・・・283

第２節　出土遺物について

1　唐草文系土器の初源・・・・・・・・285

2　赤色塗彩浅鉢の類例・・・・・・・・288

遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・ 301～347

抄録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・348

写真図版・・・・・・・・・・・・・・・PL.１～79

付図（３枚）

挿 図 目 次

第１図　年度別調査区全体図 …………………………………… 3
第２図　八ッ場ダム建設地域の位置 ………………………… 6
第３図　遺跡の位置と周辺遺跡 ……………………………… 10
第４図　遺跡周辺の地形と発掘された遺跡の分布 ………… 11
第５図　遺跡周辺の地形と調査範囲 ………………………… 15
第６図　横壁中村遺跡基本土層図 …………………………… 16
第７図　発掘された遺構配置図 ……………………………… 17
第８図　18区１号埋没河道の位置と形状 …………………… 20
第９図　18区の地形と１号埋没河道 ………………………… 21
第10図　18区１号埋没河道の形状と断面実測位置 ………… 22
第11図　18区１号埋没河道の落差と断面形状 ……………… 23
第12図　18区１号埋没河道断面図（１） …………………… 24
第13図　18区１号埋没河道断面図（２） …………………… 25
第14図　18区１号埋没河道点上げ縄文土器出土点数 ……… 29
第15図　18区１号埋没河道の落差と縄文土器出土状況 …… 30
第16図　18区１号埋没河道点上げ縄文土器出土状況１ …… 31
第17図　18区１号埋没河道点上げ縄文土器出土状況２ …… 32
第18図　18区１号埋没河道点上げ縄文土器出土状況３ …… 33
第19図　18区１号埋没河道点上げ縄文土器出土状況４ …… 34
第20図　18区１号埋没河道点上げ縄文土器出土状況５ …… 36
第21図　18区１号埋没河道点上げ縄文土器出土状況６ …… 37
第22図　18区１号埋没河道点上げ縄文土器出土状況７ …… 38
第23図　18区１号埋没河道点上げ縄文土器出土状況８ …… 39
第24図　18区１号埋没河道グリッド上げ縄文土器出土点数１ ……………………………………………………………… 40
第25図　18区１号埋没河道グリッド上げ縄文土器出土点数２ ……………………………………………………………… 41
第26図　18区１号埋没河道グリッド上げ縄文石材出土状況 ……………………………………………………………… 42
第27図　18区１号埋没河道と周辺の全遺構 ………………… 49
第28図　河道内で発見された縄文後期の遺構群 …………… 50
第29図　18区４号列石と後期土器出土状況 ………………… 51
第30図　18区24号配石 ……………………………………… 53
第31図　18区24号配石出土遺物（１） …………………… 54
第32図　18区24号配石出土遺物（２） …………………… 55
第33図　18区24号配石出土遺物（３） …………………… 56
第34図　18区25号・26号・27号・28号配石（１） ………… 57
第35図　18区25号・26号・27号・28号配石（２） ………… 58
第36図　18区25号・26号・27号・28号配石（３） ………… 59
第37図　18区25号配石出土遺物 …………………………… 60
第38図　18区26号配石出土遺物 …………………………… 61
第39図　18区27号配石出土遺物（１） …………………… 62
第40図　18区27号配石出土遺物（２） …………………… 63
第41図　18区28号配石出土遺物（１） …………………… 64
第42図　18区28号配石出土遺物（２） …………………… 65
第43図　18区29号・43号配石（１） ……………………… 66
第44図　18区29号・43号配石（２） ……………………… 67
第45図　18区29号配石出土遺物 …………………………… 68
第46図　18区４号列石出土土器（１） …………………… 69
第47図　18区４号列石出土土器（２） …………………… 70
第48図　18区４号列石出土土器（３） …………………… 71
第49図　18区４号列石出土土器（４） …………………… 72
第50図　18区４号列石出土土器（５） …………………… 73
第51図　18区４号列石出土土器（６） …………………… 74
第52図　18区４号列石出土土器（７） …………………… 75
第53図　18区４号列石出土土器（８） …………………… 76
第54図　18区４号列石出土土器（９） …………………… 77
第55図　18区４号列石出土土器（10） …………………… 78
第56図　18区４号列石出土土器（11） …………………… 79
第57図　18区４号列石出土土器（12） …………………… 80
第58図　18区４号列石出土土器（13） …………………… 81
第59図　18区４号列石出土土器（14） …………………… 82
第60図　18区４号列石出土土器（15） …………………… 83
第61図　18区４号列石出土土器（16） …………………… 84
第62図　18区４号列石出土土器（17） …………………… 85
第63図　18区４号列石出土土器（18） …………………… 86
第64図　18区４号列石出土土器（19） …………………… 87
第65図　18区４号列石出土土器（20） …………………… 88
第66図　18区４号列石出土土器（21） …………………… 89
第67図　18区４号列石出土土器（22） …………………… 90
第68図　18区４号列石出土土器（23） …………………… 91
第69図　18区４号列石出土土器（24） …………………… 92
第70図　18区４号列石出土土器（25） …………………… 93
第71図　18区４号列石出土土器（26） …………………… 94
第72図　18区４号列石出土土器（27） …………………… 95
第73図　18区４号列石出土土器（28） …………………… 96
第74図　18区４号列石出土土器（29） …………………… 97
第75図　18区４号列石出土土器（30） …………………… 98
第76図　18区４号列石出土土器（31） …………………… 99
第77図　18区４号列石出土土器（32） …………………100
第78図　18区４号列石出土土器（33） …………………101
第79図　18区４号列石出土土器（34） …………………102
第80図　18区４号列石出土土器（35） …………………103
第81図　18区４号列石出土土器（36） …………………104
第82図　18区４号列石出土土器（37） …………………105
第83図　18区４号列石出土土器（38） …………………106
第84図　18区４号列石出土土器（39） …………………107
第85図　18区４号列石出土土器（40） …………………108
第86図　18区４号列石出土土器（41） …………………109
第87図　18区４号列石出土土器（42） …………………110
第88図　18区４号列石出土土器（43） …………………111
第89図　18区４号列石出土土器（44） …………………112
第90図　18区４号列石出土土器（45） …………………113
第91図　18区４号列石出土石器（１） …………………114
第92図　18区４号列石出土石器（２） …………………115
第93図　18区４号列石出土石器（３） …………………116
第94図　18区４号列石出土石器（４） …………………117
第95図　18区４号列石出土石器（５） …………………118
第96図　18区４号列石出土石器（６） …………………119
第97図　18区４号列石出土石器（７） …………………120
第98図　18区４号列石出土石器（８） …………………121
第99図　18区４号列石出土石器（９） …………………122
第100図　18区４号列石出土石器（10） …………………123
第101図　18区４号列石出土石器（11） …………………124
第102図　18区４号列石出土石器（12） …………………125
第103図　18区４号列石出土石器（13） …………………126
第104図　18区４号列石出土石器（14） …………………127
第105図　18区４号列石出土石器（15） …………………128
第106図　18区４号列石出土石器（16） …………………129
第107図　18区４号列石出土石器（17） …………………130
第108図　18区４号列石出土石器（18） …………………131
第109図　18区４号列石出土石器（19） …………………132
第110図　18区４号列石出土石器（20） …………………133
第111図　18区４号列石出土石器（21） …………………134
第112図　18区４号列石出土石器（22） …………………135
第113図　18区１号埋没河道内で確認された縄文中期の遺構群

……………………………………………………………137
第114図　18区１号埋没河道内縄文中期土器出土状況　……138
第115図　18区36号配石　……………………………………140
第116図　18区36号・46号配石出土遺物　…………………141
第117図　18区46号・47号・48号・50号・51号配石、
19区９号配石遺構配置図　…………………………142
第118図　18区47号配石　……………………………………143
第119図　18区46号配石　……………………………………145
第120図　18区47号配石出土遺物（１）………………………146
第121図　18区47号配石出土遺物（２）………………………147
第122図　18区47号配石出土遺物（３）………………………148
第123図　18区48号・50号配石　……………………………149
第124図　18区51号配石　……………………………………151
第125図　18区51号配石出土遺物（１）………………………152
第126図　18区51号配石出土遺物（２）………………………153
第127図　19区９号配石　……………………………………154
第128図～第245図　18区１号埋没河道
出土遺物（１）～（118）……………………165～282
第246図　18区25号・26号配石と方位を共有する遺構群　…284
第247図　共通要素をもつ土器（１）…………………………286
第248図　共通要素をもつ土器（２）…………………………287
第249図　中期の浅鉢（１）……………………………………288
第250図　中期の浅鉢（２）……………………………………289
第251図　中期の浅鉢（３）……………………………………290
第252図　中期の浅鉢（４）……………………………………291

付図１　横壁中村遺跡18区１号埋没河道内後期配石遺構群と主要土器出土状況（堀之内１式）
付図２　横壁中村遺跡18区１号埋没河道内後期配石遺構群と主要土器出土状況（称名寺式・堀之内２式）
付図３　横壁中村遺跡18区１号埋没河道内後期配石遺構群と主要石器出土状況

写真目次

ＰＬ．１
１　遺跡を北西から鳥瞰
２　遺跡を南側から鳥瞰
ＰＬ．２
１　18区発掘調査直前の状況（北東から）
２　18区の遺構確認調査（西から）
３　台地部分の地山に含まれる多量の礫（18区Ｔ－16グリッド付近）
４　18区埋没河道から台地側を見る（18区２号トレンチ）
ＰＬ．３
１　河道上面の遺構確認状況（西から）
２　同上（西から）　奥に見える礫は台地部分
ＰＬ．４
１　18区台地部分に含まれる多量の地山礫
２　本遺跡の地山の様子（西から）
ＰＬ．５
１　18区４号列石全景（上空から）
２　18区４号列石全景（南側から鳥瞰）
ＰＬ．６
１　18区４号列石確認状況（西から）
２　18区４号列石確認状況（北東から）
ＰＬ．７
１　18区４号列石　南側の弧状部分を北東から見る。
２　18区４号列石　南側の弧状部分を北西から見る。
ＰＬ．８
１　18区４号列石（北から）　25号配石確認状況
２　18区４号列石（北から）　29号配石確認状況
ＰＬ．９
１　18区４号列石　南側の弧状部分を東から見る。
２　同上近接　25号配石部分を東から見る。
ＰＬ．10
１　18区４号列石　北側部分を東から見る。
２　18区４号列石　南側の弧状部分を西から見る。
ＰＬ．11
１　18区４号列石（北西から）　奥が25号配石、手前が29号配石
２　18区４号列石　26号・27号・28号配石を北西から見る。
ＰＬ．12
１　18区４号列石　南半部を西から見る。
２　18区25号・26号配石（西から）
ＰＬ．13
１　18区４号列石、配石群全景（東から）
２　同上近接
ＰＬ．14
１　18区25号・26号配石（東から）
２　18区26号配石全景（東から）
ＰＬ．15
１　18区26号・27号・28号配石（北から）
２　18区26号・27号配石（北から）
ＰＬ．16
１　18区29号配石（西から）
２　18区29号配石（北から）
ＰＬ．17
１　18区24号配石全景（東西から）
２　18区25号配石全景（北から）
３　18区25号配石下の調査（西から）
４　18区27号配石全景（北西から）
５　18区27号配石　多孔石出土状況（東から）
６　18区28号配石全景（北から）
７　18区28号配石下の調査（北から）
８　18区29号配石全景（北から）
ＰＬ．18
１　18区36号配石全景（北から）
２　18区36号配石全景（東から）
３　18区36号配石下の調査
４　同上　さらに掘り下げて調査している様子。
５　18区43号配石全景（北東から）
６　18区43号配石全景（北西から）
７　18区43号配石全景　下層の礫
８　18区47号配石（東から）
ＰＬ．19
１　18区47号配石全景（南西から）
２　18区47号配石（西から）
ＰＬ．20
１　18区46号配石（北から）
２　18区46号配石（東から）
３　18区48号配石（南から）
４　18区48号配石下の掘り方
５　18区50号配石（西から）
６　18区51号配石（北西から）
７　18区１号埋没河道下流域の出土遺物

8　18区１号埋没河道下流域の出土遺物
ＰＬ．21
1　18区１号埋没河道　上流域最下層の確認調査
2　18区１号埋没河道　中流域下層の礫溜まり（北西から）
ＰＬ．22
1　18区１号埋没河道　中流域下層の調査状況（西から）
2　18区１号埋没河道　中流域下層の礫群
ＰＬ．23
1　18区１号埋没河道　下流域下層の調査状況（南から）
2　18区１号埋没河道　下流域最下層の礫溜まり（北西から）
ＰＬ．24
1　18区１号埋没河道　下流域完掘状況（北西から）
2　18区１号埋没河道　下流域完掘状況（北西から）

ＰＬ．25～ＰＬ．38　18区４号列石出土土器
ＰＬ．39～ＰＬ．42　18区４号列石出土石器
ＰＬ．43～ＰＬ．46　18区１号埋没河道内　配石遺構出土遺物
ＰＬ．47～ＰＬ．79　18区１号埋没河道内出土遺物

表　目　次

表１　周辺遺跡一覧表 …… 13
表２　横壁中村遺跡遺構数集計表 …… 14
表３　18区１号埋没河道内で確認された縄文時代の遺構 … 27
表４　後期調査面点上げ土器時期別点数 …… 28
表５　18区４号列石内配石取上げ土器の配石間接合事例 … 44
表６　横壁中村遺跡18区１号埋没河道内出土土製円盤
時期別形態別出土量一覧 ……161
表７　横壁中村遺跡18区１号埋没河道内出土土器総量一覧
……292～293
表８　横壁中村遺跡18区１号埋没河道内
ナンバー付き取上げ石器出土総量一覧……294～295
表９　横壁中村遺跡18区１号埋没河道内
グリッド出土石器総量一覧……296～297
表10　横壁中村遺跡18区１号埋没河道内
出土石器特定石材集計１……298～299
表11　横壁中村遺跡18区１号埋没河道内
出土石器特定石材集計２ ……300

遺物観察表

配石出土土器 ……301
配石出土石器……302～303
18区４号列石出土土器……304～314
18区４号列石出土石器……315～317
18区１号埋没河道出土土器……318～342
18区１号埋没河道出土石器……343～347

第１章　調査の方法と経過

第１節　調査に至る経緯

八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、建設省関東地方建設局（当時。現在は国土交通省関東地方整備局）と群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、吾妻町教育委員会（当時。現在は東吾妻町）がその実施に関する協議を重ね、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長が、平成６年３月18日に「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財の実施に関する協定書」を締結し、八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の実施計画が決定されたことによって開始されることとなった。実施計画書に示された調査組織等の役割は、調査実施機関は群馬県教育委員会で、調査機関は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。

この協定をふまえて、平成６年４月１日に関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長により発掘調査受諾契約を、同日に群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により発掘調査委託契約を締結し、八ッ場ダム進入路関連遺跡を調査箇所とする八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業が開始された。平成６年度から実施されている調査は、工事用進入路に関するものが主体となっている。これは、八ッ場ダム建設工事の大規模な工事を円滑に進めるため、機材や重機を搬入・搬出する進入路や仮設道路の整備が先行される状況にあったためである。

平成６年度に締結された協定によると、調査対象遺跡は48遺跡であり、そのうち本遺跡の位置する長野原町横壁地区の遺跡は７遺跡であった。横壁地区でも工事用進入路を原因とする調査が先行され、平成６年度には協定対象遺跡である横壁勝沼遺跡の調査が実施された。

本遺跡も平成６年度に締結された協定での対象遺跡であり、平成６・７年度に行われた横壁勝沼遺跡の調査が終了した後、平成８年度から調査が行われることになった。工事用進入路部分の調査は平成11年度に終了し、平成12年度からは横壁地区護岸工事部分の調査に着手した。詳しくは次節「調査の経過」にゆずる。

なお、関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長は、平成11年４月１日に「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定の一部を変更する協定書」を締結し、平成11年４月以降は調査実施機関を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に変更し、現在の調査体制に至っている。

また、協定書の対象遺跡で、横壁地区に位置する７遺跡のうち上野Ⅳ遺跡と観音堂遺跡は、長野原町教育委員会との協議の結果、本遺跡に統合されることになった。

第２節　調査の経過

横壁中村遺跡の調査は平成８年度より行われた。平成８年度から11年度までは工事用進入路部分、平成12年度からは横壁地区護岸工事部分を中心とした調査であるが、これらの工事は一体のもので、調査は継続して行われてきた。各年度ごとの調査範囲は、図示した通りであるが、年度をまたいで調査された範囲もあるので、図示した範囲は調査の終了した年度を表している。各年度ごとの調査経過を調査日誌を元に抜粋する。

平成８年度　調査事務所の設置、調査区への進入路等の造成工事等を行ったため、本調査は７月１日開始となった。本年度は担当者は３名による１班での調査であり、27地区18・28区を中心とする調査を実施した。進入路が狭く重機を導入できず、人力による掘削を強いられ調査は困難であった。11月23日に現地説明会を開催し、見学者は157名であった。

平成９年度　前年度の継続である18・28区の調査と

ともに、その西側にあたる19・20・29・30区の表土掘削を実施し、調査に着手した。担当者は４名の配置であったが、７月から９月まで１名は久々戸遺跡の調査にまわっている。調査面積は約5,000㎡である。11月３・４日に当事業団主催の平成９年度出土文化財巡回展示会が八ッ場地区で実施され、遺物・パネルを出展した。

平成10年度　平成８・９年度の継続調査である。担当者は年度当初４名の配置であったが、うち１名は林地区及び西久保Ⅰ遺跡の調査を担当することになったため､実質３名の１班体制による調査となった。本年度の調査面積は約6,200㎡であった。

平成11年度　前年度までの継続調査と20・30区で調査区を拡張した。担当者は５名、２班の体制であったが、うち２名が長野原地区の調査を担当することになったため、10月末までは３名、１班での調査となった。４月29日に前年度に検出された大型敷石住居、環状柱穴列などを現地説明会で公開し、153名の見学者を集めた。さらに本年度は調査区西側の28地区11区でも調査を行ったが、試掘の結果、遺構は確認できなかった。

また、平成11年８月13日からの豪雨により横壁地区が被災したため、８月22日まで調査を休止した。本年度で工事用進入路部分の調査はすべて終了した。調査面積は6,200㎡である。

平成12年度　工事用進入路部分の調査が終了したため、この南側の代替地護岸工事部分の調査を担当者７名による２班体制で開始する予定であったが、１班は林地区の調査に対応することとなり、残る１班も、西久保Ⅰ遺跡との掛け持ちとなったため、調査対象面積は当初予定よりも大幅に減少した。本年度の調査は20区の調査が中心となり、一部18区の試掘調査を行った。また、調査区南側にあるゲートボール場の東側にパンザマスト（気象用観測マスト）が設置されるにあたって42㎡を併せて調査し、縄文時代後期の住居、中世の土坑を検出している。調査面積1,800㎡であった。

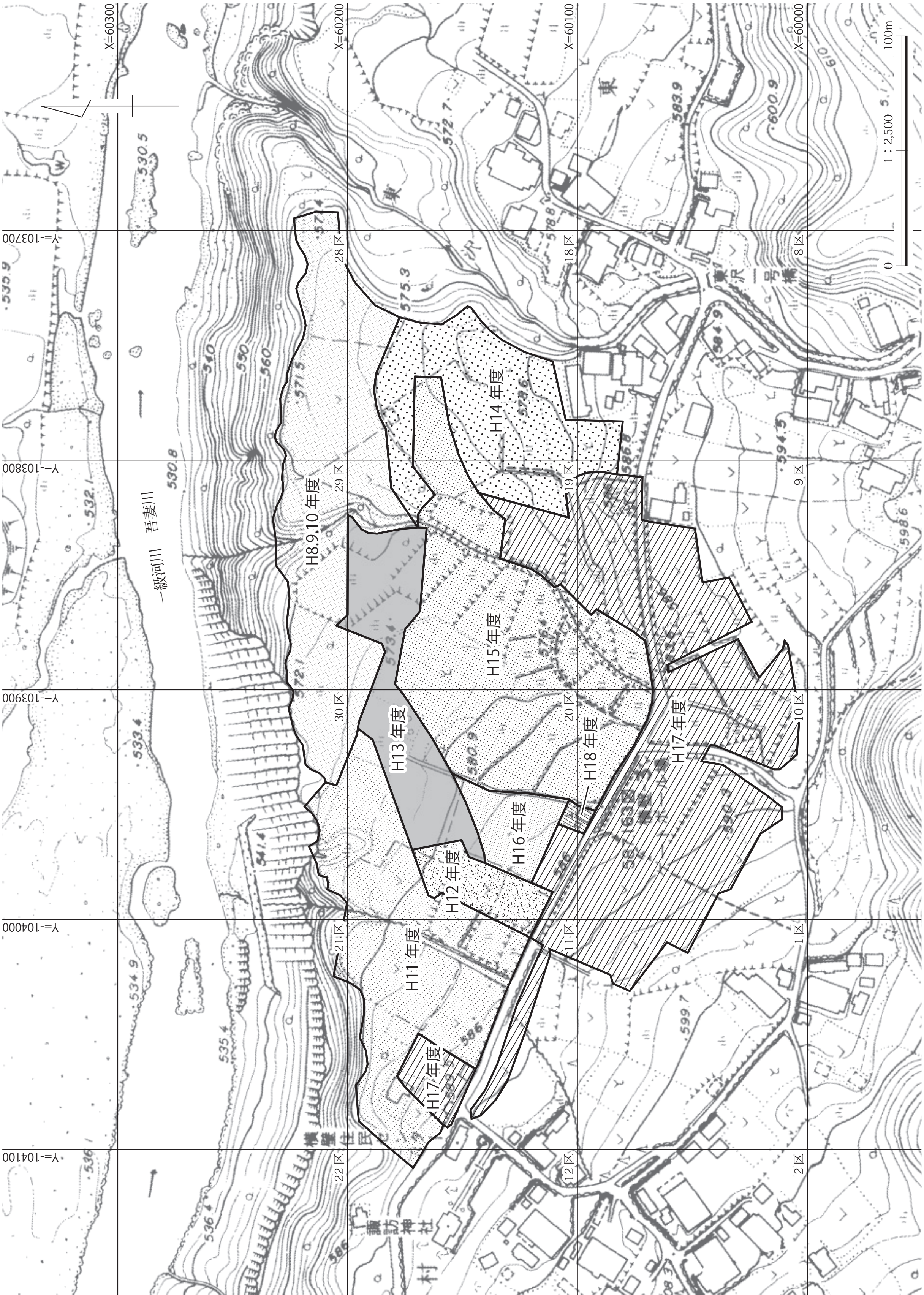
平成13年度　発掘作業員の雇用システムが変更になり、調査開始が６月４日となった。本年度の調査対象地は遺跡の中央を流れる山根沢の両側にあり、18・19・20区にあたる。工事が予定されている山根沢の西側は、工事行程にあわせて調査が終了した地区を順次、工事側に引き渡しながら進められた。11月に国土交通省より希少猛禽類の保護のため対策を講じてほしいとの要請があり、12月１日から調査体制を縮小したため調査の一部は次年度に継続となり、調査面積は当初の6,200㎡から5,200㎡となった。

平成14年度　本年度より当事業団八ッ場ダム調査事務所が開所し、八ッ場地区の調査を管轄することになった。担当者は７名の２班体制での調査となり、前年度からの継続である18区を中心に調査を行った。本年度は６月から８月にかけて担当者２名が西ノ上遺跡へ、10月からは担当者４名が上郷岡原遺跡へ異動している。また、前年度と同様に11月下旬から希少猛禽類保護のため調査体制を縮小しての調査となった。調査面積は5,400㎡であった。

平成15年度　前年度の継続調査の18区と９・10・19・20区の調査を行った。担当者は当初６名の配置であったが、４月から６月は担当者２名が久々戸遺跡の調査を行い、７月から１名が整理事業への異動となった。また11月からは１名が増員となった。調査は前年度からの継続であり、18区の埋没河道の調査から開始し、その後19・20区の調査を行った。本年度は平成12・13年度の調査区まで終了する予定であったが、用地買収が遅れ、一部次年度に継続となった。本年度の調査面積は約8,000㎡であった。

平成16年度　前年度に調査未了となった20区の調査を行った。担当者２名による１班体制である。本年度で代替地護岸工事部分の調査終了の予定であったが、調査区南側の道路沿いの一部が用地買収と墓地移転の遅れにより、調査が未了となり、次年度以降に継続となった。本年度の調査面積は約1,400㎡であった。

平成17年度　国道145号線部分の調査を、担当者５名による２班体制で行った。調査区は９・10区である。調査面積は約14,000㎡であった。



第１図　年度別調査区全体図

平成18年度　10・20区の平成17年度調査で経塚が検出された地点を中心に、４月１日から４月13日まで担当者３名による短期間の調査を実施した。調査面積は188㎡である。

第３節　調査の方法

１　調査の手順

調査は初めはバックフォーによる表土掘削を行い、順次作業員による遺構確認、遺構調査へと進んでいった。遺跡の現況は畑、水田、道路であった。

遺構から出土した遺物は、その遺構番号を付し、さらに図面上に出土位置を記録したものについては個別番号を付し、標高を測定して取り上げた。遺構外から出土した遺物については、後述するグリッド単位で取り上げた。さらに出土位置を記録したものは遺構出土のものと同様に個別番号を付し取り上げた。遺構測量は作業員によるものと測量会社に委託して測量したものがある。縮尺については、住居・土坑・配石等は1/20､炉・埋甕・埋設土器等は1/10、その他の遺構も1/20を原則としたが、溝・列石等規模の大きい遺構については1/40、全体図は1/100、1/200で作成した。また、列石の一部においては、バルーン撮影による空中写真測量も委託して実施した。

遺構の個別写真は、主に35㎜モノクローム及びリバーサル、６×７判モノクロームで撮影し、一部６×７判リバーサルも状況に応じて使用している。

２　遺跡の名称

本遺跡は、吾妻郡長野原町大字横壁字観音堂に位置する。発掘調査時の遺跡名称は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で行っている遺跡命名の慣例に従うと大字名＋小字名となり、「横壁観音堂遺跡」となるべきであるが、国土地理院1/25,000地形図「長野原」によると遺跡地には「中村」という小字名が記されているため、平成８年度の発掘調査開始時に「横壁中村遺跡」と命名した。しかし、この「中村」という小字名は行政的には用いられておらず、正確には前述の通り「観音堂」である。また、『長野原町の遺跡－町内遺跡詳細分布調査報告書－』（長野原町教育委員会 1990）によると本遺跡は「観音堂遺跡」「上野Ⅳ遺跡」の範囲に入っている。さらに群馬県遺跡台帳には「横壁中村遺跡」が記されているが記述によるとこれは本遺跡の南西にあたり、位置がやや異なる。このように、本遺跡の遺跡名に関しては若干混乱があるが、長野原町教育委員会との協議により、「横壁中村遺跡」が本遺跡の正式名称として決定されている。

３　調査区の設定

調査区の設定については、1994（平成６）年度から始まった八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査においては、「八ッ場ダム関係埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき実施されてきた。この方法については、『長野原一本松遺跡（１）』（群埋文 2002）に詳しいので、詳細はそちらを参照していただきたい。ここでは概略を記す。

調査区については、八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査対象地内を国家座標（2002年４月改正以前の日本測地系）を使用し、吾妻郡吾妻町（現東吾妻町）大柏木の東部付近を基点（Ｘ＝58000.00、Ｙ＝－97000.00）とした。そして、まずこの基点から１㎞四方の地区（大グリッド）を西に10区画、北に６区画の60地区を設定した。次に各地区を100ｍ四方の区（中グリッド）に区分し、東南隅から西に１～10区、次の列を11～20区のように100区に区部した。更に各区を４ｍ四方のグリッドに細分した。グリッドは、東南を基点に西へＡ～Ｙ、北へ１～25までの番号を付し、組み合わせてグリッド名としている（例：20区Ａ－１）。

本遺跡の調査区は、地区では「27地区」を中心とし、一部「28地区」にかかり、「区」では27地区は「９・10・17・18・19・20・28・29・30区」、28地区は「１・11区」に相当している。遺構名称は、区ごとに連続する番号を付し、区をまたぐ遺構の場合は遺構の主体と考えられる区の番号を付している。

第２章　遺跡の環境

八ッ場地区の遺跡の立地する環境については、既刊の『長野原一本松遺跡（１）』（群埋文 2002）および『八ッ場ダム発掘調査集成（１）』（群埋文 2003）に詳述されているので、そちらを参照していただきたい。ここでは、横壁中村遺跡の立地する地理的環境および歴史的環境について概観するにとどめる。

第１節　地理的環境

１　八ッ場ダム建設予定地と地域特性

八ッ場ダム建設予定地は、吾妻郡長野原町の東端にあり、景勝地として有名な国指定名勝「吾妻渓谷」に近い緑豊かな山間部にある。この地区は吾妻川の両岸に急峻な山が迫り、平坦地は川沿いのわずかな段丘面に限られている。ダムサイトの建設が計画されているのは、JR川原湯駅から東へ700ｍほどの地点で、そこから西のJR長野原草津口駅付近までの約６㎞ほどの間にダム湖ができる予定である。ちなみに「八ッ場」とは、ダムサイトの建設が予定されている地点の小字に由来している。

長野原町がある西吾妻地域は、群馬県が長野県・新潟県と県境を接する山間部に位置し、新潟県との県境には草津温泉や草津白根山があり、長野県との県境には浅間山がある。いずれも活火山で、草津白根山はイオウ成分が多く、浅間山は大量の軽石を噴出したことで知られている。

この西吾妻地域を地図で見ると、長野・新潟の県境は2,000ｍクラスの峰々をつないだ分水嶺で分かれており、北側から草津峠・渋峠・万座峠・鳥居峠・地蔵峠・車坂峠を通じて行き来をしている。また、東吾妻との境界も1,500ｍクラスの峰をつないだ分水嶺で区分され、暮坂峠・須賀尾峠・二度上げ峠で結ばれている。ここで唯一低い場所は吾妻川沿いの吾妻渓谷で、現在はここを国道145号線とJR吾妻線が通っているが、以前はかなりの難所だったところで、江戸時代までは須賀尾峠越えのルートが主要道だったという。

こうしてみると、西吾妻地域は周囲を分水嶺で囲まれた、平野部からは見通すことのできない地域であることがわかる。長野原町市街地の標高は630ｍ前後で、長野県側の周辺市町村と較べても大差はないが、地味や気象条件などの点で水田稲作には不向きな土地柄である。こうした地域特性は、遺跡の内容にも色濃く認められる。

２　遺跡の位置と地形

横壁中村遺跡の位置する長野原町は群馬県北西部に位置し、草津町、嬬恋村、旧六合村、東吾妻町と接するとともに、長野県とも県境をなしている。

この地域の地質形成に大きな影響を与えたものには吾妻川と浅間山がある。吾妻川は長野県境の鳥居峠付近に源を発し、東流して渋川市で利根川と合流する全長76.2㎞の一級河川である。本遺跡はこの合流点から約43㎞遡った地点にあり、約６㎞下流には「関東の耶馬溪」の異名をとる国指定名勝「吾妻渓谷」がある。浅間山は町域の南西部、長野県境に位置し、黒斑・仏岩・前掛山・釜山の４つの火山体で構成される標高2,568ｍの成層火山である。

本遺跡の立地する長野原地域の段丘面は、この吾妻川と浅間山の活動の影響を多分に受けて形成されている。本地域の段丘面は最上位、上位、中位、下位の４段丘面に区分されるが（長野原町 1993)、このうちの最上位段丘と上位段丘の２面は約21,000年前の黒斑火山の噴火に伴い発生し、当時の吾妻川河床を数10ｍ以上の厚さで埋めつくした応桑泥流堆積物がその基盤となっている。最上位段丘は吾妻川からの比高が約80～90ｍであり、泥流流下後にほとんど浸食されずに段丘面となったもの、上位段丘は比高が約60～65ｍであり泥流堆積物を浸食し形成されている。これら２面の上には、約11,000年前に噴出

第２図　ハッ場ダム建設地域の位置（国土地理院1/20万地勢図「高田」「長野」使用）

した浅間－草津黄色軽石（As-YPk）を含む関東ローム層が堆積している。中位段丘は比高30ｍ前後で、本遺跡のある横壁地区などこの地域に最も広く分布している。低位段丘は比高約10～15ｍである。

横壁中村遺跡は、この長野原町の北東に位置し、先述のように吾妻川右岸の中位段丘上に立地する。標高は約570ｍで、調査区北に接して流れる吾妻川とは比高差40ｍほどの段丘崖により隔てられている。また南側には山地が迫り、西は深沢、東は東沢という２本の沢によって深く区画され、調査区のほぼ中央にも山根沢という小沢が北流している。遺跡のある中位段丘面上は、これらの沢からもたらされた堆積物や土砂崩れなどによる崖錐堆積物が、吾妻川により形成された段丘礫層上を覆い、吾妻川に向かい緩く傾斜している。調査区内の比高差は約15ｍである。調査区内には、この崖錐堆積物の夥しい数の礫が存在し、調査を困難なものとした一因でもあった。中位段丘については、離水時期は明らかでないが、本遺跡の調査では段丘礫層上に関東ローム層及びAs-YPkの堆積が認められないことから、それ以降の離水と考えられる。

浅間山の活動では、本遺跡の中心となる縄文時代中期から後期にかけては大きな影響はないと考えられるが、その後も活動は続き、遺跡内にその痕跡をとどめている。平安時代の住居の埋土の中には、浅間山起源と思われる火山灰の堆積が認められるものも存在し、また江戸時代の1783（天明三）年には、噴火とともに泥流を発生させ、流域に甚大な被害を及ぼしている。本遺跡においても、この天明泥流により埋没した畑跡が検出されている。

また、本遺跡の景観を語る上で欠かせないのが丸岩の存在である。調査区の南南西約1.5㎞に位置する標高1,124ｍをはかる岩峰で、100万年ほど前に活動していた菅峰火山の溶岩に由来すると考えられている。南側を除いた３方が100ｍにも達する垂直の崖に囲まれ、本遺跡から望むと巨大な円柱状にも見える特徴的な山容を呈している。この崖面には、柱状節理による割れ目が顕著に現れており、山の形状とあわせ見た独特の景観は、この遺跡に暮らした人々がランドマークとして仰ぎ見たであろうことを推測するにたる奇峰と言える。

第２節　歴史的環境

横壁中村遺跡のある長野原町は明治22年の町村制実施の際に、川原畑、川原湯、横壁、林、長野原、大津、羽根尾、古森、与喜屋、応桑の旧十ヶ村を合併して成立した。町内での遺跡の調査は、昭和29年に行われた堪場木遺跡の調査を嚆矢とし、昭和38・47・48年には群馬県による分布調査が行われ、昭和53年には石畑Ｉ岩陰遺跡が発掘調査された。

昭和62年からは八ッ場ダム建設に先行して、町教委による埋蔵文化財詳細分布調査が実施され、183カ所の遺跡地が確認された。（その後の調査で、平成17年３月現在では214遺跡に増加している。）これ以降、町教委による発掘調査が行われている。さらに平成６年からは八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業が当事業団によって進められている。これらの調査をもとに横壁中村遺跡の歴史的環境を概観してみる。

旧石器時代　長野原町内では、これまでの調査において旧石器時代の遺跡は確認されていない。吾妻川流域は前述したように応桑泥流や浅間－草津黄色軽石（As-YPk）によって厚く覆われており、この下位を調査することは、掘削方法や安全上の問題などから難しいのが現状である。ただし、柳沢城跡（14）から遺構外ながら細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩の削器が１点出土しており、より山間部の遺跡などでこれらの堆積物の下位の調査が実施されれば、当該期の遺跡が確認される可能性は否定できない。

縄文時代　長野原町による埋蔵文化財詳細分布調査によれば現在までに214カ所の遺跡地が確認されており、このうち約半数の105遺跡で縄文時代の遺構、遺物の存在が確認されている。

まず、草創期の遺跡としては石畑Ｉ岩陰遺跡（２）があげられる。奥行４ｍ、幅40ｍの大規模な岩陰遺

跡であり、草創期から前期、そして晩期にわたる遺物と獣骨が出土している。旧石器時代の遺跡は確認されていないが、縄文時代草創期には長野原町域に人間が生活していたことを証明する遺跡である。早期では、楡木Ⅱ遺跡（27）で多くの撚糸文系土器、表裏縄文土器、スタンプ形石器とともに、竪穴住居が31軒検出されている。この住居の中には石囲炉を持つものがあるとともに、重複関係を示すものもあることから、同時期の集落における定住性について新たな視点を与えるものと思われる。また、立馬Ⅰ遺跡（17）でも撚糸文期の住居と田戸下層式期の住居が検出されている。この立馬Ⅰ遺跡では、早期から晩期までのほぼ全ての時期の遺物が出土している。山間の狭隘な谷に位置するこの遺跡からこのように長い時期にわたって遺物が出土していることは、この地域の縄文時代の環境を復元する上で興味深い事実である。さらに同時期の遺物は幸神遺跡（28）、長野原一本松遺跡（29）、坪井遺跡（35）でも出土が確認されている。

前期の遺跡は、坪井遺跡で花積下層式期の住居と土坑が検出されているほか、長野県域を主体とする塚田式、北陸地方の極楽寺式と関連すると思われる遺物が出土している。また暮坪遺跡（38）では二ツ木式期の住居が検出されている。さらに長畝Ⅱ遺跡（41）では黒浜式期の住居が検出されている。本遺跡でも関山式、あるいは黒浜式期と思われる遺物が出土しているが、量は少なく、遺構も確認されていない。前期後半では、楡木Ⅱ遺跡で諸磯式期の住居が、川原湯勝沼遺跡（10）で同時期の土坑が検出されており、本遺跡でも同時期の土坑が確認されている。

中期になると遺跡数、遺構量ともに大幅に増加する。本遺跡では勝坂式期の住居から中期末まで200軒以上の住居が確認されている。長野原一本松遺跡でも本遺跡と同様に大集落が形成されている。ただその始まりは本遺跡より若干時期が下り、中期後半の加曽利Ｅ式期になってからと思われる。この時期の特徴としては他地域との密接な交流がうかがえる点である。本遺跡の出土遺物でも、関東系の土器とともに中部高地系、特に長野県東部との強い関連がうかがえる土器が多く、さらに新潟県方面から持ち込まれたと思われる土器も少なくない。これは長野原一本松遺跡でも新潟県方面から伝播したと思われる大木系の土器が出土していることや、坪井遺跡でも新潟県域で主体的な「栃倉類型」などの資料が出土していることからも確認できよう。

後期になると長野原一本松遺跡の集落はやや縮小の傾向にあるが、本遺跡は加曽利Ｂ式期まで継続する。この時期の住居では、柄鏡形敷石住居の検出例が多く、本遺跡や長野原一本松遺跡のほか、林中原Ⅰ遺跡（20）、上原Ⅳ遺跡（21）、向原遺跡（32）、檞Ⅱ遺跡（37）、滝原Ⅲ遺跡（44）、古屋敷遺跡（45）、上郷岡原遺跡（48）などで確認されている。

晩期になると遺跡数は減少する傾向にあり、前述した石畑Ⅰ岩陰遺跡以外ではほとんど確認されていなかったが、最近の調査により検出例が増加している。川原湯勝沼遺跡では氷Ⅱ式土器による再葬墓と思われる土坑が検出され、久々戸遺跡（31）では氷式土器の鉢形土器、立馬Ⅰ遺跡でも長野県北部を主体とする女鳥羽川式土器の浅鉢が出土している。本遺跡でも平成15年度の調査で晩期終末から弥生時代初頭と思われる埋設土器、土坑が確認された。検出できた遺構数は少ないが、土器片を中心とする遺物量は多く、県内でも有数のものと考えられる。

弥生時代　長野原町域では、この時期の遺跡は極めて希薄である。遺構では、本遺跡で甕形土器を埋設した前期の再葬墓の可能性のある土坑が検出されているほか、立馬Ⅰ遺跡で前期から中期の住居と中期の甕棺墓が検出されている程度である。また、楡木Ⅲ遺跡（25）、坪井遺跡、外輪原Ⅰ遺跡（42）などで前期から中期の遺物、二社平遺跡（４）で後期の遺物が出土している。

古墳時代　1938（昭和13）年に編纂された『上毛古墳綜覧』によれば、長野原町には大津の鉄塚と与喜屋の五輪塚の２基の古墳が存在するとされている。しかし、現在までに発掘調査によって確認されたも

のは一つもなく、現時点では東吾妻町の岩島地区が古墳の西限である。集落としては、林宮原遺跡（22）で１軒、下原遺跡（23）で１軒の住居が確認されているが、いずれも小規模なものである。

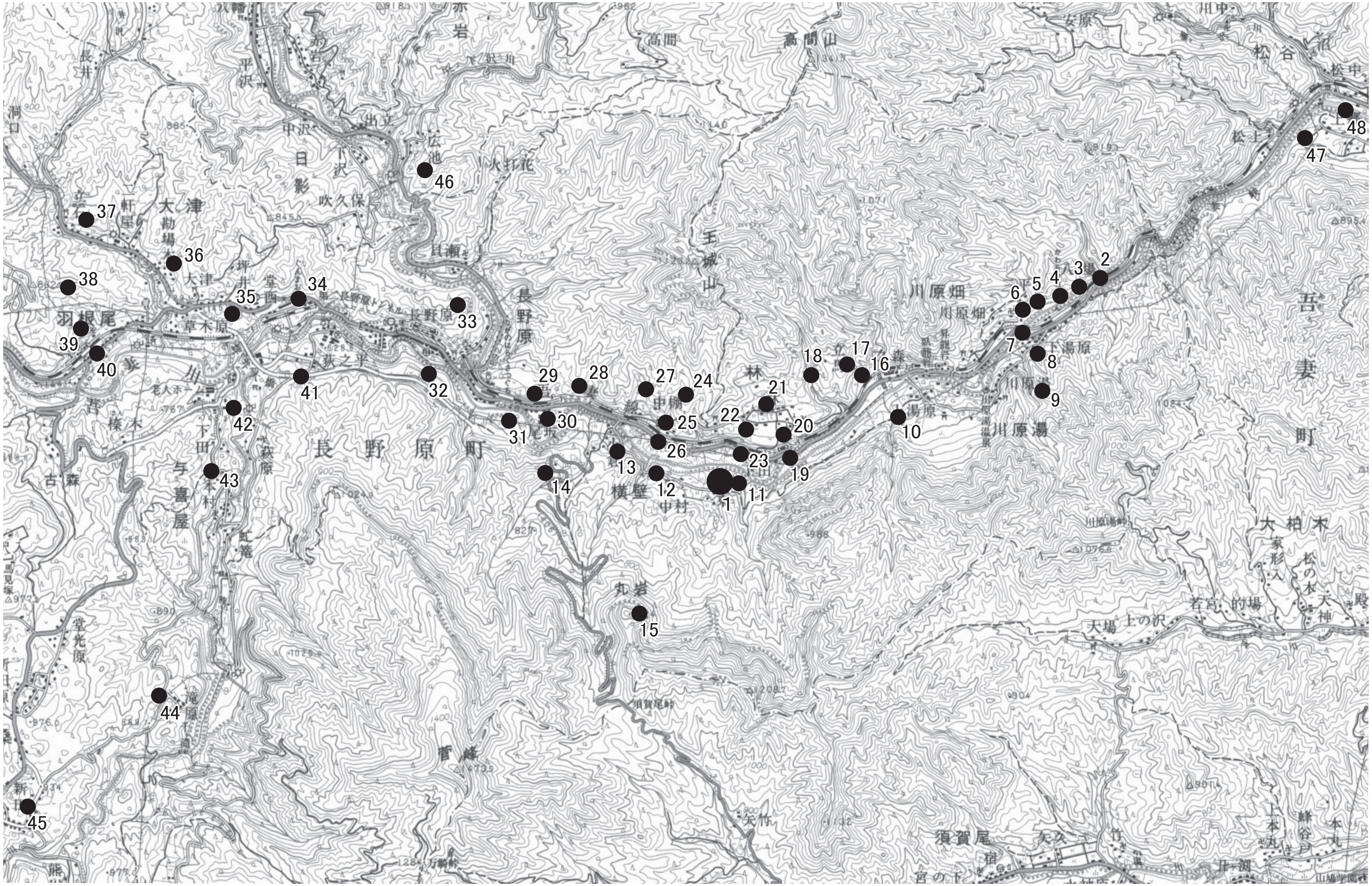
奈良・平安時代　奈良時代の遺跡は極めて希薄で、分布調査ではわずかに羽根尾Ⅱ遺跡（40）で確認されただけである。これに対して平安時代の遺跡は多く、97遺跡が確認されている。主な遺跡としては横壁中村遺跡、花畑遺跡（18）、林宮原Ⅱ遺跡、楡木Ⅱ遺跡、長野原一本松遺跡、向原遺跡、坪井遺跡などが挙げられる。各遺跡での住居の検出数は数軒と少ないが、楡木Ⅱ遺跡では、９世紀後半から10世紀前半にかけての竪穴住居が約30軒とまとまって検出されており、「三家」や「長」と書かれた墨書土器の存在とともに注目される。この地域の平安時代の集落は、楡木Ⅱ遺跡にみられるように９世紀後半に出現し10世紀前半に消滅するものがほとんどであり、特徴的である。特徴的な遺物としては、町立中央小学校の敷地から出土した瓦塔があり、塔の最上層にあたる屋根部がほぼ完形で残っているもので、現在は同小学校に保管されている。

中世　この時期の資料は柳沢城跡、丸岩城跡（15）、長野原城跡（33）、羽根尾城跡（39）、などの城館跡が中心であったが、近年の発掘調査により遺跡が増えつつある。西久保Ⅰ遺跡（13）、立馬Ⅰ遺跡、下原遺跡、二反沢遺跡（24）、楡木Ⅱ遺跡、長野原一本松遺跡などで遺構が確認されている。下原遺跡では畑跡や建物跡、二反沢遺跡では区画跡のほか、羽口や鉄滓など製鉄関連遺跡も検出されている。本遺跡においても、石垣を伴う館跡が検出されており、柳沢城跡との関連で注目される。また平成12年度には踏査により金花山砦跡（９）が新たに見つかっている。

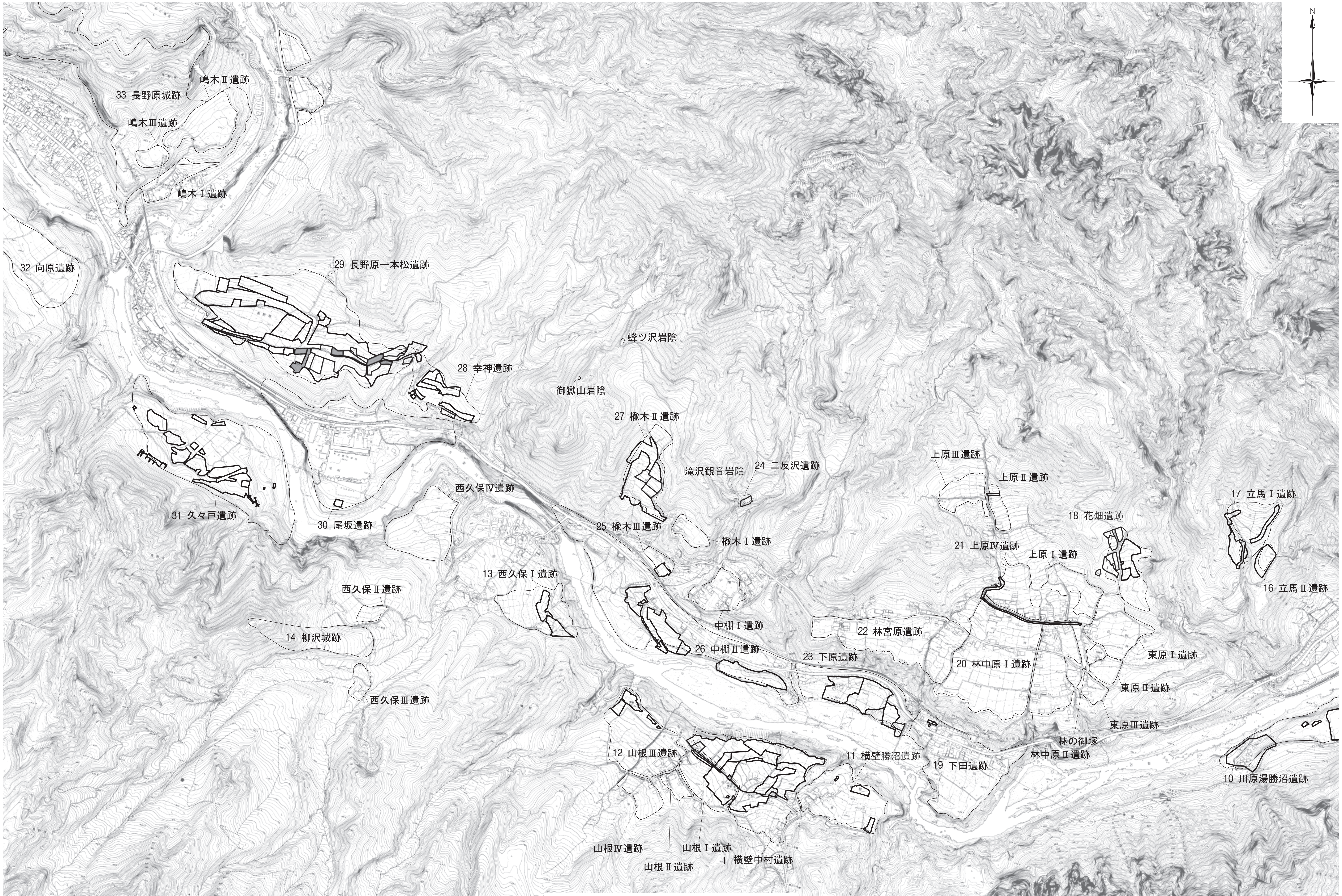
近世　近世の遺跡の大部分は1783（天明三）年の浅間山の噴火に伴い発生した泥流堆積物により埋没したものである。主な遺跡としては、東宮遺跡（７）、西ノ上遺跡（８）、川原湯勝沼遺跡、下田遺跡（19）、中棚Ⅱ遺跡（26）、尾坂遺跡（30）、久々戸遺跡（31）、小林家屋敷跡（34）などが挙げられる。多くは畑を中心とする生産遺跡であるが、東宮遺跡、尾坂遺跡、下田遺跡、小林家屋敷跡などでは民家跡も検出されている。特に小林家屋敷跡は、農業・酒造業を営みこの地域の分限者と呼ばれた小林家の屋敷の一部が検出されたものであり、文献との照合もなされ重要な発見である。本遺跡からは墓跡や泥流堆積物により埋没した畑跡が検出されている。また平成17年度調査では経塚を検出し、多数の一字一石経が出土している。

泥流下から発見される遺跡は、旧地表面がそのまま保存されているものが多く、集落や生産域の構成要素及びその関連性を具体的に読み取ることが可能である。泥流の発生した日時が明らかであるため、遺物の時期をほぼ限定することも可能であり、また、通常では残らない建築部材や漆器などの植物遺存体の検出例も多い。今後水没地の調査が進展するにつれ、泥流に埋没した遺跡の調査は更に増えることが予想され、近世農村史研究に多大な寄与をもたらすものと考えられる。

参考文献（番号は表１の文献欄に対応）
１．六合村 1973『六合村誌』
２．群埋文 1998『長野原久々戸遺跡』第240集
３～18．群埋文 2002～2007八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第１集～第16集
19～24．群埋文 1998～2007『年報』17～26
25．群馬県史編纂委員会 1988『群馬県史　資料編』１
26．塩野新一 1972『群馬県吾妻郡長野原町 堤場木遺跡調査（概報）』
27．富田孝彦 2000「外輪原遺跡の弥生中期土器」『群馬考古学手帳』10
28．長野原町 1976『長野原町誌』上巻
29．長野原町 1993『長野原町の自然』
30．長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局 1979『石畑遺跡略報』
31．長野原町教育委員会 1990『長野原町の遺跡－町内遺跡詳細分布調査報告書－』
32．長野原町教育委員会 1990『檞Ⅱ遺跡』
33．長野原町教育委員会 1992『長畝Ⅱ遺跡・坪井遺跡』
34．長野原町教育委員会 1996『向原遺跡』
35．長野原町教育委員会 1997『滝原Ⅲ遺跡』
36．長野原町教育委員会 2000『坪井遺跡Ⅱ』
37．長野原町教育委員会 2001『暮坪遺跡』
38．長野原町教育委員会 2004『町内遺跡Ⅳ』
39．長野原町教育委員会 2004『林宮原遺跡Ⅱ』
40．長野原町教育委員会 2005『小林家屋敷跡』



第 3 図　遺跡の位置と周辺遺跡（国土地理院1/50,000地形図「草津」使用）



第４図　遺跡周辺の地形と発掘された遺跡の分布

表１　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺跡の主な内容	文献
1	横壁中村	長野原町横壁	本遺跡。	５．７他
2	石畑Ⅰ岩陰	長野原町川原畑	県教委昭和53年度調査。縄文草創期から晩期の遺物と獣骨が出土。	30
3	石畑	長野原町川原畑	事業団平成８・９・10年度調査。縄文前期包含層。弥生中期土坑。近世畑。	4
4	二社平	長野原町川原畑	事業団平成８・10年度試掘。弥生後期土器片。近世畑。	4
5	三平Ⅰ・Ⅱ	長野原町川原畑	事業団平成16年度調査。縄文前期住居。中世建物。陥し穴多数。	15
6	上ノ平Ⅰ	長野原町川原畑	事業団平成18・19年度調査。縄文中期中葉から後期住居。平安住居。陥し穴多数。	24
7	東宮	長野原町川原畑	事業団平成７・９・19年度調査。近世民家、畑。	4
8	西ノ上	長野原町川原湯	事業団平成14年度調査。近世畑。	6
9	金花山砦跡	長野原町川原湯	町教委・事業団により平成12年度に踏査・確認。中世城跡。	
10	川原湯勝沼	長野原町川原湯	事業団平成９・16年度調査。縄文前期後半の土坑、晩期終末期の再葬墓。近世畑。	8
11	横壁勝沼	長野原町横壁	事業団平成６・７年度調査。縄文中期から後期の土器。槍先形尖頭器が出土。	4
12	山根Ⅲ	長野原町横壁	事業団平成10・13・18年度調査。縄文中期後半の住居、土坑。	21．24
13	西久保Ⅰ	長野原町横壁	事業団平成６・10・12年度調査。縄文中期末葉の敷石住居、土坑。中期の水場以降。	4
14	柳沢城跡	長野原町横壁	町教委平成５年度調査。中世城跡。郭、堀切、土居等検出。	28
15	丸岩城跡	長野原町横壁	中世城跡。	28
16	立馬Ⅱ	長野原町林	事業団平成14年度調査。縄文時代中期初頭から後半の住居。	10
17	立馬Ⅰ	長野原町林	事業団平成13・14年度調査。縄文早期初頭、晩期の住居。弥生中期の住居、甕棺墓。	13
18	花畑	長野原町林	事業団平成９～12年度調査。平安住居。陥し穴多数。	4
19	下田	長野原町林	事業団平成７年度調査。近世民家、畑。	4
20	林中原Ⅰ	長野原町林	町教委平成15年度調査。縄文後期前半の敷石住居。	38
21	上原Ⅳ	長野原町林	事業団平成15年度調査。縄文後期前半の敷石住居。晩期後半の土器。近世水路。	23
22	林宮原	長野原町林	町教委15年度調査。古墳住居１軒。平安住居６軒。	39
23	下原	長野原町林	事業団平成12～16年度調査。古墳住居１軒。平安住居２軒。中世建物。近世畑。	５．14
24	二反沢	長野原町林	事業団平成12年度調査。中世区画、製鉄関連遺物。近世畑。	11
25	楡木Ⅲ	長野原町林	事業団平成10年度調査。縄文前期、後期の包含層。弥生中期の包含層。	4
26	中棚Ⅱ	長野原町林	事業団平成11・15年度調査。近世畑、石垣、道など。	5
27	楡木Ⅱ	長野原町林	事業団平成12･13年度調査。縄文早期初頭の集落。前期、中期初頭の住居。平安住居。中世建物。	20．21
28	幸神	長野原町長野原	事業団平成８・９年度調査。縄文中期中葉から後半の住居。古代の可能性ある畑。	19
29	長野原一本松	長野原町長野原	事業団平成６～19年度調査。縄文中期後半から後期初頭にかけての拠点的集落。	３．17
30	尾坂	長野原町長野原	事業団平成６・７・11・18・19年度調査。近世民家、畑。	4
31	久々戸	長野原町長野原	事業団平成９～15年度調査。縄文晩期土器。近世畑、道、掘立柱建物。	５．６
32	向原	長野原町長野原	町教委平成５年度調査。縄文中期から後期の住居。平安住居。	34
33	長野原城跡	長野原町長野原	中世城跡。	28
34	小林家屋敷	長野原町長野原	町教委平成14年度調査。近世礎石建物、土蔵、石垣。	40
35	坪井	長野原町大津	町教委平成３・10年度調査。縄文前期、中期住居。弥生土器。平安住居。	33．36
36	堪場木石器時代住居	長野原町大津	昭和29年調査。縄文中期後半の住居。群馬県史跡。	26
37	檞Ⅱ	長野原町大津	町教委昭和63年度調査。縄文後期前半の敷石住居４軒。	32
38	暮坪	長野原町羽根尾	町教委平成12年度調査。縄文前期前半の住居。	37
39	羽根尾城跡	長野原町羽根尾	中世城跡。	28
40	羽根尾Ⅱ	長野原町羽根尾	奈良散布地。	31
41	長畝Ⅱ	長野原町与喜屋	町教委平成12年度調査。縄文前期前半、中期後半の住居。	33
42	外輪原Ⅰ	長野原町与喜屋	町教委平成７年度試掘。縄文前後半の土器。弥生土器。	27
43	上ノ平	長野原町与喜屋	縄文中期、後期の土器、石器類出土。	28
44	滝原Ⅲ	長野原町応桑	町教委平成８年度調査。縄文中期後半の住居。中期末の敷石住居。	35
45	古屋敷	長野原町応桑	昭和34年発見。後期前半の敷石住居。	28
46	広池	旧六合村赤岩	群馬大学昭和44年度調査。中期後半の住居。	1
47	上郷Ａ	東吾妻町三島	事業団平成15年度調査。陥し穴多数。押型文土器出土。	6
48	上郷岡原	東吾妻町三島	事業団平成14年度調査。縄文中期後半から後期前半住居。近世民家、畑。	18

第３章　発見された遺構と遺物

第１節　遺跡の概要

横壁中村遺跡は、縄文時代中期後半から後期後半を中心とする集落遺跡で、平成18年度までの調査で竪穴住居230軒以上が確認されており、県内でも有数の大規模集落であることが判明しつつある。

遺跡は、その中央を流下する通称「山根沢」の両側に展開しており、東側は「丸岩」の足下から流れる「東沢」までを範囲としている。北側及び西側の範囲は今後の調査に負うところとなるが、冬には午後３時で日が山に入る北向きの台地に、これほどの大規模集落が維持されたのは、間近にこれらの沢があったからであろう。

この地で人々の生活が始まるのは、縄文時代早期からで、19区の山根沢沿いで鵜ヶ島台式土器等が少量出土している。前期では、初頭の花積下層式から諸磯ｃ式までの土器が断続的に出土しているが、この時期の住居はまだ確認されていない。中期では、五領ヶ台式から勝坂式にかけての土器がかなり広範囲で出土しており､土坑はいくつか確認されている。住居が出現するのは勝坂式後半からである。中期後半は集落が最大規模となり、その後も集落はやや規模を縮小しながら継続し、列石遺構や配石遺構、掘立柱建物等が伴う集落が後期前半まで認められる。後期後半になると山根沢の西側に配石墓群が形成される。この時期の集落の構成はまだはっきりしない。後期後半以後の様子を示す材料は少ないが、晩期終末期の遺物は多量に出土しており、本地域の主要遺跡の一つといって良いだろう。

弥生中期前半期の遺物も比較的多く出土しているが、県内で稲作農耕が始まる中期後半期になると活動の痕跡は途絶えてしまう。この状況は、本遺跡に限らず、西吾妻地域全体に認められる傾向である。

その後､本地域に集落が戻るのは９世紀代からで、本遺跡でも平安時代の住居が数軒確認され、炭化した床材が遺存する焼失住居跡も検出されている。

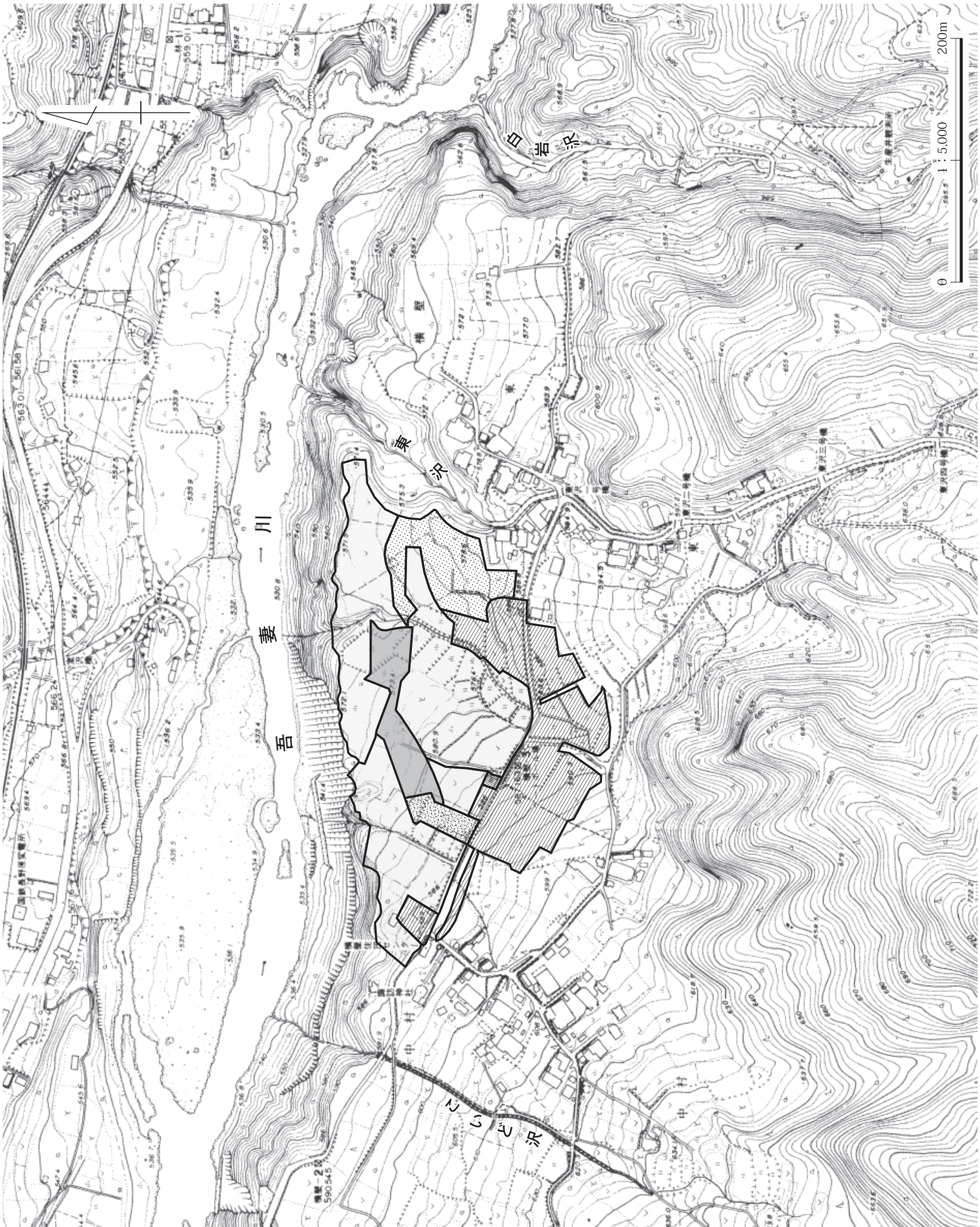
中世になると本地域には、海野一族が支配する「三原荘」が成立し、戦国時代にはその一系でもある真田氏が、甲斐武田氏の指示で本地域を掌握するようになる。本遺跡の南西には柳沢城と丸岩城があり、遺跡内では20区を中心に鍛冶場を伴う中世の館が確認されている。また、その他に中世から江戸期の墓や経塚、天明三年の浅間山噴火に伴う泥流で埋没した畑も検出されている。

以上が本遺跡の概要であるが、遺跡の内容は多岐にわたるため、今回は、平成13～14年度を中心に調査された縄文時代の埋没河道について報告する。なお、表２は現段階における本遺跡の遺構種別ごとにその数を集計したものである。本遺跡の整理は継続中であるため、今後も遺構数の変更される可能性が

表２　横壁中村遺跡遺構数集計表（平成８～16年度）

		9区	10区	18区	19区	20区	28区	29区	30区	合計
竪穴住居		1	3	27	52	104	19	18	13	237
土坑	縄文			86	110	272	11	21	28	528
	弥生					4				4
	平安				1	1				2
	中世以降			161	134	170	2	1	4	472
掘立柱建物	縄文			4		6		1		11
	中世				3	7				10
埋設土器	縄文		2	23	9	27	4		2	67

		9区	10区	18区	19区	20区	28区	29区	30区	合計
配石遺構				42	17	28	17	53	15	172
列石遺構				7	4	5	12	4		32
集石遺構				1		4				5
環状柱穴列	縄文				2				1	3
柱穴列	縄文				1			1		2
	中世					1				1
焼土	縄文			1	2	2		2	1	8
	中近世			12	6	16				34
埋没河道				1	5					6



第５図　遺跡周辺の地形と調査範囲

あることをご了解いただきたい。

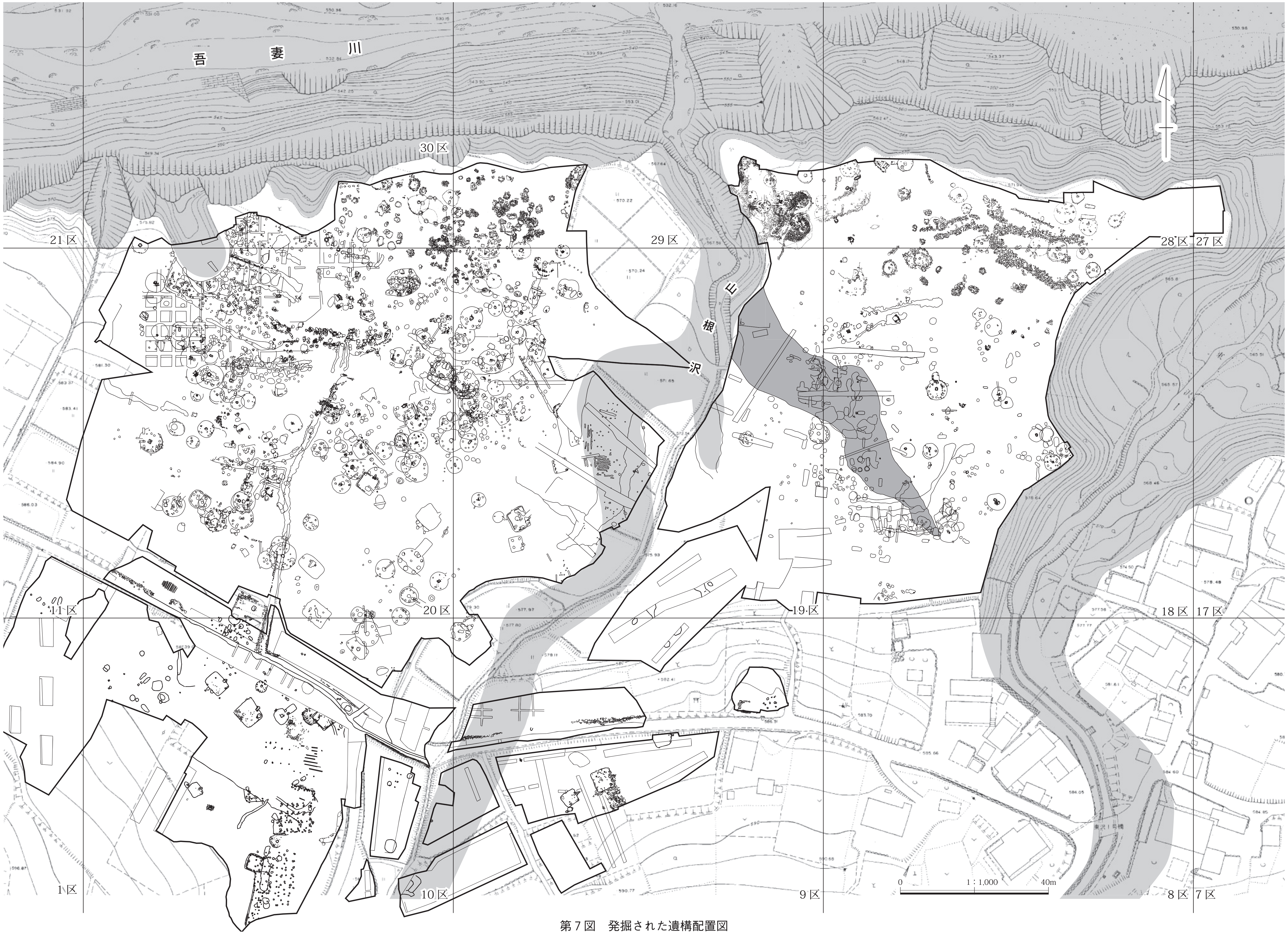
第２節　基本土層

本遺跡が乗る段丘面は、岩盤の上に吾妻川が運んだ段丘礫層を基盤としており、その上に南側の岩塊を核とする山地からの崩落土と礫が繰り返し堆積して形成された、北向きの緩傾斜地に遺跡は立地している。台地上の基本土層は、図に示したⅠ～Ⅹ層まで確認しているが､この10層が１カ所ですべて揃う断面は今のところ認められない。また、各土層の層厚は地区によって異なっているため、あえて記入していない。

今回の報告対象となる縄文時代中期の遺構は、土層としてはⅥ層に該当するが、第１章本文中で「地山の黄色砂質土」と呼んでいるのは、Ⅷ層に該当する。

Ⅰ	Ⅰ層	表土（耕作土）
Ⅱa	Ⅱａ層	浅間A泥流
Ⅱb	Ⅱｂ層	浅間A軽石
Ⅱc	Ⅱｃ層	浅間A軽石下畑の耕作土
Ⅲ	Ⅲ層	淡褐色土　軟質で炭化物を含む。中世に比定される土壌で、20区１号館付近では炭化物を多量に含み、黒土化していた。
Ⅳ	Ⅳ層	灰黒褐色土　やや軟質で均質。古代に比定される土壌であるが、本遺跡では大半が混土化されて、層としてはほとんど残っていない。
Ⅴ	Ⅴ層	黄褐色土　やや軟質。縄文時代後期後半頃の土壌で、加曽利Ｂ式期の遺構と関連する。今のところ、山根沢周囲に認められることから、Ⅷ層ないしはローム層の２次堆積の可能性が高い。
Ⅵ	Ⅵ層	灰褐色土　締まりのある土壌で、黄色軽石や白色粒子を多く含む。縄文時代に比定される土壌で、中期から後期前半の遺構・遺物はこの土層中に含まれる。なお、下半部を中心に多量の礫（山石）を含む。
Ⅶ	Ⅶ層	西側縁辺地区に特有の土壌で、層位はⅧ層と同じであり、沢沿いに流れたものかもしれない。この土層の上層部には縄文時代前期前半の土器が包含され、この土層で埋没した土坑も確認されている。
Ⅷ	Ⅷ層	黄褐色粘質土　崩落したローム層の２次堆積土で、多量の礫・砂礫を含む部分が多い。本遺跡では20区の西半部でのみ確認されており、現在の山根地区集落はこの土層の高まりの上に立地していると考える。供給源は山根集落南側の沢上流部、つまり丸岩の北麓で、崩落時期は縄文時代早期後半頃と思われる。
Ⅸ	Ⅸ層	黒褐色粘質土　硬質で粘性が強く、黄色軽石と白色粒子を多量に含む。
Ⅹ	Ⅹ層	黄色砂礫層　吾妻川が運んだ段丘砂礫層で、本遺跡北側の崖面では15m以上の堆積が確認できる。この下層は基盤の岩塊となる。

第６図　横壁中村遺跡基本土層図



第７図　発掘された遺構配置図

第３節　18区１号埋没河道の調査

ここでは、平成12年度及び14年度を中心に発掘された18区１号埋没河道の調査について報告する。この河道跡には、縄文時代の大量の遺物が包含されており、その上層で多数の配石遺構が確認された。以下にその詳細を報告する。

１　埋没河道の位置と確認の経緯

本遺跡が立地する場所は吾妻川右岸の中位段丘面に該当しており、段丘面には南側の丘陵部から流下する幾すじかの沢がある。段丘面は、丘陵部からの崩落土や沢沿いに運ばれた土砂の堆積等で、吾妻川に向かって緩やかに傾斜する北向きの緩斜面になっている（第２図・第３図）。

横壁中村遺跡は、遺跡の中央部を流下する通称「山根沢」の両側に縄文時代の集落が展開するが、地表面の傾斜は山根沢の東西で異なっている（第３図・第４図）。中期の環状集落がある西側は「こいど沢」が形成した緩斜面で、本遺跡内では北東方向に下がる等高線が認められる。一方東側は、本遺跡の東側を画す「東沢」が形成した緩斜面で、遺跡内では概ね北西に下がる等高線となっている。

今回報告する18区１号埋没河道は、後者の「東沢」が形成した緩傾斜地で確認された（第４図・第５図）。18区は、その東半部を「東沢」によって断ち切られているが、西側は19区に続いており、19区の中央付近に「山根沢」が流下している。東沢は、本遺跡の南側にそびえるランドマーク「丸岩」の東裾から流下する規模の大きな沢で、水量も豊富である。現在の流路は、縄文時代の集落がのる段丘面より５ｍ以上も下にあり、その境は断崖状に落ち込んでいる（第３図）。

18区の発掘調査は、北側の一部は平成９・10年度に実施され、その大半は14年度を中心に平成12年度から平成15年度にかけて断続的に行われた（第１図）。18区調査範囲の東半は東沢に面しており、西半に較べてやや高く、ほぼ真北に向かって下がっているが、西半は北西方向に下る緩傾斜地となっている。現況はいずれも畑地で、傾斜に沿って切り盛りが加えられ、一部に石垣も残っていた。

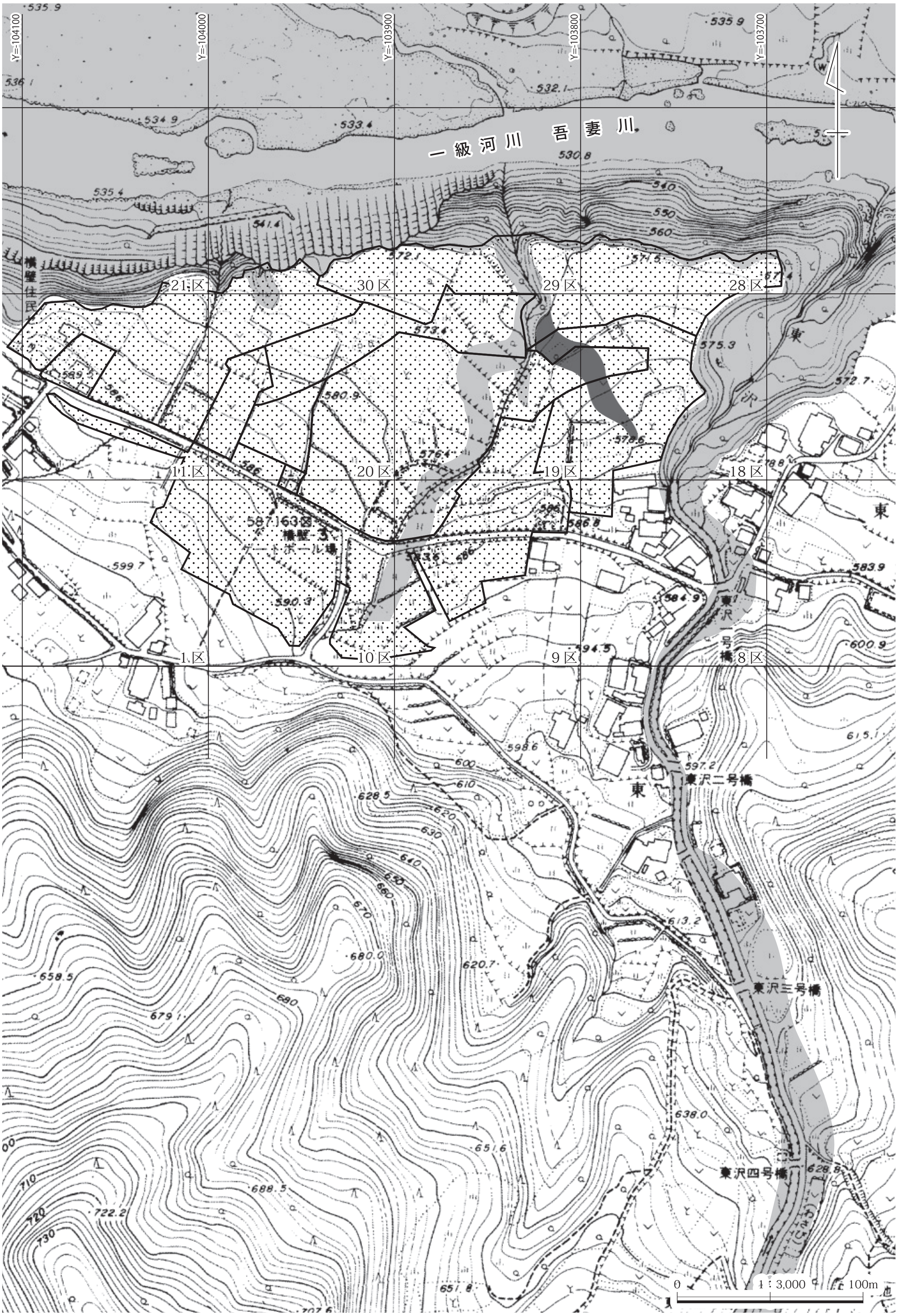
平成12年度の調査は、まず18区南側半分が対象地となったが、遺構の分布状況が未確認だったことから、調査範囲に東西・南北方向のトレンチ４本による確認調査から開始することになった。調査の結果、縄文時代中期後半から後期の遺物及び大量の礫が、濃淡はあるものの、ほぼ全域に分布が認められること、数カ所で住居や土坑が確認されたこと、調査区西側部分に埋没した河道跡があり、埋没土中に多量の遺物が包含されていることなどが判明し、全面発掘調査の必要性が確認された。しかし平成12年度は、工事との関係で優先性が高いその他の遺跡地の発掘調査が浮上したため、18区については確認調査終了段階で一旦凍結されることになった。

翌平成13年度は、18区に先行して発掘が進められていた19区・20区の調査が一段落ついた10月後半から、18区の調査も平行して実施することになった。濃淡を交えながら分布する大量の礫に注意しながら表土を掘削し、中世以後の石垣や土坑群の調査が終了する頃になると、調査区を斜めに横断する埋没河道の姿が見え始めた。

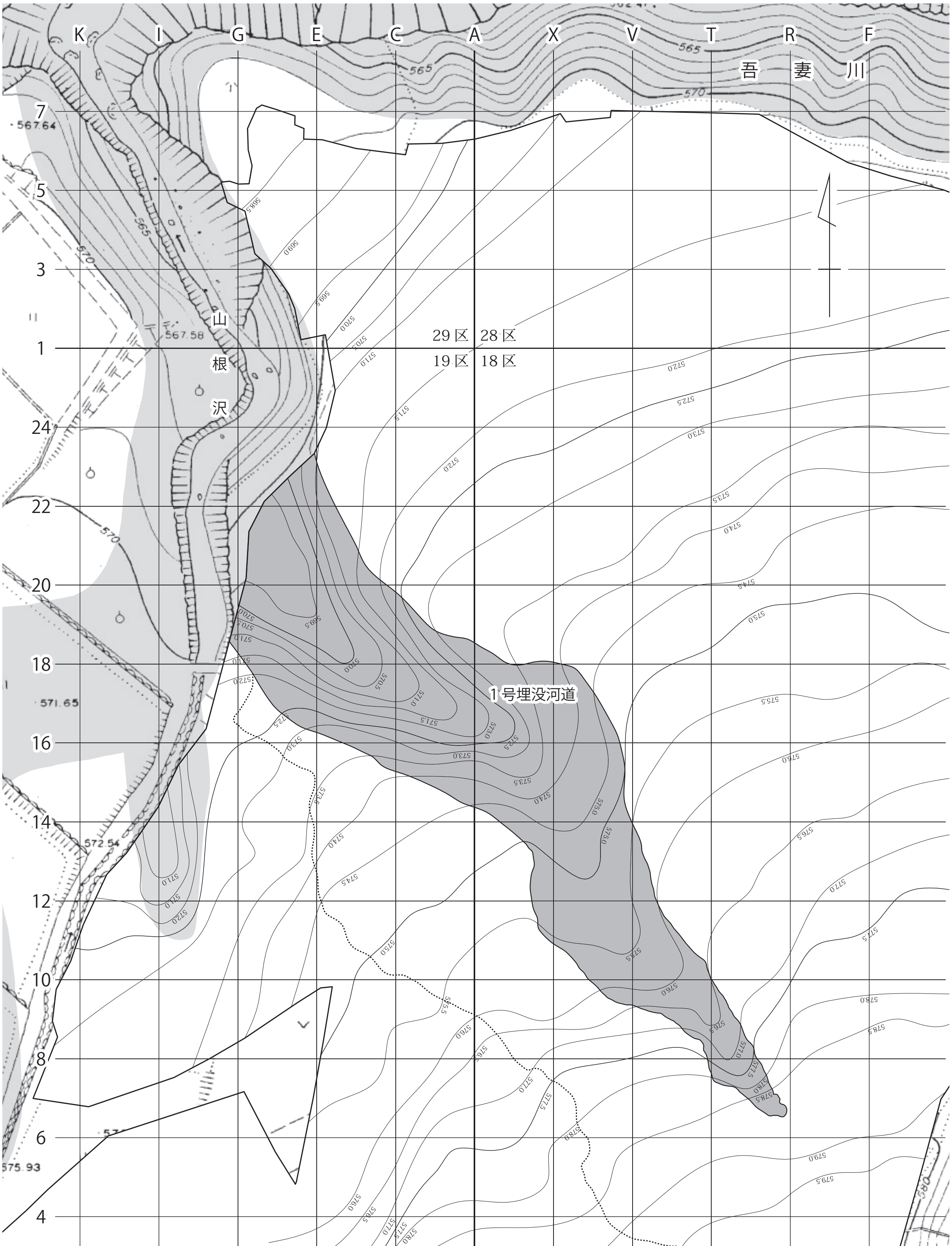
翌平成14年度は、18区の発掘調査が本格的に実施された。１号埋没河道は、調査範囲の中央付近でくの字状に折れ曲がり、その折れ部は外側に大きく張り出しているように見えた。そして、折れ部を円形状に縁取るように多量の礫が集積された状態で確認された。礫の確認面では主に堀之内１式土器の出土が認められた。

その後、手がついてなかった18区南半部も全面にわたる調査を実施することになり、18区全域と19区の山根沢以東が調査の対象となった。南半部は耕作等による削平がかなり進んでいるため、縄文時代の遺構の多くは失われていたが、１号埋没河道の全景を確認することができるようになった。

なお、工事用進入路との関係から、山根沢との関係を示す19区側の接点部分の調査は、平成15年度にずれ込んで実施された。

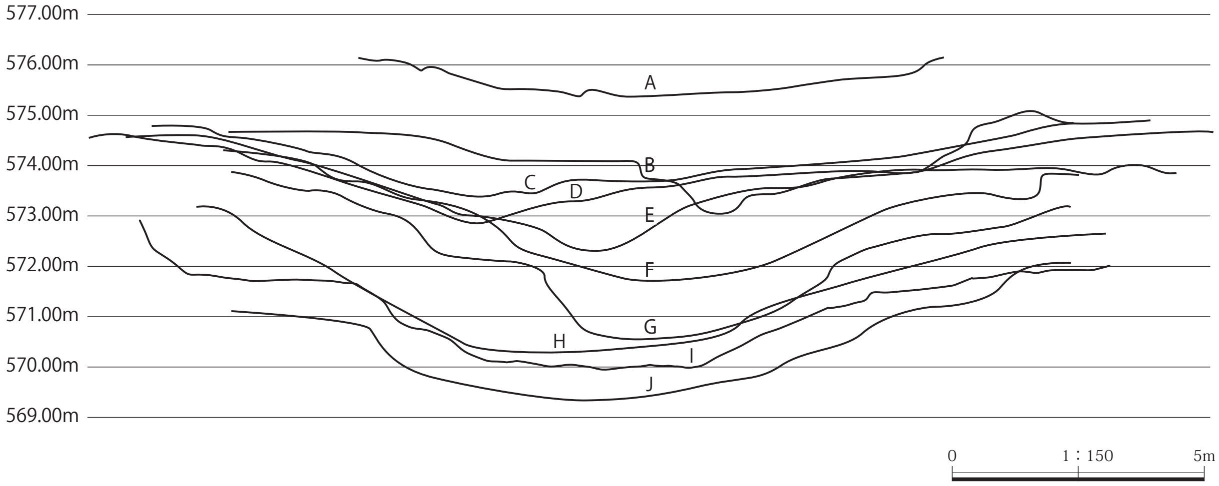


第８図　18区１号埋没河道の位置と形状



第９図　18区の地形と１号埋没河道

第10図　18区１号埋没河道の形状と断面実測位置



第11図　18区１号埋没河道の落差と断面形状

２　埋没河道の形状と埋没過程

ここでは第５図～第９図を参照しながら記述を進めたい。第５図は18区１号埋没河道と山根沢の関係を示したもの、第６図は埋没河道内およびその周囲で確認された縄文時代の全遺構を示したもの、第７図は第６図の断面位置での河道底面形状を集成したもの、第８図～第９図はＡ～Ｊの断面図であるが、断面図は全て最終段階まで作図したものではないことを、予めお断りしておきたい。

１号埋没河道は、18区Ｒ－６グリッド付近を頂点に、北西方向の等高線に沿ってやや蛇行しながら流下し、19区へ入る手前で西側にくの字状に折れ、再び北側に弱く湾曲して山根沢に取り付いている。頂点から19区へ入る手前の折れ部分までは、底面が浅く形状も緩やかだが、折れ部分を過ぎたところで急激に落ち込み、底面形状も鋭角になっている。

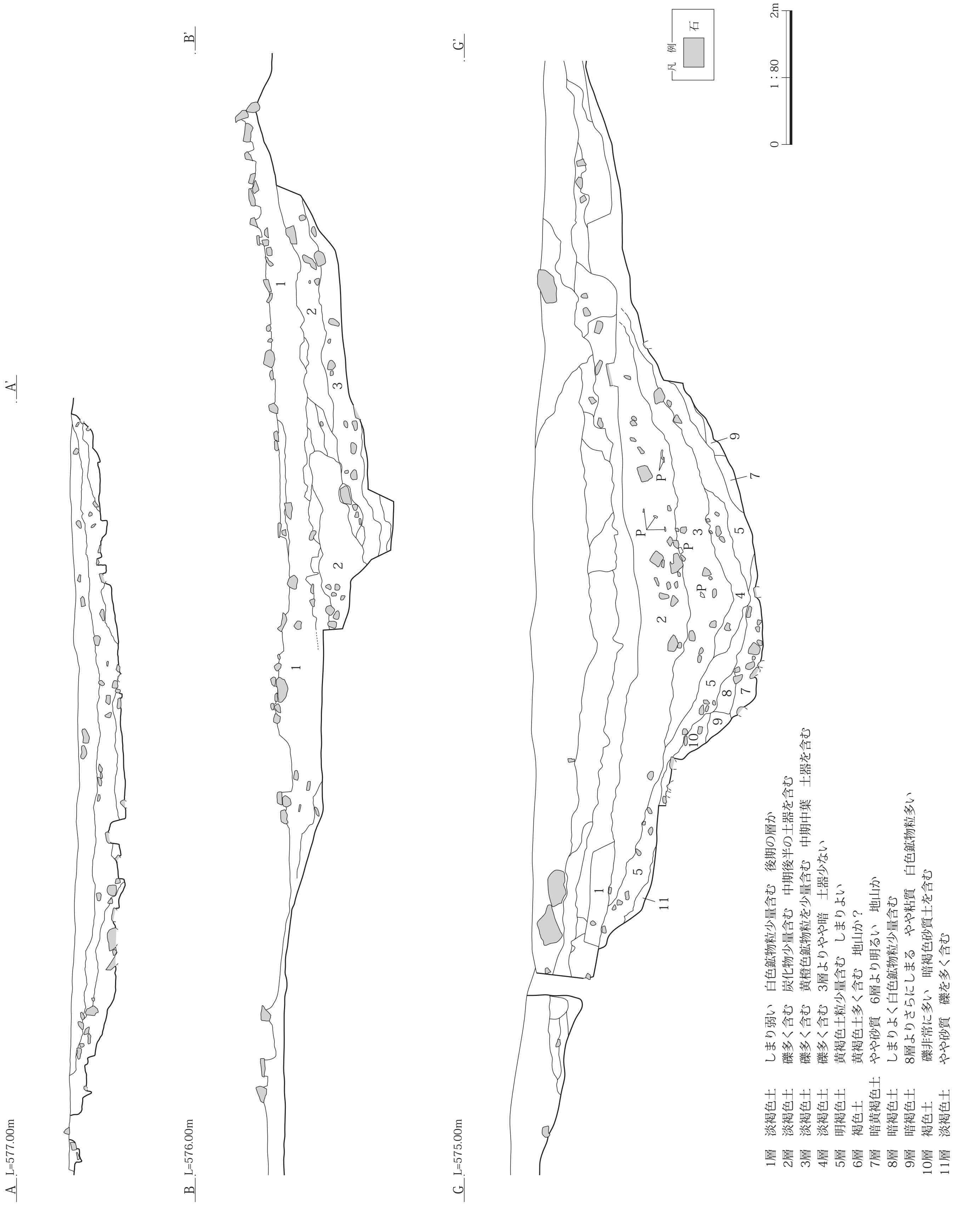
第７図をみると、河道上流側の断面Ａと下流側のＨでは河道底面に７ｍの落差があり、Ｅから下流側では傾斜が大きくなっている様子がわかる。このような形状は、本地域の沢でもよく見られる特徴であり、小さな滝のような段差を連ねながら高速で流れ下る光景が目に浮かぶ。

この埋没河道は、その方向と形状から、おそらく東沢そのもの、あるいはその支流が形成したものと考えられる（第４図参照)。また、河道内からの出土遺物は早期後半鵜ガ島台式期から認められており、少なくとも縄文時代早期には河道の埋没が進行していたと考えてよいだろう。

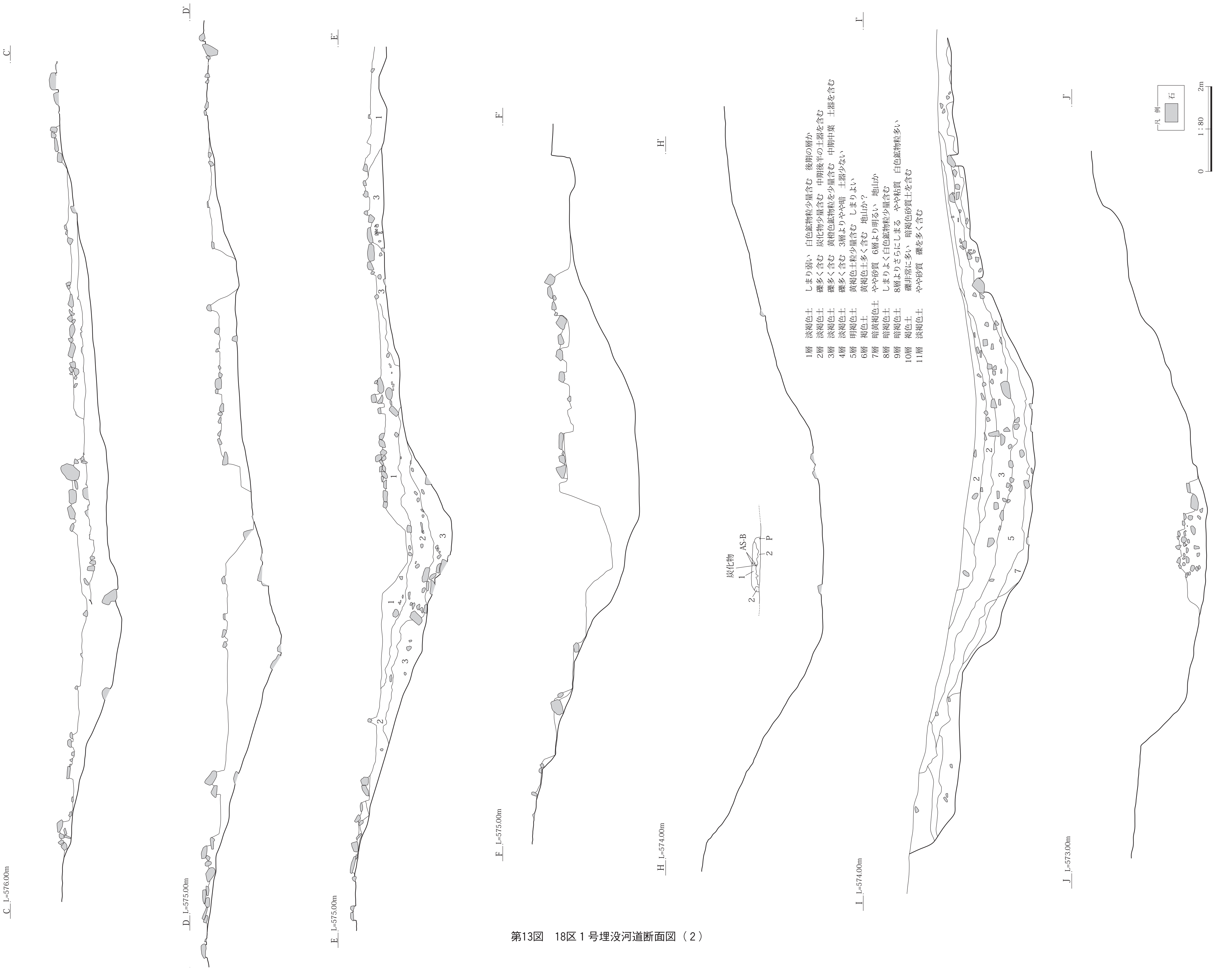
河道の形成時期を示す証拠は確認できていないが、河道内からの遺物の出土状況を勘案すると、縄文時代中期後半ではまだ河道のなごりが残っていたと考えられるが、後期堀之内１式期頃にはかなり平坦化が進んだようだ。そのことは、堀之内１式期の18区３号掘立柱建物や19区27号住居が河道内に入り込んでいる状況からも伺うことができる。

３　調査経過と遺構・遺物の概要

１号埋没河道の調査は、まず平成13年度の段階で河道中央部付近を先行して調査し、折れ部の入り口付近で集積された礫が帯状に連なった状態で確認された。平成14年度に入り、石列は河道が西側に折れて広くなったそのとば口を頂点に、河道の両岸に沿ってＶ字状に展開している状況が確認されたことから、これを４号列石とした。河道内では後期前半の土器が数多く出土し、なかでも４号列石の内部を中心に大型の破片が折り重なるような状態で多数見受けられた。出土する土器の多くは堀之内１式土器であり、４号列石との関係で資料化が必要と判断して、主要土器は三次元データを付して点上げすることにした。また、石器は４号列石に使用されているもの



第12図　18区１号埋没河道断面図（１）



第13図　18区１号埋没河道断面図（２）

を中心に、周辺の礫石器もできるだけ取り上げるように心懸けた。

しかし、調査の進捗に合わせて４号列石をよく観察すると、各部分によって使用している礫の種類や大きさ、配置方法などが異なっており、一連の遺構とすることに疑問も生じた。そこで、４号列石の各部分のうち、共通性のある礫のまとまりを配石として認識し、23号・25号～29号の６カ所を配石遺構とした。つまり、４号列石と以上の６カ所の配石は共有することになる。ちなみに、このうち23号配石は、その後の検討で19区27号住居（堀之内１式期の柄鏡形住居：横壁中村報告書（８）で報告済み）の付属施設に変更した。なお、４号列石と相前後して確認した24号配石と43号配石も後期の配石である。

４号列石の下層にも多量の礫と中期土器が包含されていた。その多くは集落の時期に符合する中期後半のもので、特に加曽利Ｅ３式土器が主体だが、遺構が発見できない早期後半から前期の土器も少量含まれていた。中期の土器は中流部を中心にしながらも河道内のほぼ全体に含まれていたが、なかでも河道中央の折れ部の西側にある深い落ち込み部分に集中する傾向があり、後期堀之内１式土器の集中部とは明らかな違いが認められた。

下層部の調査でも礫は多量に認められ、その分布は土器の集中とほぼ同様の傾向にあったが、数カ所で列状あるいは１カ所に集積するものがあった。これらのうち６カ所を配石と認定し、18区36号・46号～48号・50号配石および19区９号配石とした。

その後、さらに掘削を進めたが、やがて遺物の出土が止まり、次いで褐色土と礫の出土が認められなくなった段階で立ち上がりの地山層と埋没土との違いを比較し、その差が不明瞭になった段階で河道の底面と認識し、調査を終了した。

なお、この埋没河道内では表３に示した縄文時代の遺構が確認されており、今回は未報告だった中期の配石７カ所と、４号列石を含む後期の配石７カ所、及び埋没河道内出土遺物を報告する。

表３　18区1号埋没河道内で確認された縄文時代の遺構

遺構名	時期	備考
18区19号土器埋設遺構	縄文後期	横壁（７）で報告済み
18区23号土器埋設遺構	縄文中期加曽利E3式期	横壁（７）で報告済み
18区25号土器埋設遺構	縄文後期堀之内1式期	横壁（７）で報告済み
18区17号焼土遺構	縄文中期	横壁（７）で報告済み
18区23号配石	縄文後期堀之内1式期	横壁（８）で報告済み
18区24号配石	縄文後期	今回報告
18区25号配石	縄文後期	今回報告
18区26号配石	縄文後期	今回報告
18区27号配石	縄文後期	今回報告
18区28号配石	縄文後期	今回報告
18区29号配石	縄文後期	今回報告
18区36号配石	縄文中期	今回報告
18区43号配石	縄文後期	今回報告
18区46号配石	縄文中期	今回報告
18区47号配石	縄文中期	今回報告
18区48号配石	縄文中期	今回報告
18区50号配石	縄文中期	今回報告
18区51号配石	縄文中期	今回報告
19区39号住居	縄文中期	横壁（３）で報告済み
19区9号配石	縄文中期	今回報告

４　河道内の遺物出土状況

18区１号埋没河道からは、縄文時代早期鵜ガ島台式～晩期終末までの土器が出土しており、その破片総数は約58,000点に及ぶ。このうち主体を占めるのは集落が形成される中期後半～後期前半で、特にこの河道では加曽利Ｅ３式土器と堀之内１式土器が目立つ存在だが、その他にも集落内の住居等ではあまり見かけない浅鉢や台付き土器の台部などが数多く認められた。通常では調査機会の少ない集落内埋没河道ならではの遺物かもしれない。

この埋没河道の調査では、出土遺物の大半はグリッド単位で取り上げているが、上層で遺構確認された４号列石や配石の調査に伴って4,600点あまりの主要遺物を３次元データを付して点上げしている。そのうち土器は4,141点あり、内訳は中期が1,010点、後期が3,131点で、数量は中期では加曽利Ｅ３式土器が、後期では堀之内１式土器が主体となっている（表４）。第14図は、点上げした土器の点数を時期に関連なくグリッド別に表示したものだが、これを縄文時代の遺構配置図に出土位置を●で表示すると第16図のようになる。土器は河道中流域の折れ部を中心に濃密な分布状況を示している。第15図はこれを中期と後期に分けて河道を縦断する方向で表示した

ものである。中期の土器を○、後期の土器を▲で表示している。河道の上流部から下流部までの落差が８ｍほどあり、中流折れ部に広がる平坦面に後期の土器が集中すること、後期の土器の出土レベルが相対的に中期よりやや高い位置にあり、流水等によるその後の混在がさほど認められないこと、中期の段階ではすでに河道の埋没が安定していること、などの状況が読み取れる。

第17図～第19図は中期土器の出土状況で、遺構は中期だけを表示している。３次元データを付した点上げはもとより後期の列石・配石と出土遺物との関係把握を目的にしており、中期土器については上層の一部だけが対象になっているのだが、中期段階の配石との関係や、後期との違いなどを検討するには有効であろう。ちなみに、この画面に表示してある住居のうち、河道の東に隣接する10号・18号・22号・23号住居は加曽利Ｅ１式期古段階、輪郭のない21号住居は加曽利Ｅ３式期、下流部の19区39号住居は時期不明である。第17図は中期土器1,010点を表示したもので、分布は一様で特に偏差は認められないが、上流部の36号配石の周囲と、中流の19区９号配石周囲に、土器の分布がやや多く認められる。第18図は中期前半（五領ヶ台式～勝坂式）の土器分布だが、出土量が少なく、傾向はつかめない。第19図は後期後半（加曽利Ｅ１式～同４式）の土器分布で、第17図はこの段階の分布傾向を示していたのであり、しかも中期後半835点のうち622点は加曽利Ｅ３式期の土器である。ところが、加曽利Ｅ３式期の住居はこの画面より南側、あるいは東側にあり、河道の周辺ではほとんど確認されていない。それは、その後の削平が河道周囲に強く及んでいるためで、本来はこの地区にも加曽利Ｅ３式期の住居があったと考えてよい。

第20図～第23図は後期土器の出土状況で、ここでも遺構は後期だけを表示している。遺構名称は第27図と第28図、および付図１～３を参照していただきたい。河道周辺の遺構のうち、11号住居は称名寺２式に、そのほかの住居はいずれも堀之内１式期に比定されるが、なかでも河道の右岸側に遺構の一部がかかる18区３号掘立柱建物と29区27号住居、および河道最上流に位置する18区19号住居について、一言ふれておきたい。18区３号掘立柱建物は棟持柱を伴う長方形の大型高床建物で、堀之内１式期の本遺跡を代表する遺構である。特に長軸をほぼ南北にとっている点などは、同時期の周囲の遺構を見る際の一つの基準になる。29区27号住居は主軸を３号掘立柱建物と同様にほぼ南北にとっており、両者の関係および隣接する４号列石との関係も注目される。なお、

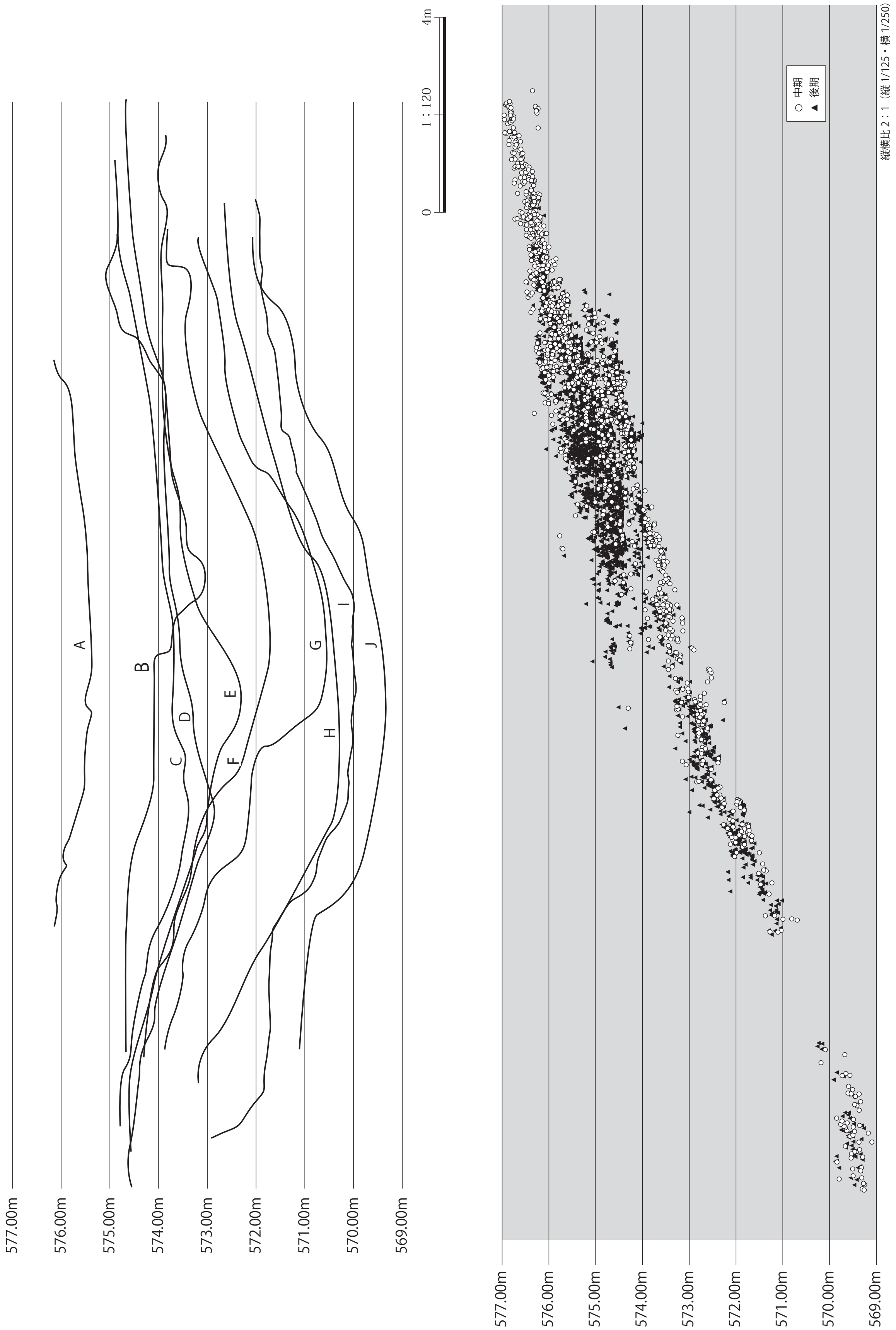
表４　後期調査面点上げ土器時期別点数

〈　中　期　〉	点数
五領ヶ台式	0
勝坂式	19
阿玉台式	10
焼町	18
曽利式	2
唐草文系（古）	7
唐草文系	98
加曽利Ｅ１式	60
加曽利Ｅ２式	3
加曽利Ｅ３式	622
加曽利Ｅ４式	43
中期	128
中期合計	1010
〈　後　期　〉	
称名寺１式	66
称名寺２式	23
堀之内１式	1379
堀之内２式	167
加曽利Ｂ式	0
後期	1496
後期合計	3131
総合計	4141
土製円盤	26
石器	294
総計	4461

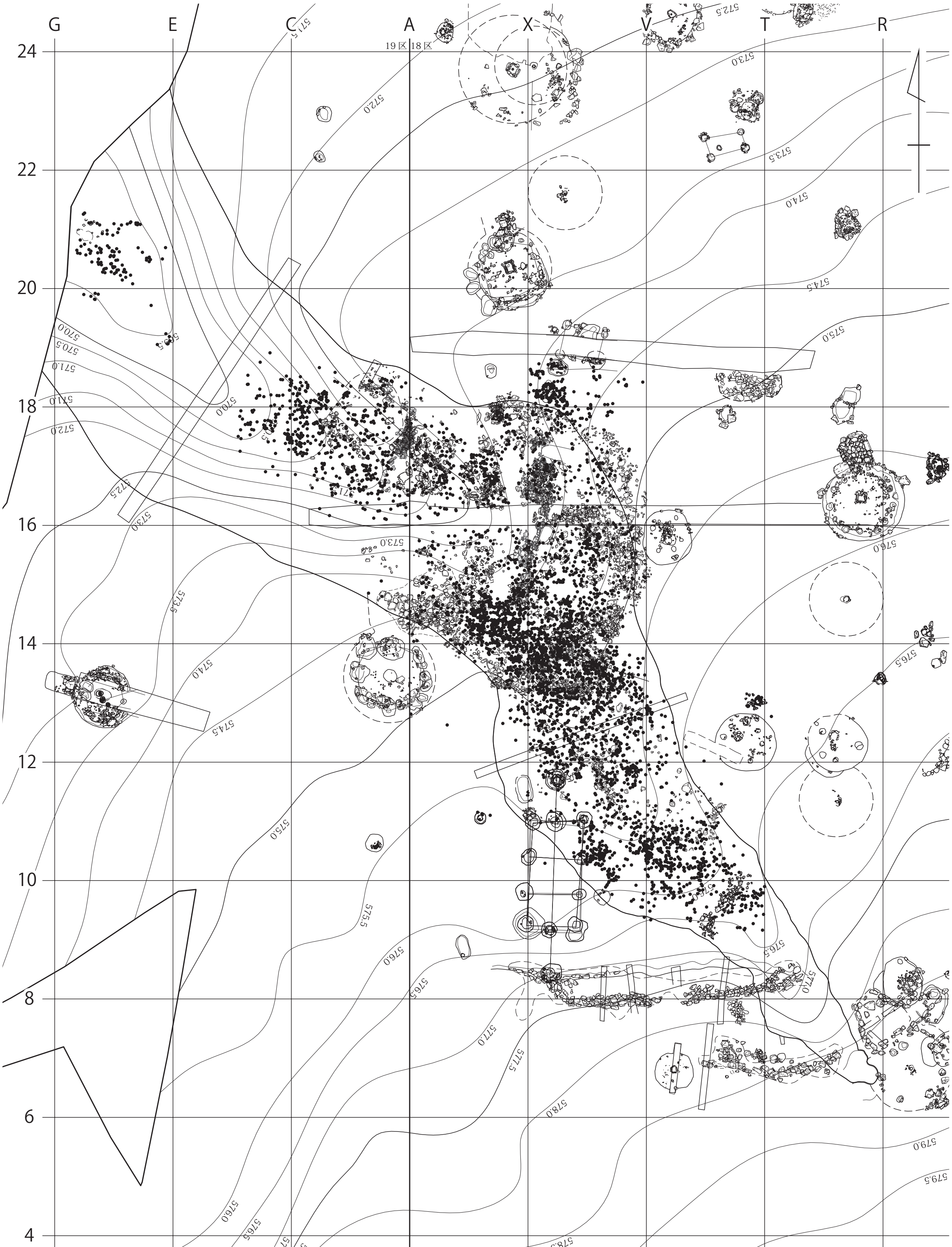
	19区							18区									計
	G	F	E	D	C	B	A	Y	X	W	V	U	T	S	R	Q	
22																	
21		6	10														16
20		46	29														75
19		6	6														12
18					24	64	18	1	1	137	20						265
17					67	129	77	49	74	68	25						489
16					3	37	100	72	75	38	27						352
15							1	27	64	121	80						293
14							4	76	412	235	66						793
13								8	133	389	196	1					727
12								2	19	176	128	29	1	1			356
11									5	51	115	18	2				191
10										28	146	232	30				436
9											18	56	62				136
8																	
7																	
6																	
5																	
計		58	45		94	230	200	235	783	1243	821	336	95	1			4141

0　1：500　20m

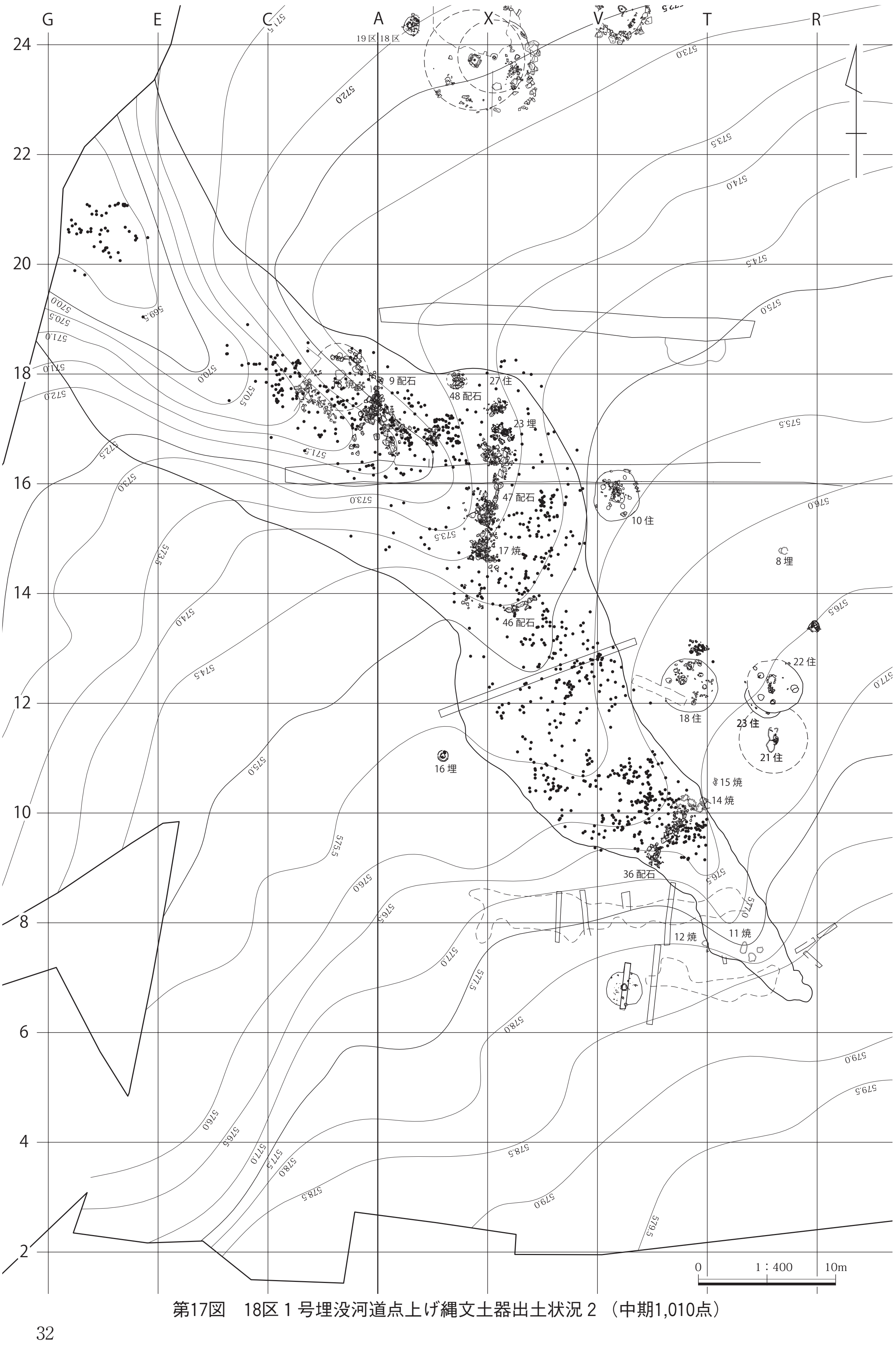
第14図　18区１号埋没河道点上げ縄文土器出土点数



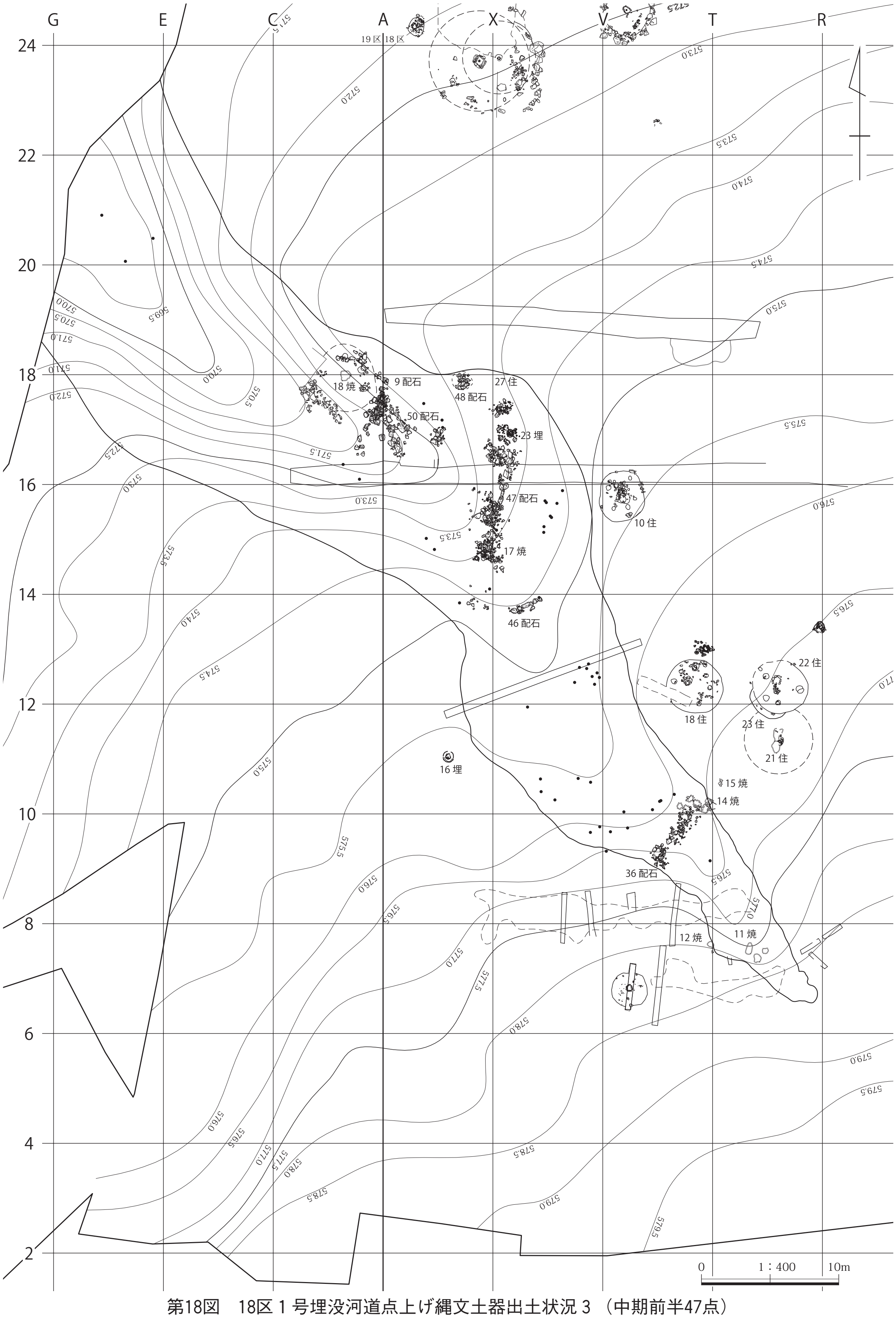
第15図　18区１号埋没河道の落差と縄文土器出土状況



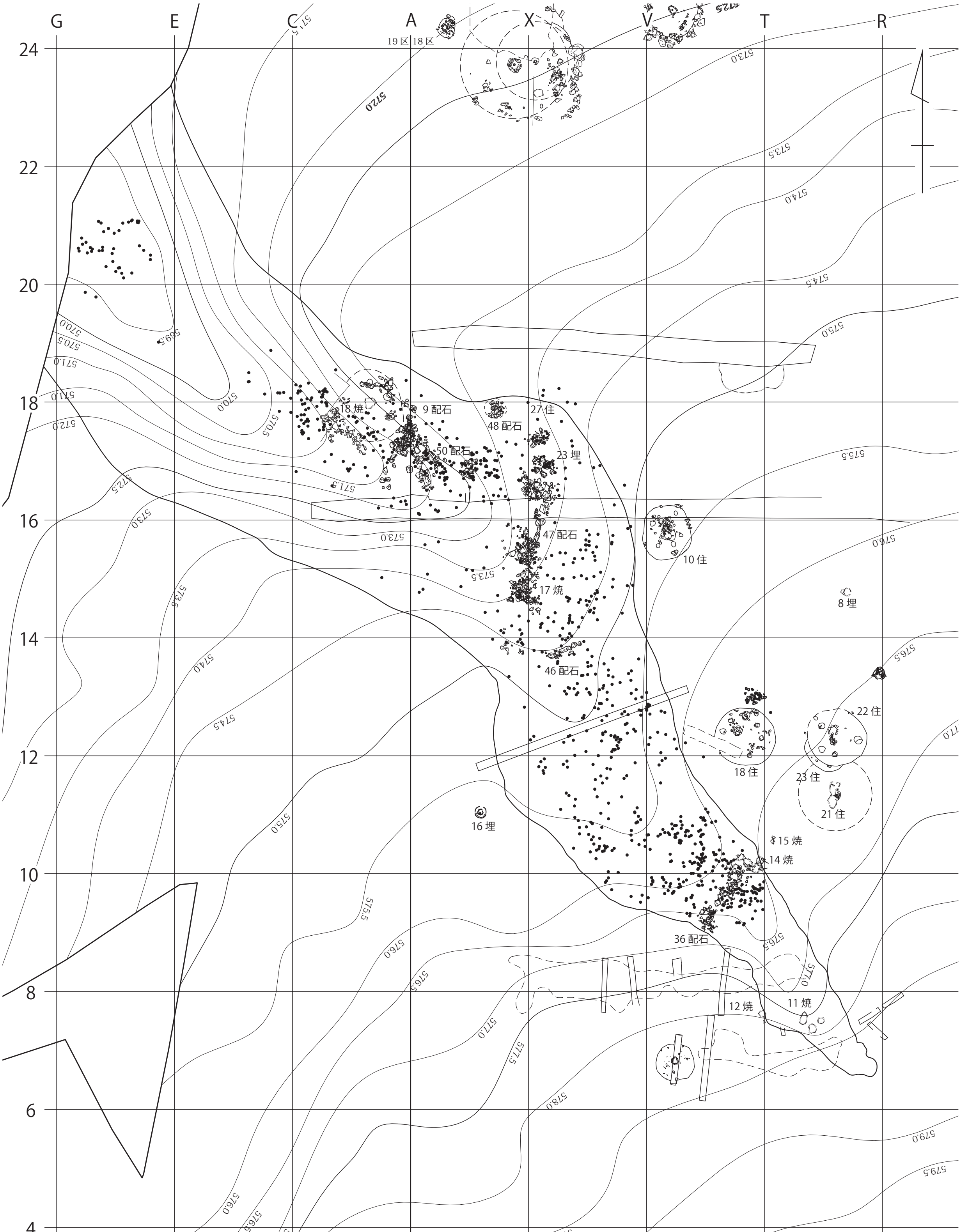
第16図　18区１号埋没河道点上げ縄文土器出土状況１（全時期4,141点）



第17図　18区１号埋没河道点上げ縄文土器出土状況２（中期1,010点）



第18図　18区１号埋没河道点上げ縄文土器出土状況３（中期前半47点）



第19図　18区１号埋没河道点上げ縄文土器出土状況４（中期後半835点）

18区４号列石を構成する配石のうち、23号配石は29区27号住居の出入り口部に伴う弧状部分列石の一部となる可能性が高いことから、27号住居に伴う配石としてすでに報告済みである。18区19号住居は同時期の住居の中で最も高い位置にあり、主軸は等高線に直行する位置にとる。出入り口部には５号列石・６号列石とした弧状列石を伴うが、このうち６号列石は東西方向に合わせて配置されており、位置関係も含めて18区３号掘立柱建物との関係が深い遺構と考えたほうがよいかもしれない。

さて、第20図は後期土器3,131点を表示したもので、４号列石の西半部を中心に、３号掘立柱建物の東側から中流域全体に、そして下流部と、数カ所に集中を見せながら分布している。

第21図は称名寺式期の土器89点を表示したもので、点数は少ないものの、中流部の18区Ｘ－18グリッドと下流部の19区Ｅ－20グリッドに集中する場所があり、さらに19区９号配石の周辺に散在する状況が観察できる。

第22図は堀之内１式土器1,379点を表示したもので、４号列石の西半部に濃密な集中があり、他に３号掘立柱建物の東側や19区９号配石の周辺にも集中が認められる。

第23図は堀之内２式土器167点を表示したもので、前時期を引き継ぐように４号列石の西半部に集中があり、他に19区９号配石の西側の河道中央にややまとまった分布が認められる。

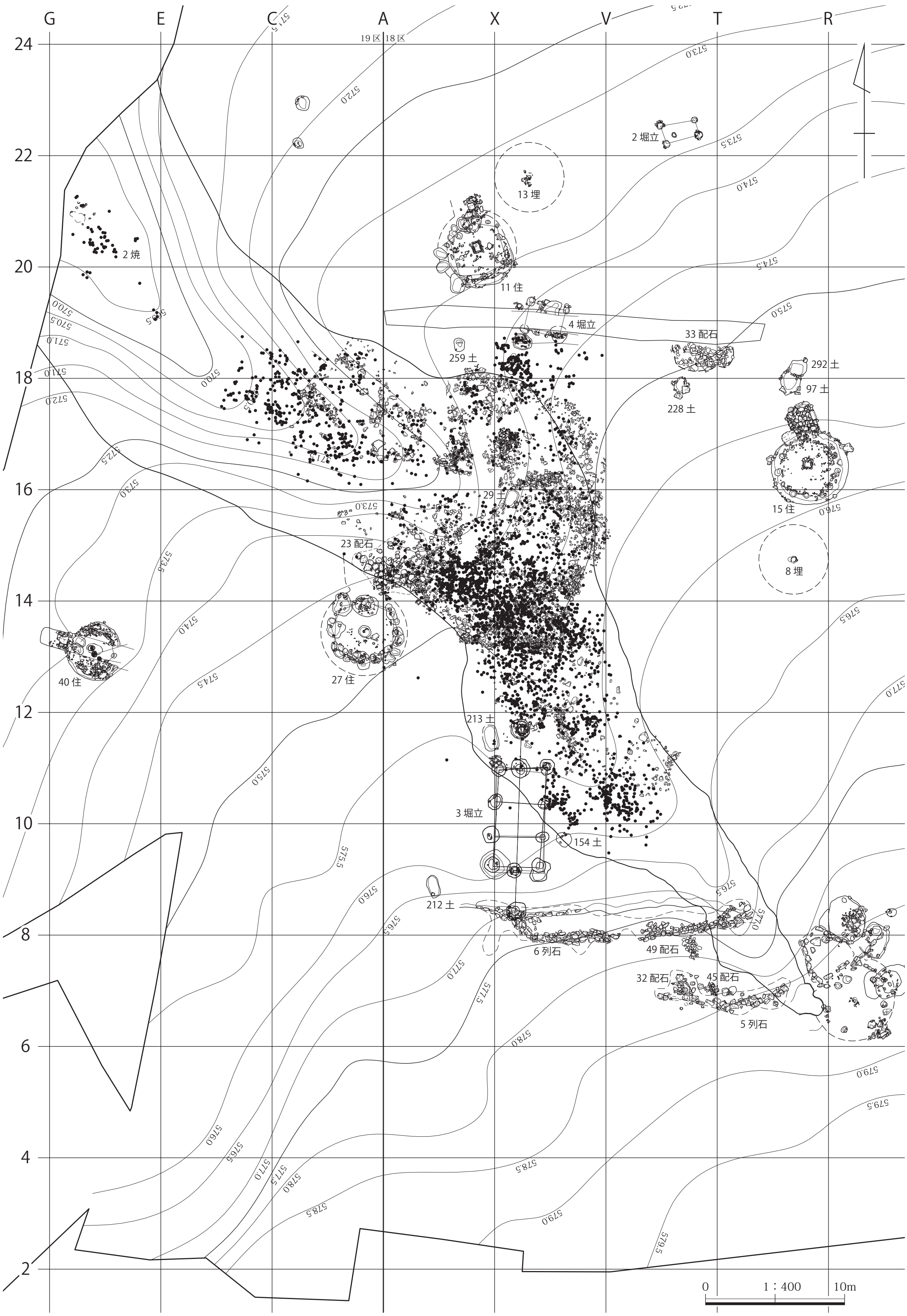
後期土器は粗製系が多く、3,131点のうち約半数は型式区分ができなかったが、型式が判明している土器1,635点のうち、84％にあたる1,379点が堀之内１式土器である。付図１・２に後期主要土器の分布と接合状況を掲載したので参照していただきたい。

以上が３次元データをもつ点上げした主要土器の分布状況である。続いて、量的には圧倒的多数を占めるグリッド取り上げの土器について、その概要を報告しておきたい。表７はその集計結果である。早期後半の土器は４点のみの出土であるが、本遺跡での最初の活動を示す重要な証拠である。前期前半の土器は23点、前期後半の土器は63点出土しており、その後も繰り返し反復的な活動が行われていることを示す。中期の土器は全体で27,992点が出土しており、後期の土器総数14,561点の約２倍に相当する。これは集落の規模と継続期間の実情を反映しており、中期では加曽利Ｅ３式期を、後期では堀之内１式期をピークに集落が盛衰している状況が看取される。

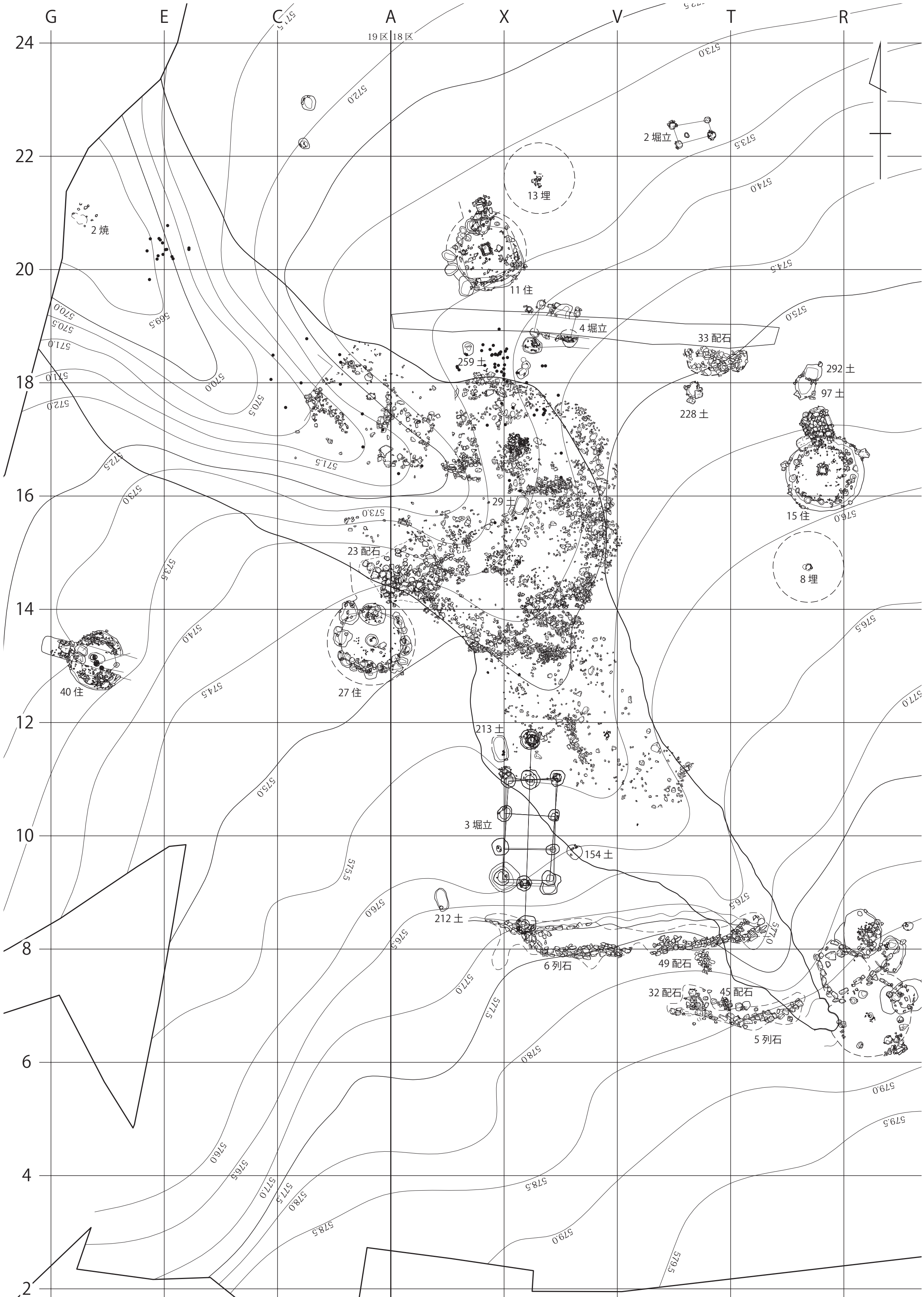
第24図・第25図に時期別のグリッド取上げ土器の点数を示した。中期の分布は前半と後半とが同傾向にあり、18区Ｙラインから19区Ｃラインにわたる河道中央部を中心に分布している。後期の分布はやや異なっている。称名寺式では18区Ｖ～Ｗ－17グリッドを中心に最大の集中があり、そのほかに18区Ｗ－13～14グリッド、19区Ｂ－16～17グリッド、19区Ｄ～Ｆ－19～20グリッドの３カ所に集中が分散している。堀之内１式は18区Ｗ～Ｘ－13～14グリッドに最大の集中があり、ほかに18区Ｕ－10グリッドと19区Ａ～Ｃ－17グリッドの２カ所に集中が認められる。最大の集中箇所は18区４号列石の主要部に該当しており、点上げ土器の分布と一致する。堀之内２式の分布は堀之内１式の分布を引き継いだ地区にあり、これも点上げ土器の分布と同じ傾向を示している。

なお、河道内からは土器と共に多量の石器や石材も出土しており、表８・表９に出土石器一覧を、表10・表11に出土特定石材一覧を示した。石材のうち、小型石器の石材となる黒曜石・チャート・珪質変質岩の３種類について、そのグリッド別の出土量を重量（ｇ）で表示したものを第26図に示した。時期の特定や詳細な観察はできないが、出土傾向は土器の分布とほぼ共通しており、基本的には土器と一緒に廃棄される傾向が看取された。

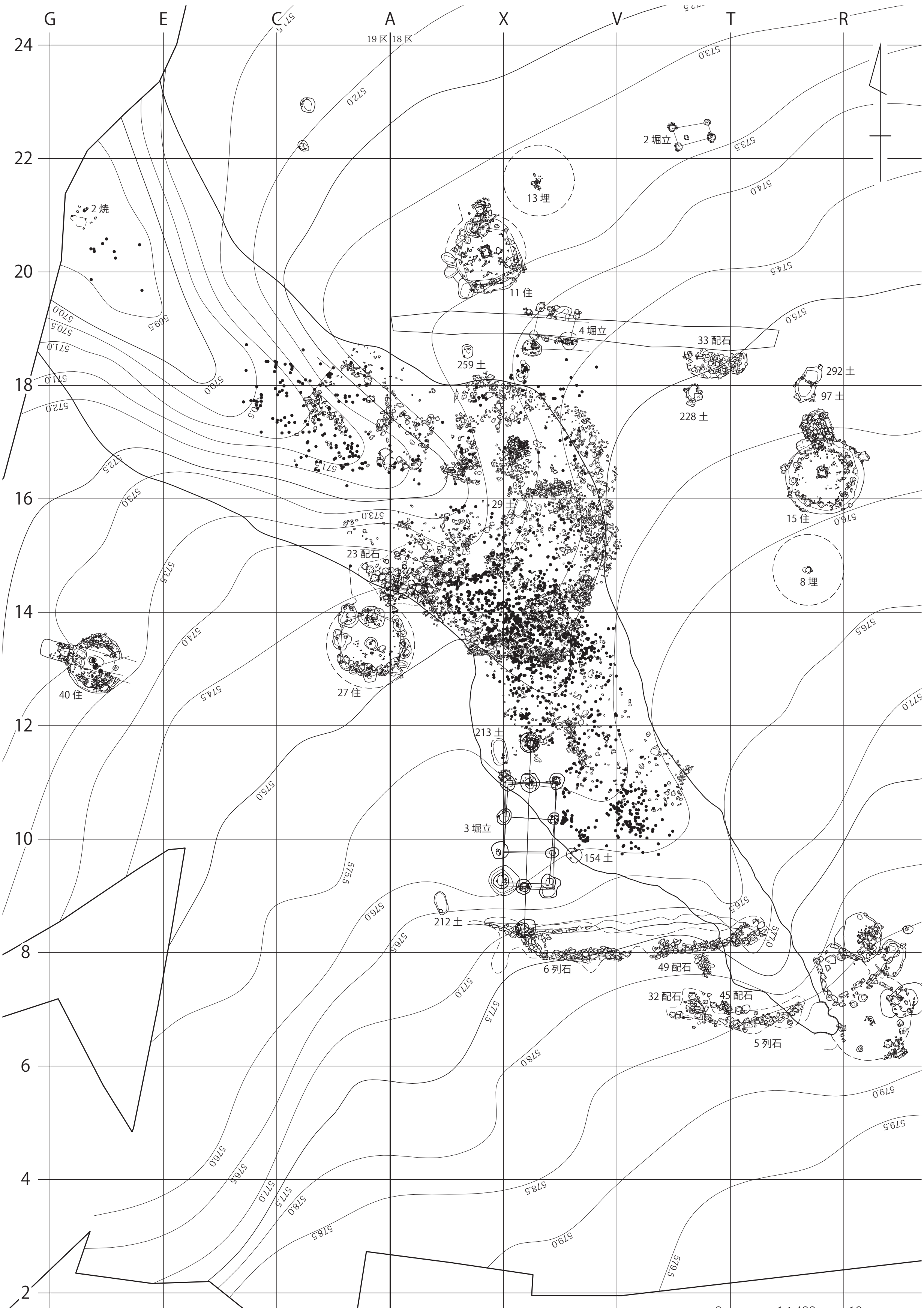
また、河道内から939点もの土製円盤が出土している。当初は円形の土製円盤のみを取り上げていたが、楕円形や方形状のものもあること、大型のものは欠損品が多いことなどに気付き、意識的に点検した結果、実は多量に存在していることがわかった。恣意的な目での観察であり、取り違いもあると思うが、その点はご容赦願いたい。



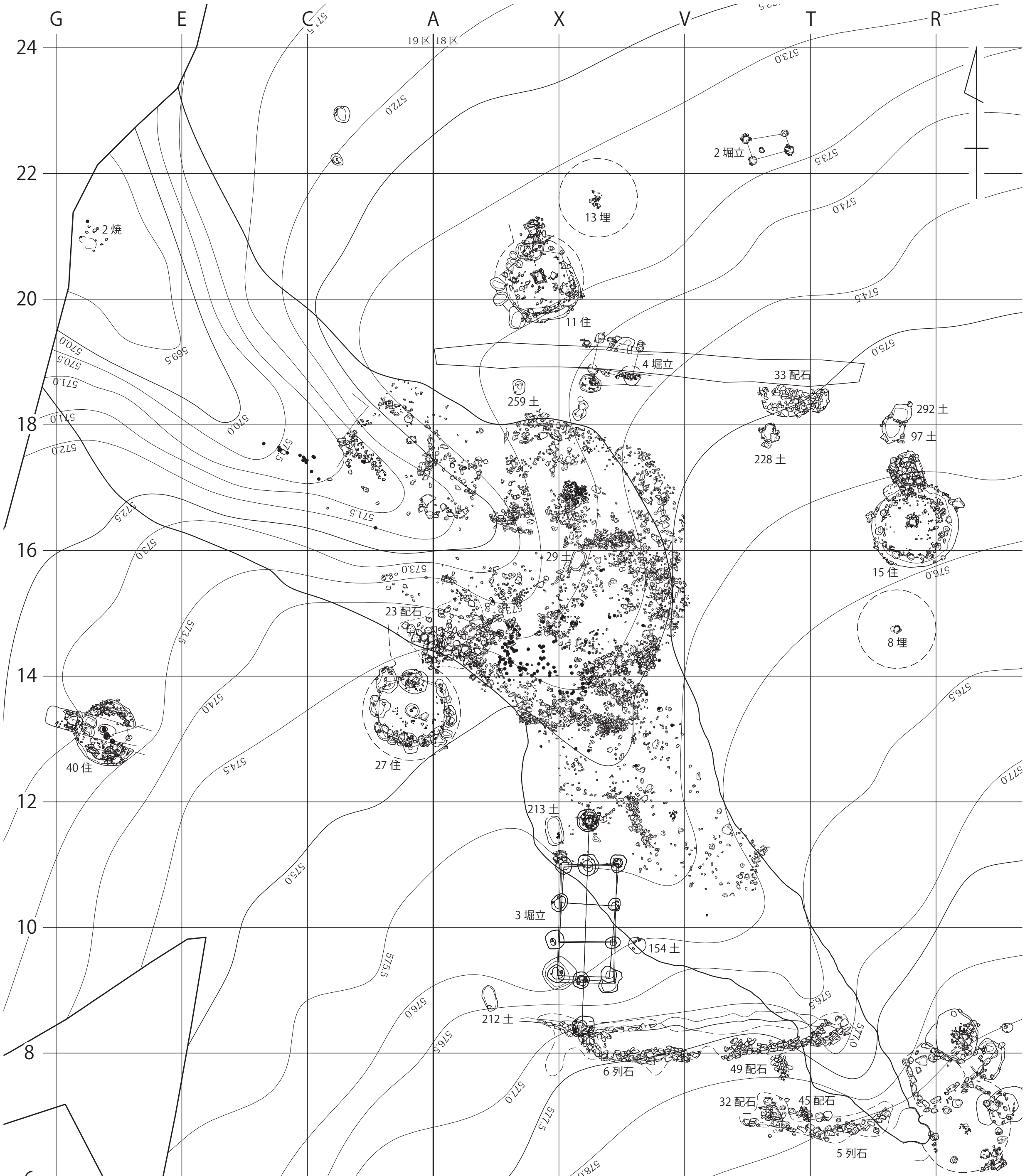
第20図　18区１号埋没河道点上げ縄文土器出土状況５（後期3,131点）



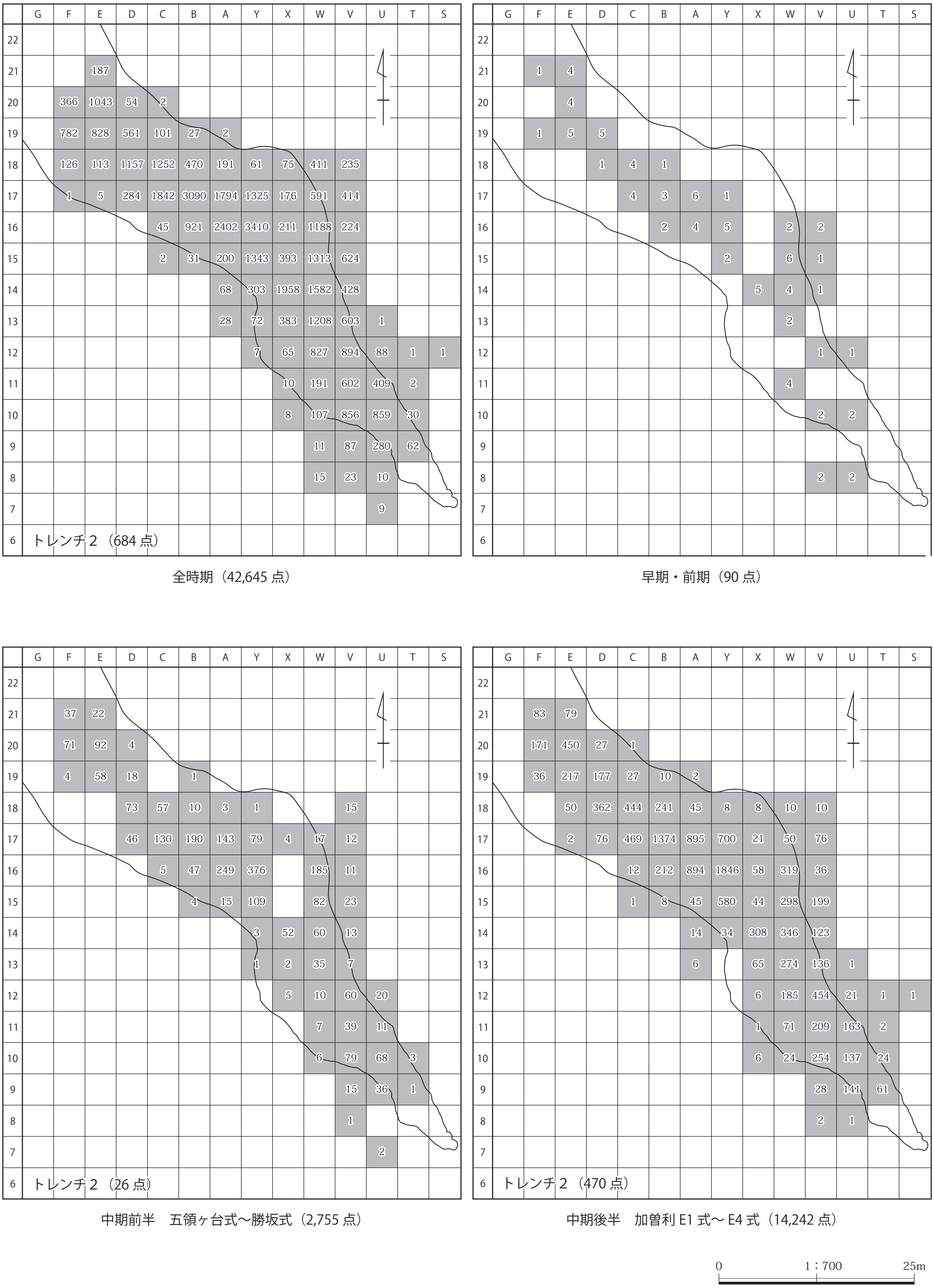
第21図　18区１号埋没河道点上げ縄文土器出土状況６（称名寺式89点）



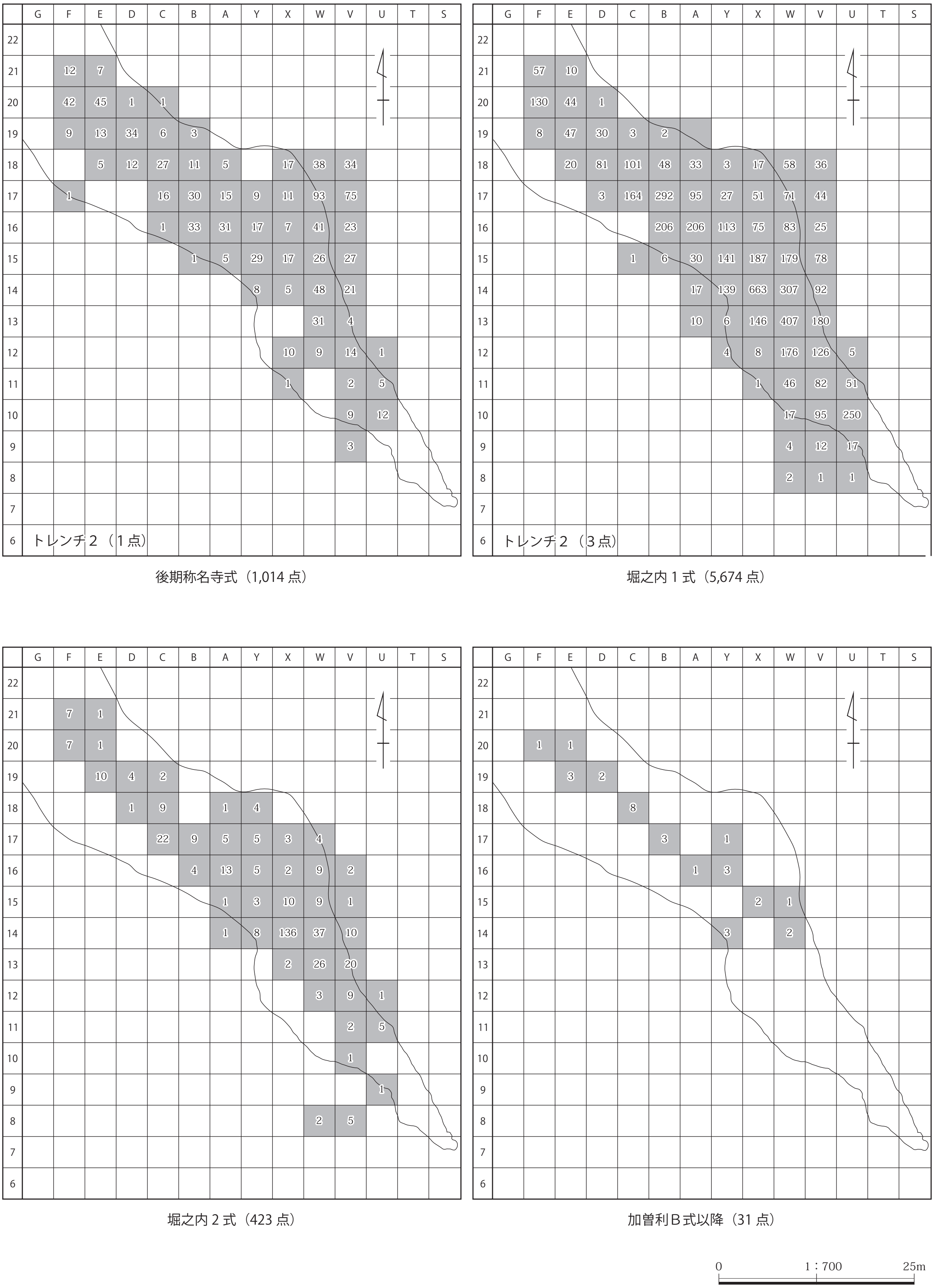
第22図　18区１号埋没河道点上げ縄文土器出土状況７（堀之内１式1,379点）



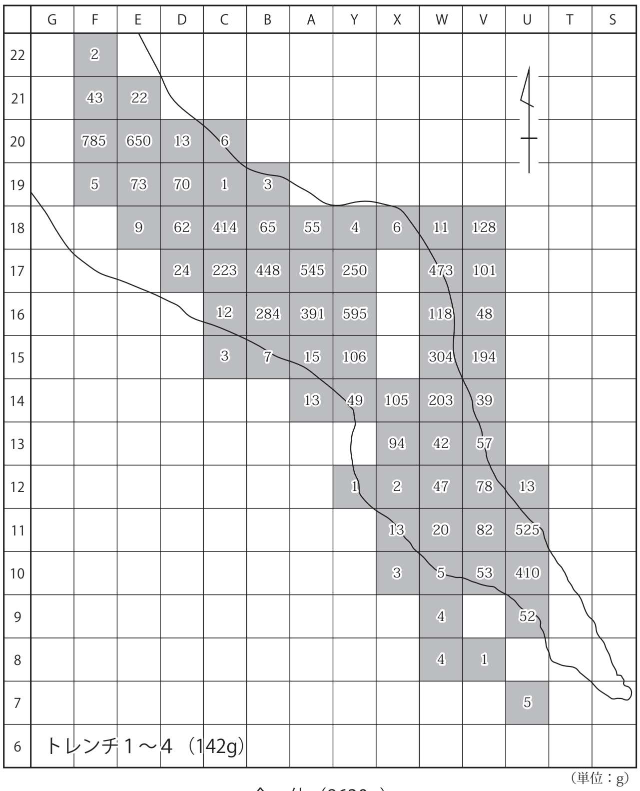
第23図　18区１号埋没河道点上げ縄文土器出土状況８（堀之内２式167点）



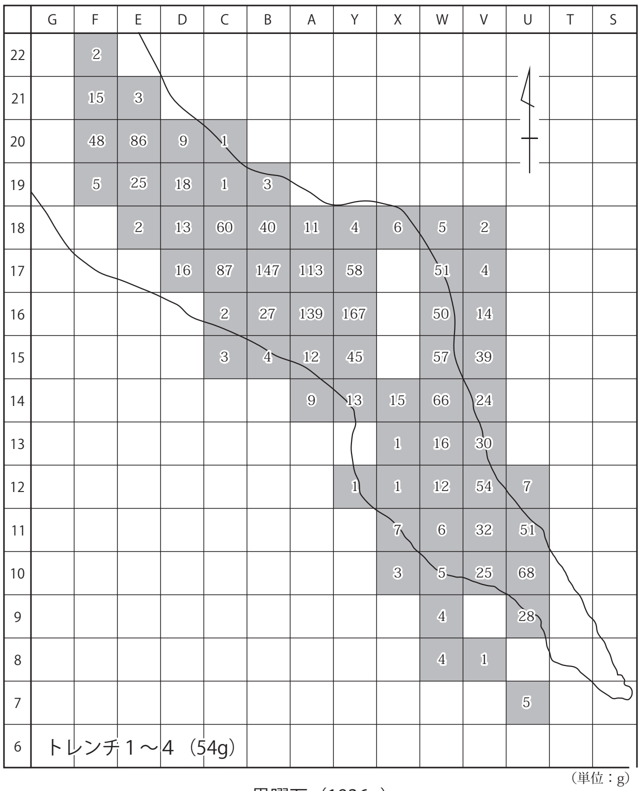
第24図　18区１号埋没河道グリッド上げ縄文土器出土点数１（全時期、早期・前期、中期前半、中期後半）



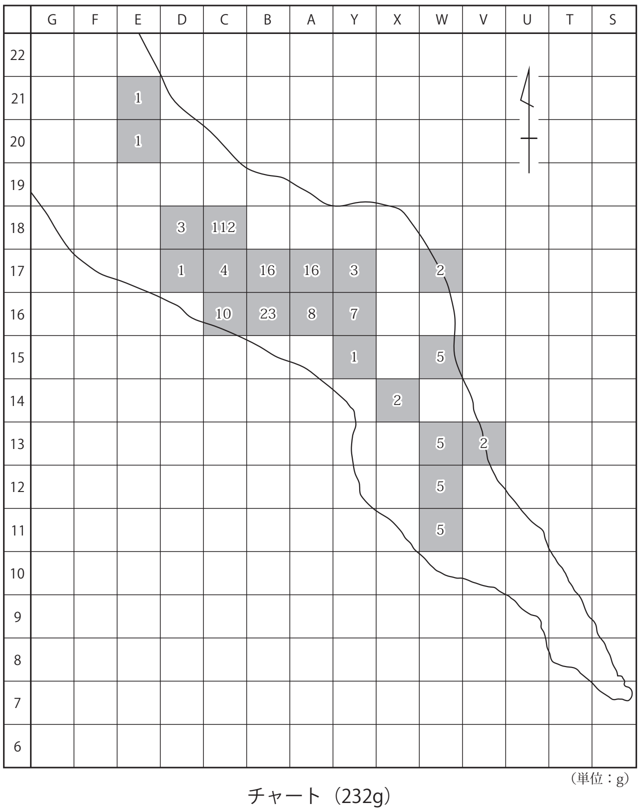
第25図　18区１号埋没河道グリッド上げ縄文土器出土点数２（後期称名寺、堀之内１、堀之内２、加曽利Ｂ以降）



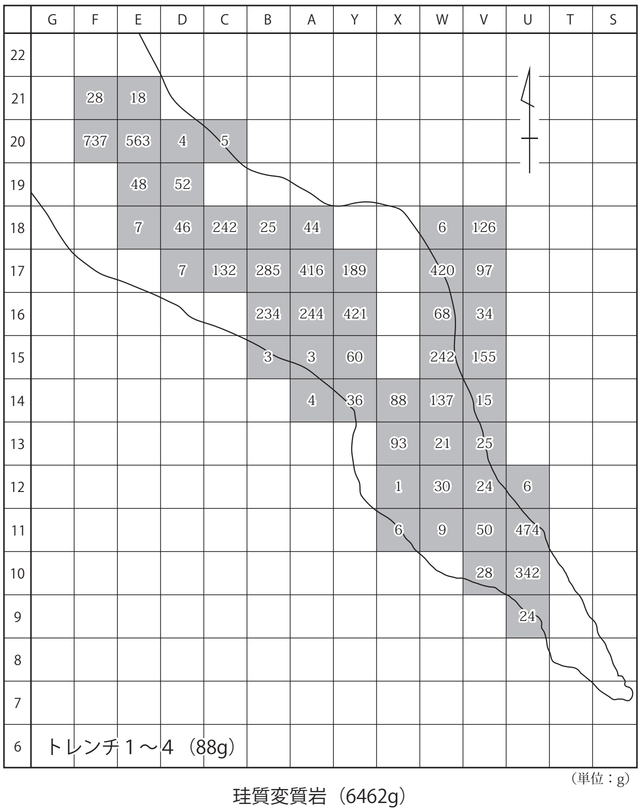
全　体（8630g）



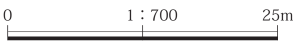
黒曜石（1936g）



チャート（232g）



珪質変質岩（6462g）



第26図　18区１号埋没河道グリッド上げ縄文石材出土状況（全体、黒曜石、チャート、珪質変質岩）

第４節　縄文時代の配石遺構

１　18区４号列石の調査

４号列石は、18区１号埋没河道内の中流折れ部に広がる平坦面で確認された（第27図～第29図）。この折れ部は、上流からの細い川幅が広がる場所で、４号列石はまさにその広がった河道縁辺に沿うように配置されていた。

列石は、標高574.5～575mの等高線に沿うように、ほぼ水平に配置され、その内部を中心に多量の土器が出土した。出土した土器の大半は堀之内１式土器で、特に主要土器は河道中央から左岸の縁辺に沿って集中しており、縁辺の傾斜に合わせて内側へ緩やかに落ち込んだ状態で認められた（PL７～９）。

確認当初は、左岸側の河道立ち上がりに沿って直線的にのびるラインを基準に、W－13グリッドで直角方向に折れ、さらにV－15グリッドで直角方向に折れるコ字状あるいは方形状の配置を想定した。この場合、規模は14m四方になるが、北辺や西辺には礫が途切れる場所があり、特に西辺の礫がわずかしか残っていないことになる。ちなみに、グリッド16ラインより北側では礫が長方形状に抜ける部分があるが、これは中世以後の土坑が重複したことによるのだが、礫が集積して場所も雑然と集積しているだけで基準となるものがなく、しかも礫はさらに下部へ続いおり、地山礫との区別が困難な状況となる。また、南辺のラインは河道内でもほぼ水平を保つように構築されているが、北辺では河道内の傾斜に合わせて落ち込んでいる。

河道右岸側の礫はむしろ右岸の立ち上がりに沿って大型礫がいくつか並んでおり、河道縁辺の立ち上がりに沿った配置という点では左岸側の状況と一致している。この配置を想定した場合、規模は一辺18mほどになる。

調査の進捗に伴って礫配置の状態がより明瞭になり、列石各部に使用されている石の形状や配置に違いがあることが判明した。特に４号列石認定の基準となった東辺から南辺の石列のなかに、特徴を共有する礫のまとまりがあり、これを配石と認識して23号・25号～29号配石とした。その後、23号配石は隣接する29区27号住居の出入り口部に伴う弧状列石の一部である可能性が高いことから、23号配石は29区27号住居の施設に変更し、４号列石を構成する配石は25号～29号配石の５基となった。

このうち、25号～28号配石は、４号列石の南東コーナー部分を構成する一連の配石で、埋没河道を横断する位置にあるが、一定の幅で帯状に横断するのではなく、全体としてつぶれた二等辺三角形状を呈する。この一連の配石には所々に間隙があり、それが配石を区分した時の一つの基点にもなっている。

２　18区４号列石を構成する配石の調査

４号列石を構成する25号～29号配石を報告するにあたり、事前に出土遺物についてふれておきたい。25号～29号配石の出土土器は、各配石出土としては扱わず、４号列石出土土器として掲載している。表５に各配石出土の土器番号を示した。土器番号は４号列石出土土器の番号である。

各配石の出土遺物として取り上げた土器は、25号が17点、26号が20点、27号が27点、28号が９点、29号が15点、合計88点であるが、そのうちの30%以上の土器が配石間で接合している。トーンをかけた番号の土器がそれであり、なかでも224・254の２点は３カ所の配石間で接合関係が認められた。

以上のことから、４号列石を構成する25号～29号配石は、その形態差をもとに個別化して配石としたが、出土土器は個別配石に伴うと捉えるよりも、それらが集合した４号列石という構造物に伴うものとして扱うことにした。ただし、各配石の遺物の項目では、表５をもとに土器についても扱う。なお、石器については各配石出土として掲載してある。

表５　18区４号列石内　配石取上げ土器の配石間接合事例

遺構名	配石取上点数	配石間接合点数	接合事例土器番号（トーンは配石間接合事例を示す）															配石間接合事例数			
25号配石	17点	8点	192	211	242	254	256	263	267	268	277	381	392	397	399	410	419	23号1例	26号4例	27号1例	29号3例
			541	第37図1																	
26号配石	20点	8点	69	154	195	198	205	224	254	263	269	277	300	311	341	365	397	25号4例	27号3例	28号2例	29号1例
			398	415	430	480	540														
27号配石	27点	8点	54	81	115	154	188	195	212	216	224	232	239	244	248	249	250	25号1例	26号4例	28号4例	29号1例
			254	284	321	340	343	400	460	463	469	475	494	543							
28号配石	9点	5点	81	224	233	312	343	395	426	463	480							26号2例	27号4例		
29号配石	15点	5点	77	163	164	249	268	311	329	339	394	399	406	412	419	427	482	25号3例	26号1例	27号1例	
合　計	88点	34点																			

2配石間接合　3配石間接合

18区25号配石（第34図～第37図、PL.17－２・３）

位　置　18区Ｘ－12グリッド

配　置　河道を横断するように、東西方向にのびる配石で、東側に26号配石が接する。26号との境は、一見連続しているように見えるが、基準となる南辺の石列の配置はその手前で終わっている。西側の石列は、河道の立ち上がりでちょうど止まっており、その後の削平で失われたためか、当初からの配置かは定かでない。

形　状　東西４ｍ、南北２ｍほどの範囲に、20～30㎝大の石が整然と配置されている。河道の上流側にあたる南側の縁にやや小振りな石の長軸を揃えて直線的に並べ、下流側にはやや大きな扁平礫を敷き詰めるように配置している。

　やや厚手の大きな扁平礫が数多く使用されているが、川原石は持ち込まれていない。

遺　物　配石面から北側へ下る傾斜に合わせて多量の土器が出土した。そのうち、本配石に伴うと判断した土器は４号列石192・211・242・254・256・263・267・268・277・381・392・397・399・410・419・541の16点と第37図１で、このうち254・263・277・397の４点は26号配石と、268・399・419の３点は29号配石と、254は27号配石と、それぞれ接合関係が認められた。また、第37図１は西側に隣接する23号配石出土土器と接合関係があり、別掲載であつかった。出土土器はいずれも堀之内１式に比定される。この他に、土製円盤595が出土している。

　石器は、扁平な円礫の両面に磨面と敲打痕が残る台石（第37図２）が、南側の縁に並ぶ石列の東隅に使用されていた。

18区26号配石（第34図～第36図、第38図、PL.11－２、PL.14－２、PL.15－１・２）

位　置　18区Ｗ－13グリッド

配　置　東西方向にのびる配石で、25号配石の東側に接している。また、北側に27号配石が近接するが、その間には直径１～1.5ｍほどの円形状の空白部が二つ繋がったような状態で、両者の間を分けてい

る。

形　状　東西４ｍ、南北1.5ｍほどの範囲、20～30㎝大の石が配置されており、基本的な構成は25号配石と類似するが、礫の配置は雑然としており、南側の縁に石の並びはなく、中央付近に小さな地山礫が集積されていた。27号配石との間にある円形状の空白部は、浅いボール状に地山礫も抜けており、この掘り込みが本配石の石の配置を乱したのかもしれない。

使用された礫は地山礫が主体だが、小さな扁平礫数個と川原石数個が使用されており、使用礫の内容は27号配石に類似している。

遺　物　配石面から北西側へ下る傾斜面を中心に多量の土器が出土した。そのうち、本配石に伴うと判断した土器は４号列石69・154・195・198・205・224・269・300・311・341・365・398・415・430・480・540の16点と、25号配石出土土器と接合した４点を加えた20点である。このうち154・195・224の３点は27号配石と、224・480の２点は28号配石と、311は29号配石と、それぞれ接合関係が認められた。出土土器は大半が堀之内１式であるが、480は堀之内２式に、540は加曽利Ｂ式に比定される。この他に、土製円盤585・600の２点が出土している。

石器は、使用痕ある剥片１点（２）と多孔石２点（１・３）が出土しており、１は配石の中央部から、３は並んだ円形状空白部の間に置いた状態で出土している。

18区27号配石（第34図～第36図、第39図・第40図、PL.15－１・２、PL.17－４・５）

位　置　18区Ｖ～Ｗ－13～14グリッド

配　置　26号配石と28号配石の間にあり、南東から北西方向に主軸をとる長方形状の範囲に石が配置されている。

形　状　長軸４ｍ、短軸２～３ｍほどの長方形状の範囲に石を敷き詰めたように配置されている。使用された石は、南東側ではやや小さな地山礫が主体であるが、北西側は40㎝大の大型礫を含むやや大きな石が主体となっている。

平面形状がやや歪んでみえるのは、26号との間に円形状の空白が２カ所あるからで、確認当初は26号と一体で長方形の配石と捉えていたが、26号は25号から東西にのびる直線的な配置を重視して単独の扱いとした。

使用された礫は地山礫が主体だが、大小の扁平礫10数個と川原石数個が使用されており、使用礫の内容は26号と類似する。

遺　物　配石中およびその周囲から多量の土器が出土した。そのうち、本配石に伴うと判断した土器は４号列石54・81・115・188・212・216・232・239・244・248・249・250・284・321・340・343・400・460・463・469・475・494・543の23点と、これに25号配石出土土器と接合した１点、および26号配石出土土器と接合した３点を加えた27点である。このうち、81・343・463の３点は28号と、249は29号配石出土土器と接合が認められた。出土土器は大半が堀之内１式に比定されるが、54は称名寺１式に、81と115は称名寺２式に、475と494は堀之内２式にそれぞれ比定されよう。この他に、土製円盤597・617の２点が出土している。

石器は、素材剥片母岩１点（１）、磨石類３点（２・３・４）、多孔石４点（５・６・７・８）が、配石の各所から出土している。

18区28号配石（第34図～第36図、第41図・第42図、PL.15－１、PL.17－６・７）

位　置　18区Ｖ－14グリッド

配　置　27号配石の北東に近接する。北東側の礫群との間に１ｍほどの空白があり、礫配置の密度が明らかに異なる。

形　状　東西２ｍ、南北３ｍほどの三角形状の範囲に石を敷き詰めたように配置されている。谷側にあたる北西側に50～70㎝大の大型礫３個を並べるように配置し、その山側に小さな石を敷き詰めるように集積している。

使用された礫は地山礫が主体だが、大小の扁平礫

数個と川原石数個が使用されている。

遺　物　配石中およびその周囲から数多く土器が出土した。そのうち、本配石に伴うと判断した土器は４号列石233・312・395・426の４点と、26号配石出土土器と接合した２点、および27号配石出土土器と接合した３点を加えた９点である。出土土器は大半が堀之内１式に比定される。

石器は打製石斧１点（1）、磨石類１点（2）、台石１点（3）、多孔石２点（4・5）、砥石２点（6・7）が配石の各所から出土している。

18区29号配石（第43図～第45図、PL.17－８）

位　置　18区Ｘ～Ｙ－14グリッド

配　置　23号配石の東側に接して確認された。確認当初は23号の一部と考えたが、確認面が23号よりやや低く､石の配置に一体感が認められないことから、単独の配石とした。

形　状　２列の石列を直径2.3ｍほどのドーナツ状に配置し、その中央に数石の石を配置する。南側の一部の石を失っており、西端は23号配石と重なって判然としない。

石は30㎝前後でよく揃っており、扁平礫数個と川原石数個が使用されている。

遺　物　南側にある25号配石との間を中心に多量の土器が出土した。そのうち、本配石に伴うと判断した土器は４号列石77・163・164・264・329・339・394・406・412・427・482の11点と、25号配石出土土器と接合した３点、26号配石出土土器と接合した１点、27号配石出土土器と接合した１点を加えた16点である。出土土器は大半が堀之内１式に比定されるが、77は称名寺２式に、482は堀之内２式に比定されよう。この他に、土製円盤605が１点出土している。

石器は、円礫を使用した多孔石１点（1）、大型の扁平礫を使用した砥石１点（2）が出土しており、１は周囲をめぐる配石の内に、２は中央の配石に使われていた。

３　18区４号列石出土遺物

第29図は、４号列石を中心とする後期配石群の図に、点上げした後期主要土器の出土位置を●で示したもので、復元された主要土器とその接合関係を付図１・２に示した。確認当初は４号列石の範囲も確定していなかったため、後期の調査面として広範囲を対象としていた。

出土土器は堀之内１式土器を中心とする後期前半の土器群が主体で、その分布は４号列石の内部、特に25号～29号配石に囲まれた範囲に著しい集中があり、その上流部と下流部、そして河道北側の４号掘立柱建物南側の河道縁辺などにも、数カ所に土器の集中する箇所が認められる。付図１・２に示した接合関係でも、同じ地区に接合の集中が認められ、そのうちのいくつかの土器は、集中箇所の間を繋ぐ広範な接合関係が認められた。主要土器以外の土器はグリッド単位で取り上げているが、時期が判明している後期土器の80％が堀之内１式土器であり（表７）、分布の集中する地区も同様の傾向が認められた（第25図）。

それらも含めて、４号列石出土土器類621点を第46図～第90図に、４号列石出土石器94点を第91図～第112図にそれぞれ掲載した。いずれも遺物番号は通番にしてある。

第46図１は前期諸磯ｂ式土器、２～４は中期加曽利Ｅ３式土器、５～20は加曽利Ｅ４式土器である。中期と後期の調査面に明瞭な差異があるわけではないから、実際には中期の土器もかなり出土している。

第47図21～第48図63、第49図65～70・72・73は、称名寺１式土器である。49は浅鉢、50～56は鉢形の土器で、いずれも注口が付くものが多い。称名寺式期に浅鉢や鉢形の注口土器が多いのは、この地域の特徴であろう。

第48図64、第49図71、第50図74～82、第55図142～第56図164は称名寺２式に比定される土器である。64は口縁部内面に称名寺式特有の文様帯を持ち、胴

下半の一定範囲だけに縄文を施した特異な土器であり、注目しておきたい。142～145は浅鉢、146は鉢、152は小型壺状の土器か、151は全面を赤色に塗彩された注口土器の注口部である。147～150・153～164は茂沢類型に該当すると思われる一群である。微隆線で文様を施す一群で、147～149は浅鉢、150は注口土器、153・154は瓢形土器か。

第51図83～第53図124は、本地域の称名寺式段階の特徴を示す半粗製的な土器群で、軽質なつくりで大型品が多い。口縁部をめぐる断面三角形の隆線は、押圧痕や刻目を加えるものと、そうでないものとがある。

第54図125～141は、越後地域に主に分布する三十稲場式系統の土器を一括した。その特徴とされる刺突文は、細長いもの、円形のもの、花弁状に盛り上がるもの、などが認められる。135・136は胴部に縄文が施文されるタイプで、135は頸部に列点文がめぐる。136は粘土紐をねじったような橋状把手がつくタイプで、把手間を列点文を施した隆線で繋いでいる。これらの大半は称名寺式期に該当すると思われるが、137～141は堀之内１式に比定されよう。

第57図165～第82図473、第87図543・544は堀之内１式に比定される土器群で、４号列石出土土器の主体をなす一群である。

第57図165～176は茂沢類型の系統をひく一群で、幅広の隆帯に沈線を加えて平行隆線を表出している。

第57図184は波状口縁を呈する薄手の土器で、東海以東の土器であろうか。

第58図185～193は古い段階の一群で、称名寺式の特徴を色濃く残している。190～192は茂沢類型の系統を引くものであろう。

第59図194～第68図309、第72図353～第79図431、第87図543・544は、外反する無紋の口頸部を特徴とする深鉢で、胴部文様は渦巻文と斜行沈線を基調とする。堀之内１式を代表する一群で、いくつかのタイプがある。第59図194～第68図309・第87図544はオーソドックスなタイプで、県内各地で確認できる一群である。このうち、第66図265～267・270・271は胴部文様が簡素化しており、堀之内２式に含まれる可能性がある。第72図353～359は短い口頸部に橋状把手が付くタイプで、器形は越後地方に分布する三十稲場式に類似している。159のねじったような把手は、第54図136の系統か。第73図371～376は口縁部分が欠落したような鉢形を呈す土器で、これも越後地域に多いタイプである。374は深鉢になるかもしれない。第74図377～379・第75図392～402は大きく開いた口縁部に小さな胴部が付くタイプで、越後地域や信州地域に多く認められる。このうち、388～391・395・402は堀之内２式に含まれるかもしれない。第74図380～387は頸部がくの字に強く折れて口縁部が短いタイプで、信州地域に多くみられるタイプだが、胴部の張りが強い381・384などは三十稲場式との関連が考えられる一群であろう。第76図403～413は大きく外反した口縁部の内面に文様帯を構成するタイプで、これは越後地方に多いタイプである。第77図414～第79図431・第87図543は外反する口縁部が長いタイプのものである。これらの一部は堀之内２式を含む可能性がある。

第69図310～第70図337は、体部に一連の文様が構成される一群である。321～337は関東地方に多いタイプで、一般的に朝顔形深鉢と呼ばれる。第71図338～352越後地域や信濃地域に多いタイプで、体部のくびれの位置で文様を上下に分けるものもある。

第79図433・440は口縁部がすぼんだ小型の鉢で、器形や文様は371～376と類似する。434～439口縁部内面に文様帯をもつもので、浅鉢あろうか。433・440は口縁部がすぼまった小型の鉢であろう。437は内外面を赤色で彩色された土器である。438・439は、口縁部がくの字に折れた浅鉢あるいは鉢である。441・442は注口土器で、442は平面形が紡錘形をしており、舟形を呈するようだ。

第80図458・459は蓋形の土製品である。

第81図461～第82図468は素文の一群、469～473は深鉢の底部である。

第83図474～第85図523、第87図545は堀之内２式

土器である。深鉢は、平野部の土器に較べて体部が細い円筒状を呈するものが多い。474～476・480はよく似た構図だが、表現を少しづつ変えている。479は鉢。513～523は注口土器で、丁寧な造りのものが多い。

第86図524～532は加曽利Ｂ式土器である。524は精緻な薄手の土器で、鉢あるいは深鉢であろうか。525は鉢、527・528・531は胴部がくの字状に張り出した土器であろう。524～527は加曽利Ｂ１式、528・529はＢ２式、530・531はＢ２～３式に比定されよう。

第86図533・534は高井東式、535は晩期終末、536は晩期安行３a式、537～542は後期に比定される。

第87図546、第88図547～第90図621は土製円盤である。４号列石からは多量の土製円盤が出土しており、その大半は堀之内１式土器を使用している。形態は、円形タイプを主体に、楕円形や方形状のものもあり、中央付近に孔があるものもある（605）。大きさは、直径２～６㎝のものを主体に、１㎝ほどのものから10㎝前後のものまでが認められる。また、使用した土器が判明しているケースもあり、546は第87図545の深鉢の口縁部を使用、590・598・601・606・609・615の６点はいずれも第73図365の深鉢を使用していることが判明している。

第91図～第112図に示した94点の石器は、４号列石から出土した石器である。19区出土のものが13点含まれており、これらは除外すべきだったが、後期面出土としてここに掲載した。主に配石に使われた石器を取り上げているため、石鏃等の小型品は基本的に扱っていない。なお、25号～29号配石出土石器と４号列石出土主要石器の出土位置を、付図３に示したので参照して頂きたい。

第91図１・３・７・８・10は削器、２は加工痕ある剥片、４・５・６・９は使用痕ある剥片、第92図11～第93図22は打製石斧､23～26は磨製石斧である。これらの生活必需品類は、おそらく土器とともに投棄されたものであろう。

第94図27は分割母岩､28～第96図37は石核である。大きな母岩や石核が配石中に置かれていることもあるが、ここでは４号列石から離れた位置から出土しているものが多い。河道内では各所から石器制作に係わる剥片・砕片類が多量に出土しており、それらと共に投棄されたものかもしれない。

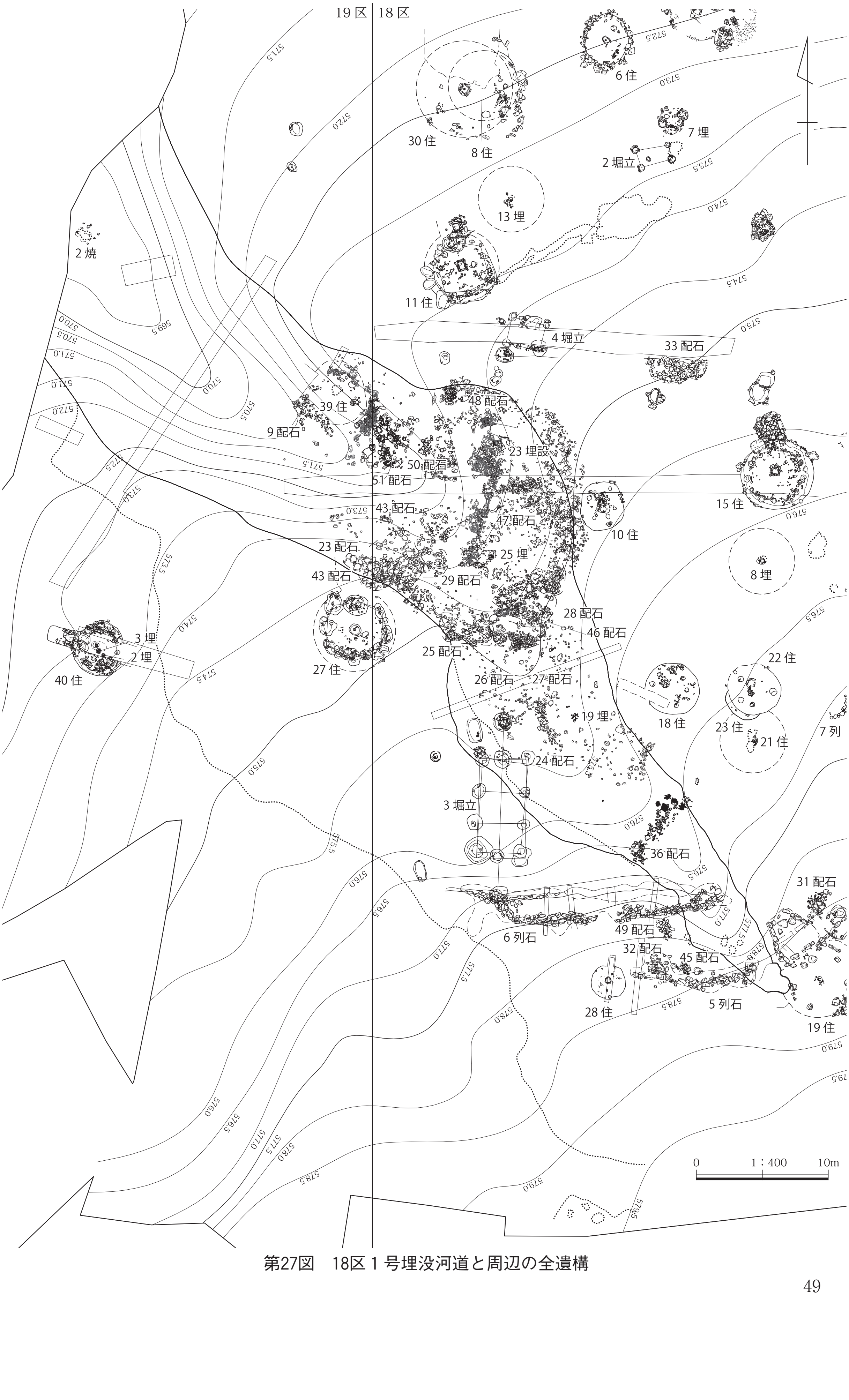
第97図38～第99図55は磨石類である。このうち、39・42・43・48・49・53・55の７点は４号列石の範囲内から出土している。本遺跡では、磨石類は後期になると、住居内の敷石の一部や配石遺構などに使われている事例が多い。

第100図56～60は石皿である。いずれも欠損品であるが、このうち56・59の２点が４号列石の範囲内から出土している。

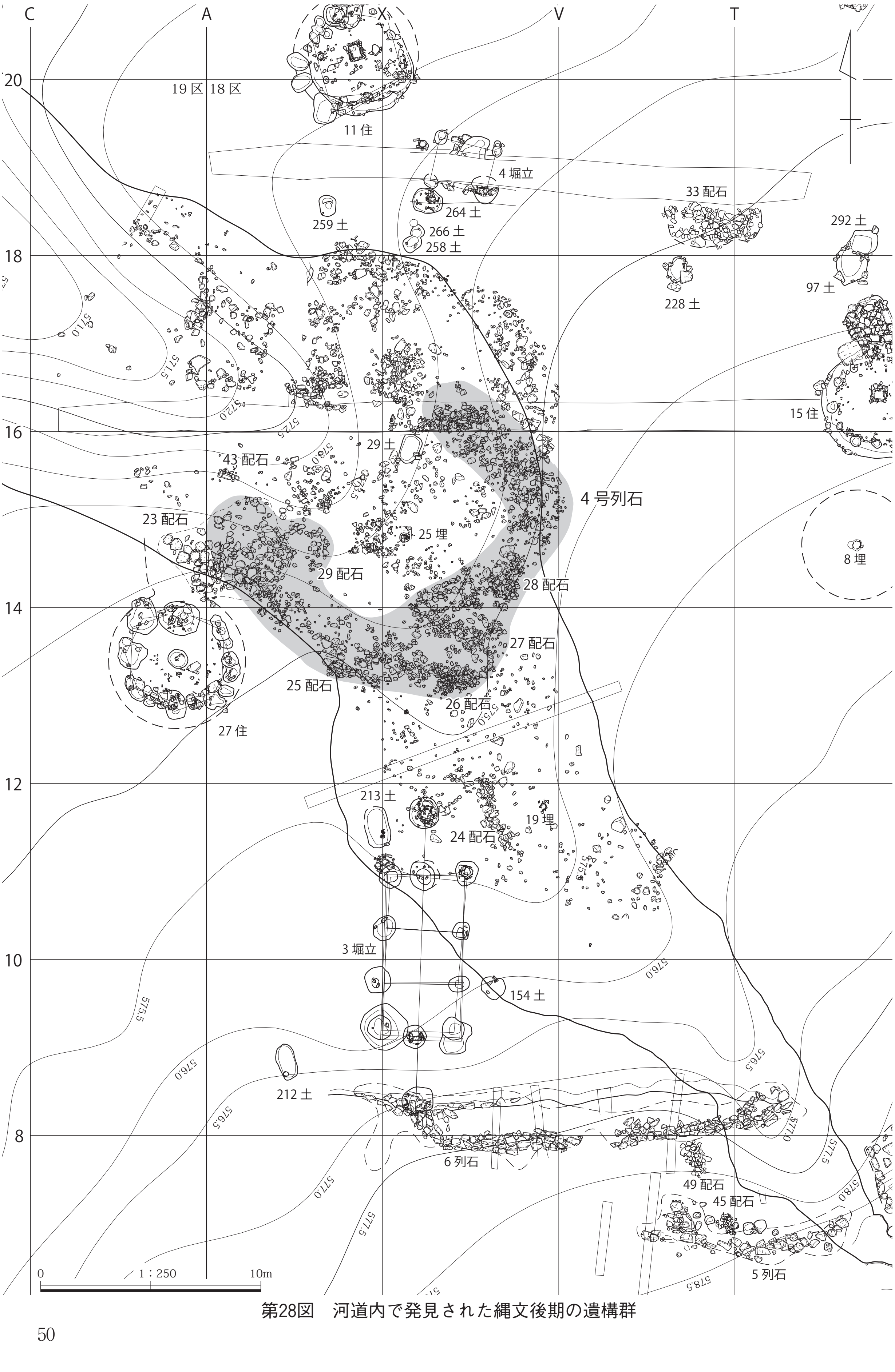
第101図61・62、第102図64、第103図65は砥石、第102図63は敲石、第103図66～68は台石である。大きな礫を使用したものもあり、完存品も多いが、このうち４号列石の範囲内で使われたのは62の砥石だけである。

第104図69～第111図90は多孔石である。このうち69～71・76～82・84～86・88・90の15点が４号列石の範囲内から出土している。付図３で出土位置を見ると、北東コーナーの外側から79、内側から69・81・84、南西コーナーの内側から85、29号配石の北側から78・80・90、中央部の礫がやや多い場所から70・71・76・77・82・86・88が出土している。これに配石出土の多孔石９点を加えると、４号列石全体では24点の多孔石が出土していることになる。

第112図91・92は石棒、93・94は軽石である。石棒はいずれも緑色片岩を使用したもので、欠損品である。91は大型の有頭石棒の頭部片で、28号配石の北東から出土している。92は小型の体部片で、両端を欠損しており、河道右岸の縁辺部からの出土である。93はたまご形の軽石の一部に、多孔石の穴に類似した錐揉み状の穴が一つ認められるが、その他の加工は判然としない。25号配石付近からの出土である。94は加工が認められない軽石で、27号配石の上面から出土している。

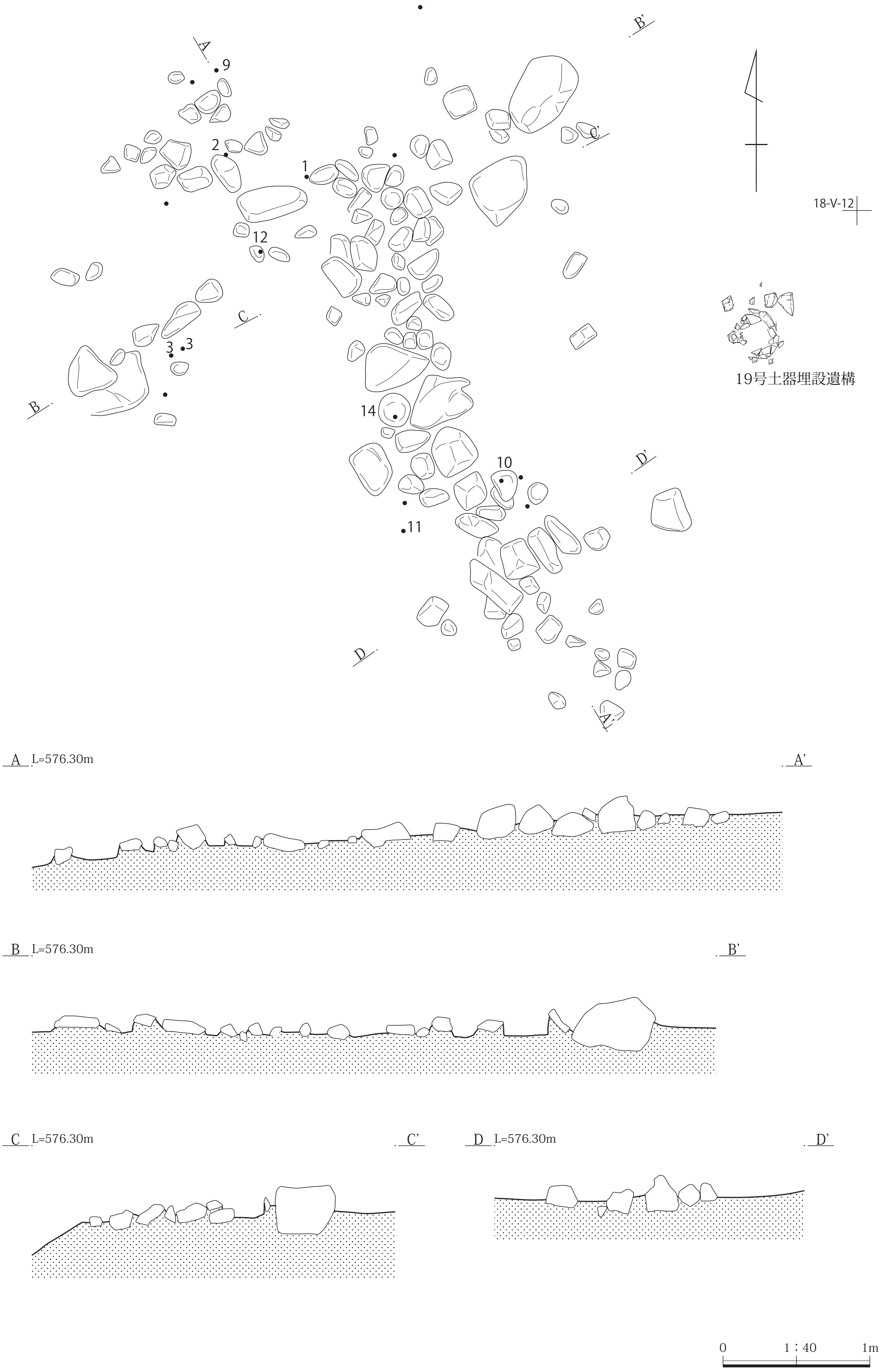


第27図　18区１号埋没河道と周辺の全遺構

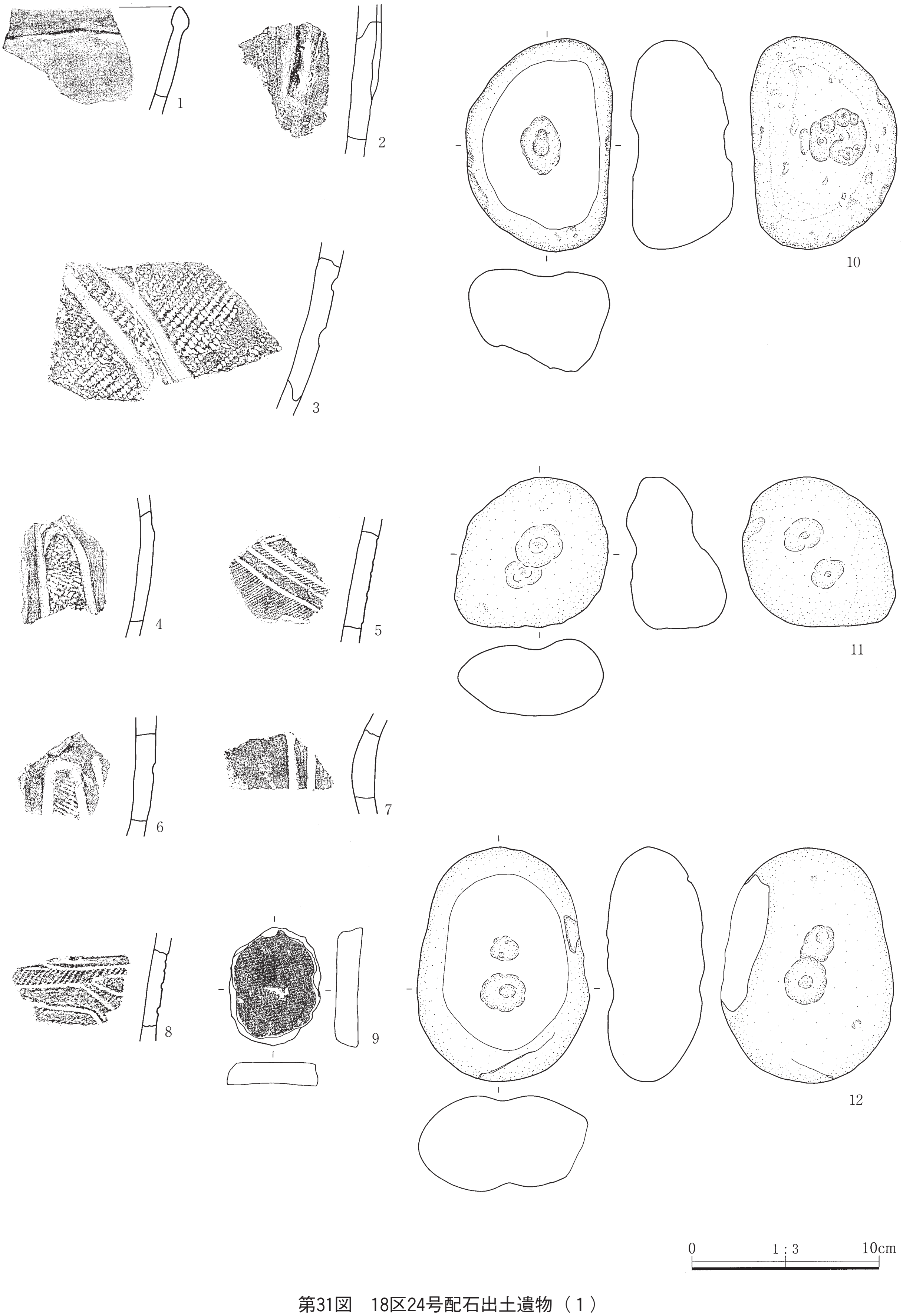


第28図　河道内で発見された縄文後期の遺構群

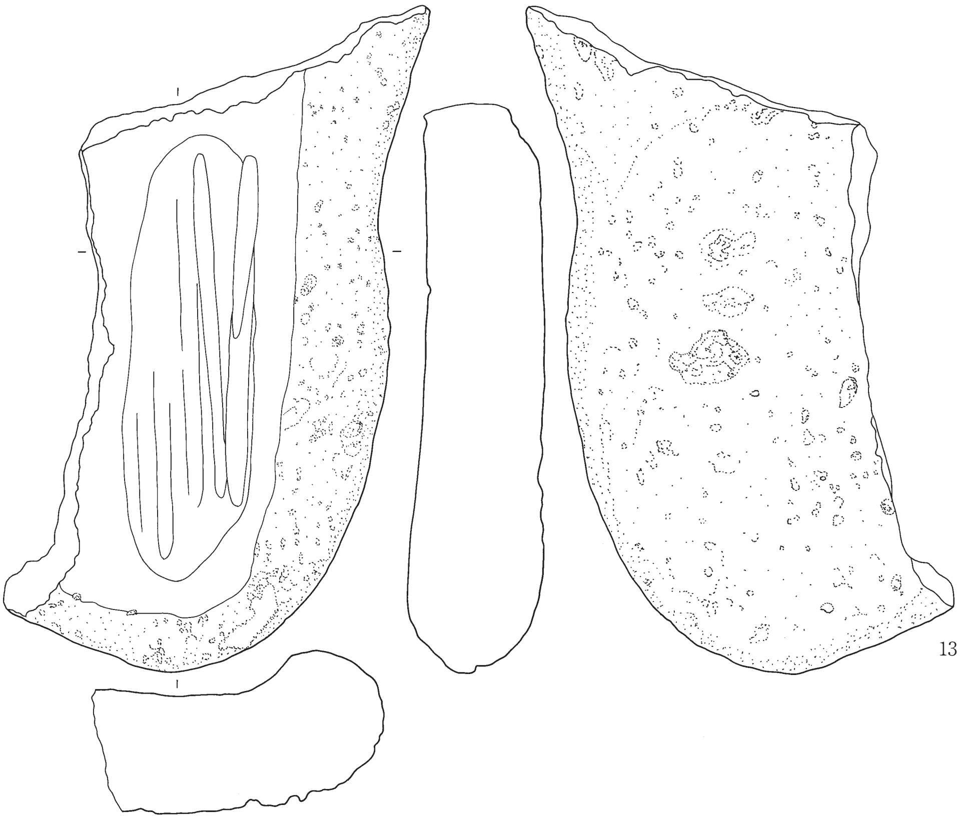
第29図　18区４号列石と後期土器出土状況



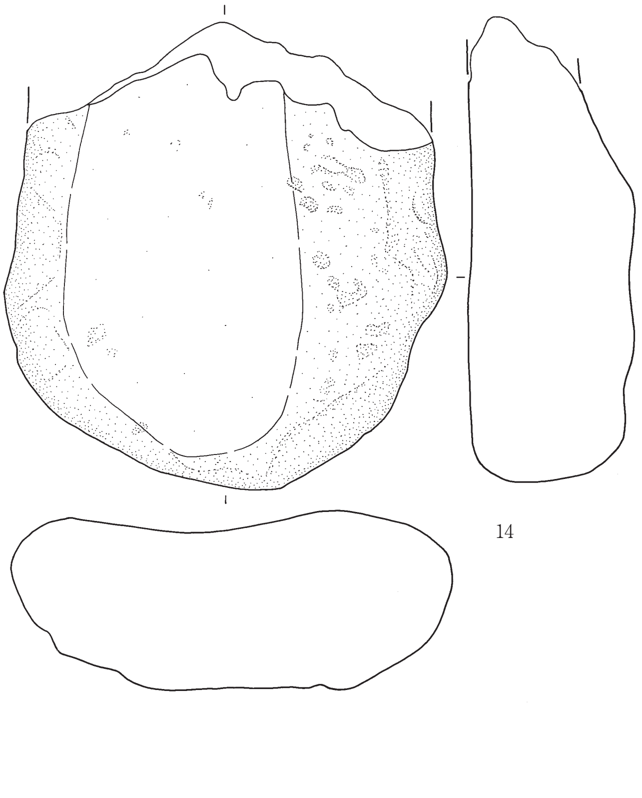
第30図　18区24号配石



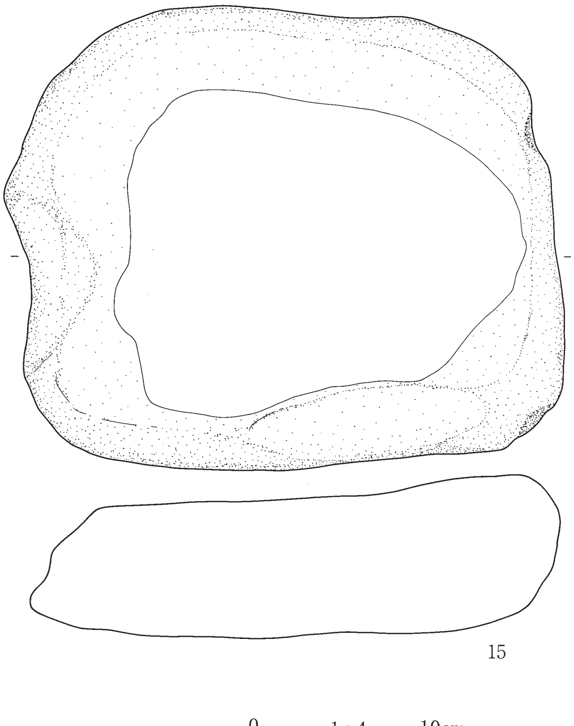
第31図　18区24号配石出土遺物（１）



13



14

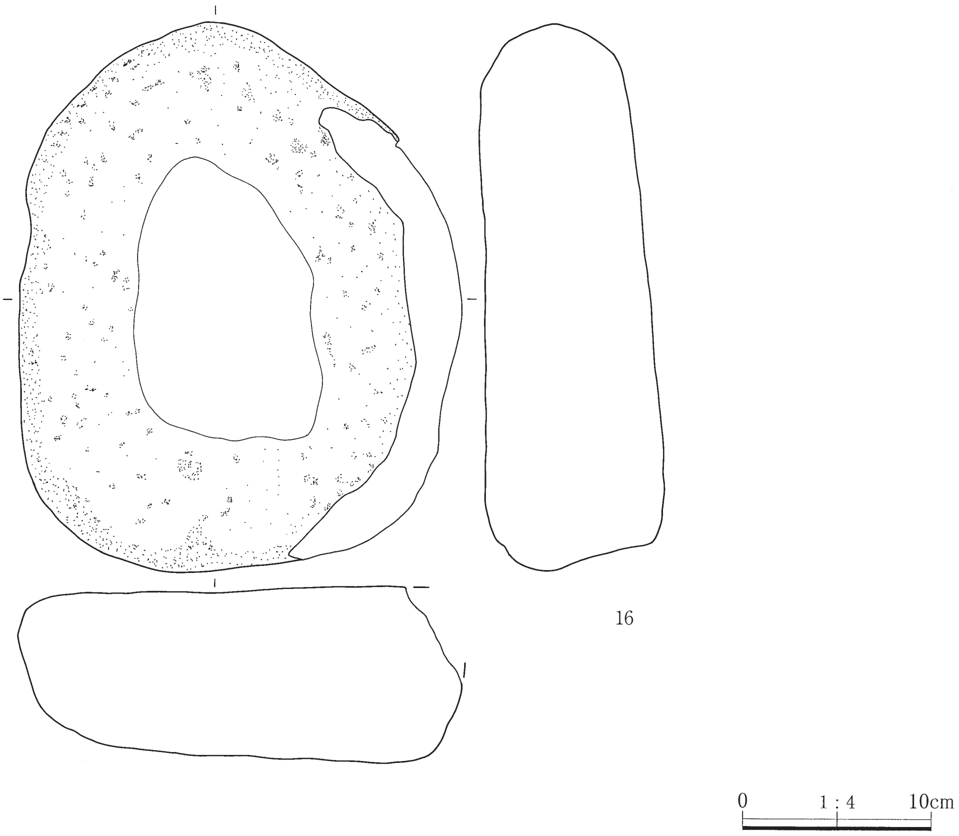


15

0　1：4　10cm

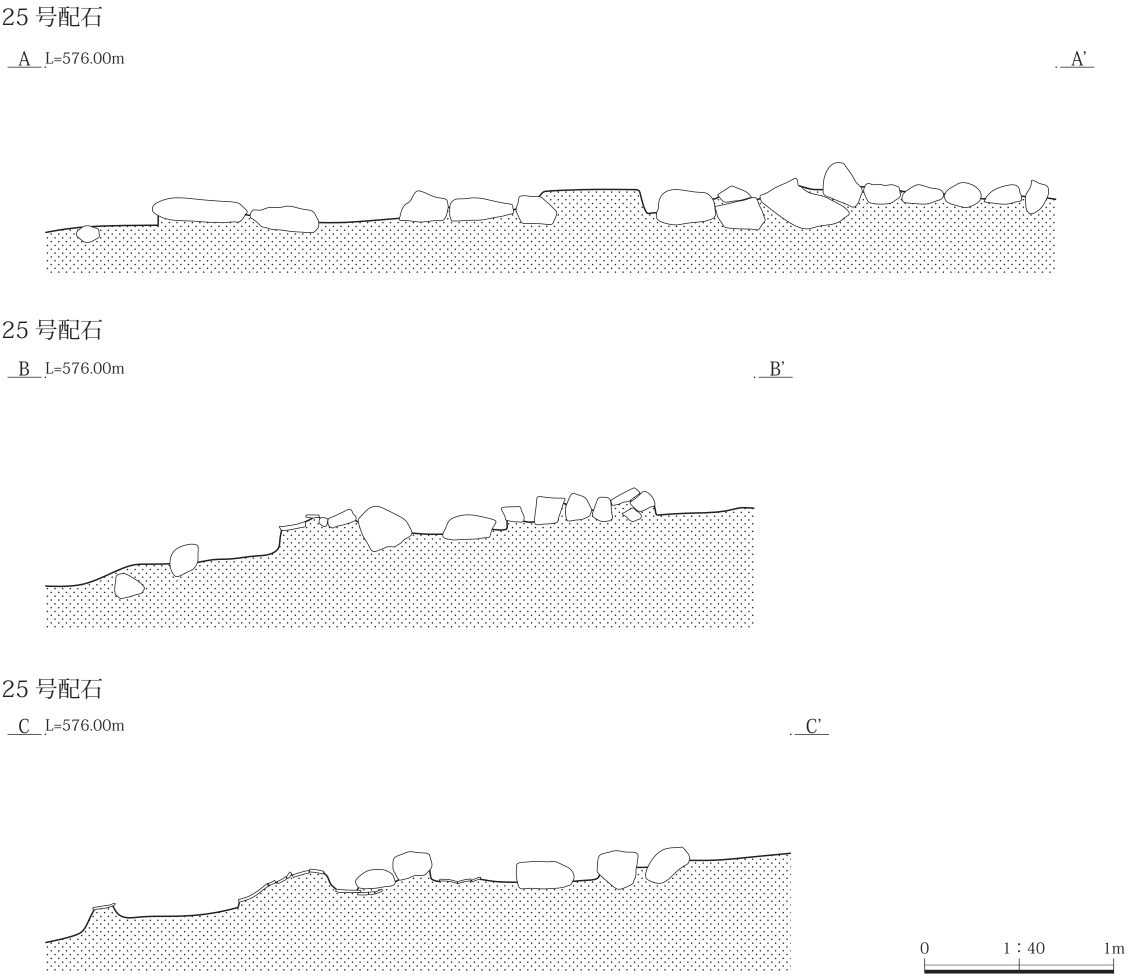
15　0　1：6　20cm

第32図　18区24号配石出土遺物（２）



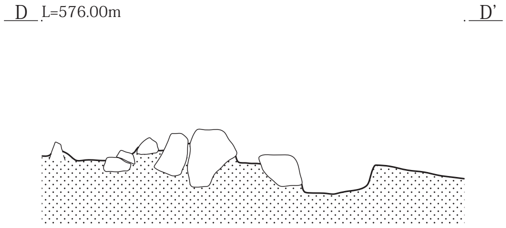
第33図　18区24号配石出土遺物（３）

第34図　18区25号・26号・27号・28号配石（1）

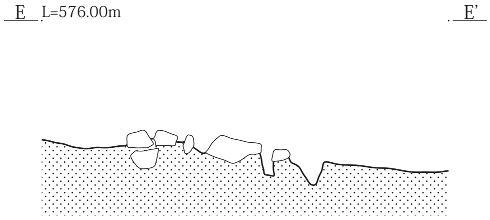


第35図　18区25号・26号・27号・28号配石（２）

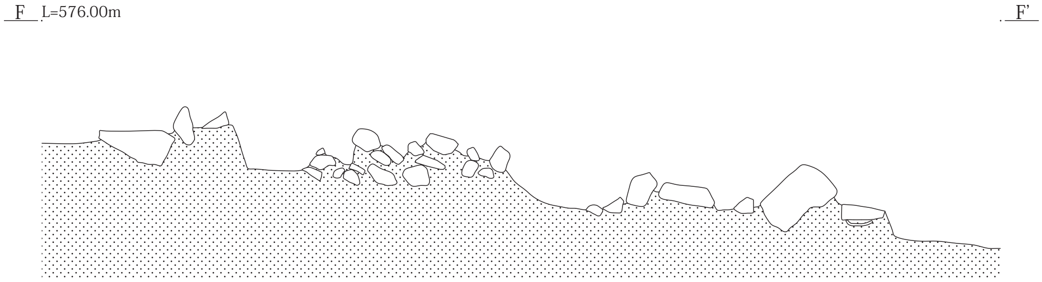
26 号配石



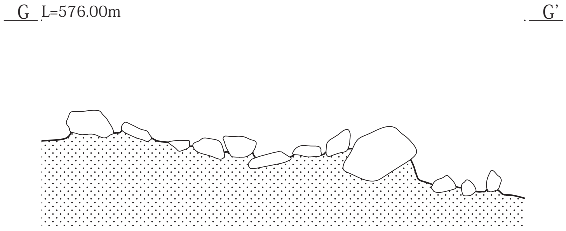
26 号配石



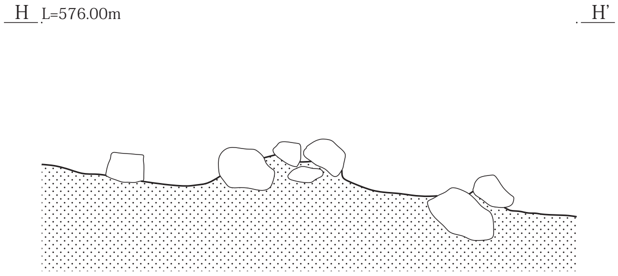
27 号配石

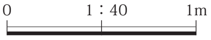


28 号配石

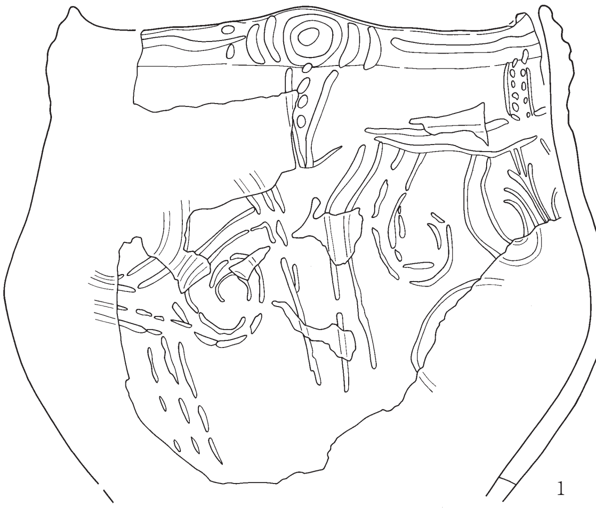


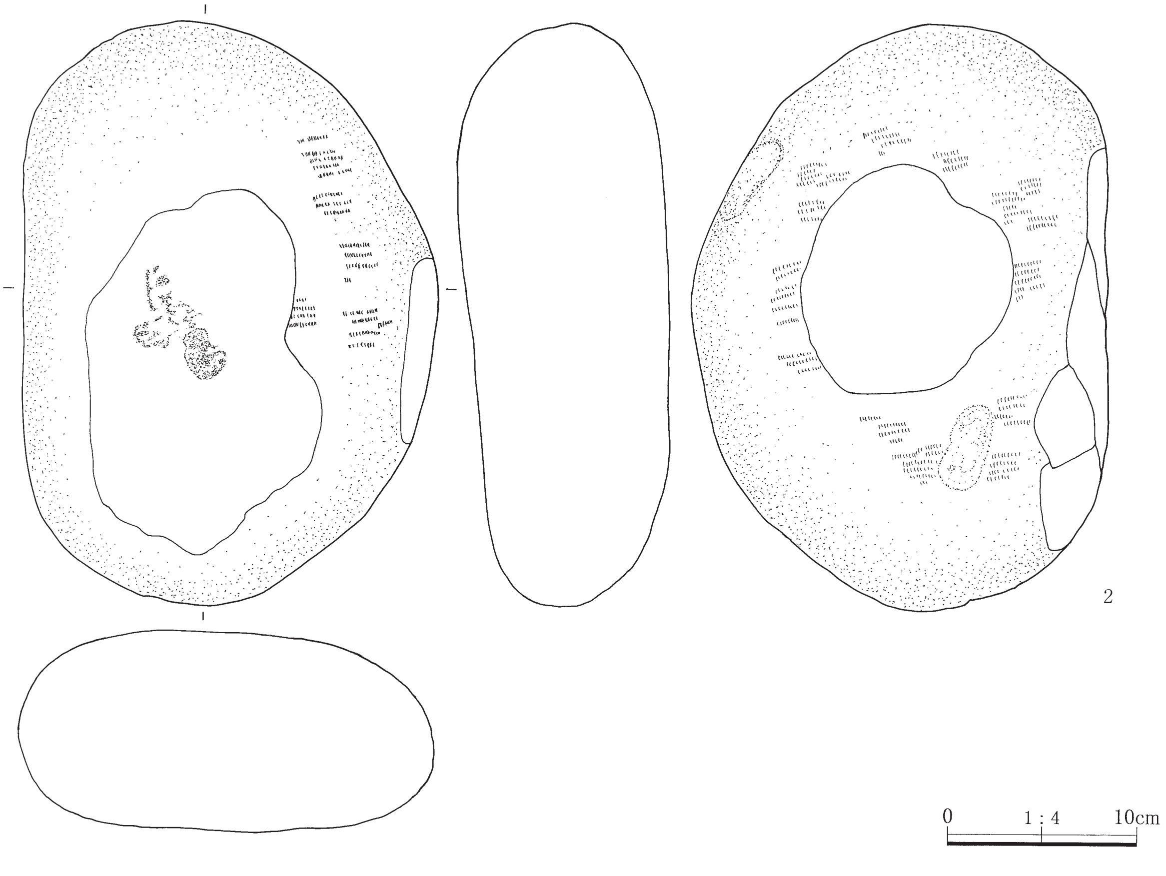
25 号配石



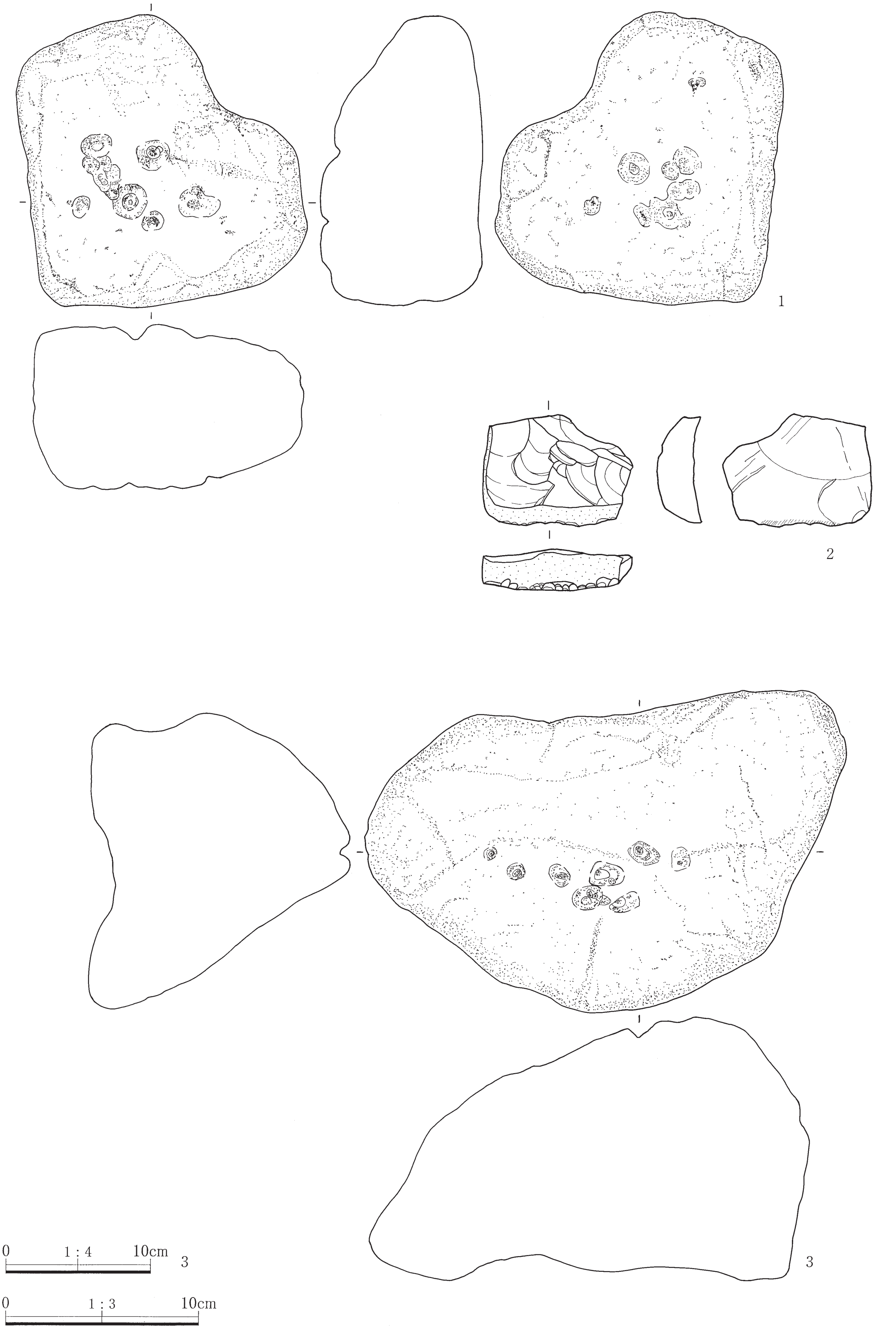


第36図　18区25号・26号・27号・28号配石（３）

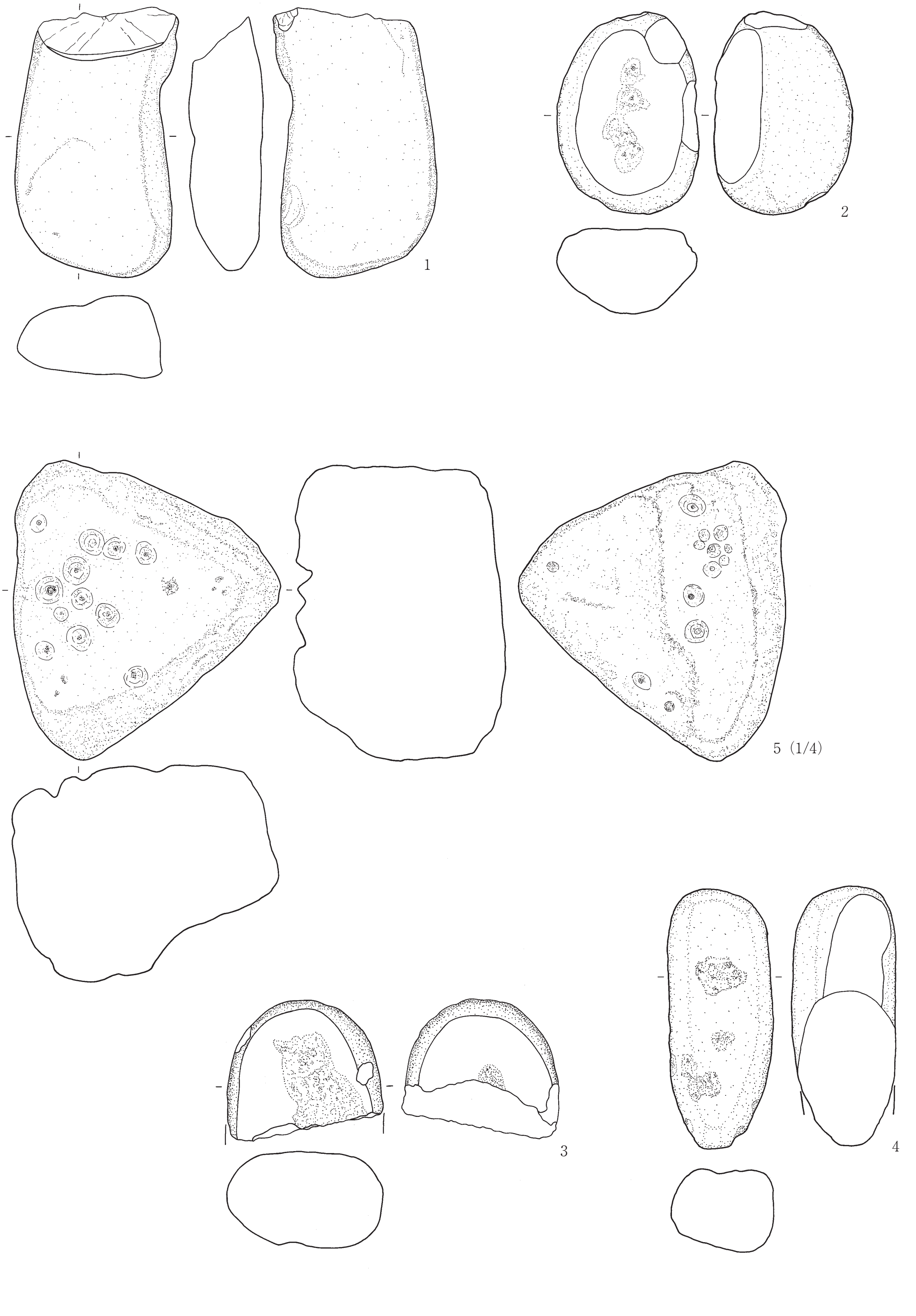




第37図　18区25号配石出土遺物



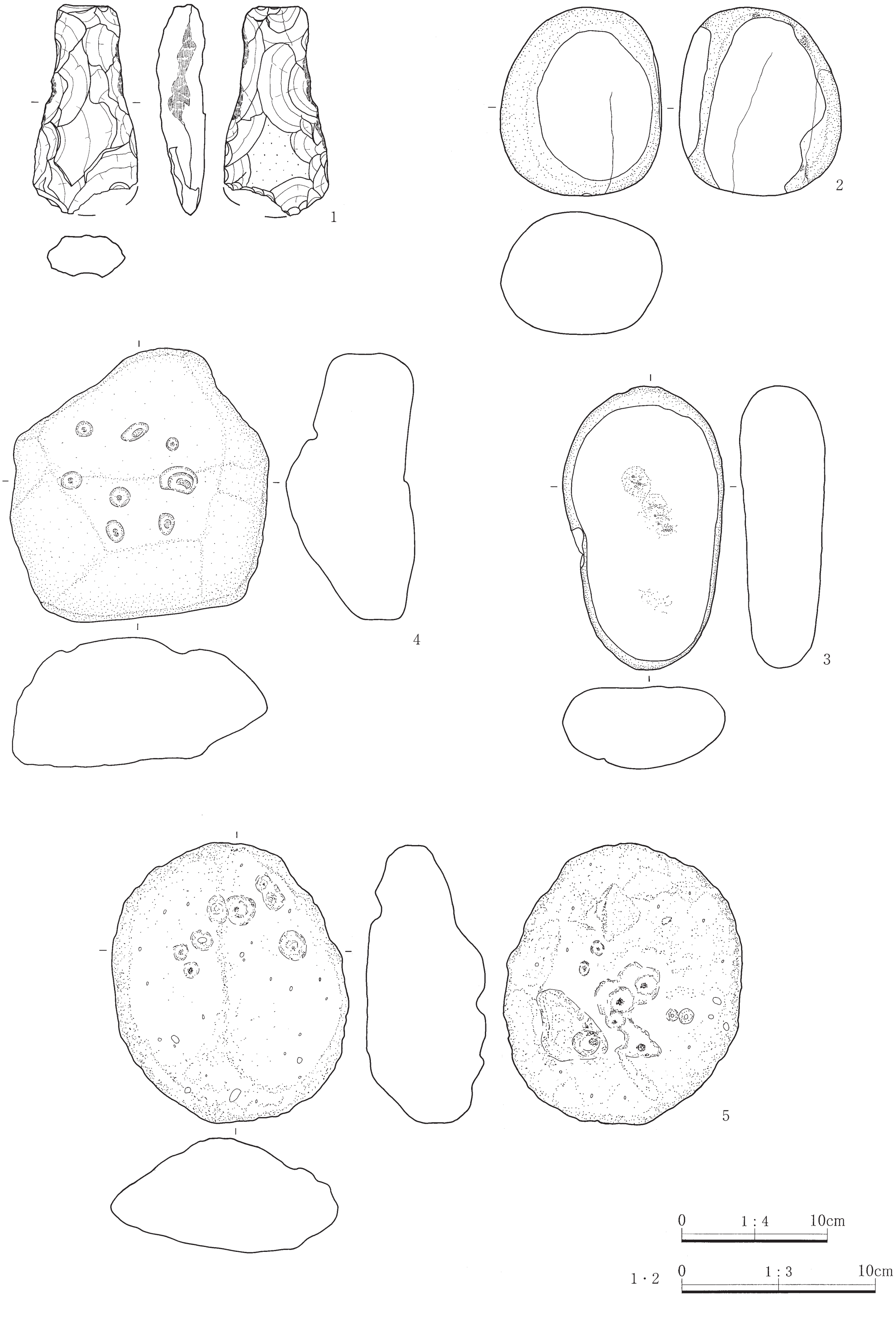
第38図　18区26号配石出土遺物



0　1：3　10cm

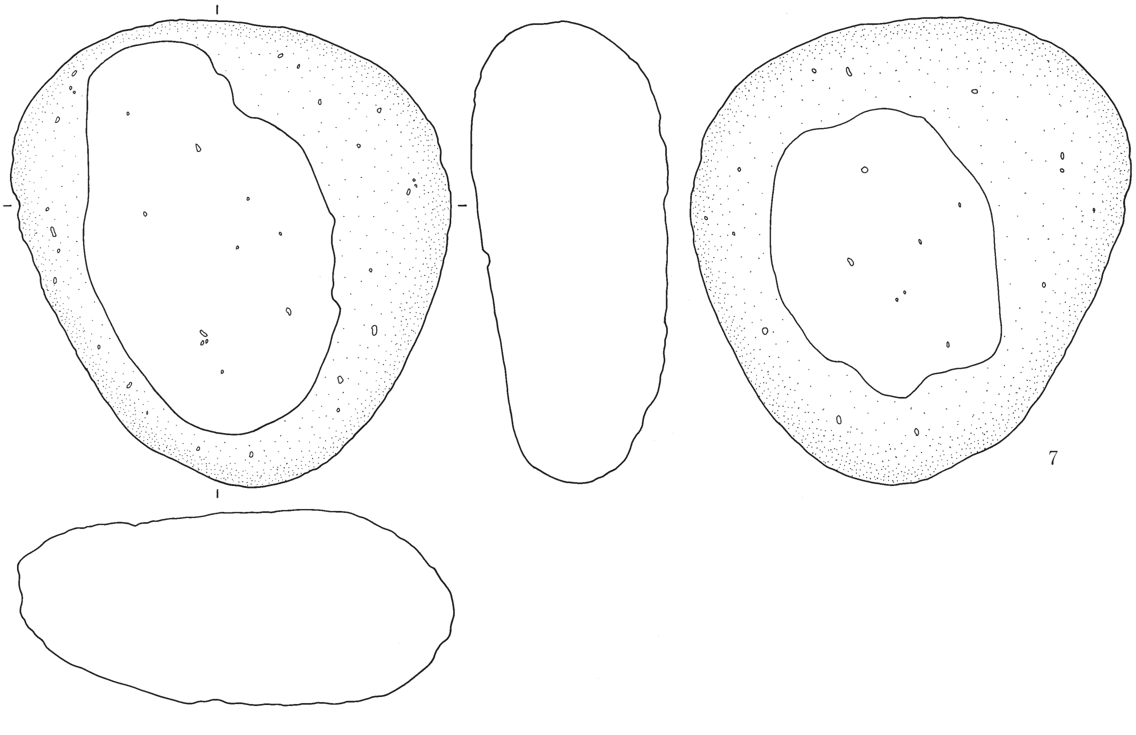
第39図　18区27号配石出土遺物（１）

第40図　18区27号配石出土遺物（２）



第41図　18区28号配石出土遺物（１）

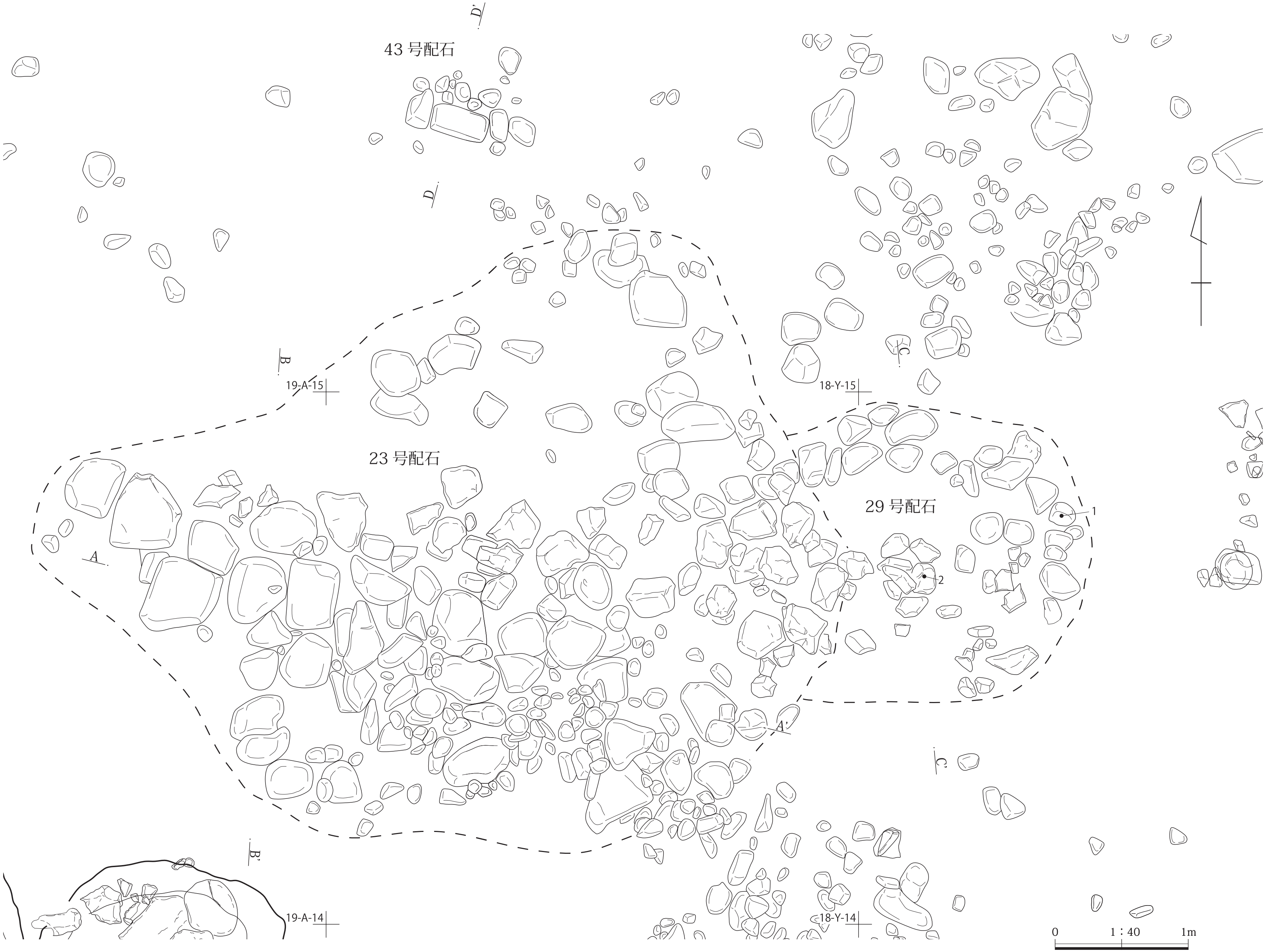
6



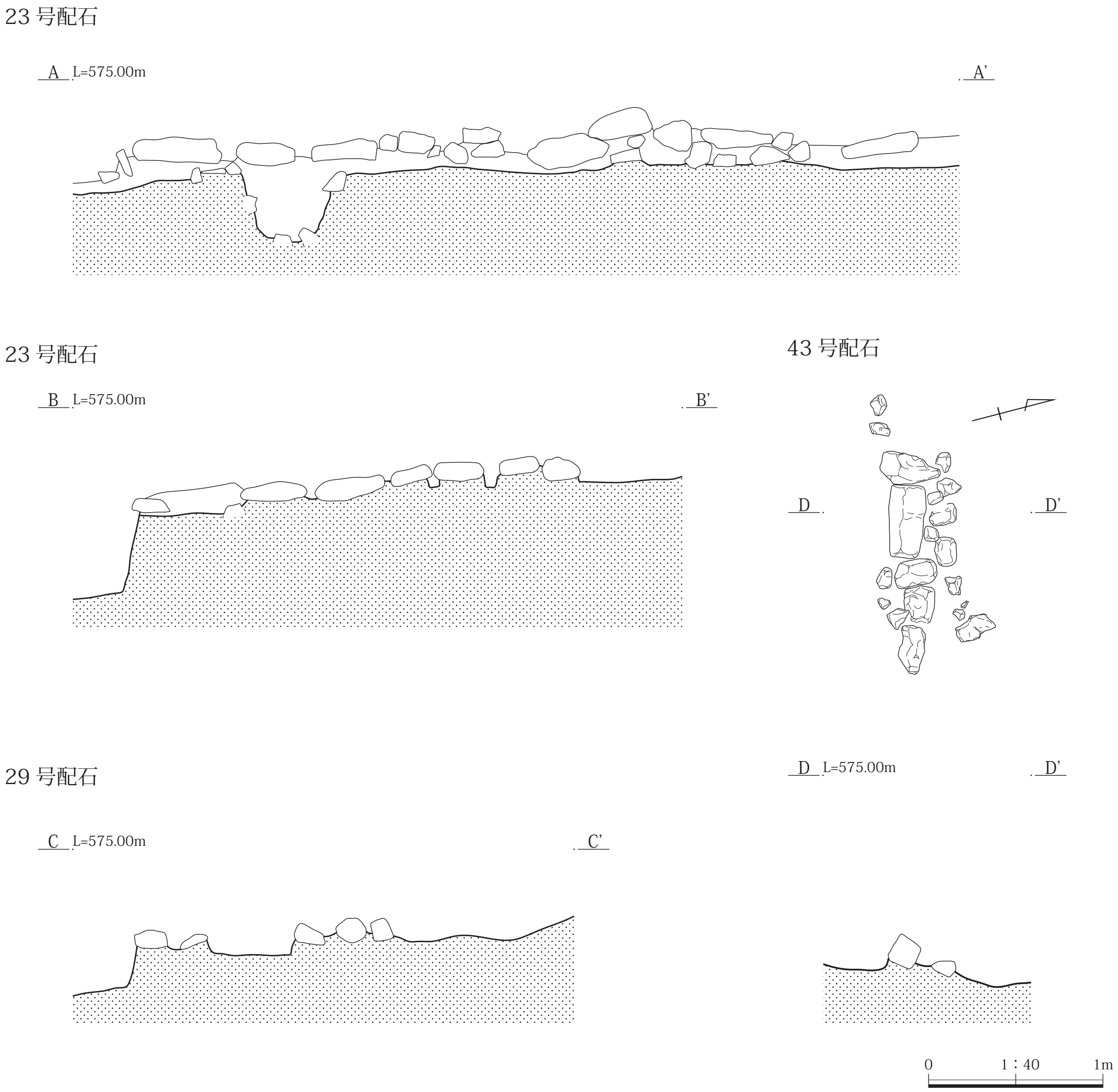
7

0　1：4　10cm

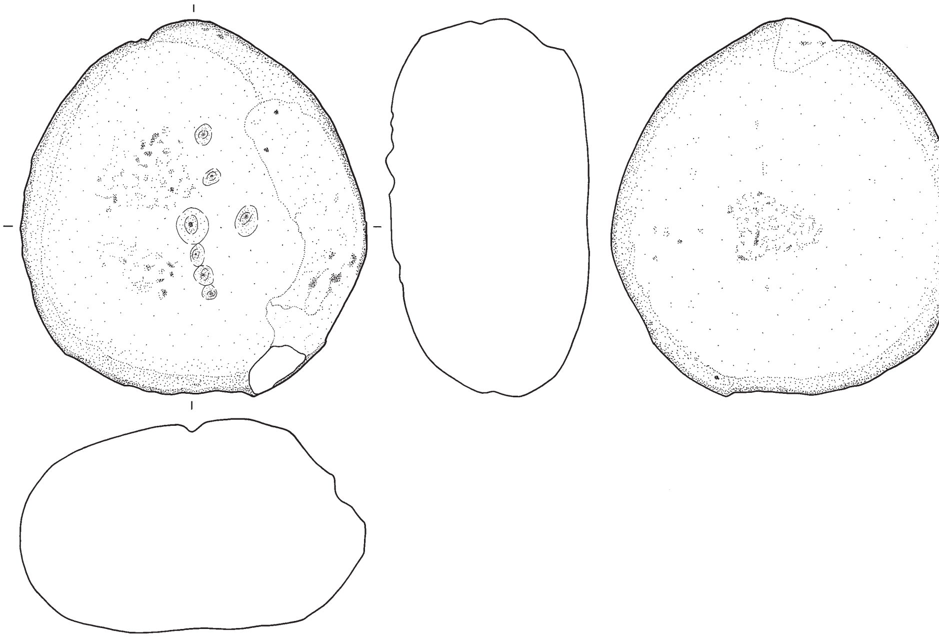
第42図　18区28号配石出土遺物（２）



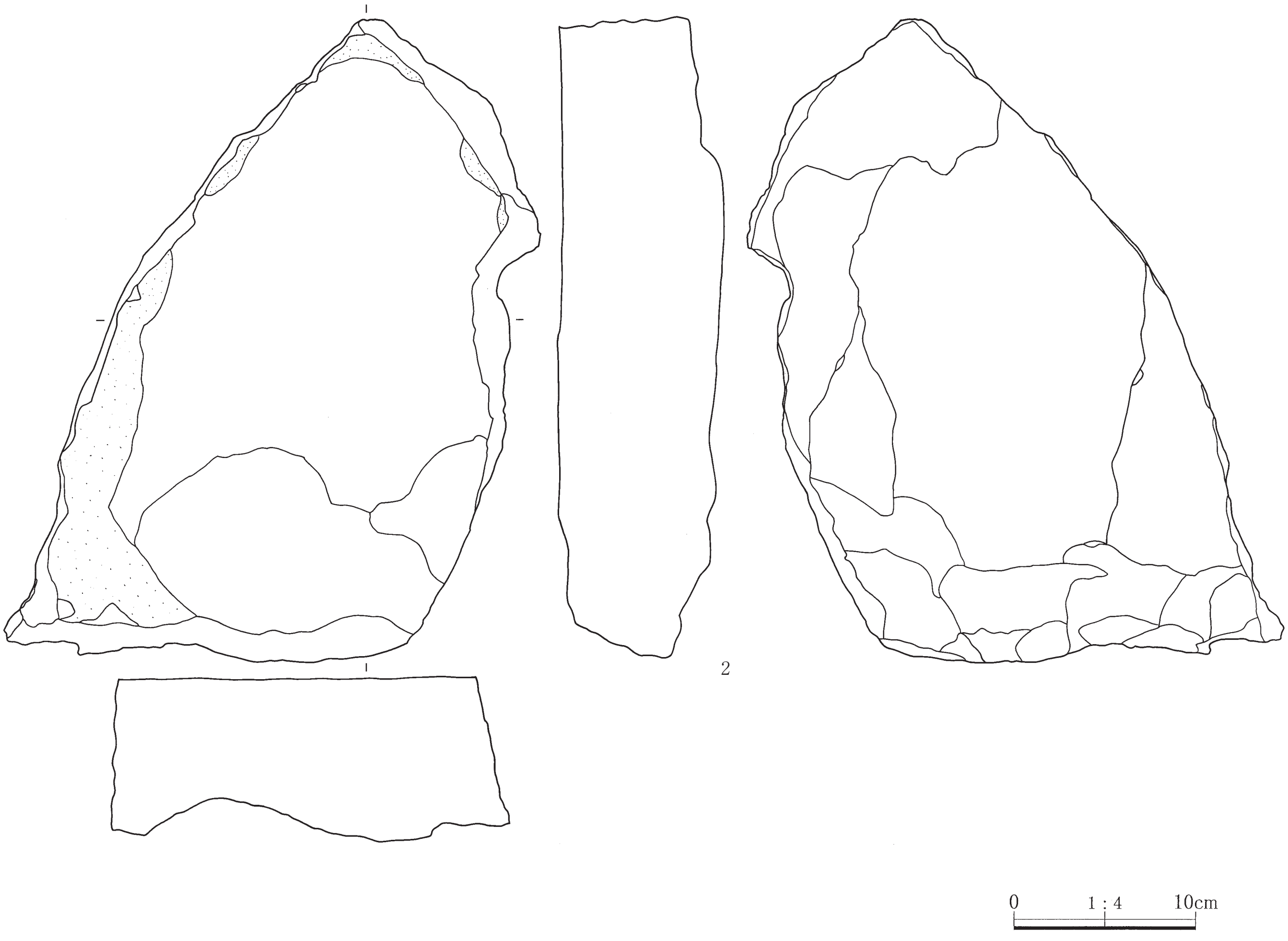
第43図　18区29号・43号配石（1）



第44図　18区29号・43号配石（２）

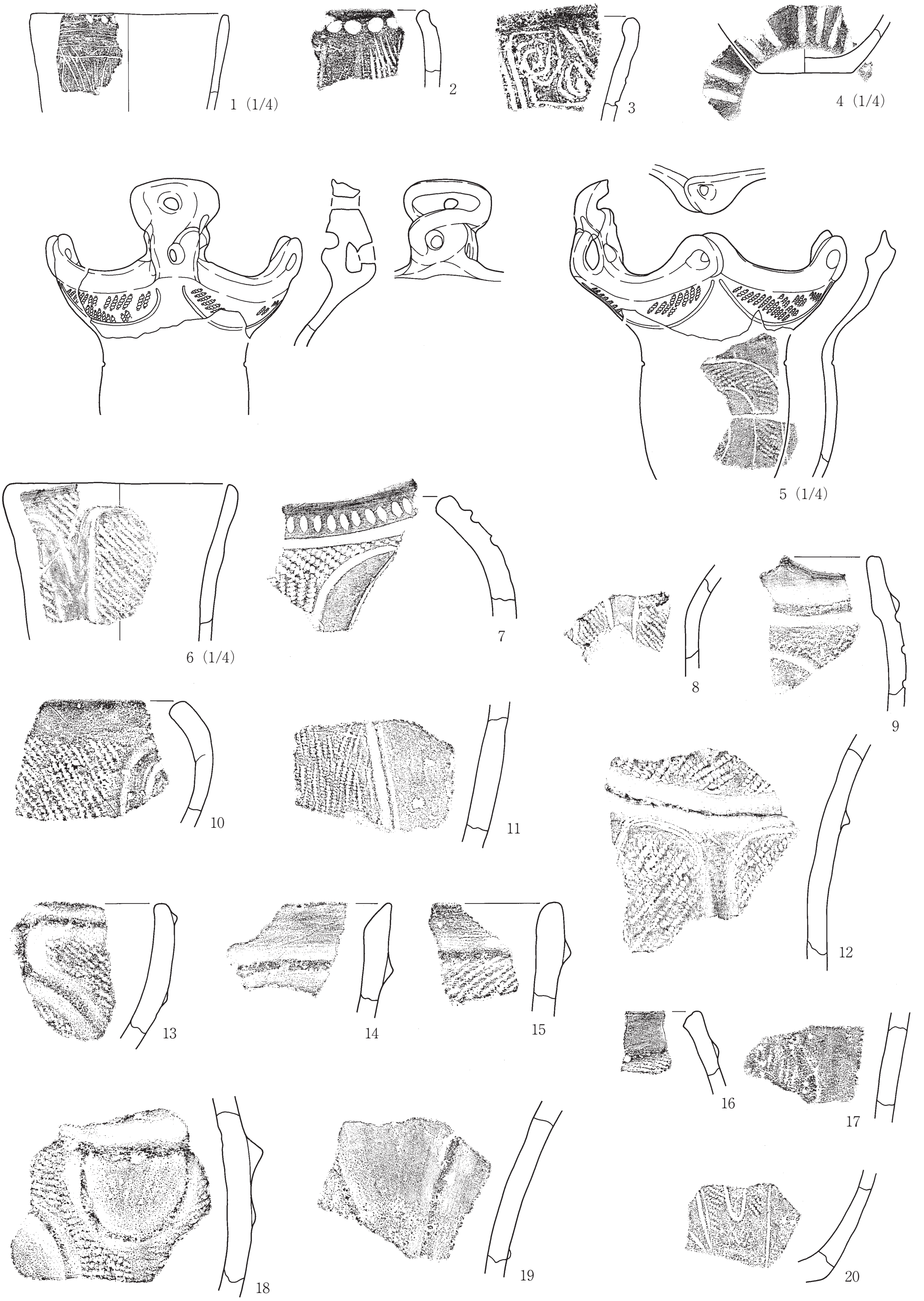


1



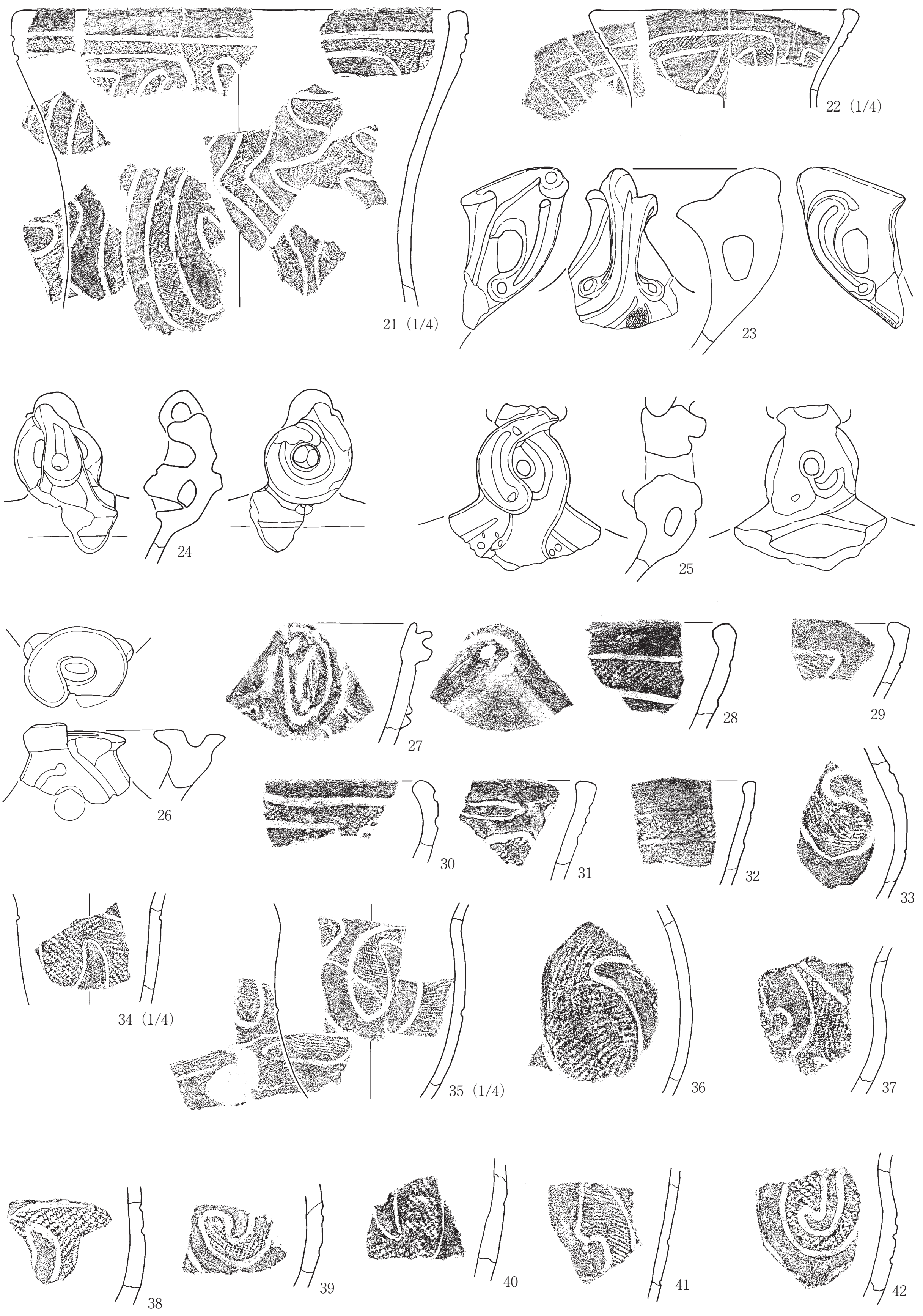
2

第45図　18区29号配石出土遺物

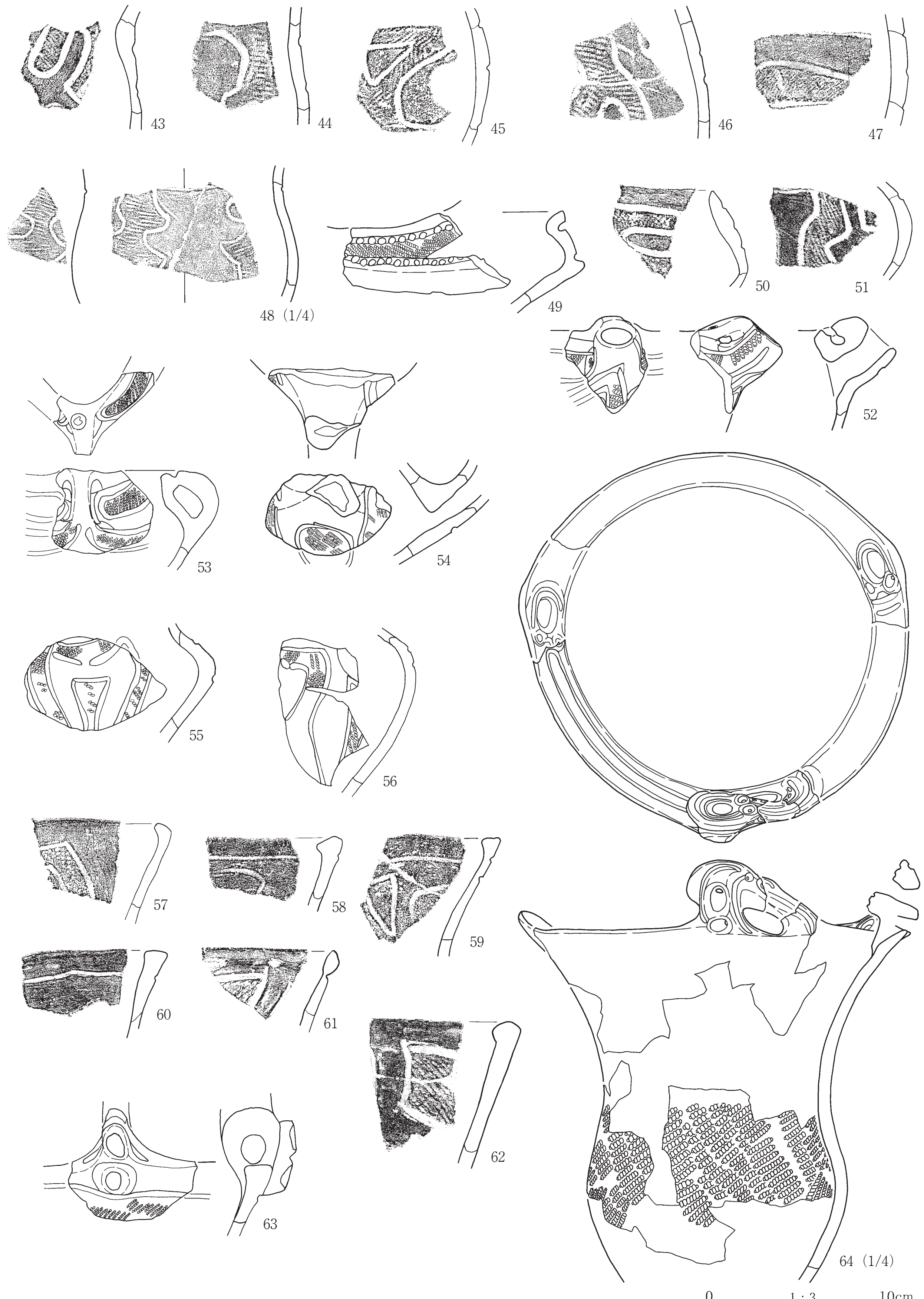


第46図　18区４号列石出土土器（１）

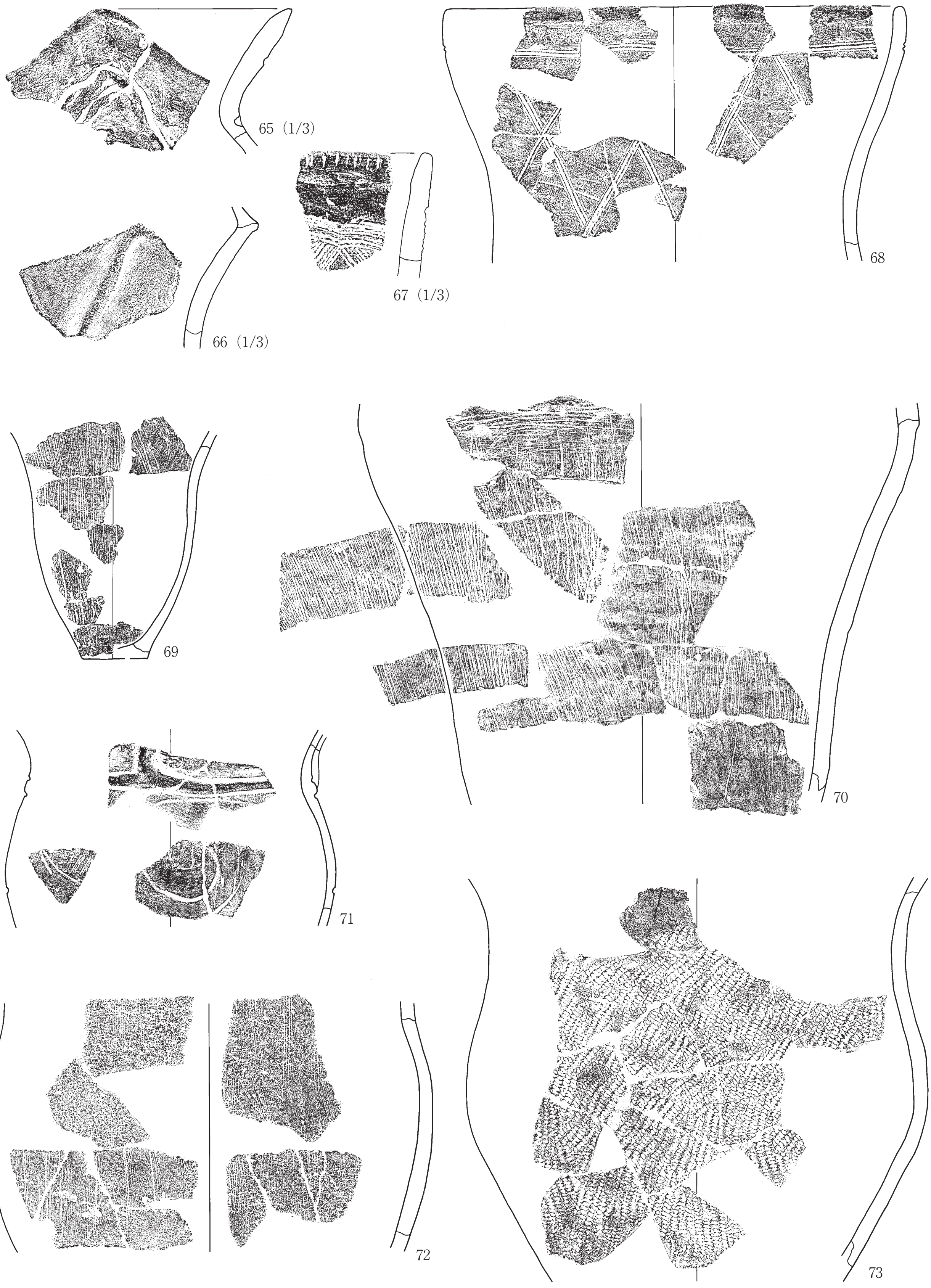
0　1 : 3　10cm



第47図　18区４号列石出土土器（２）

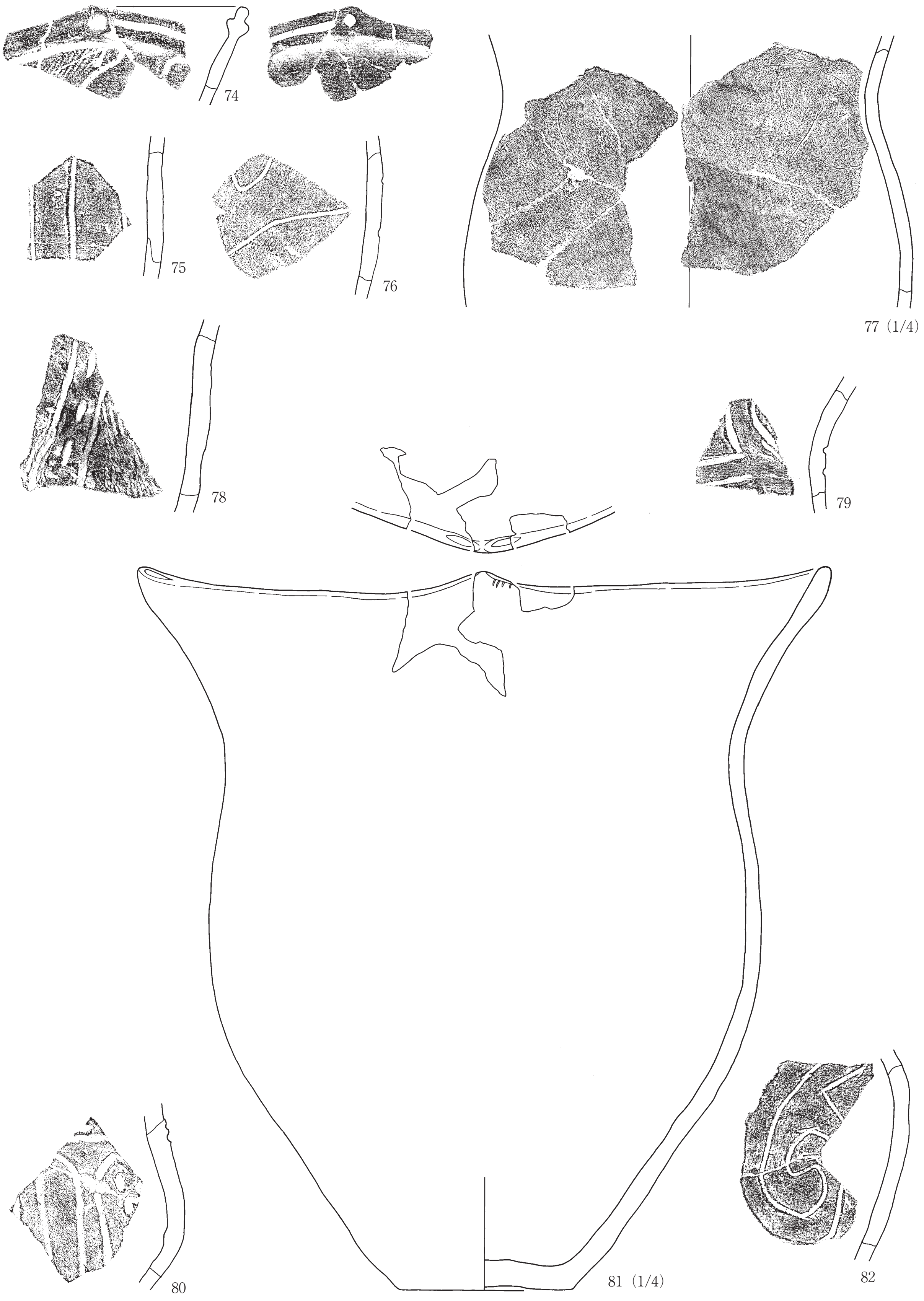


第48図　18区４号列石出土土器（３）

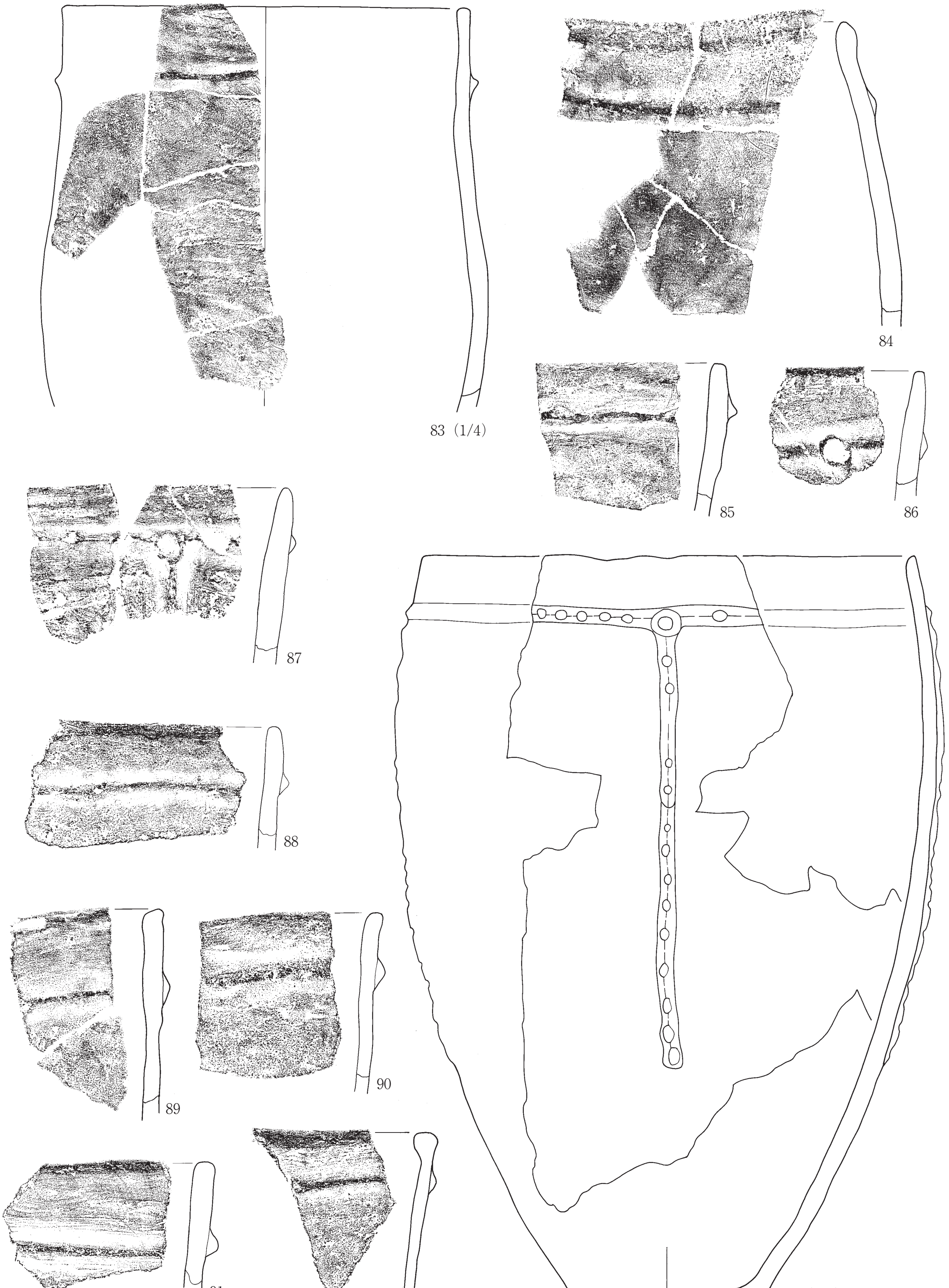


第49図　18区４号列石出土土器（４）

0　1：4　10cm

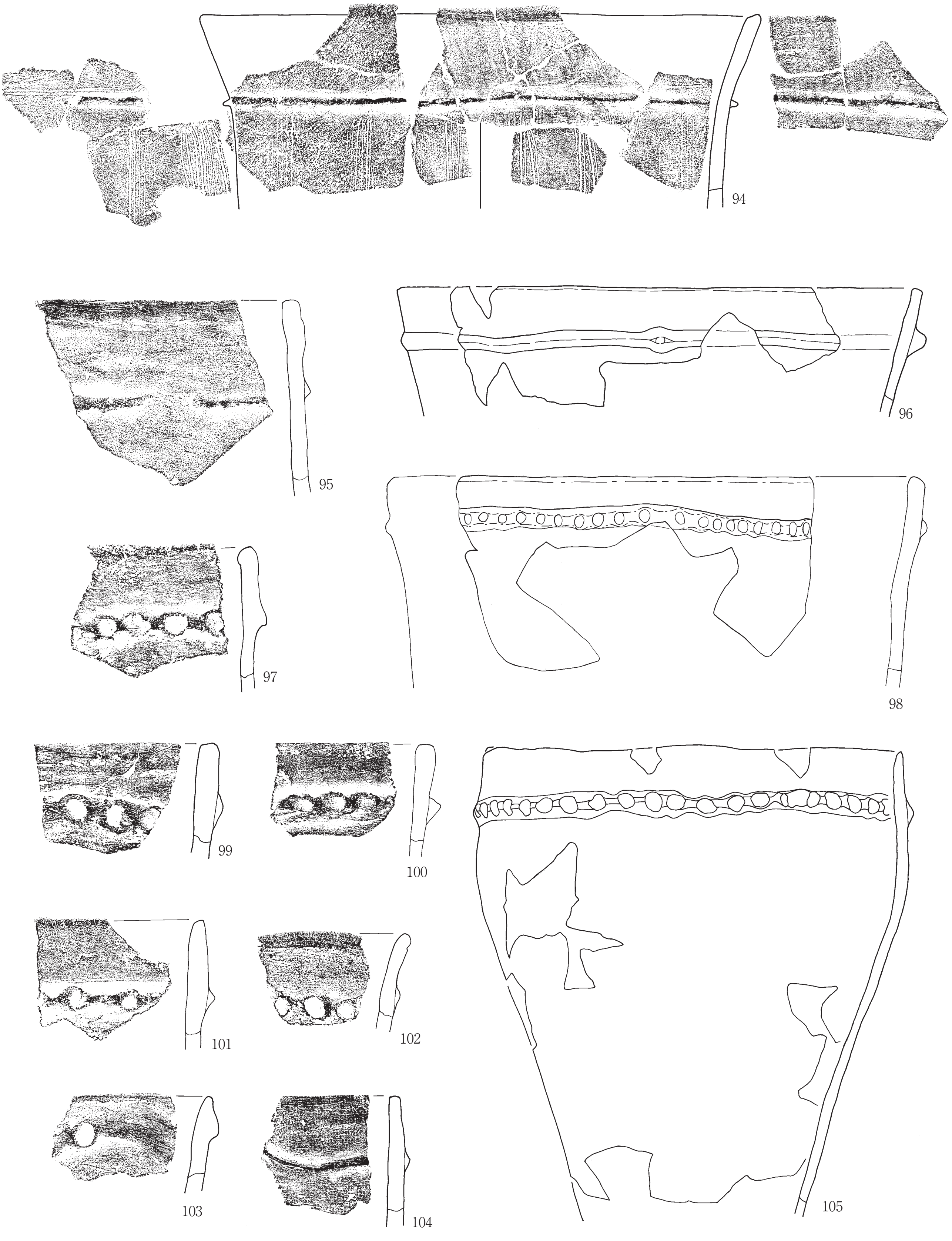


第50図　18区４号列石出土土器（５）



第51図　18区４号列石出土土器（６）

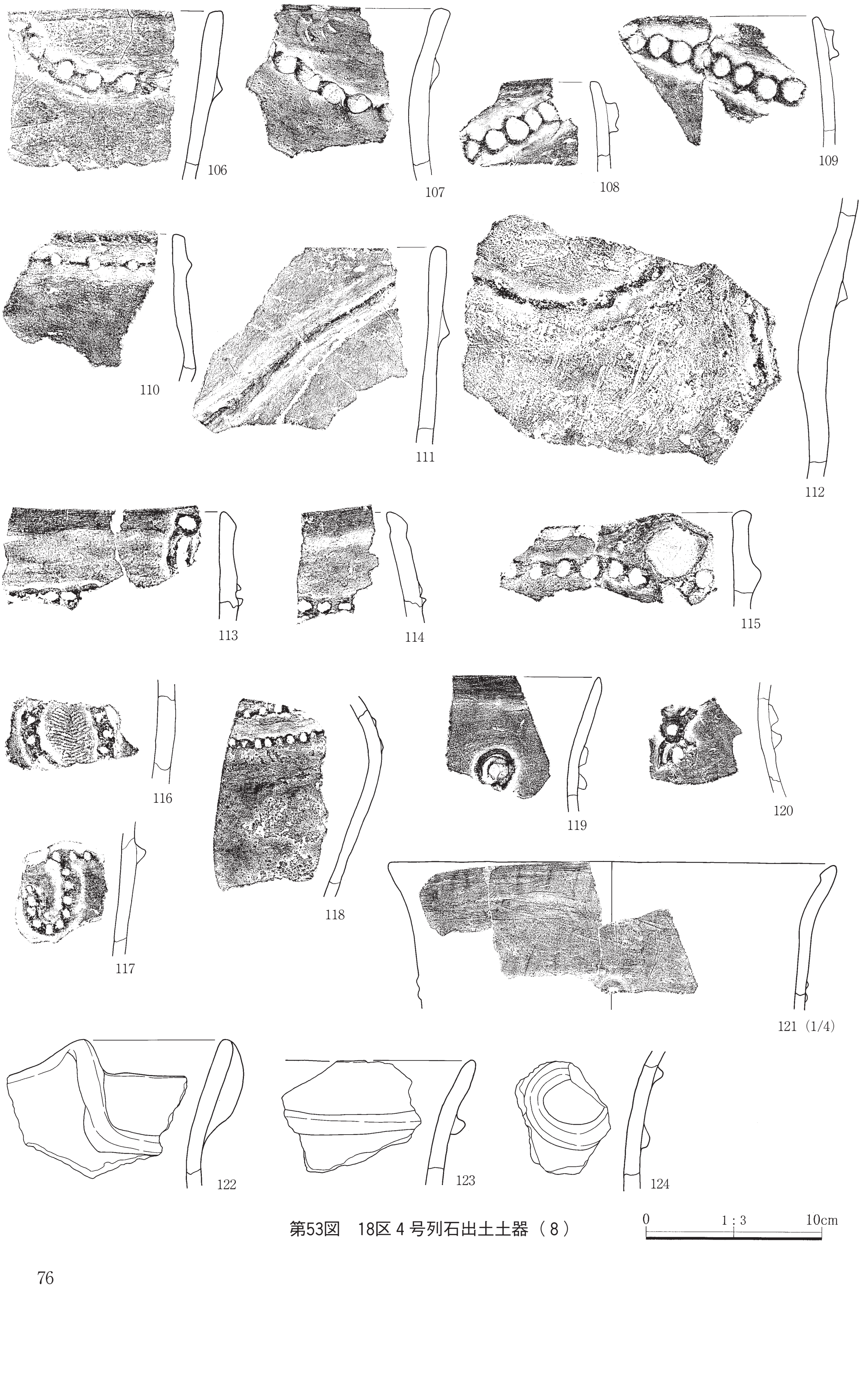
0　1：3　10cm



94・96・98・105　0　1：4　10cm

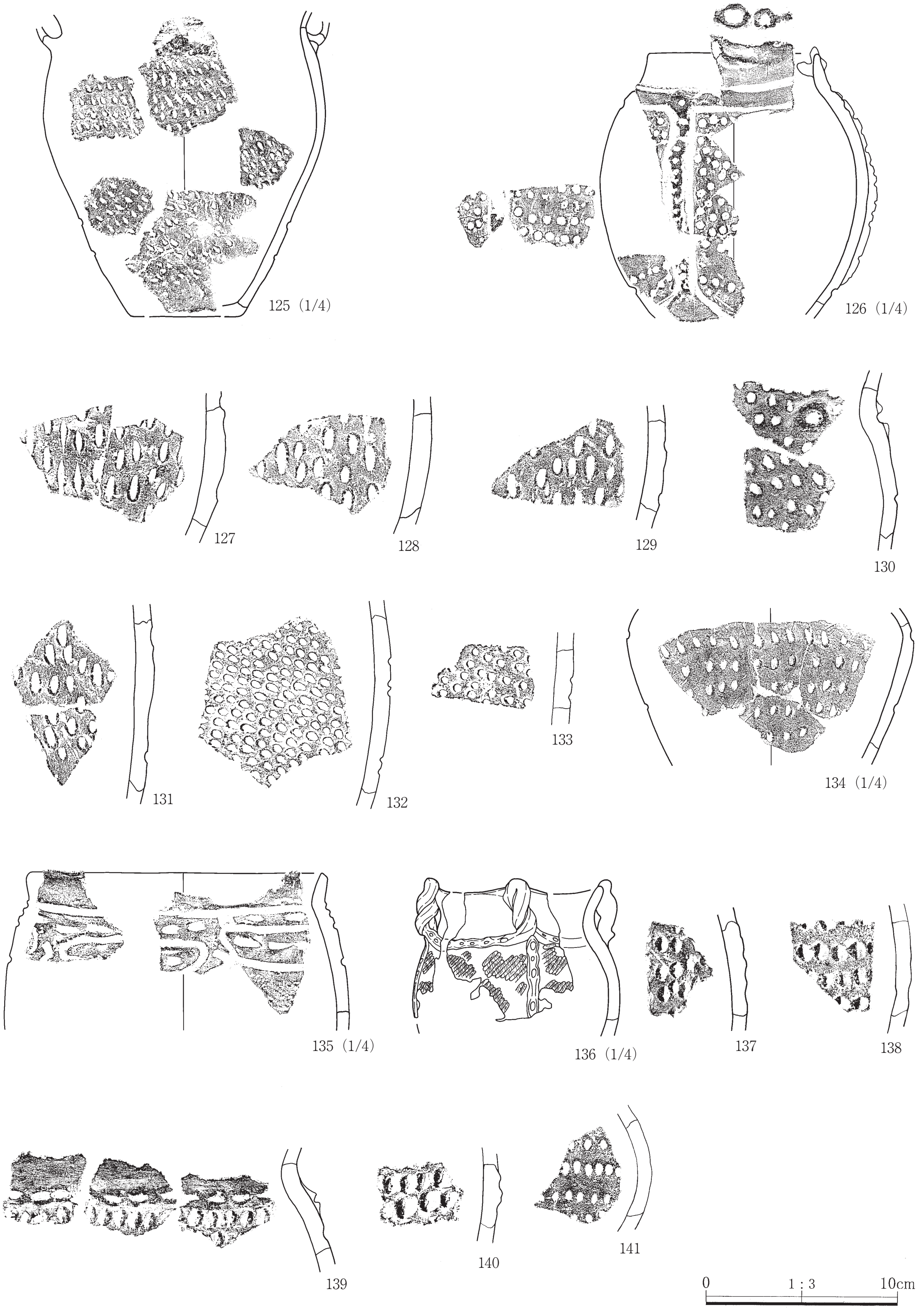
0　1：3　10cm

第52図　18区４号列石出土土器（７）

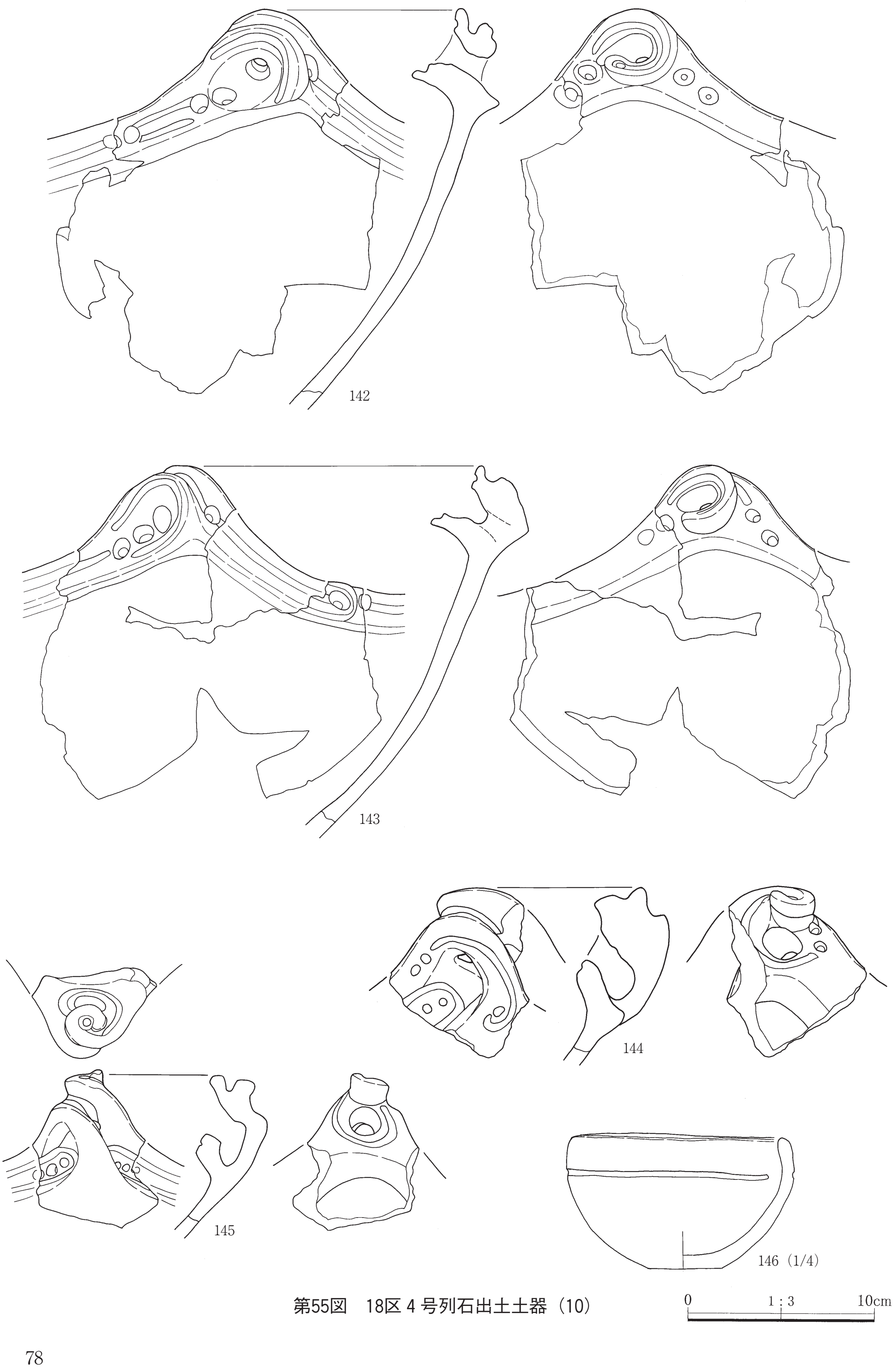


第53図　18区４号列石出土土器（８）

0　1：3　10cm

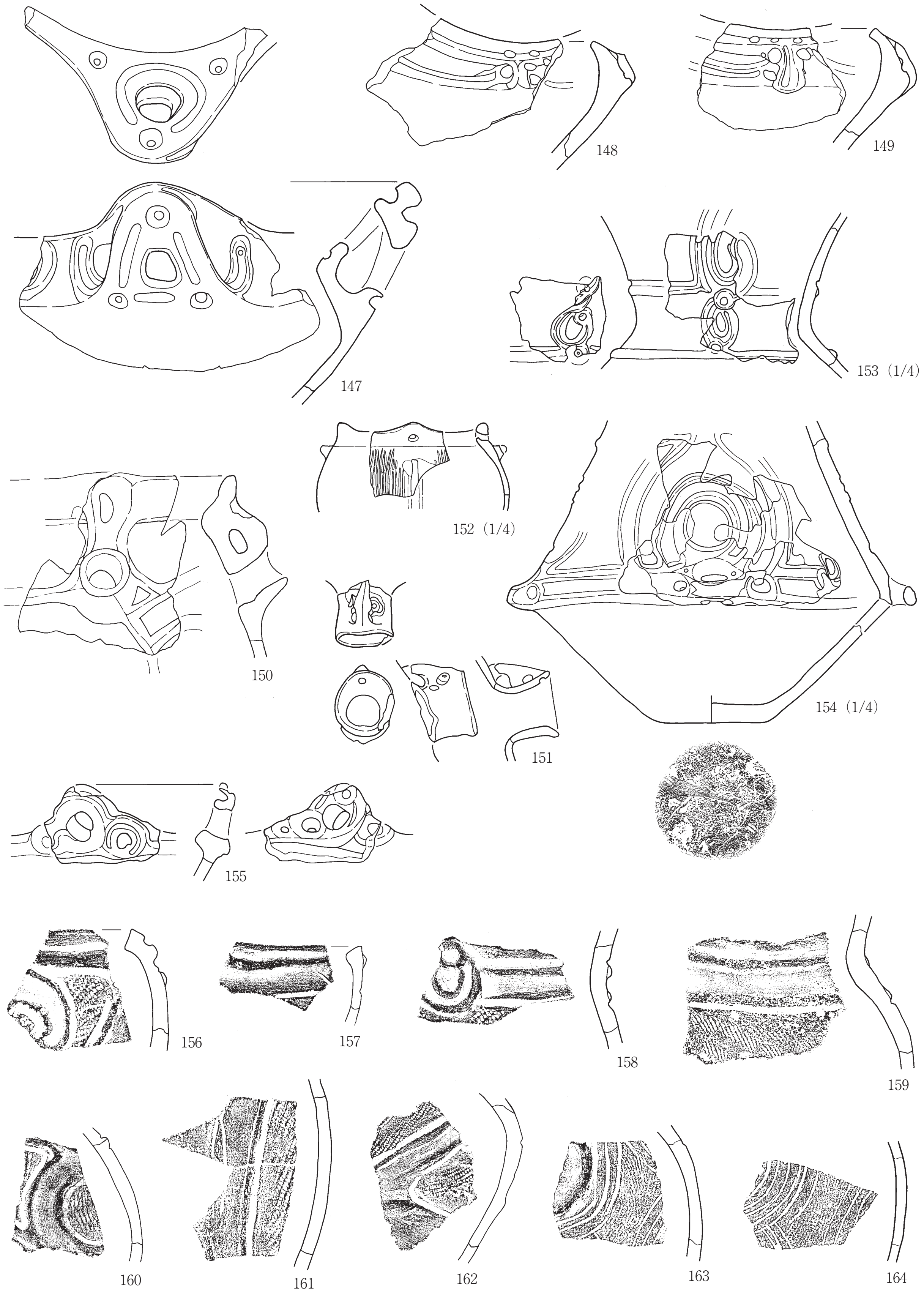


第54図　18区４号列石出土土器（９）



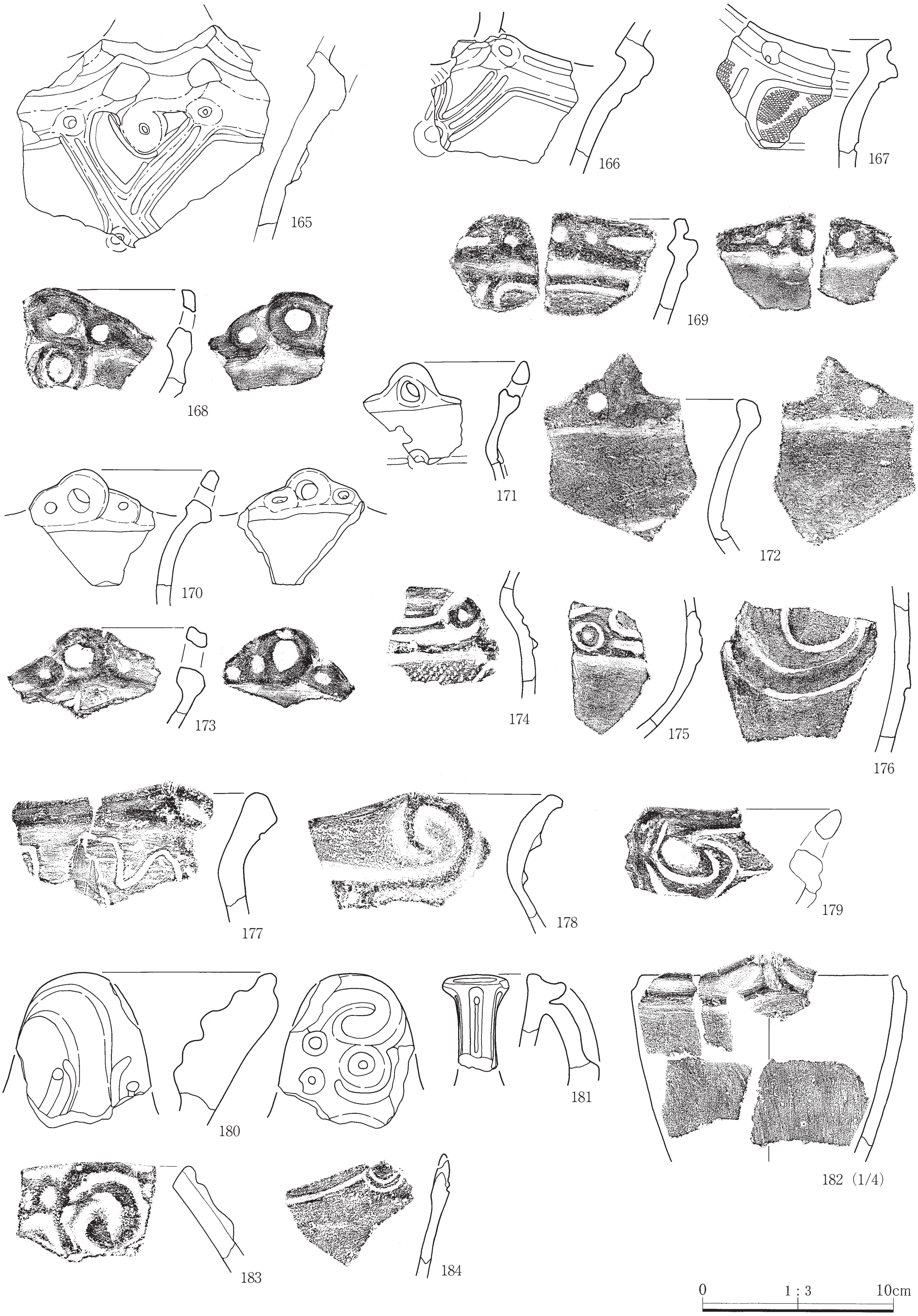
第55図　18区４号列石出土土器（10）

0　1：3　10cm

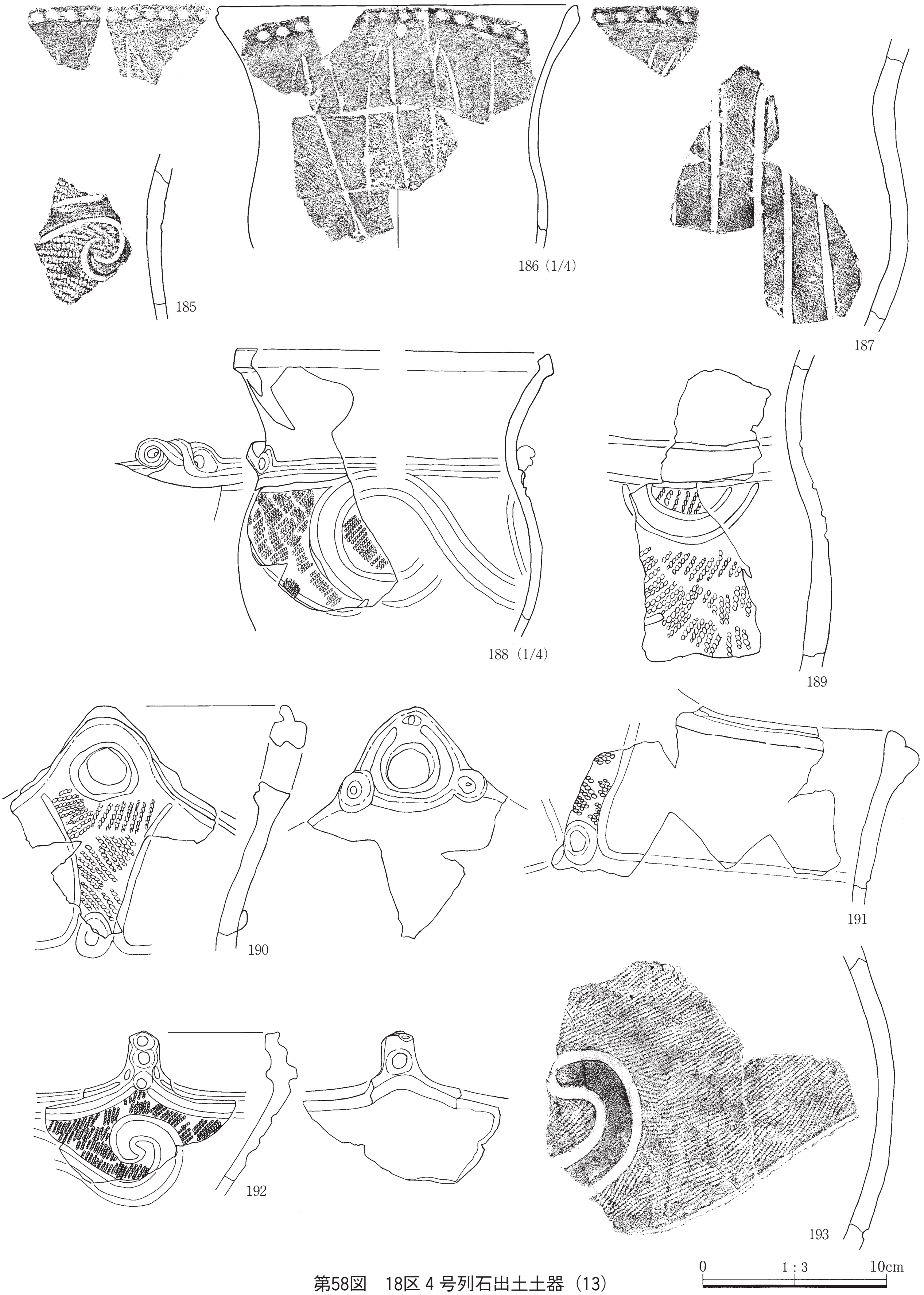


第56図　18区４号列石出土土器（11）

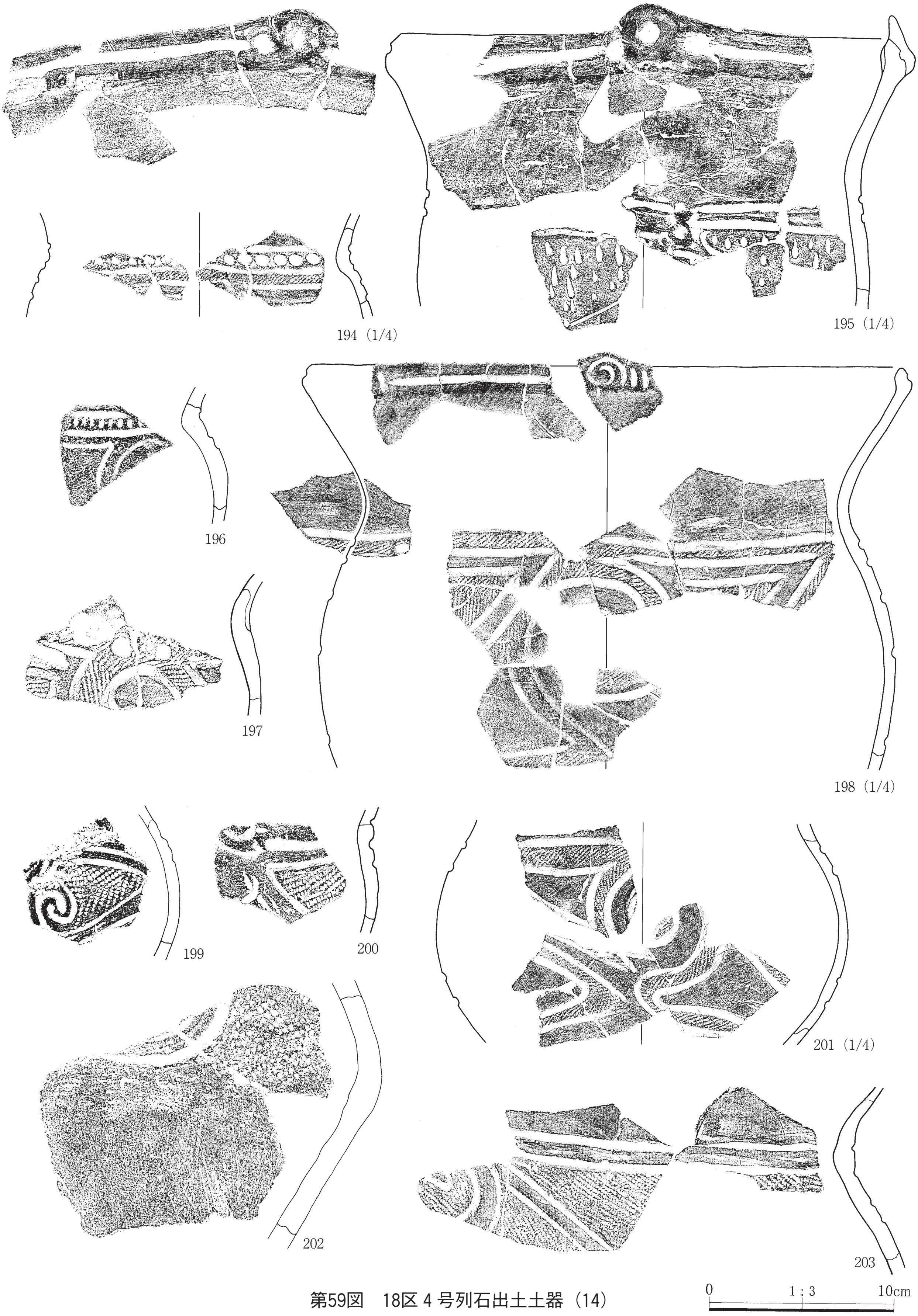
0　1：3　10cm



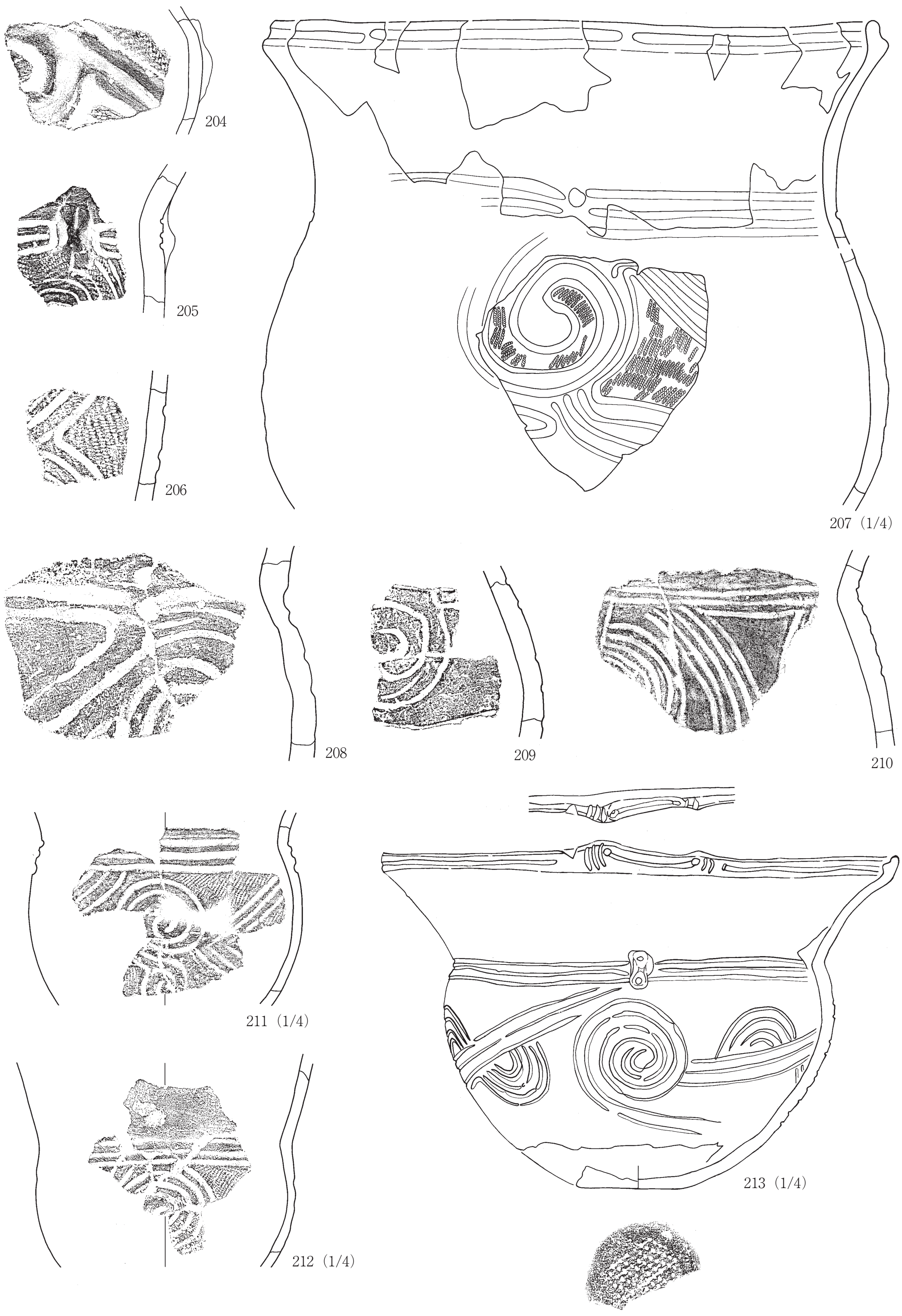
第57図　18区４号列石出土土器（12）



第58図　18区４号列石出土土器（13）

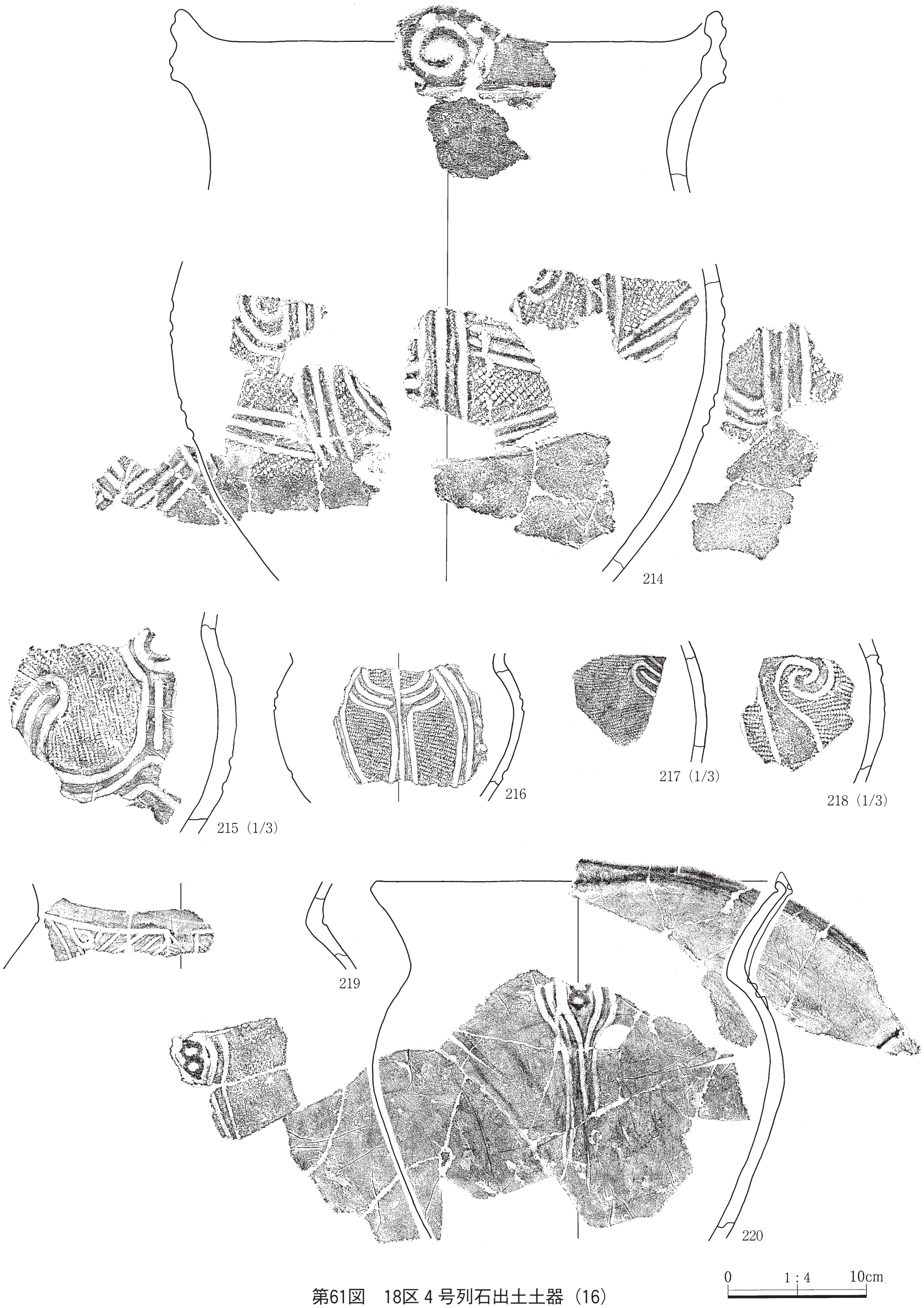


第59図　18区４号列石出土土器（14）

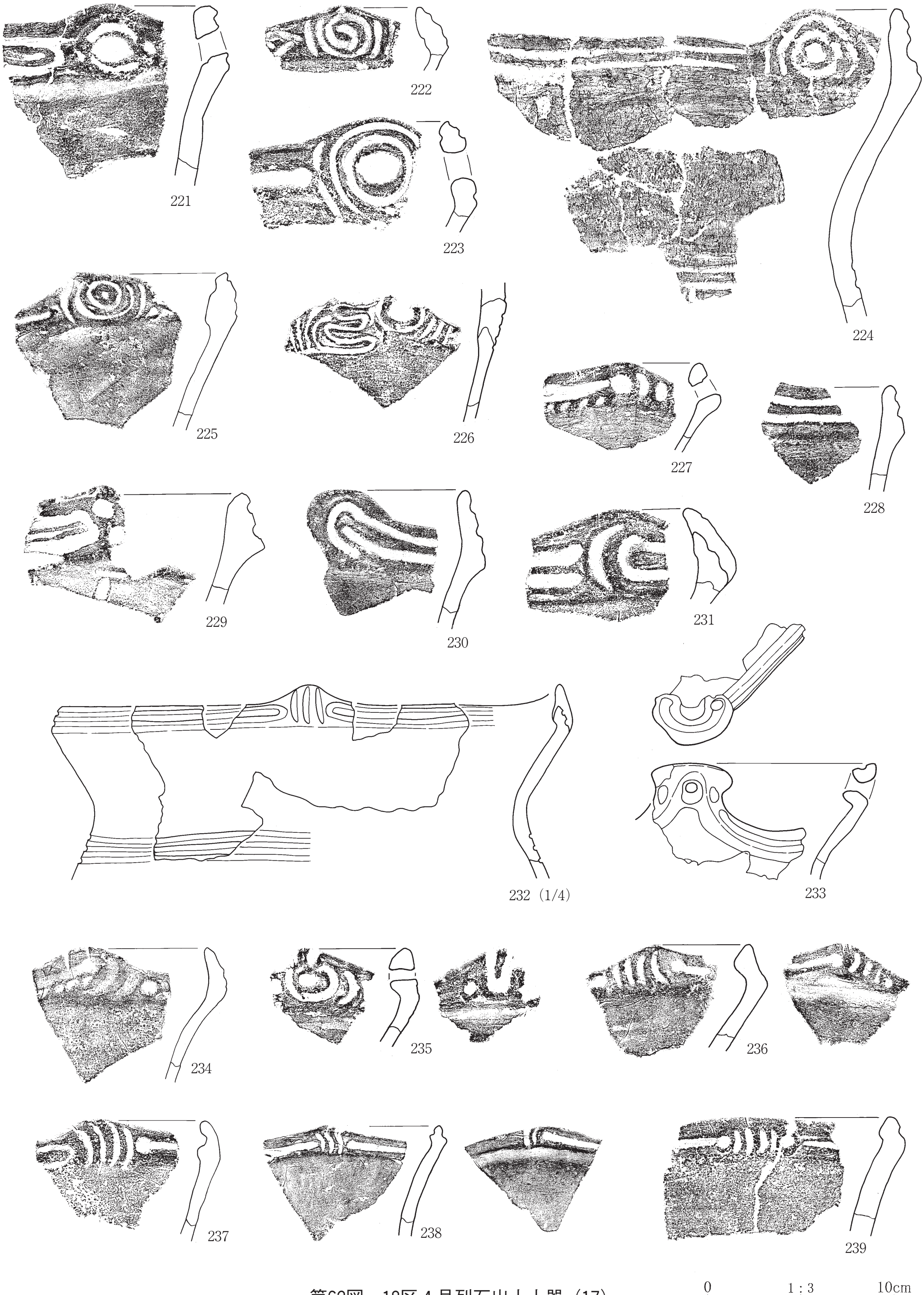


第60図　18区４号列石出土土器（15）

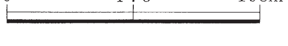
0　1：3　10cm

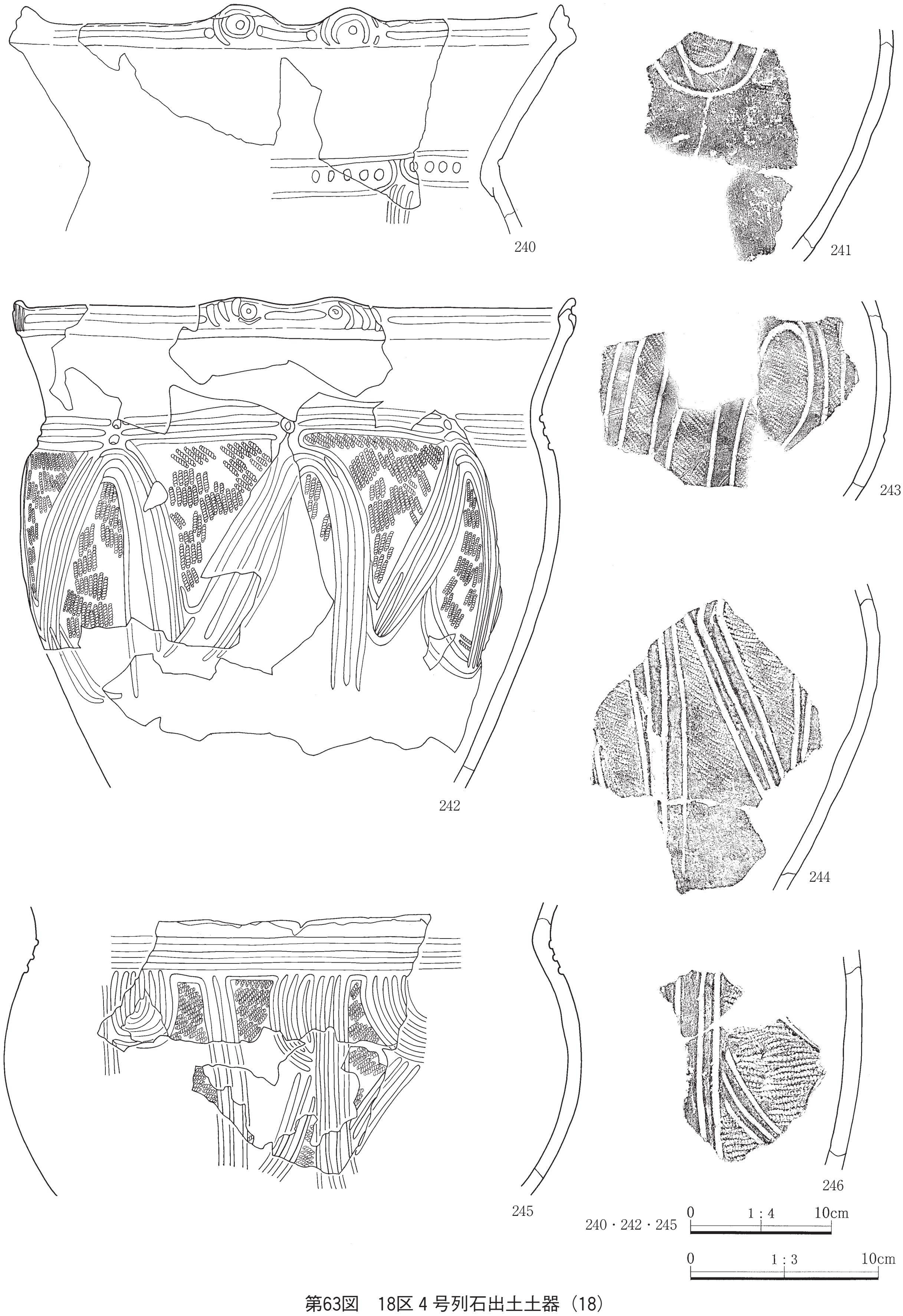


第61図　18区４号列石出土土器（16）



第62図　18区４号列石出土土器（17）

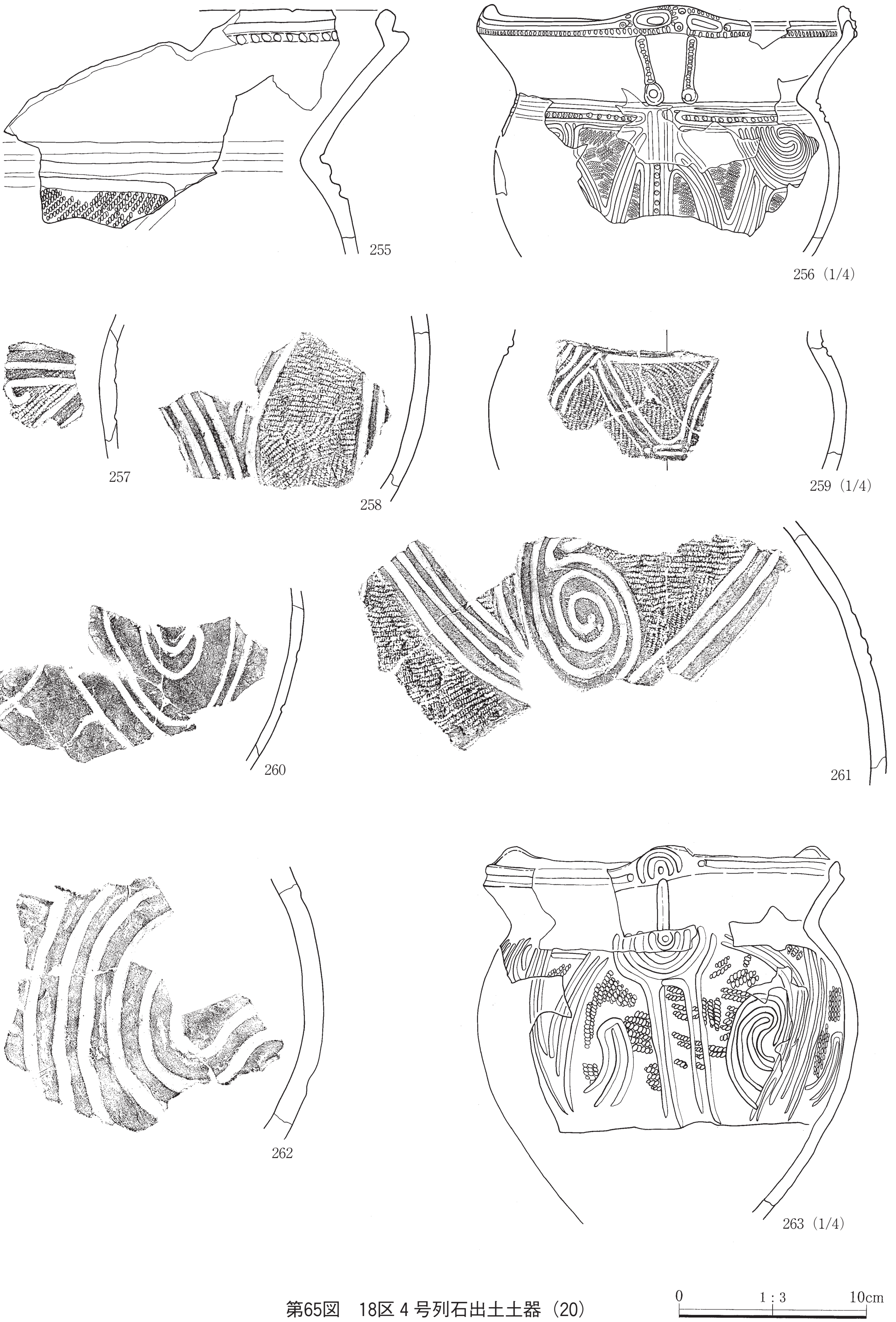




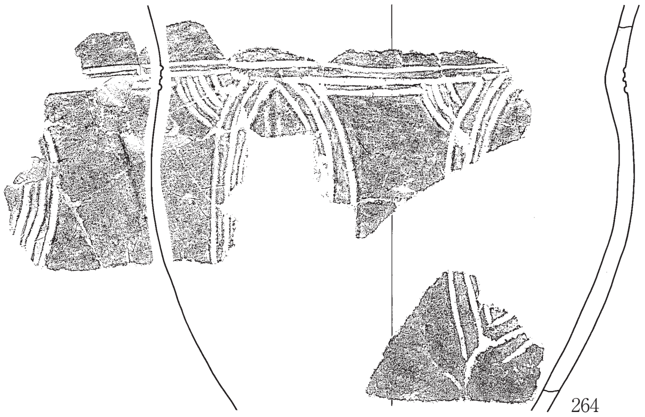
第63図　18区４号列石出土土器（18）

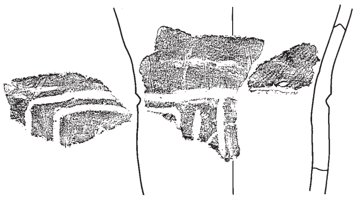
第64図　18区４号列石出土土器（19）

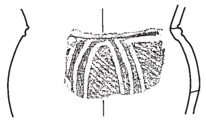
0　1：4　10cm



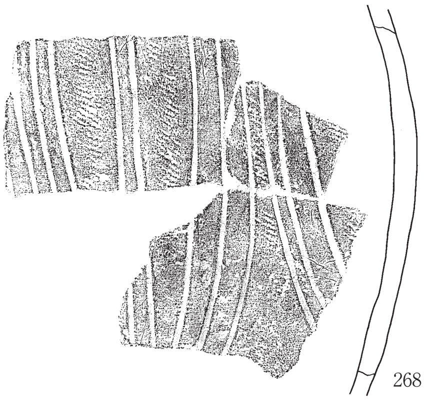
第65図　18区４号列石出土土器（20）

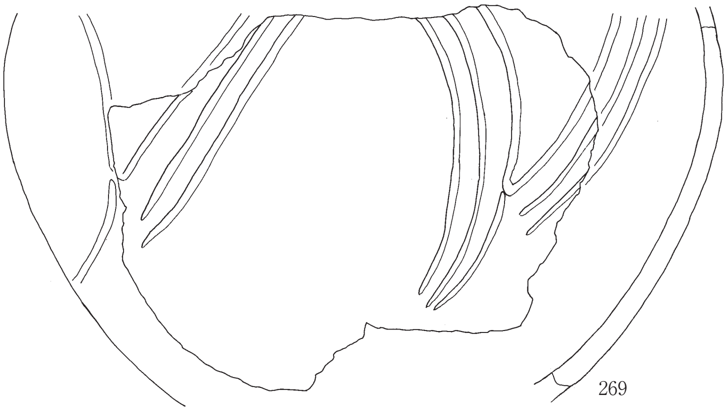

264

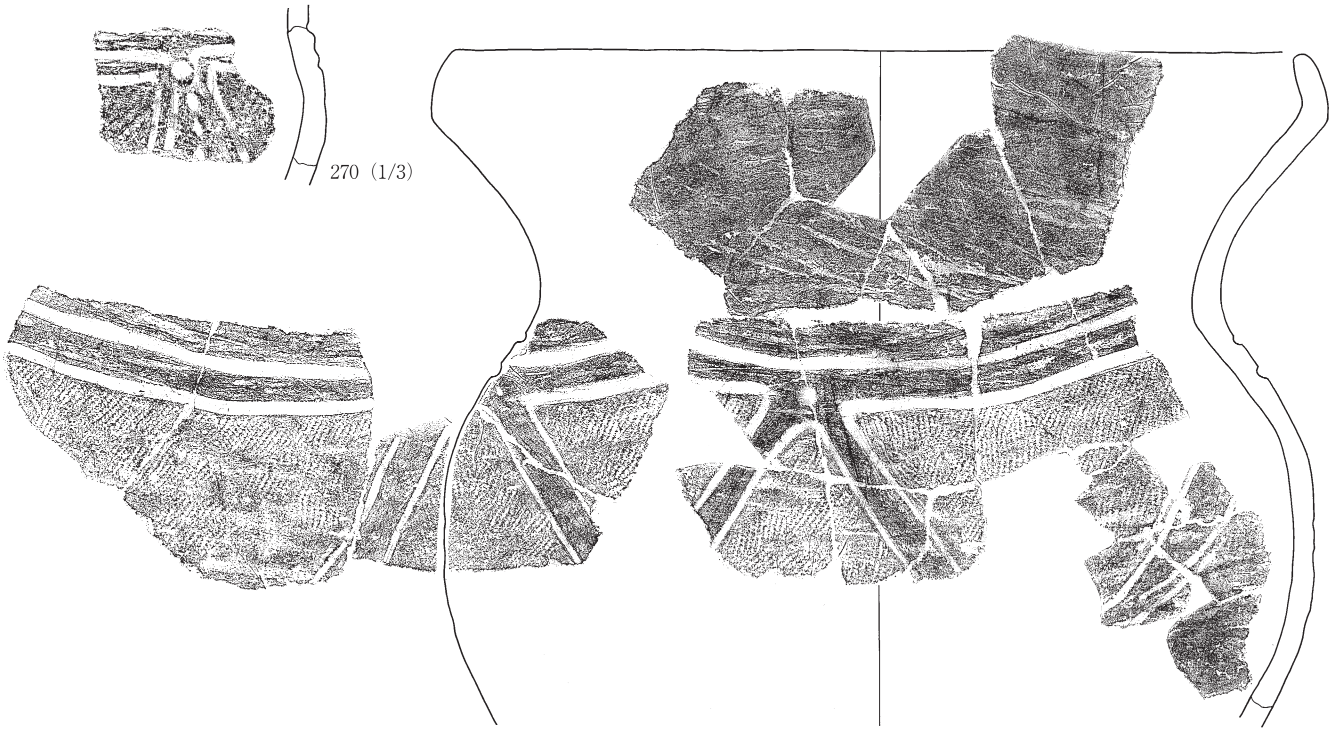

265


266

267


268（1/3）

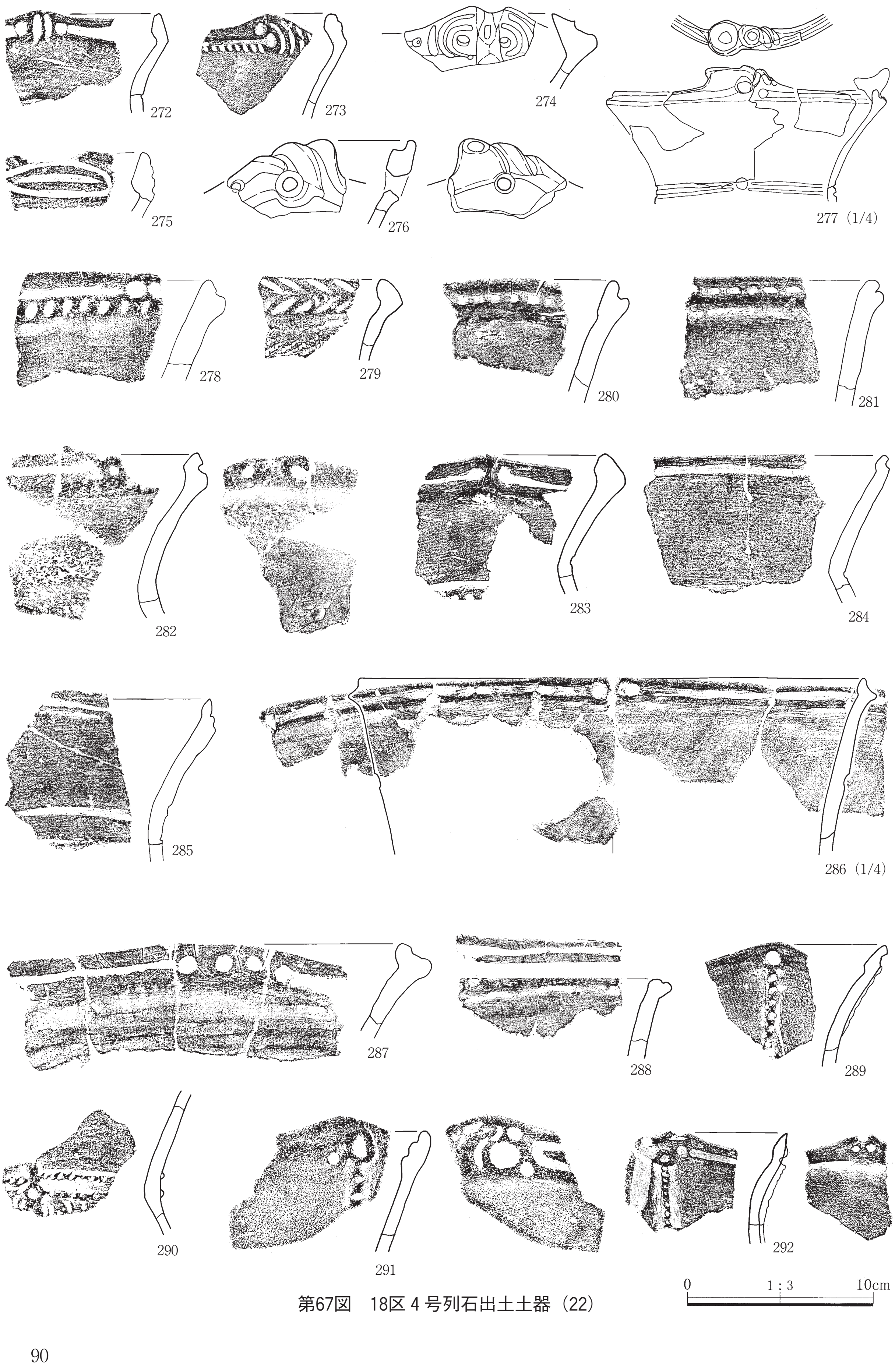

269


270（1/3）

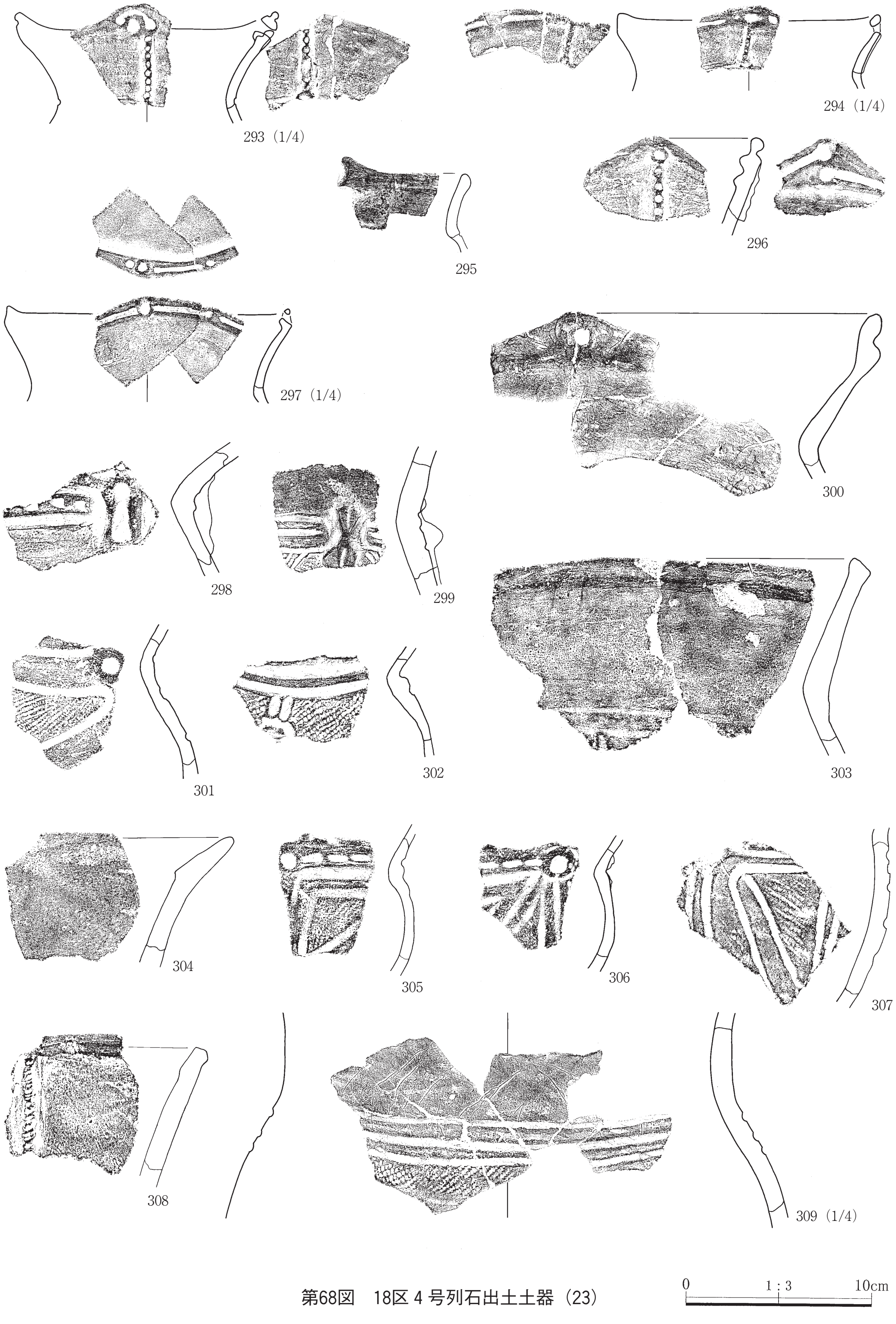
271

0　1：4　10cm

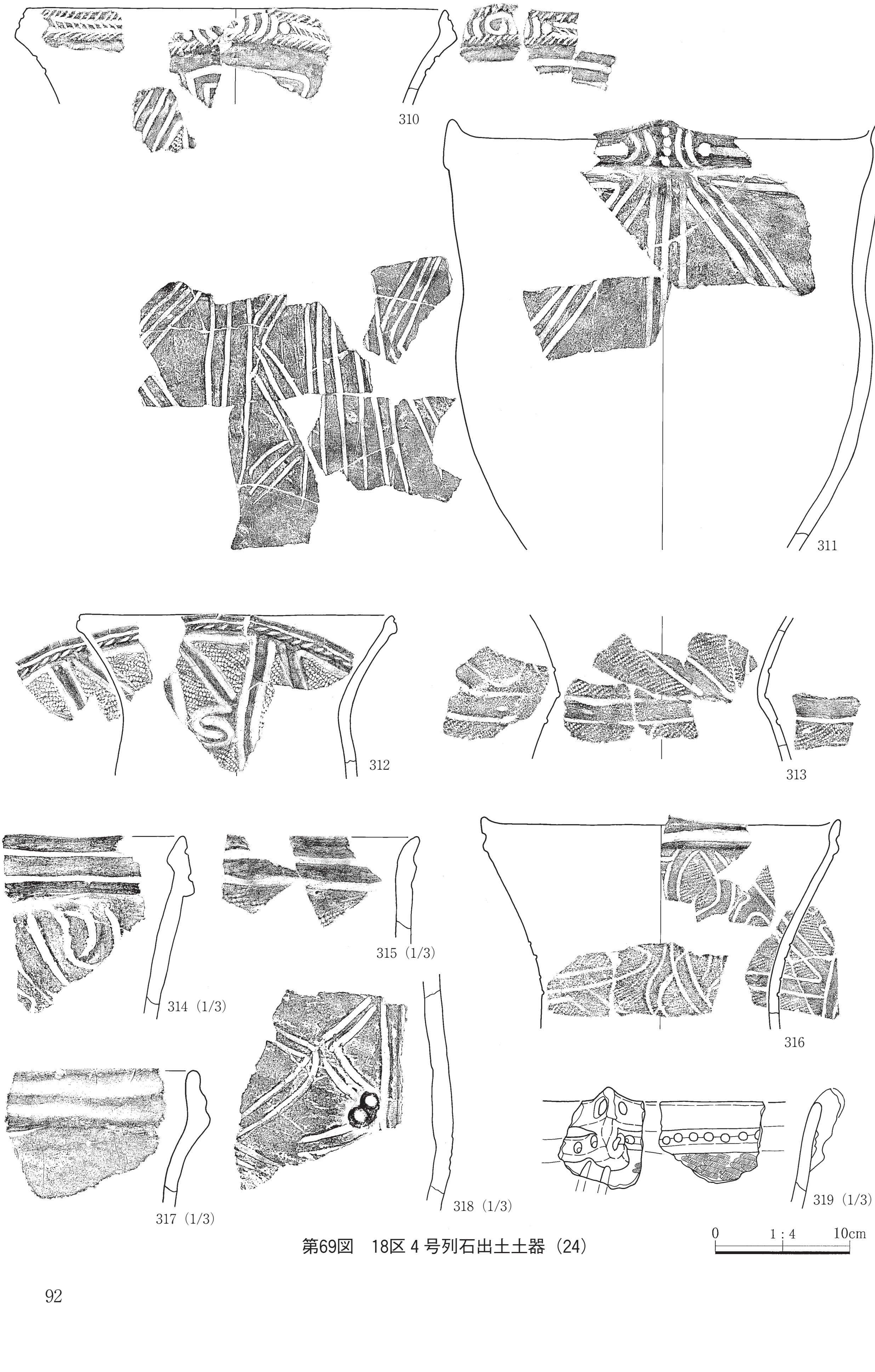
第66図　18区４号列石出土土器（21）



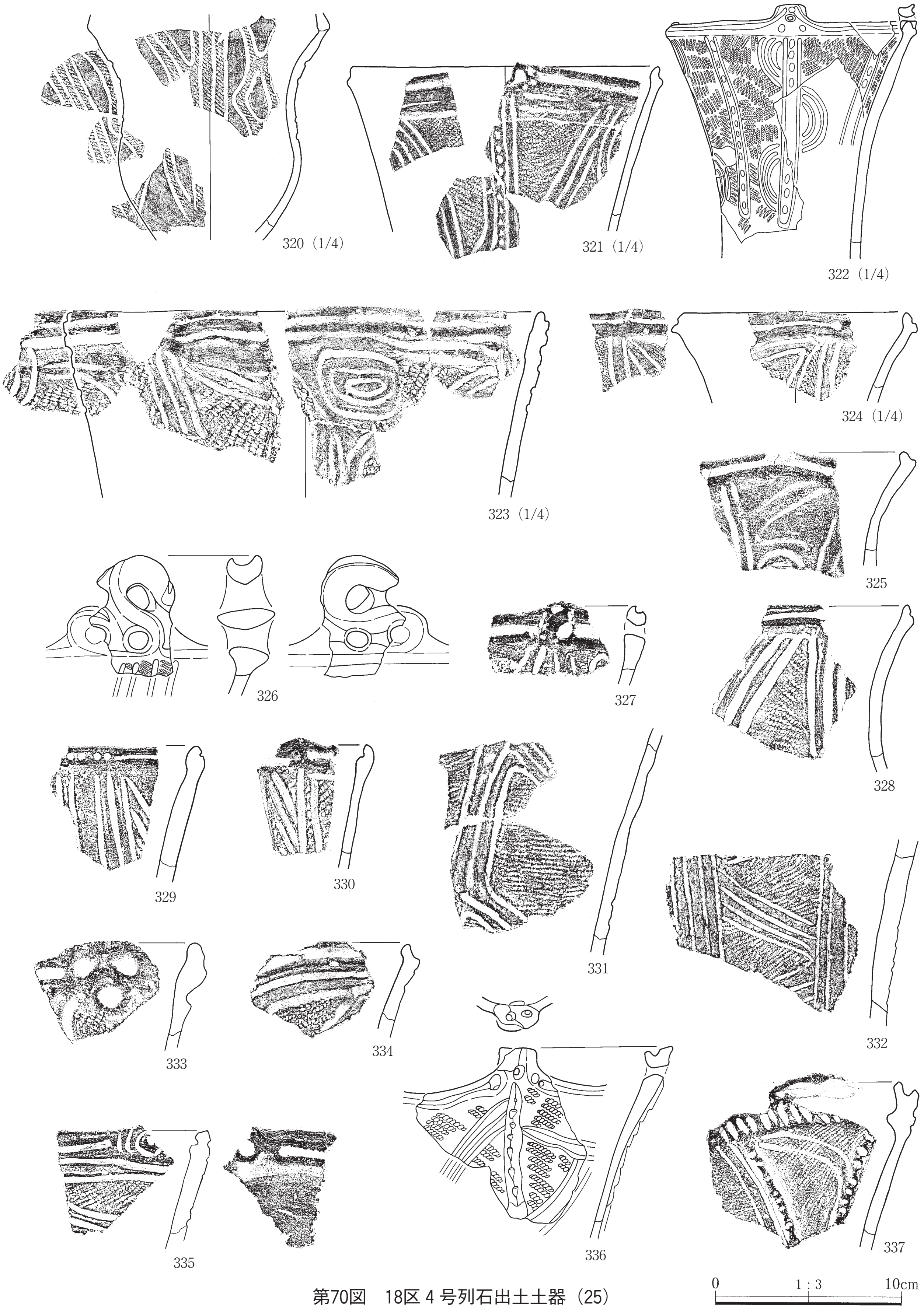
第67図　18区４号列石出土土器（22）



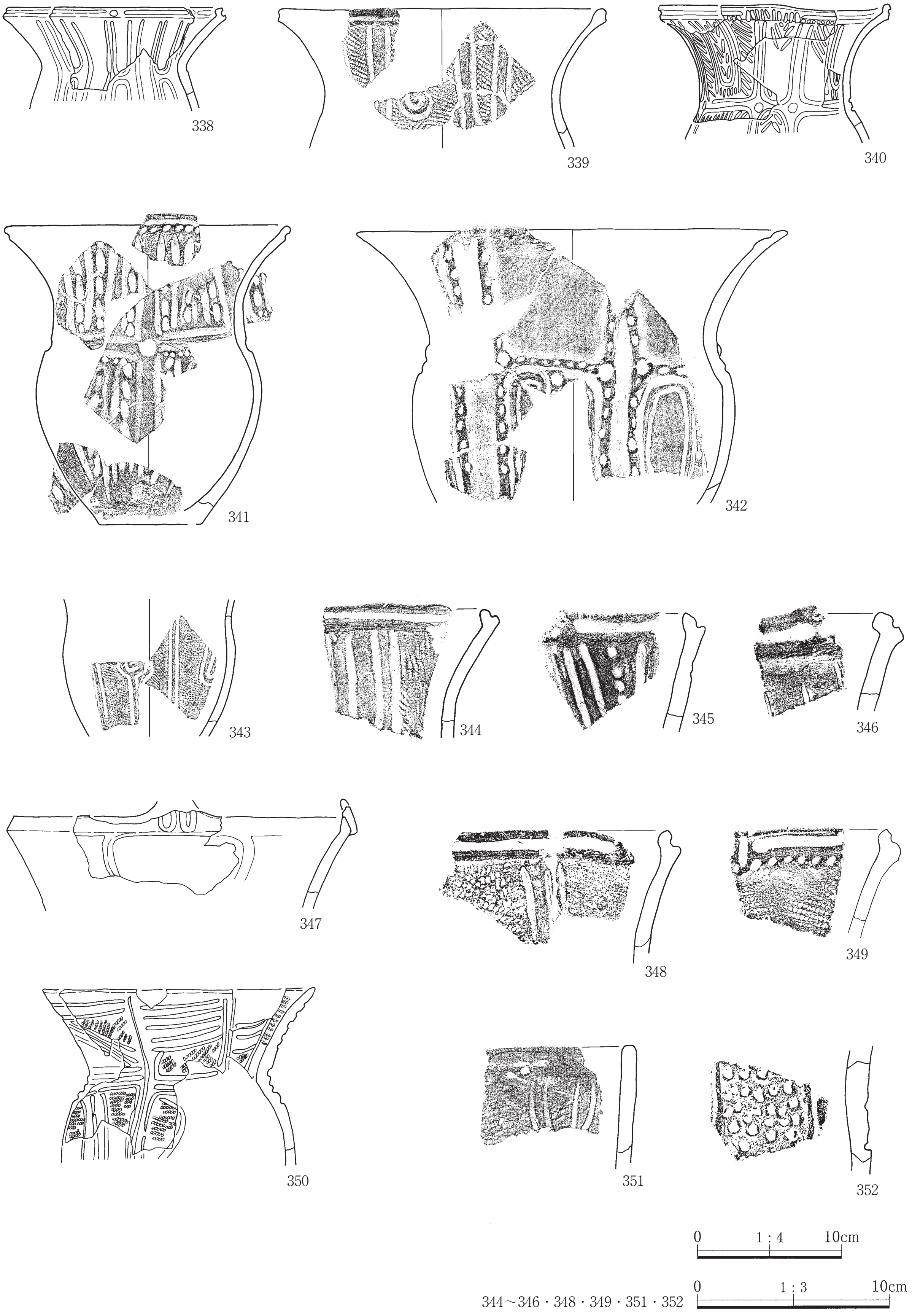
第68図　18区４号列石出土土器（23）



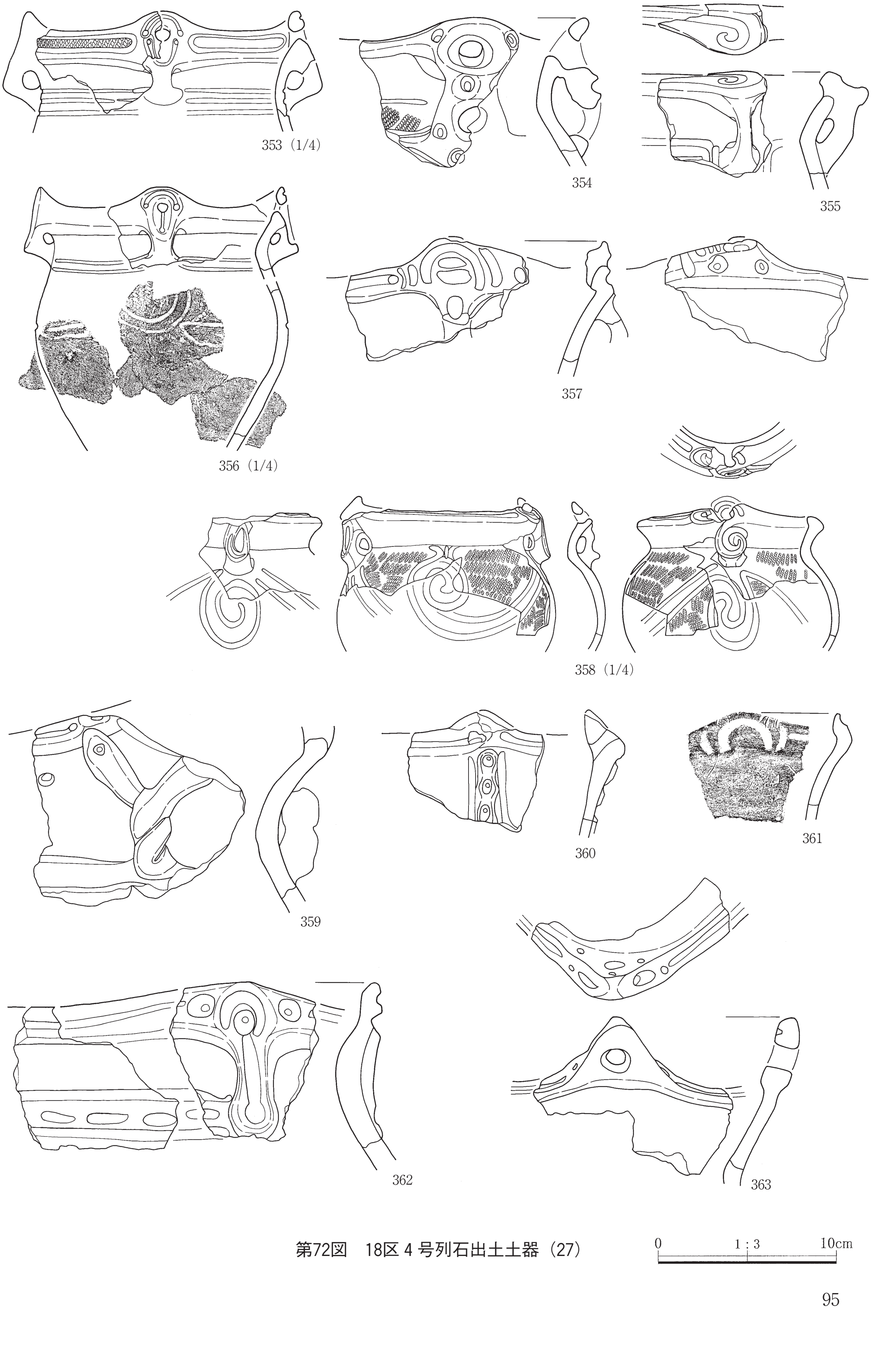
第69図　18区４号列石出土土器（24）



第70図　18区４号列石出土土器（25）

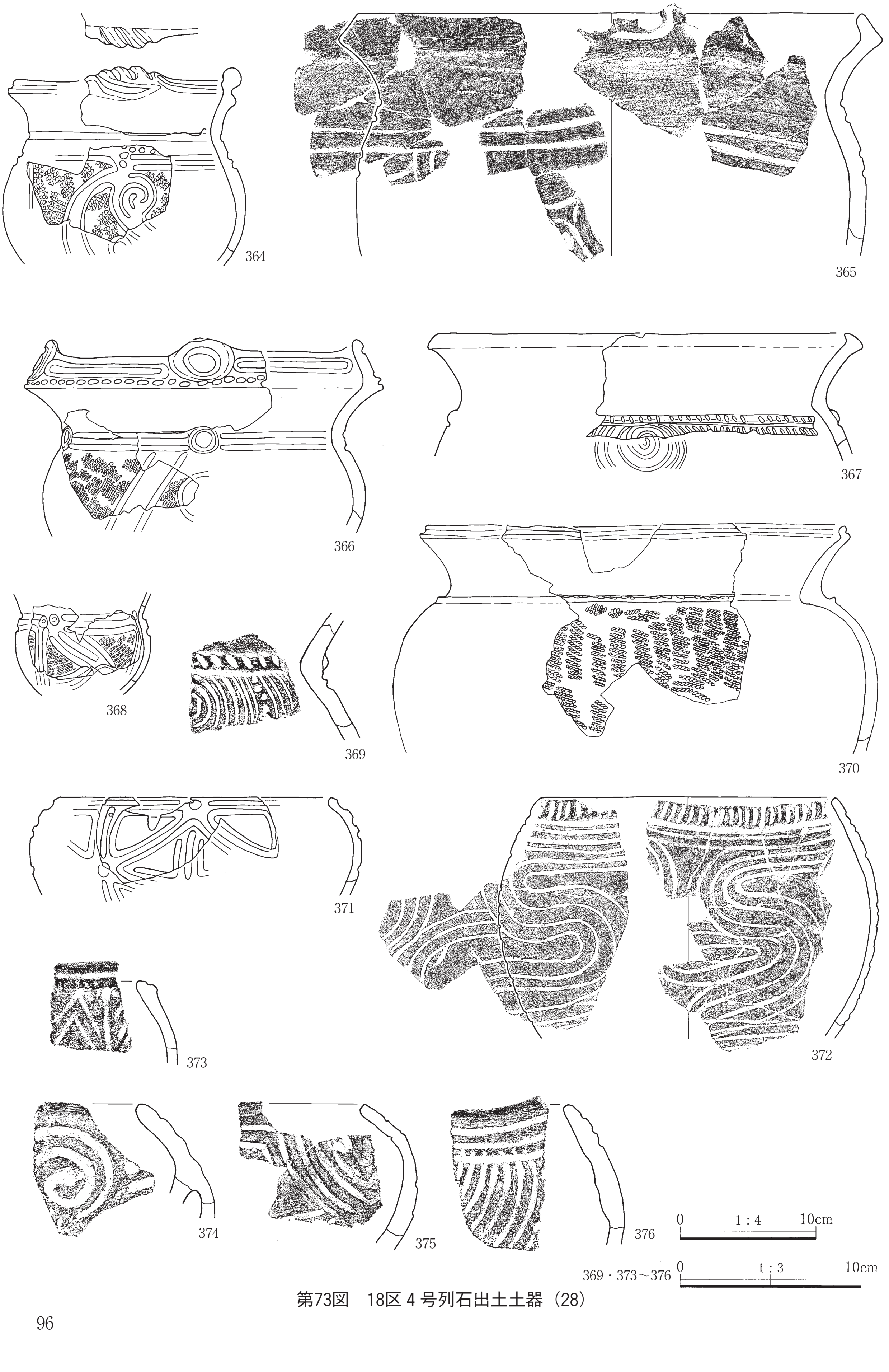


第71図　18区４号列石出土土器（26）

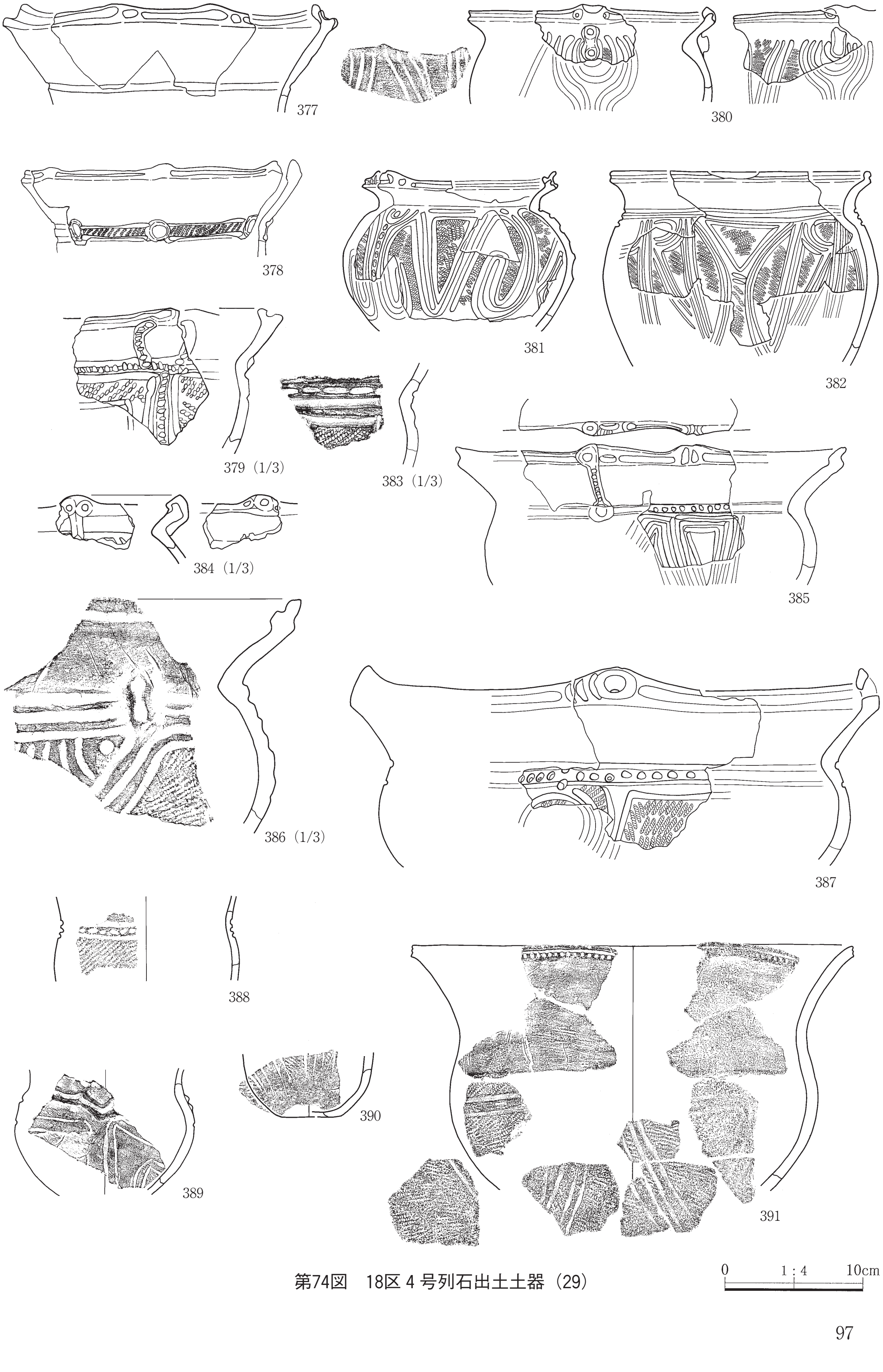


第72図　18区４号列石出土土器（27）

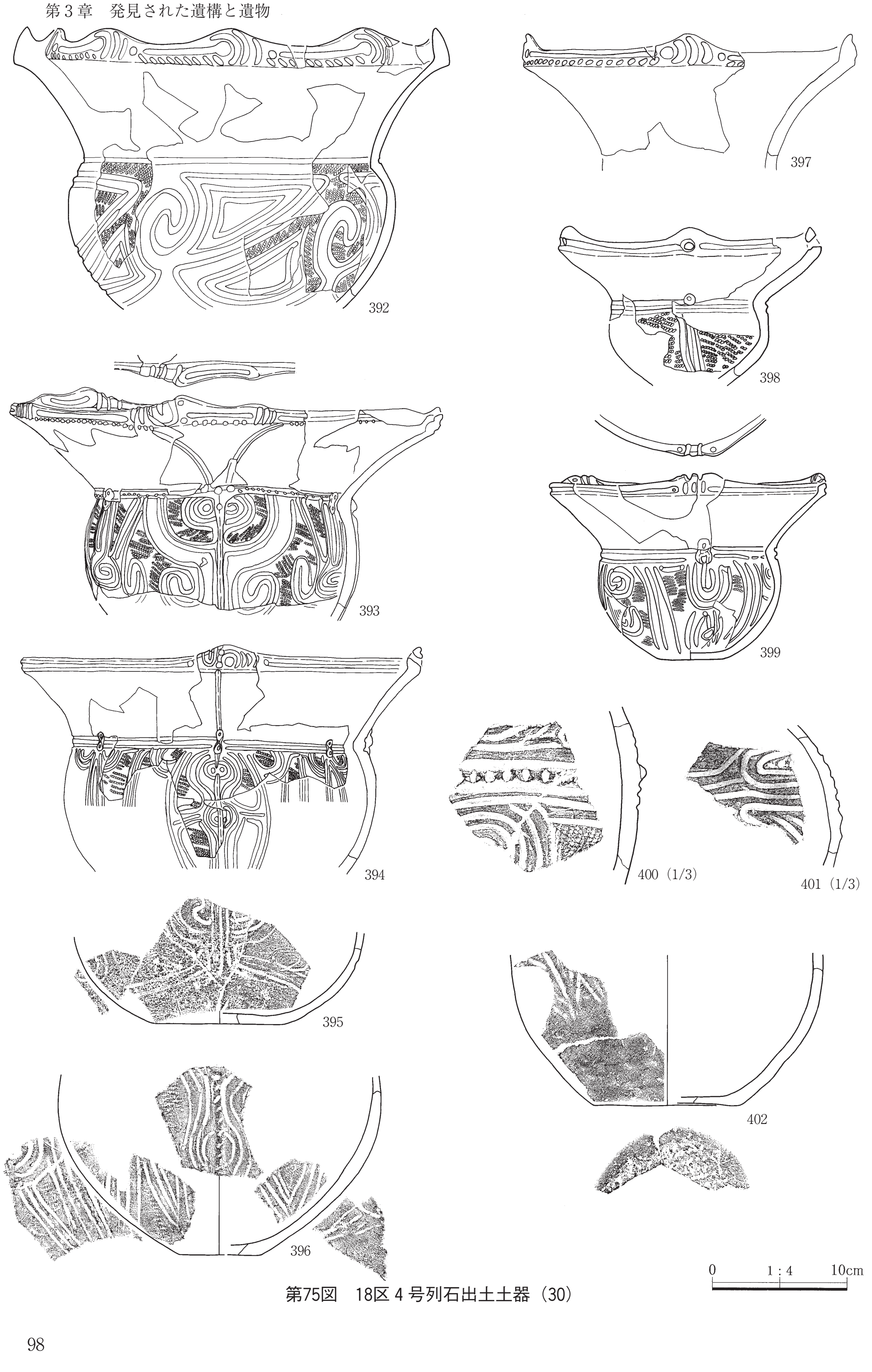
0　1：3　10cm



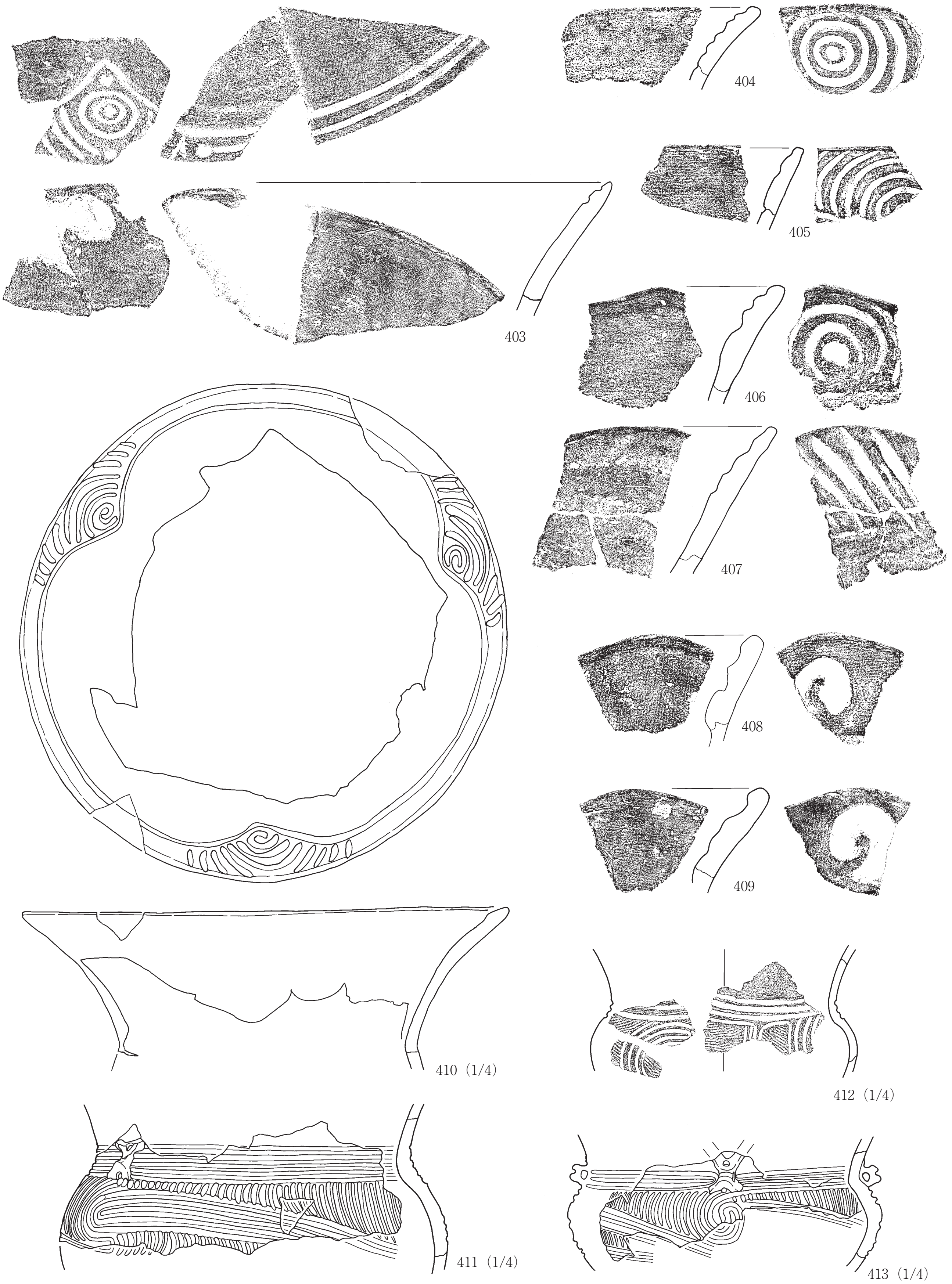
第73図　18区４号列石出土土器（28）



第74図　18区４号列石出土土器（29）

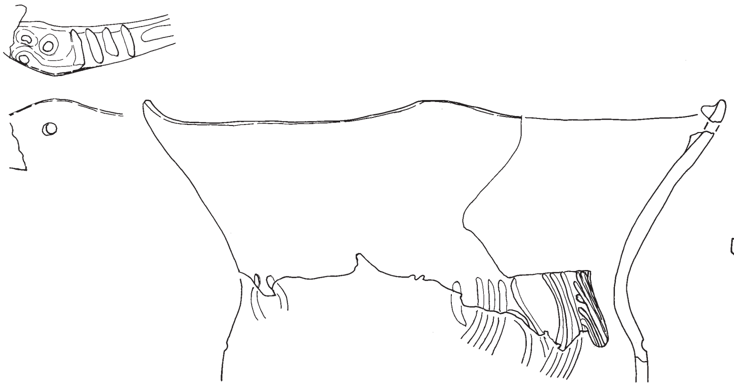


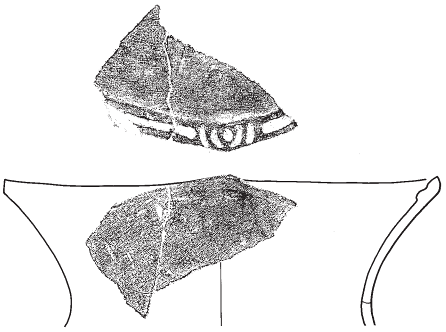
第75図　18区４号列石出土土器（30）

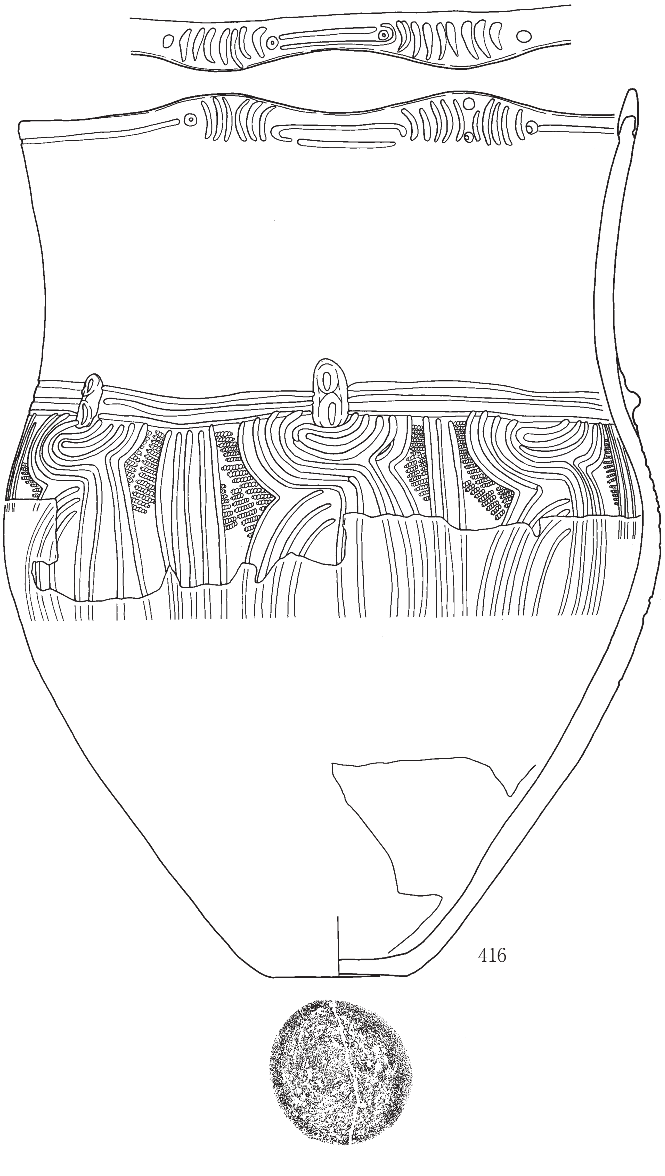


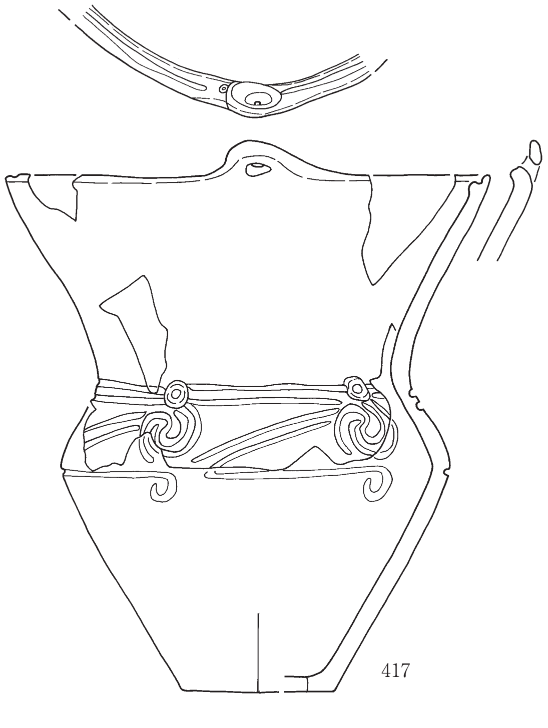
第76図　18区４号列石出土土器（31）

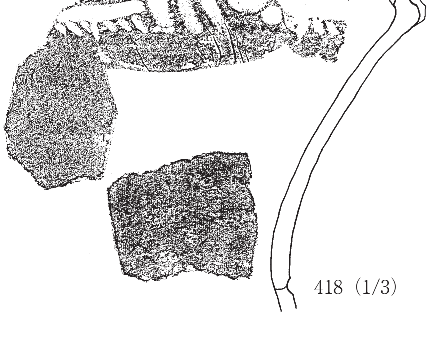
0　1：3　10cm


414


415

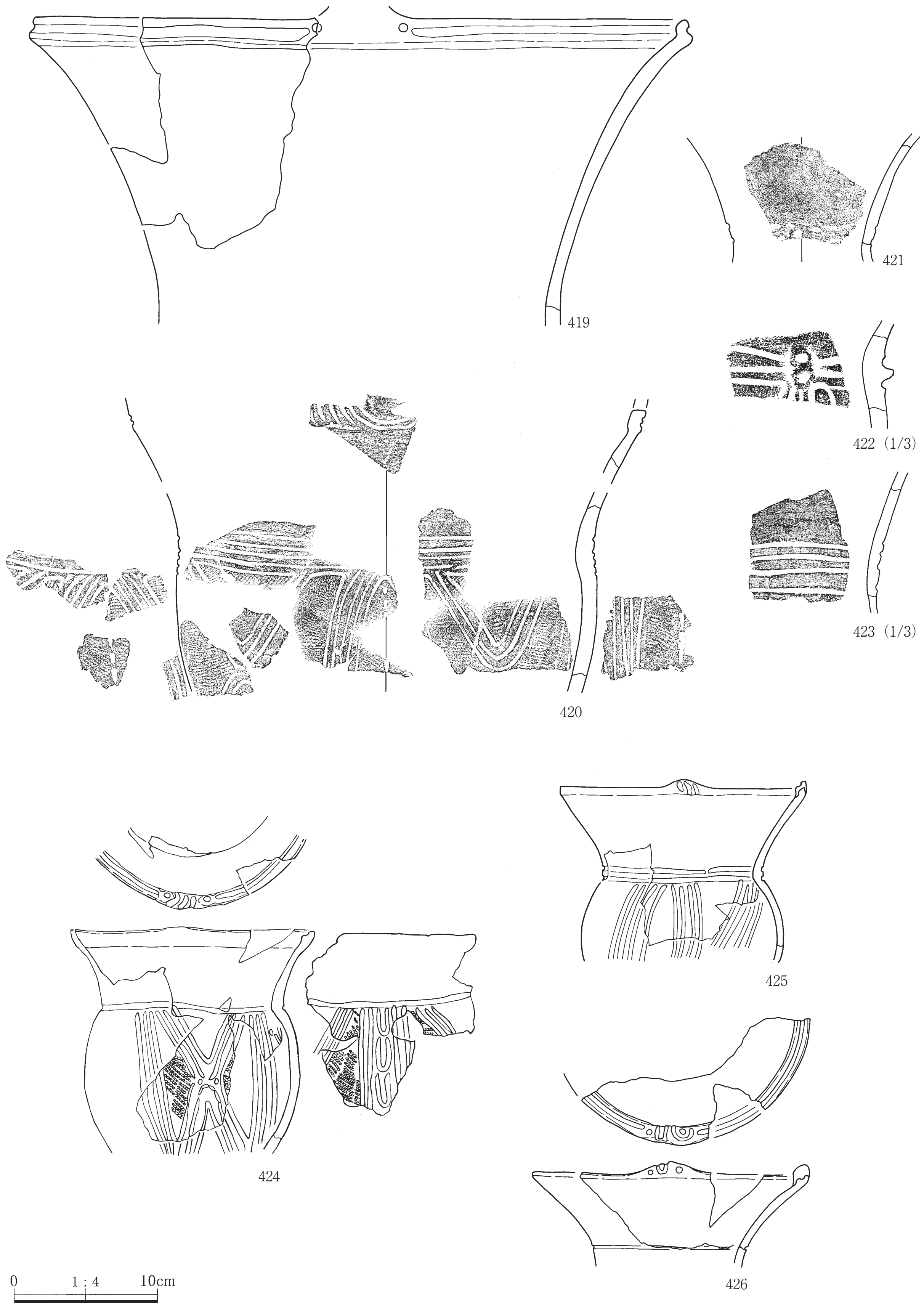

416


417

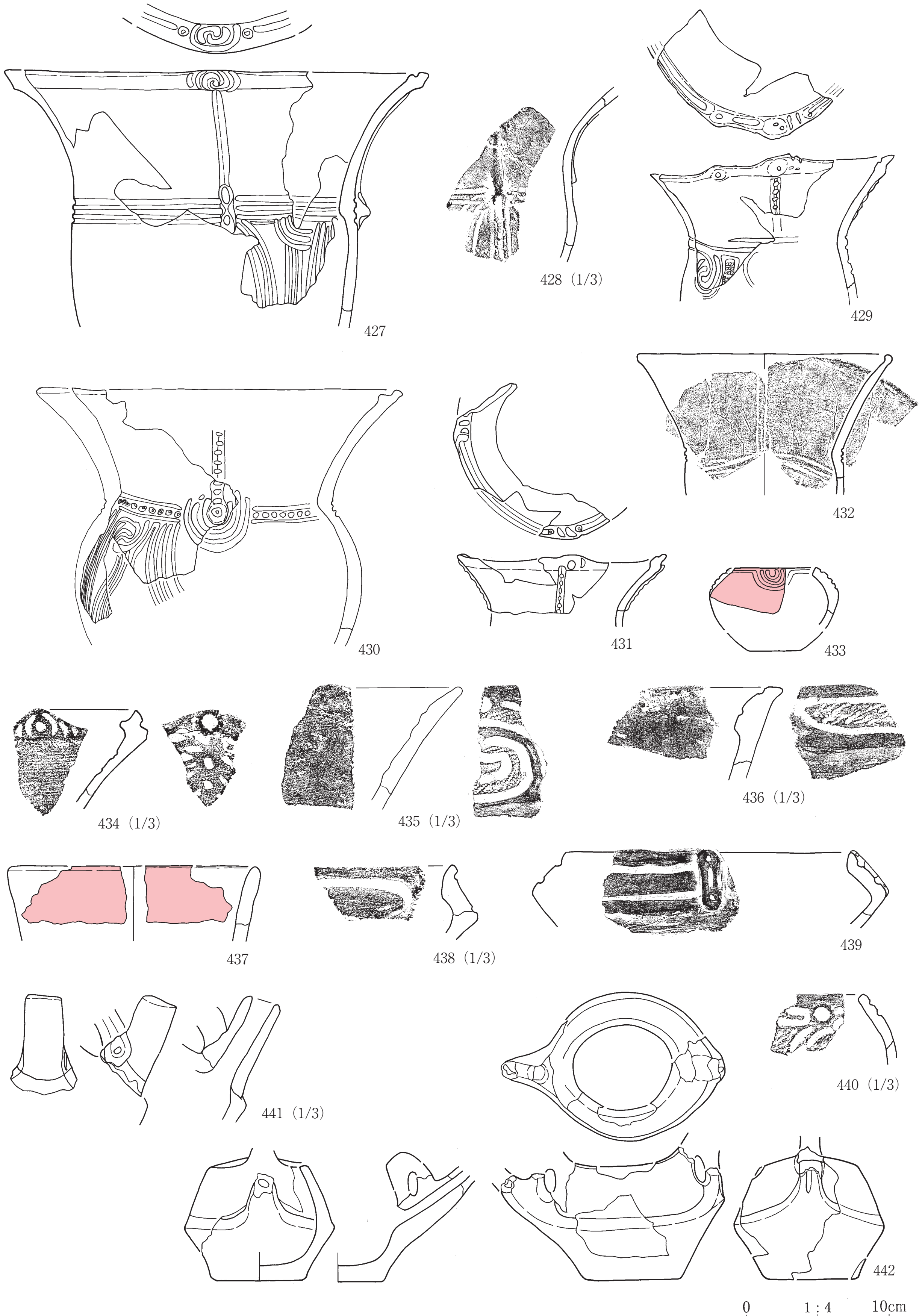

418（1/3）

0　1：4　10cm

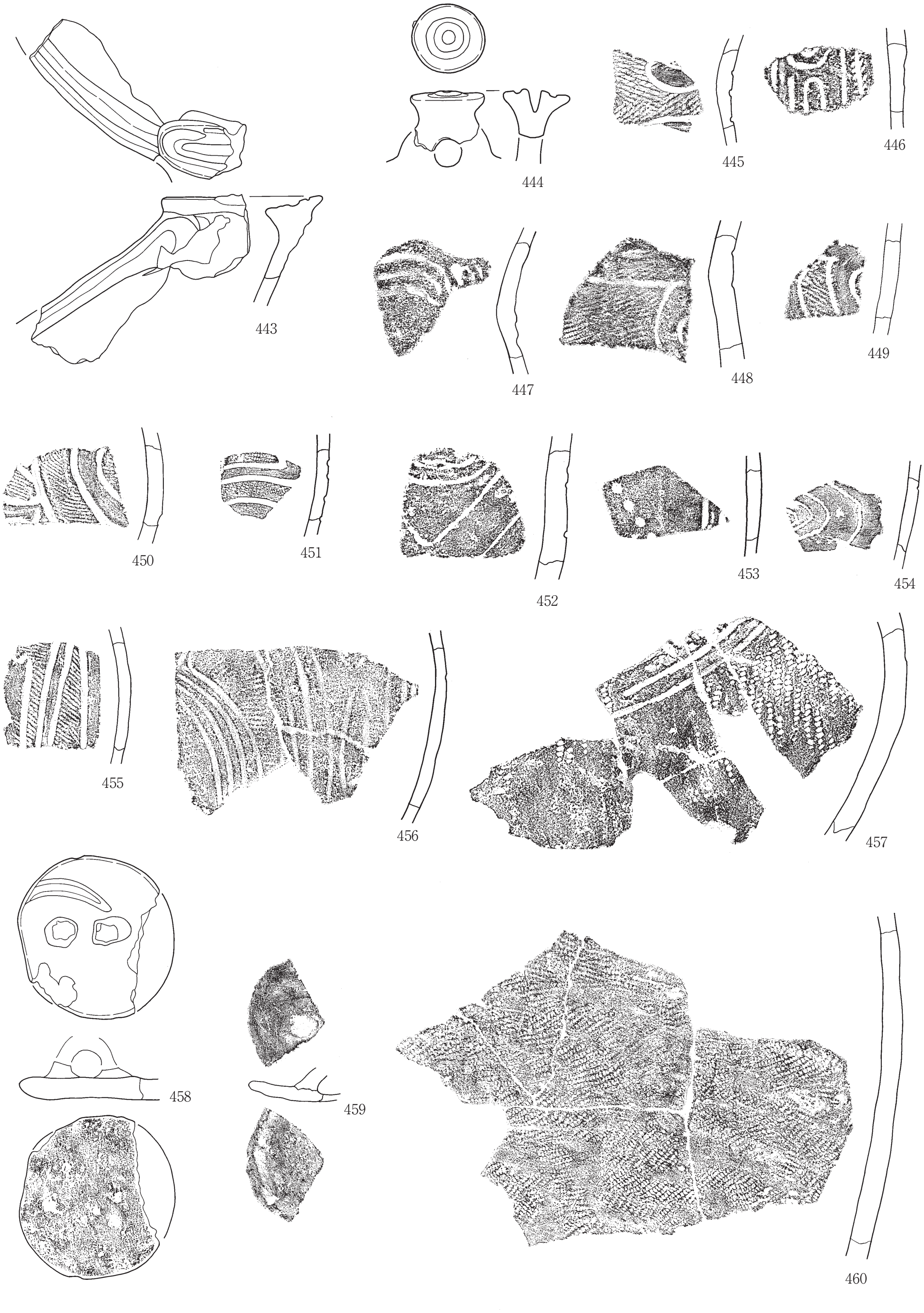
第77図　18区４号列石出土土器（32）



第78図　18区４号列石出土土器（33）



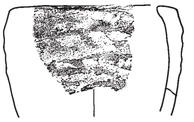
第79図　18区４号列石出土土器（34）

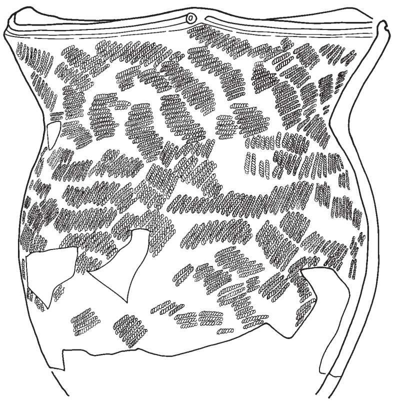


第80図　18区４号列石出土土器（35）

0　1：3　10cm

461


462

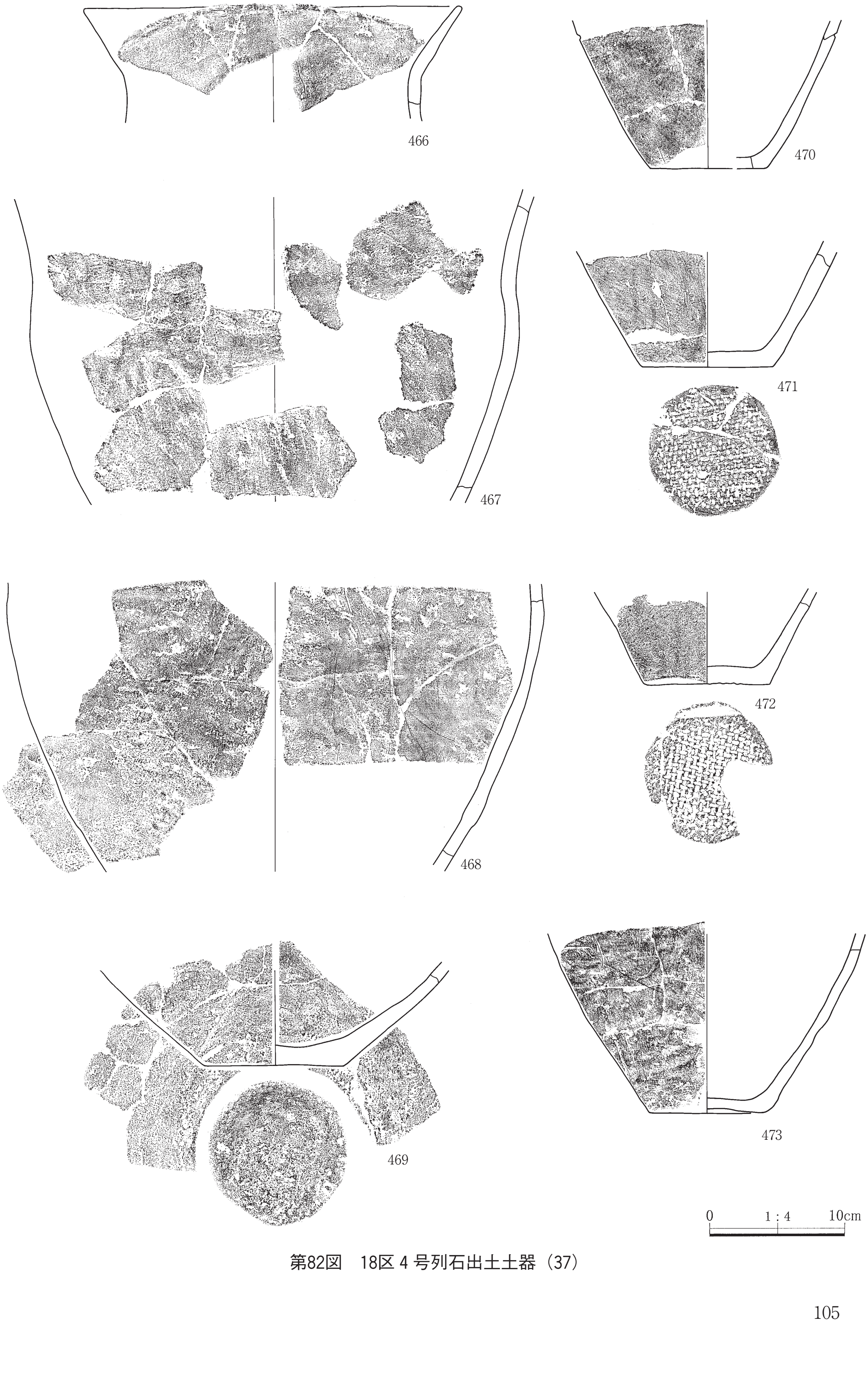

463

464

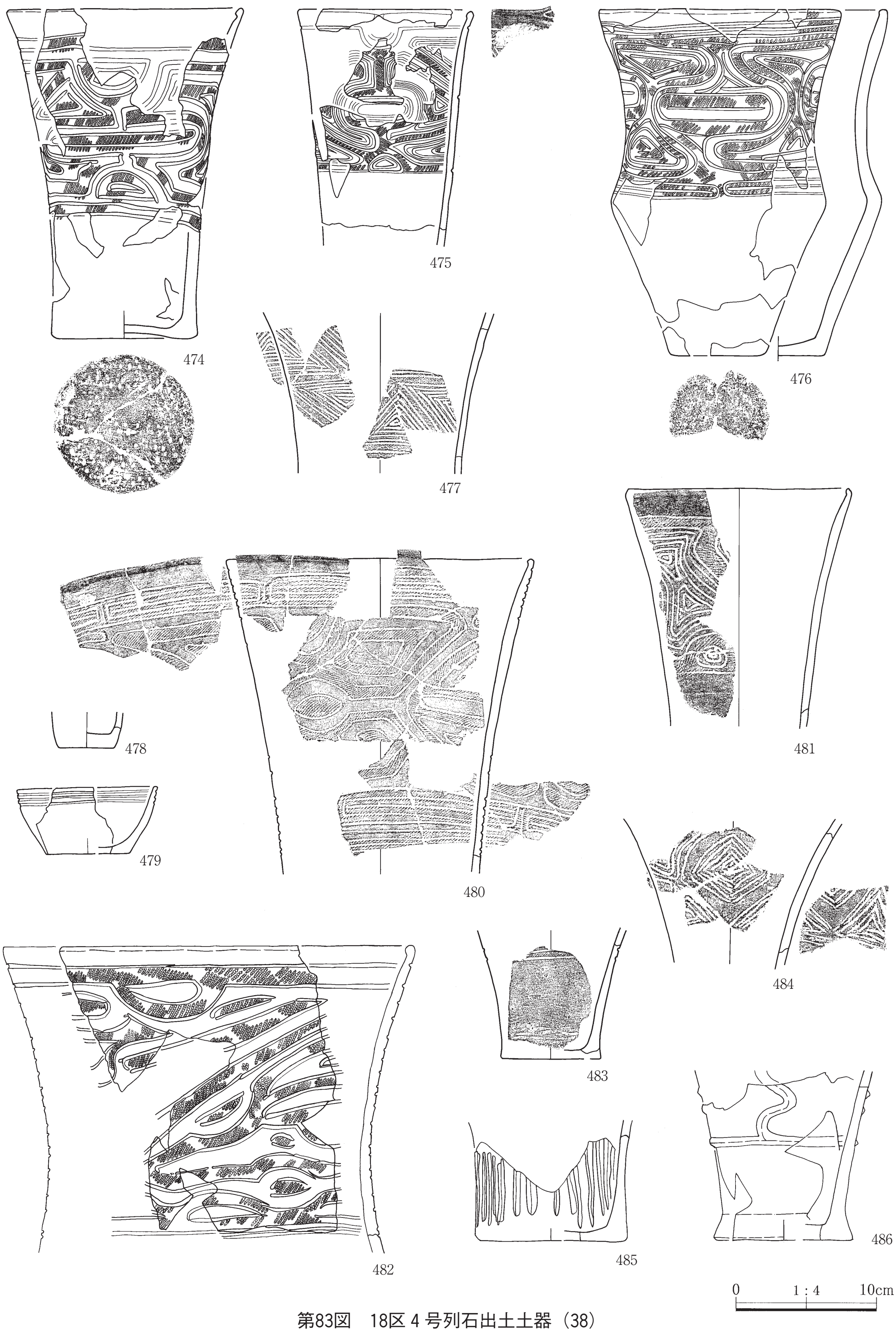
465

0　1：4　10cm

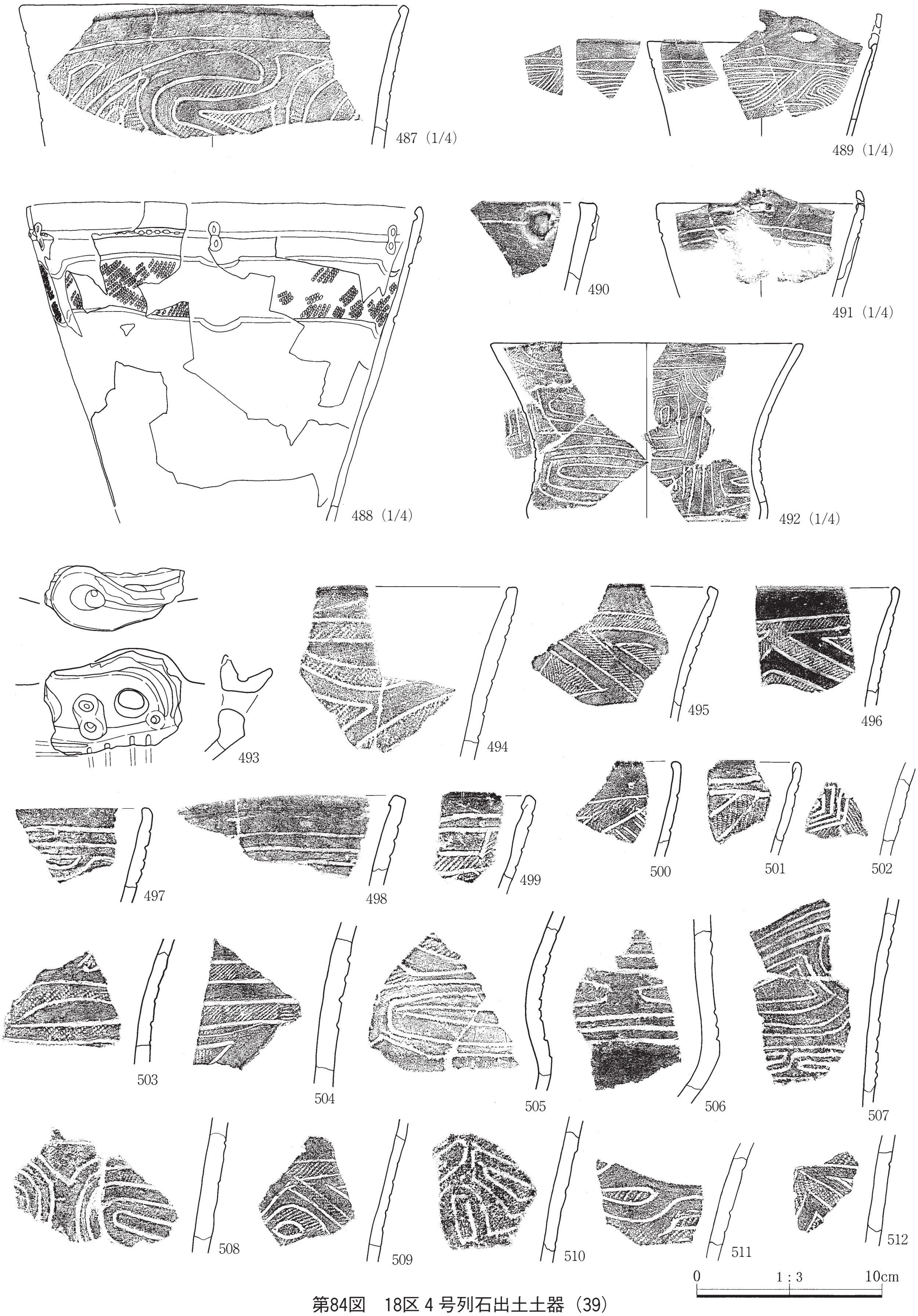
第81図　18区４号列石出土土器（36）



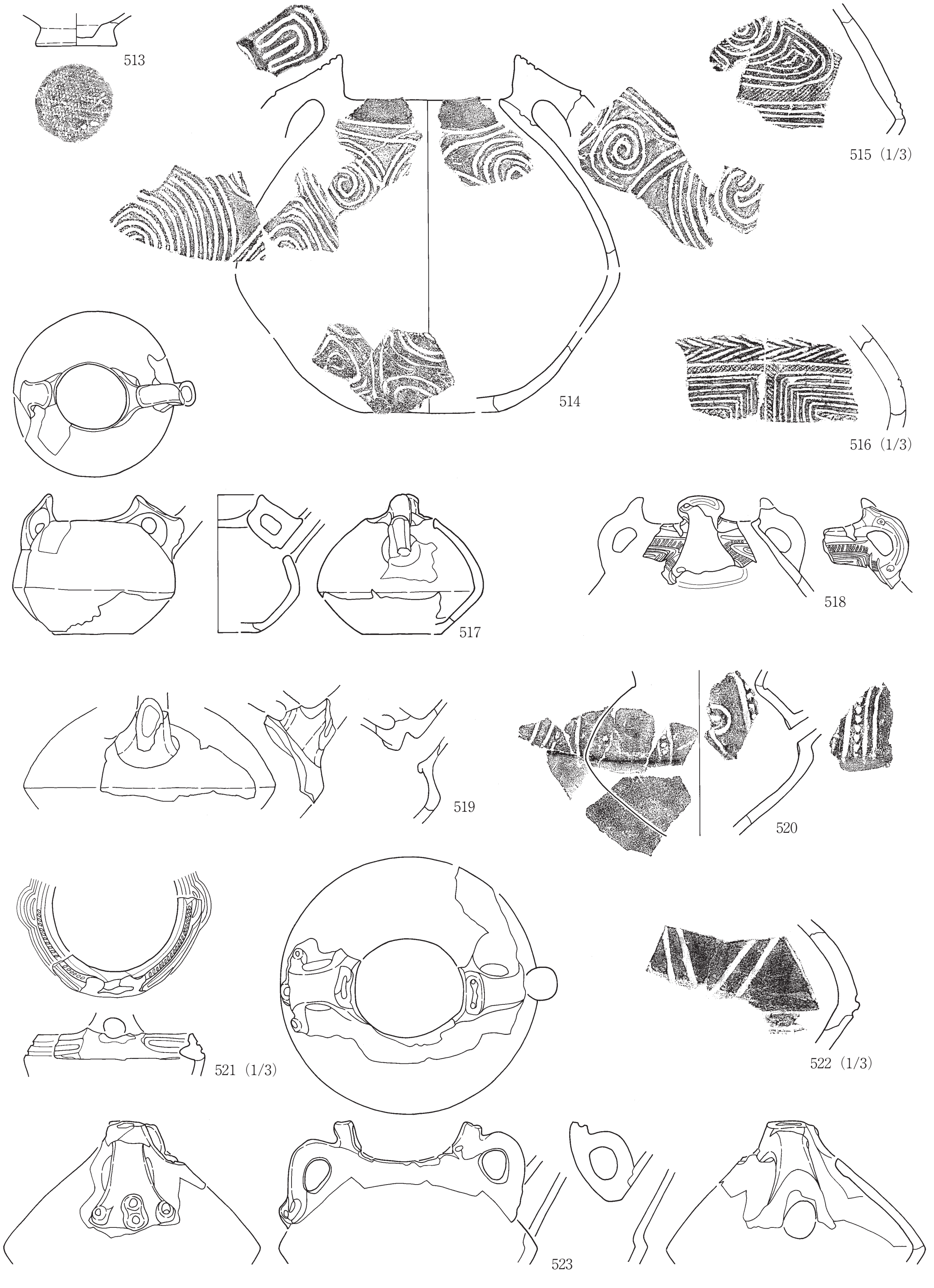
第82図　18区４号列石出土土器（37）



第83図　18区４号列石出土土器（38）

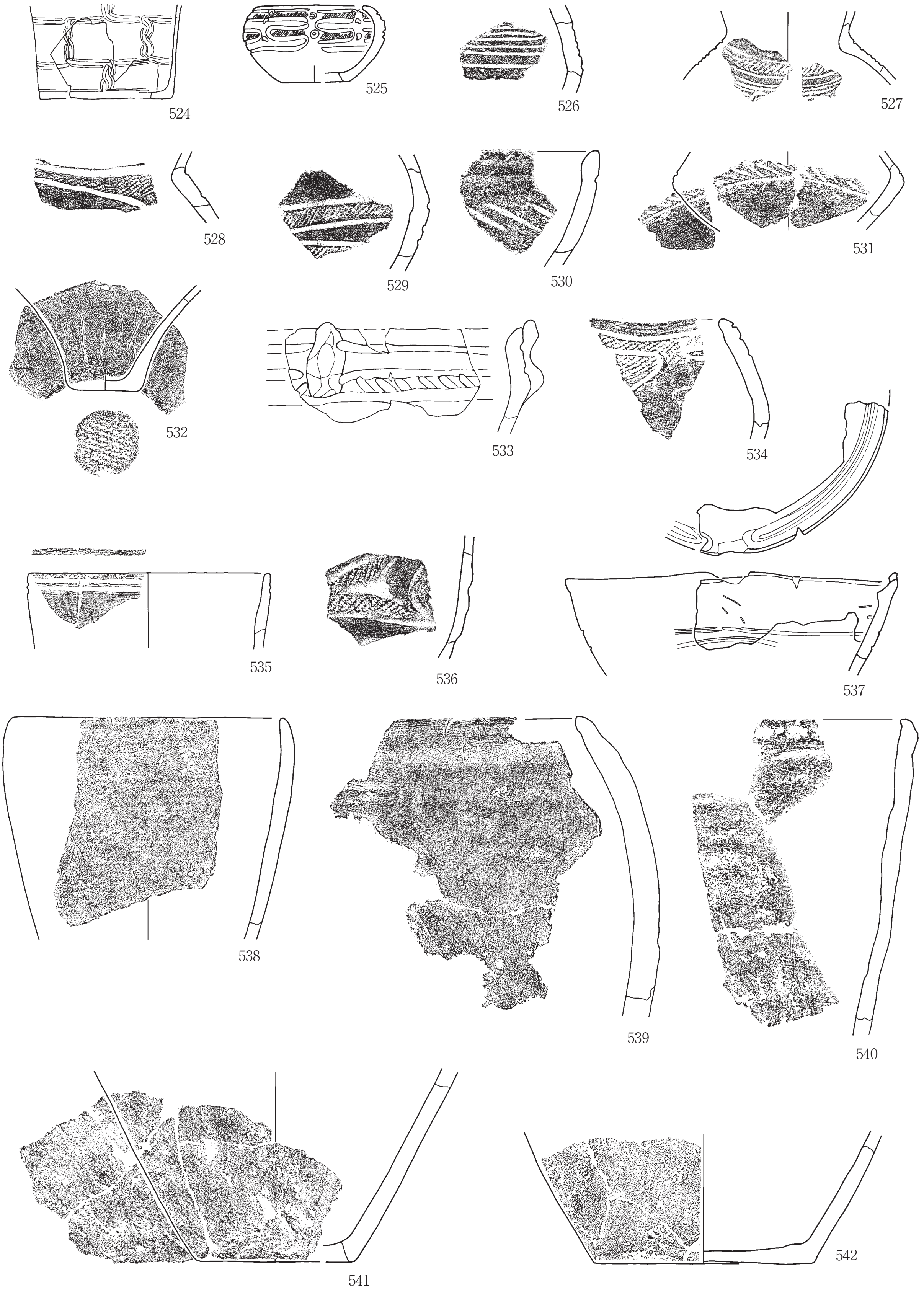


第84図　18区４号列石出土土器（39）



第85図　18区４号列石出土土器（40）

0　1：4　10cm

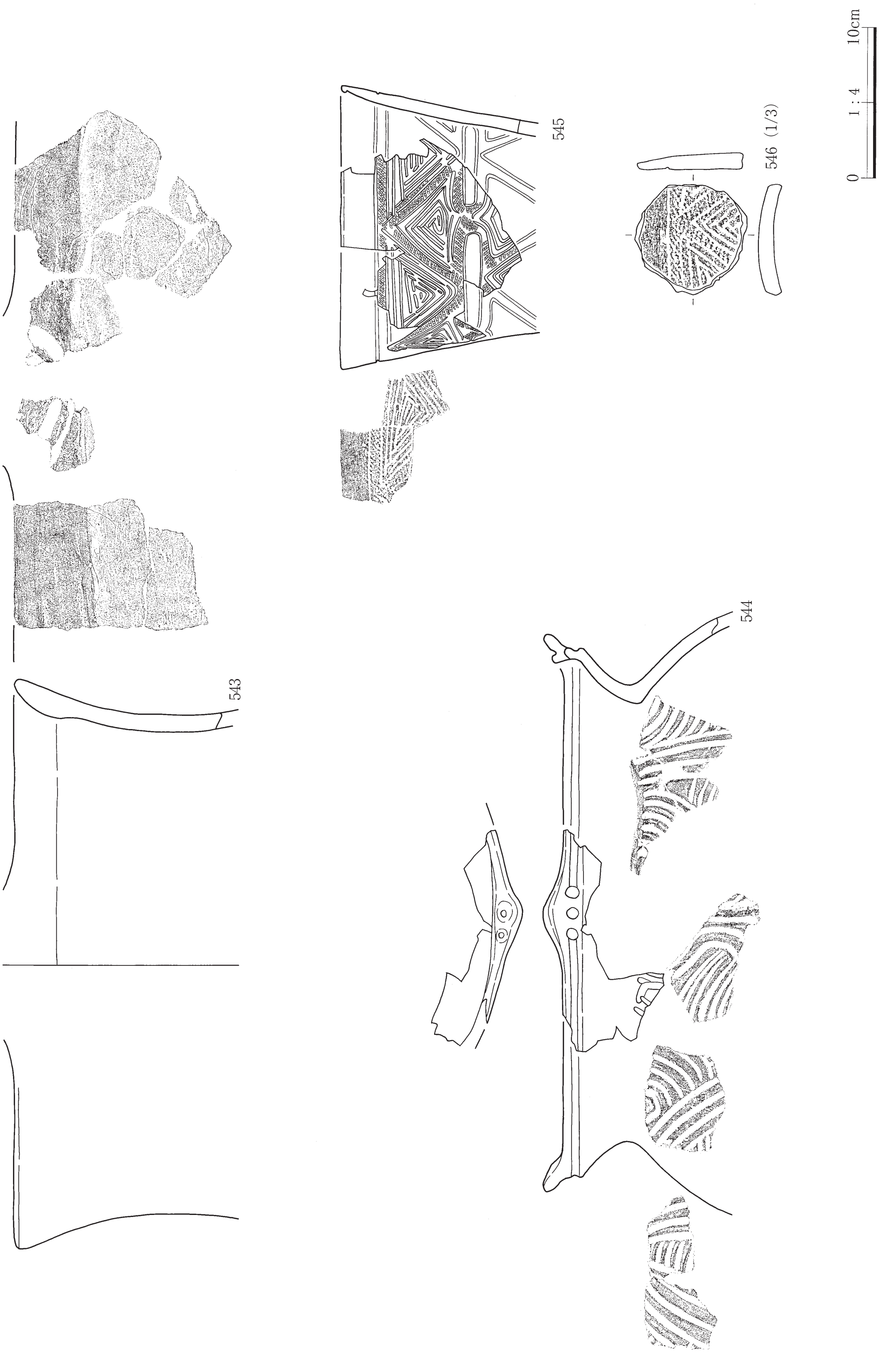


526・528～530・533・534・536・539・540

0　1：4　10cm

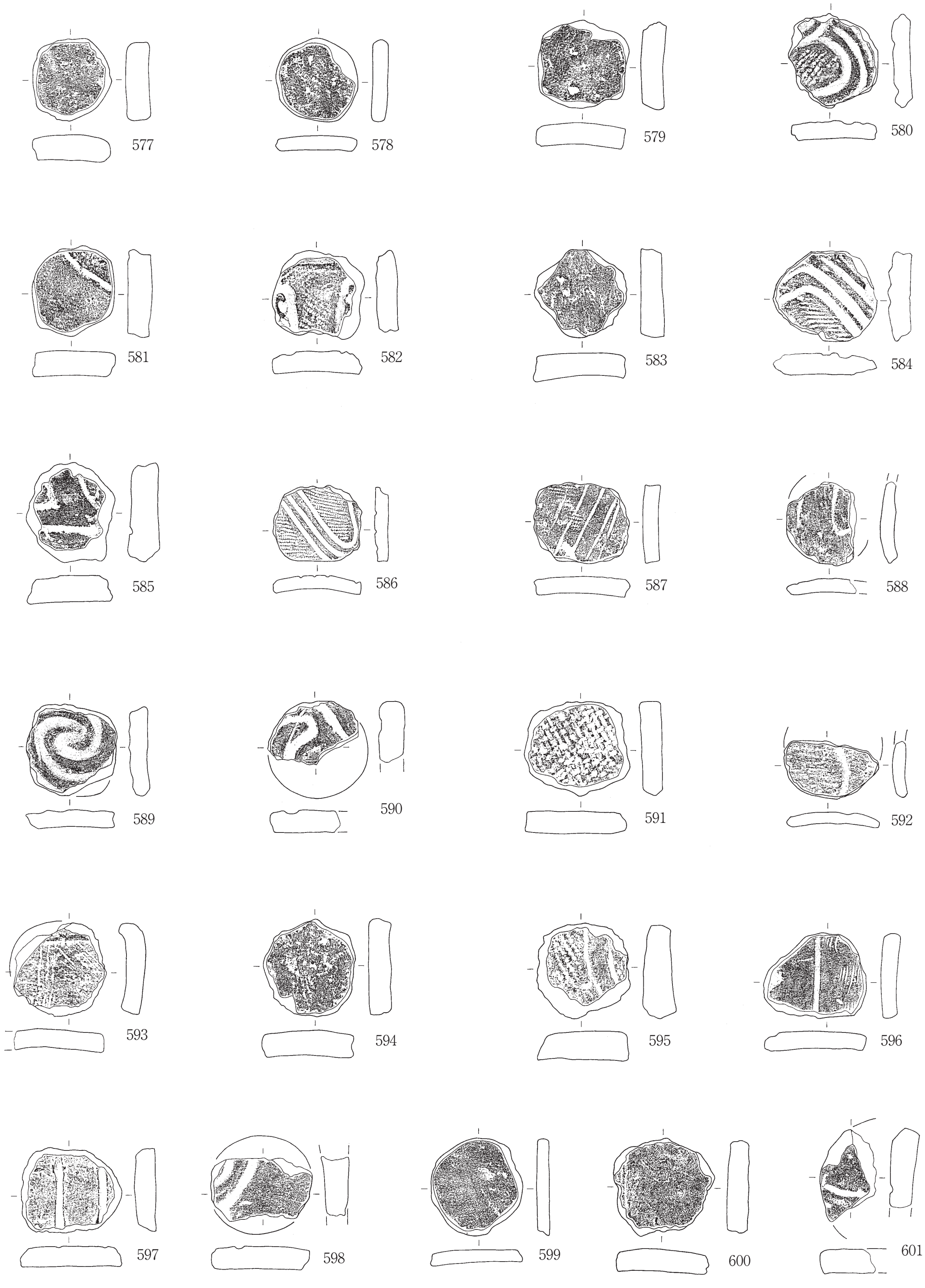
0　1：3　10cm

第86図　18区４号列石出土土器（41）



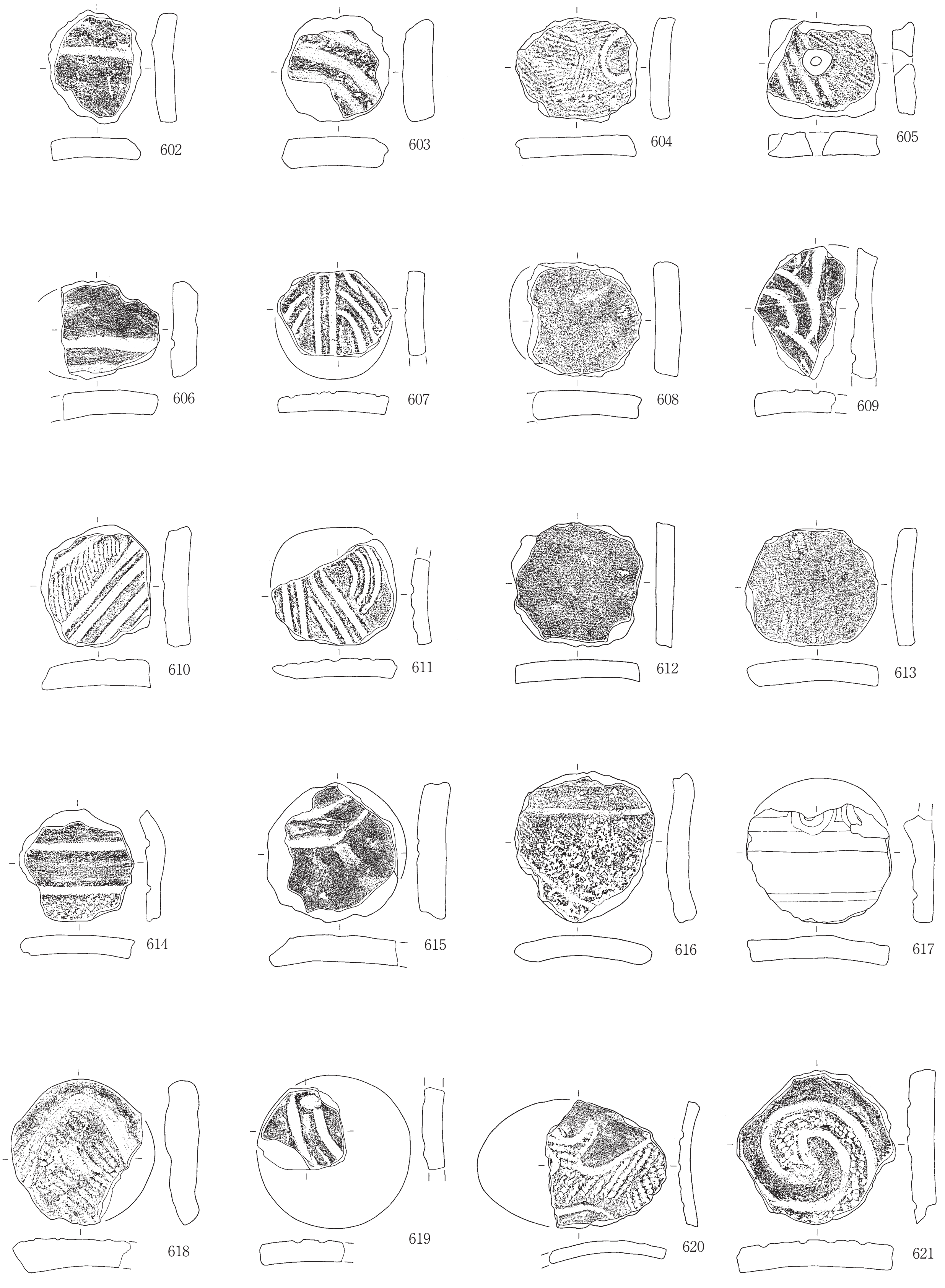
第87図　18区４号列石出土土器（42）

第88図　18区４号列石出土土器（43）



第89図　18区４号列石出土土器（44）

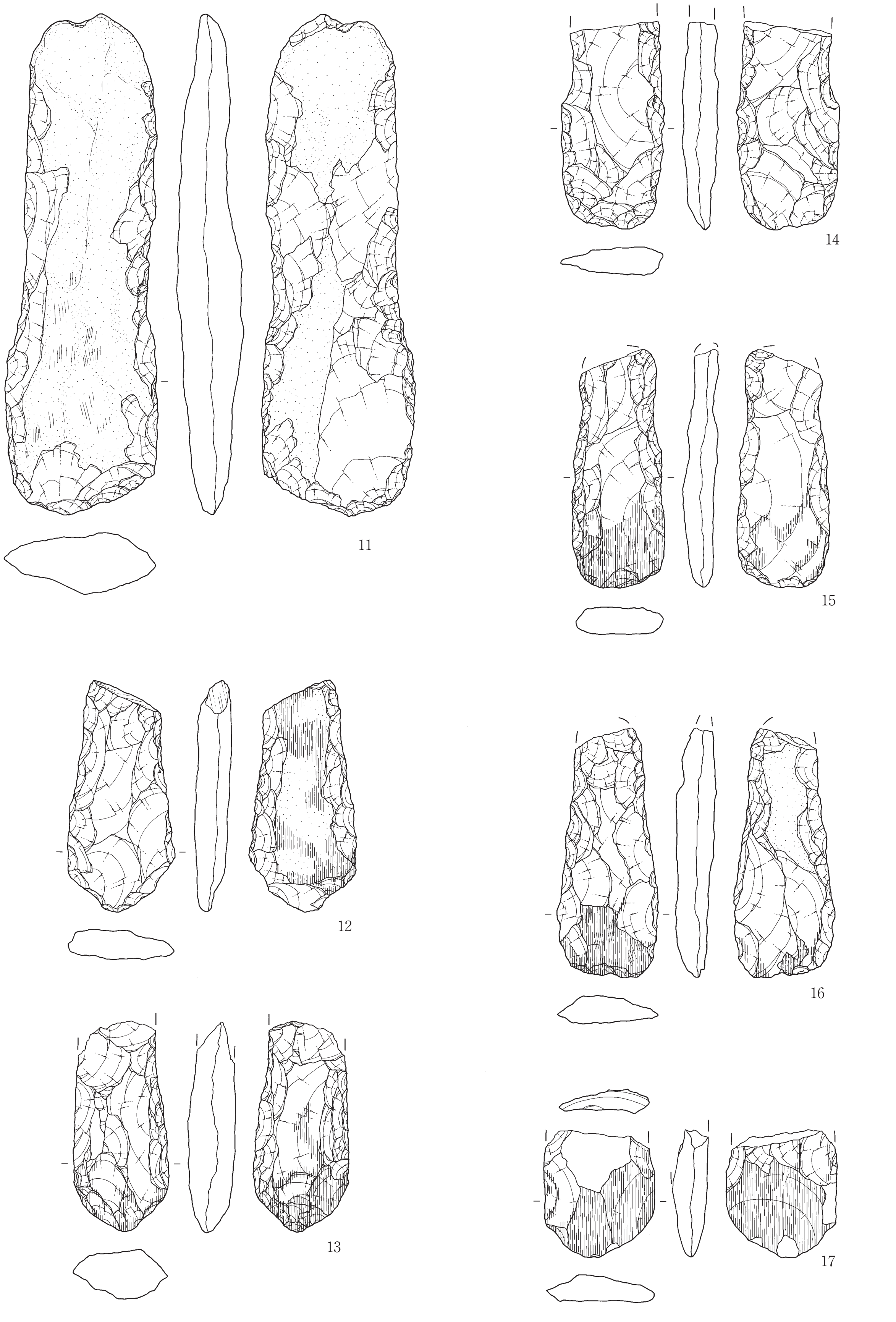
0　1：3　10cm



0　1：3　10cm

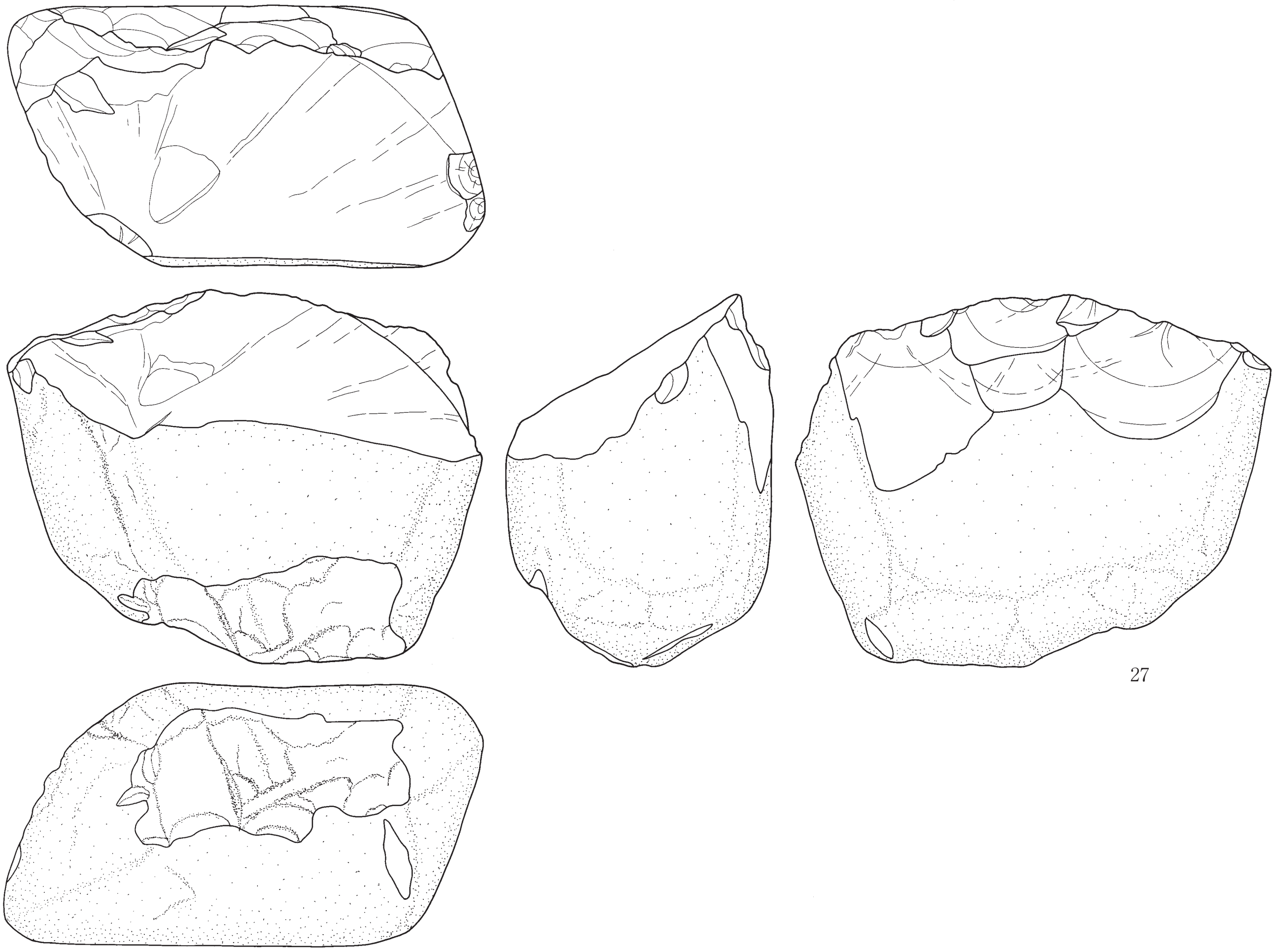
第90図　18区４号列石出土土器（45）

第91図　18区４号列石出土石器（１）

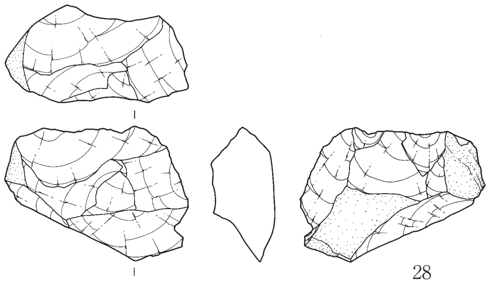


第92図　18区４号列石出土石器（２）

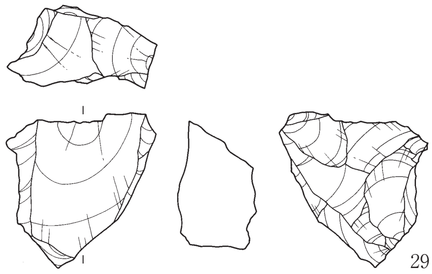
第93図　18区４号列石出土石器（３）



27



28

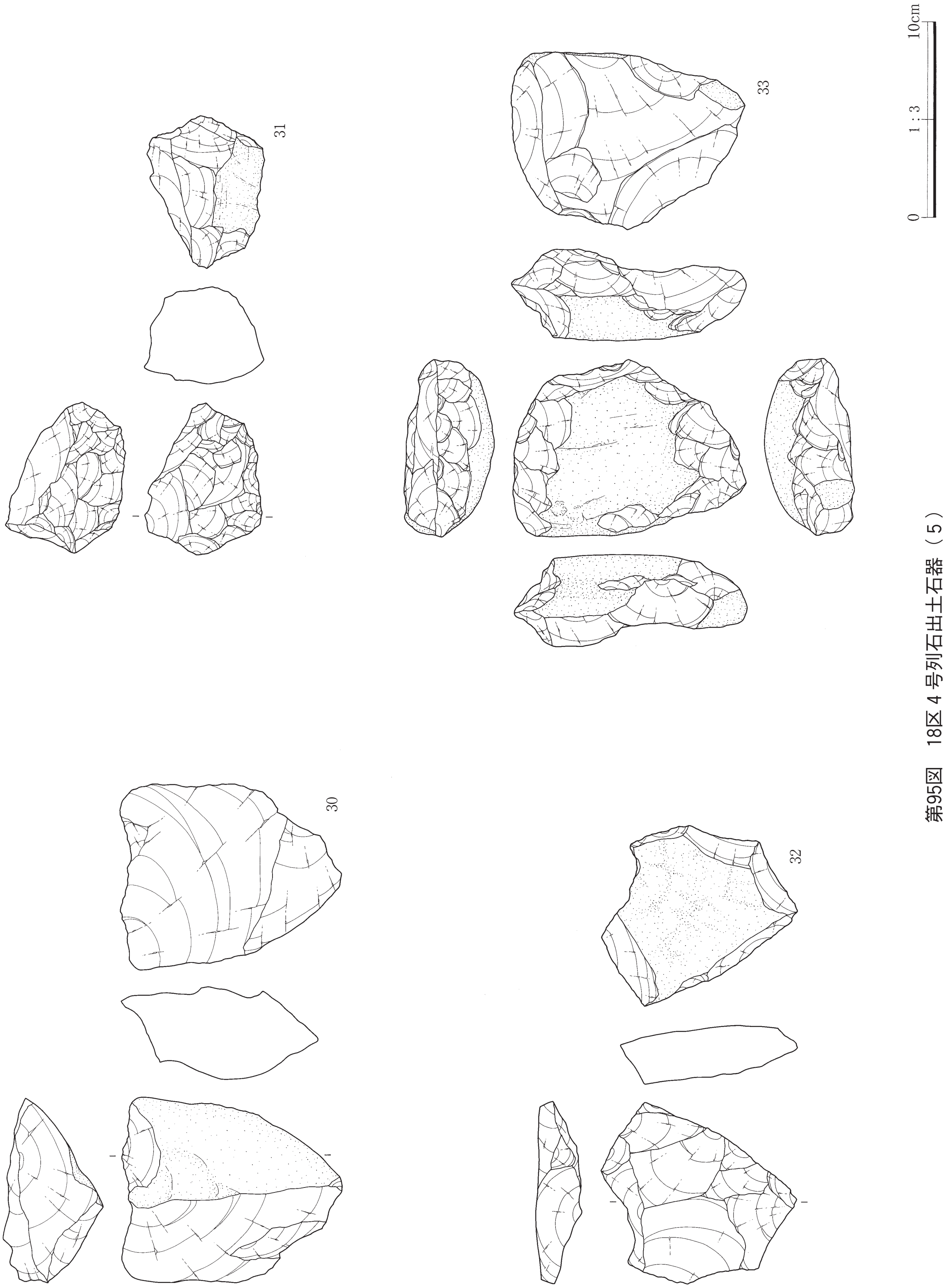


29

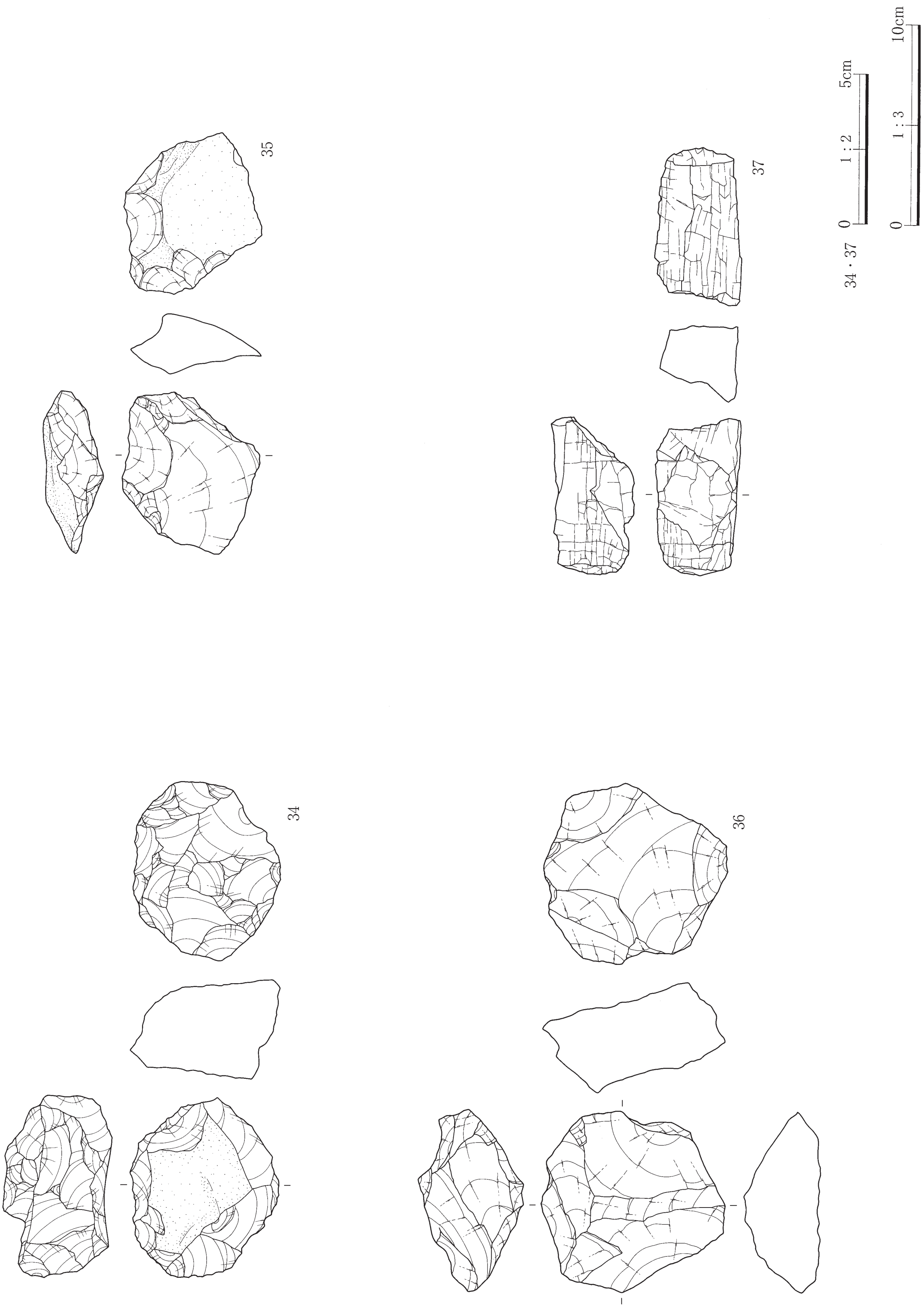
29　0　1：2　5cm

0　1：3　10cm

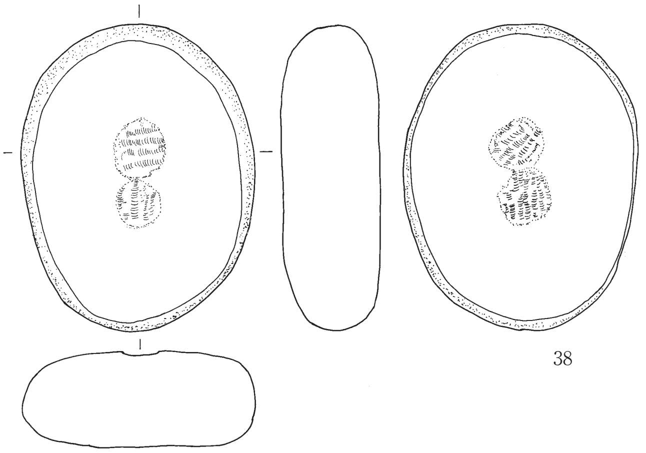
第94図　18区４号列石出土石器（４）

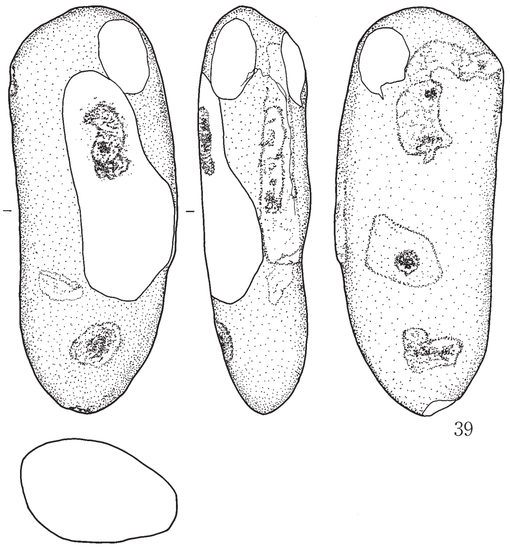


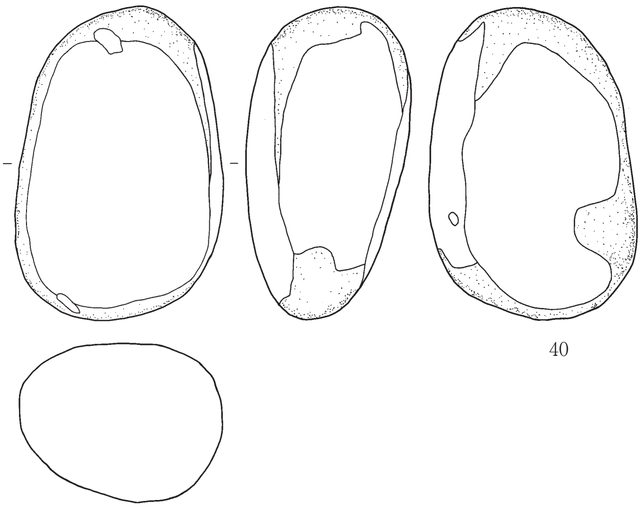
第95図　18区４号列石出土石器（５）

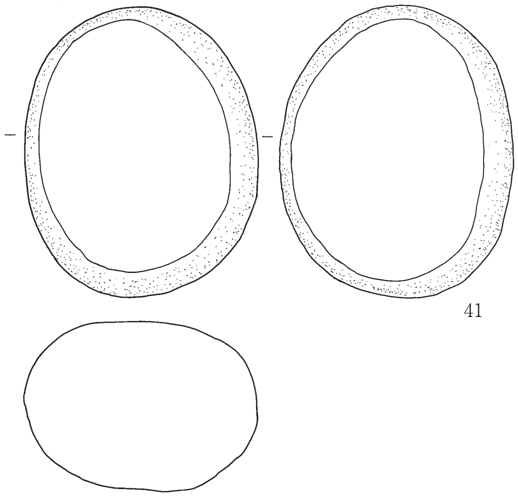


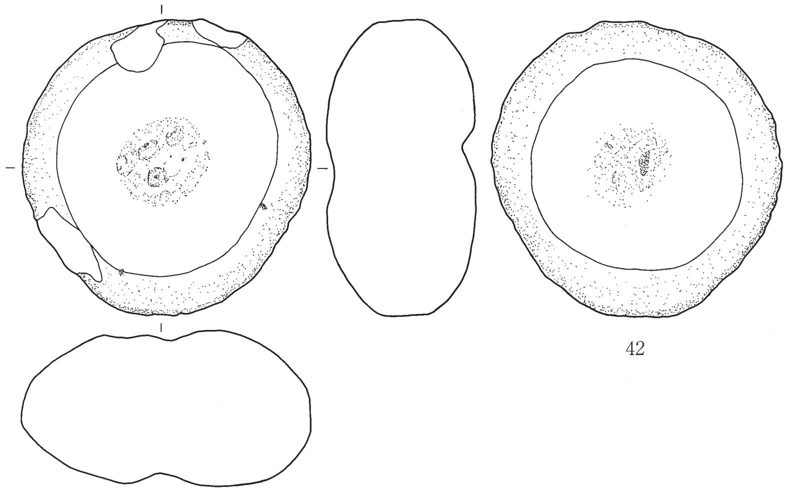
第96図　18区４号列石出土石器（６）

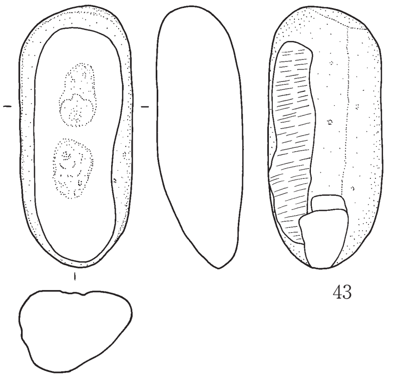

38


39


40


41

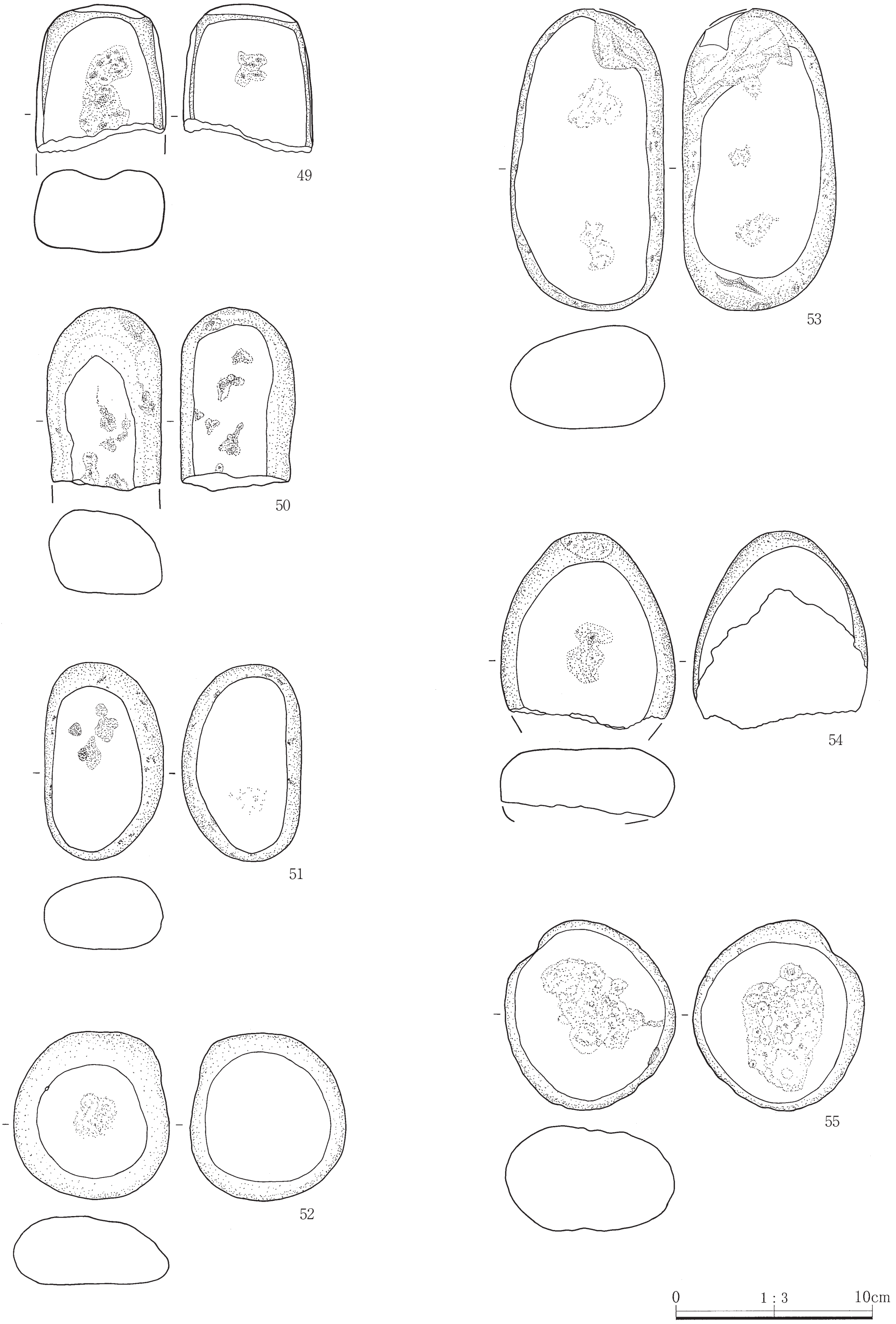

42


43

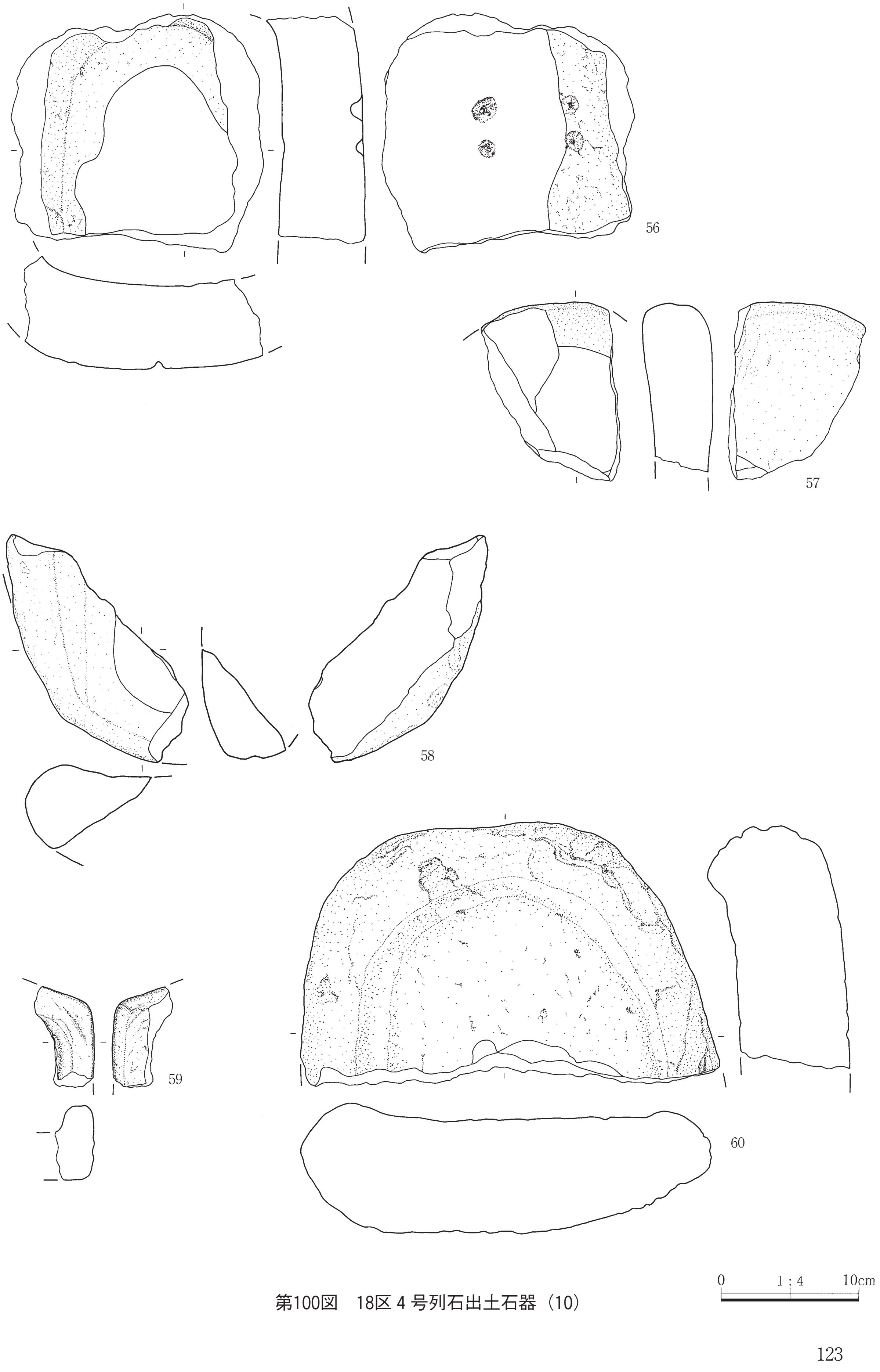
0　1：3　10cm

第97図　18区４号列石出土石器（７）

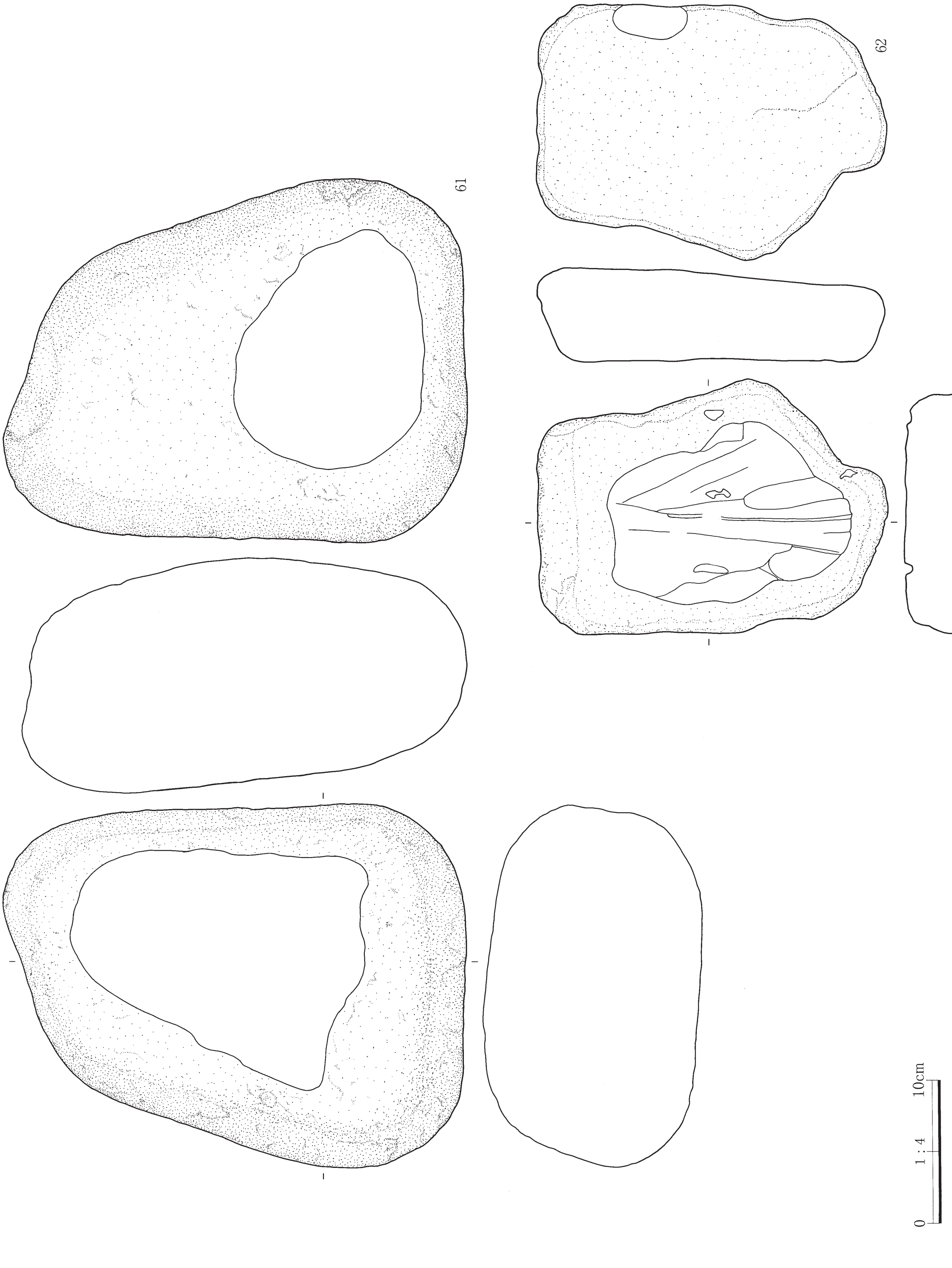
第98図　18区４号列石出土石器（８）



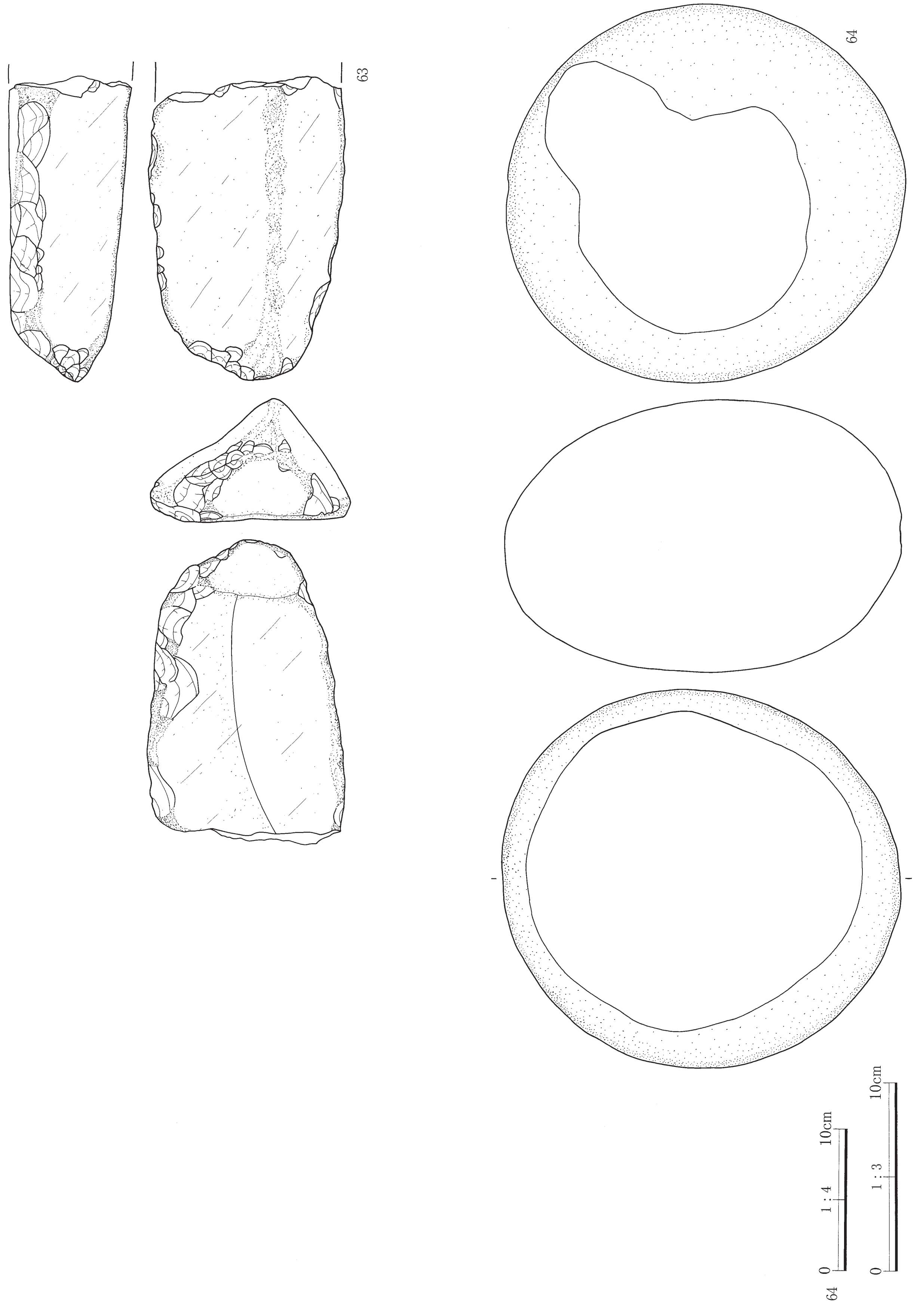
第99図　18区４号列石出土石器（９）



第100図　18区４号列石出土石器（10）

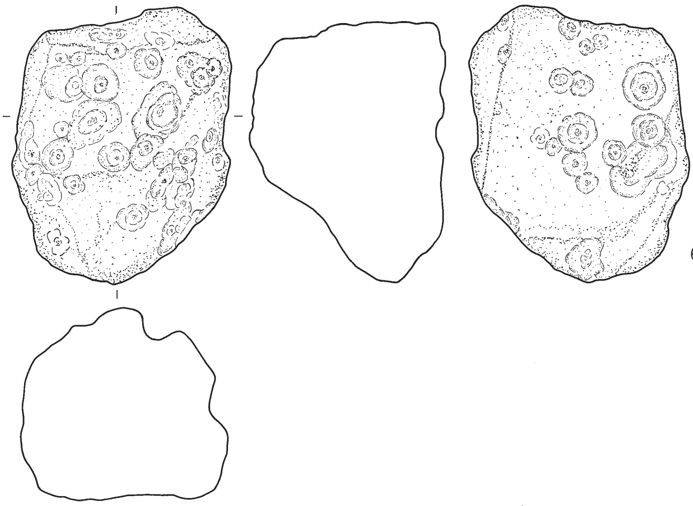


第101図　18区４号列石出土石器（11）

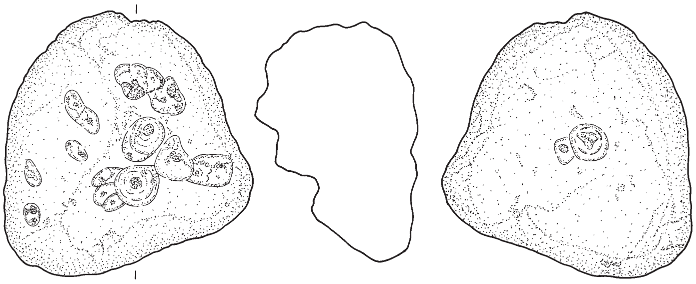


第102図　18区４号列石出土石器（12）

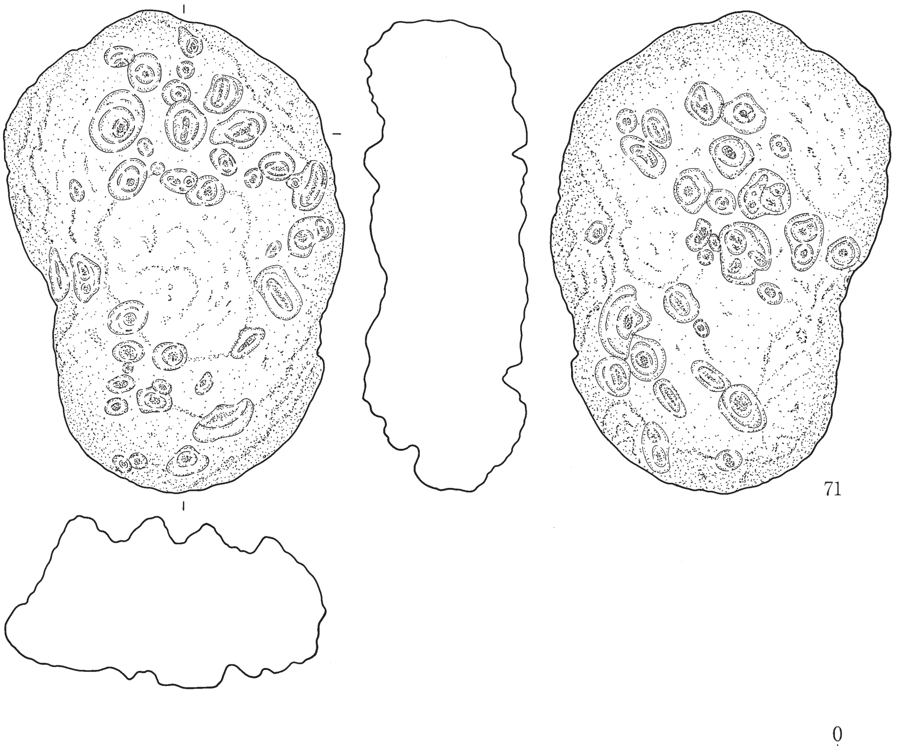
第103図　18区４号列石出土石器（13）



69



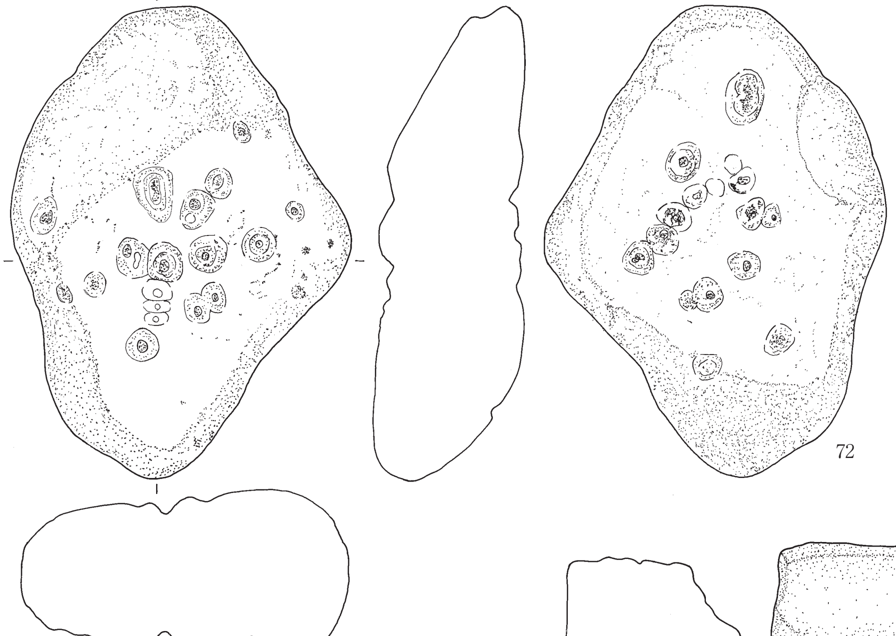
70



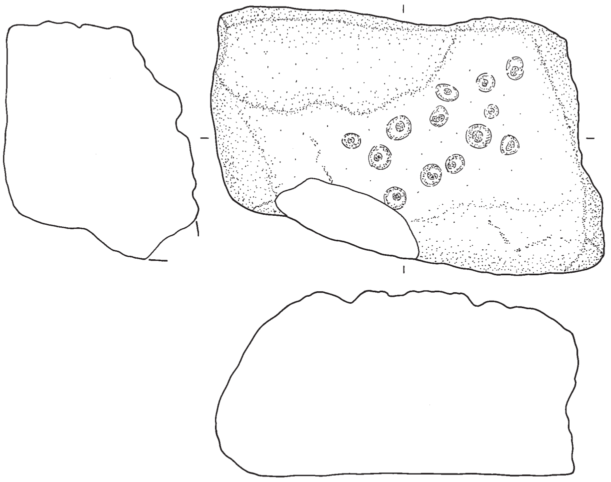
71

0　1：4　10cm

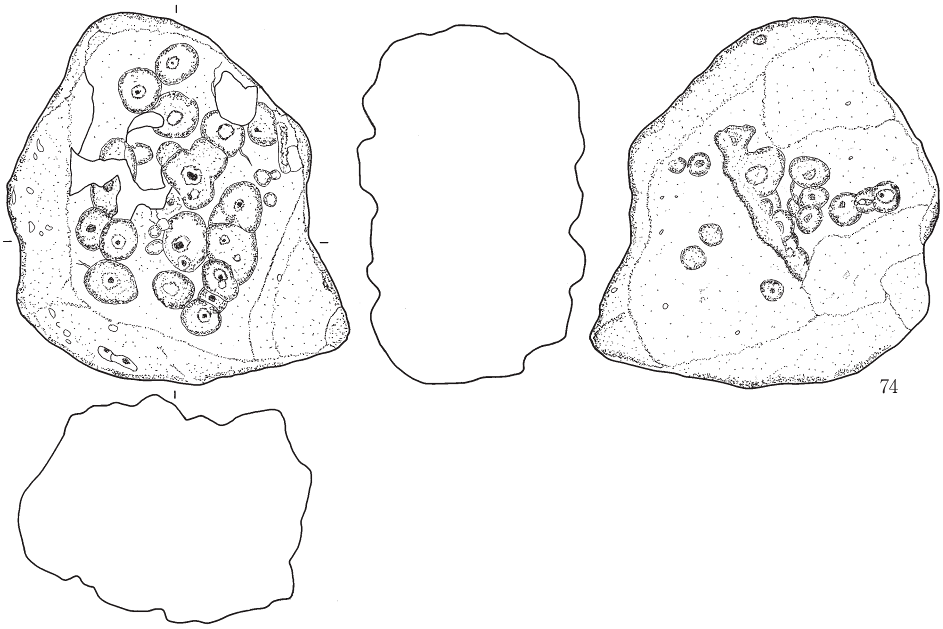
第104図　18区４号列石出土石器（14）



72



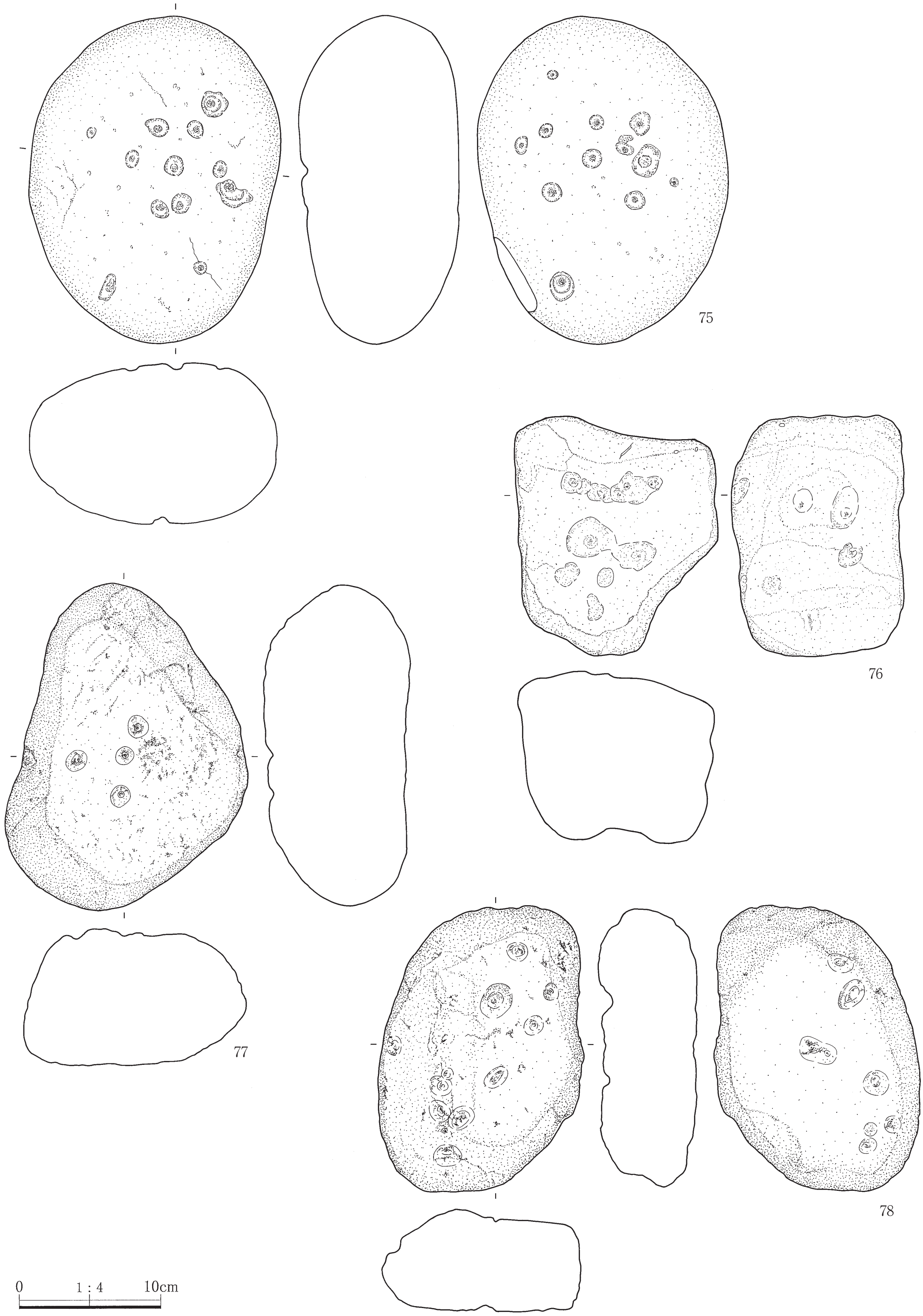
73



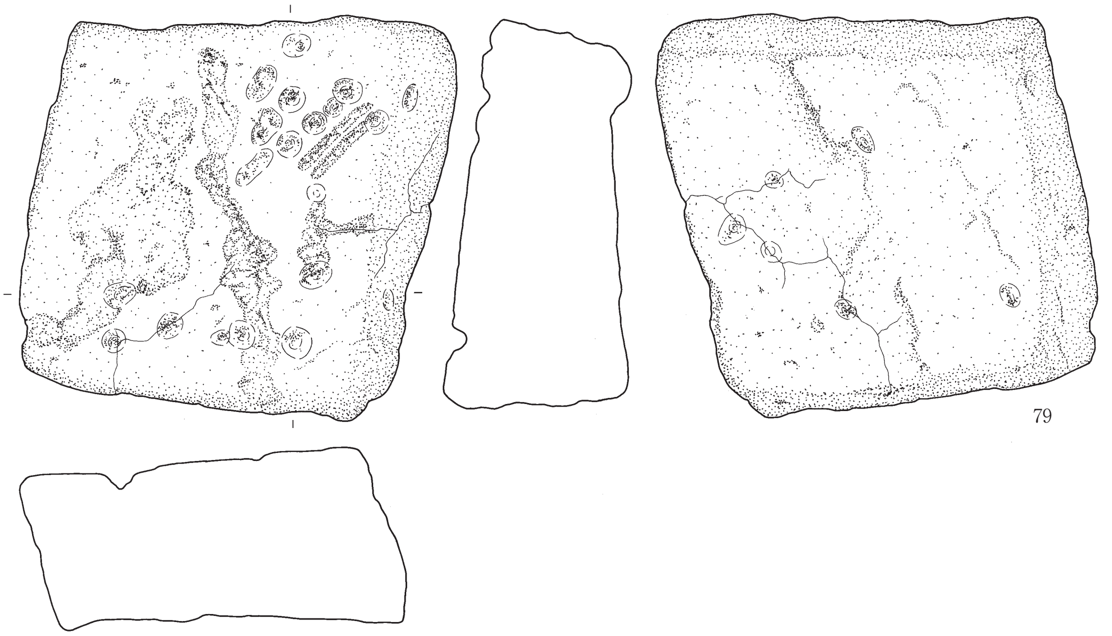
74

0　1：4　10cm

第105図　18区4号列石出土石器（15）



第106図　18区４号列石出土石器（16）

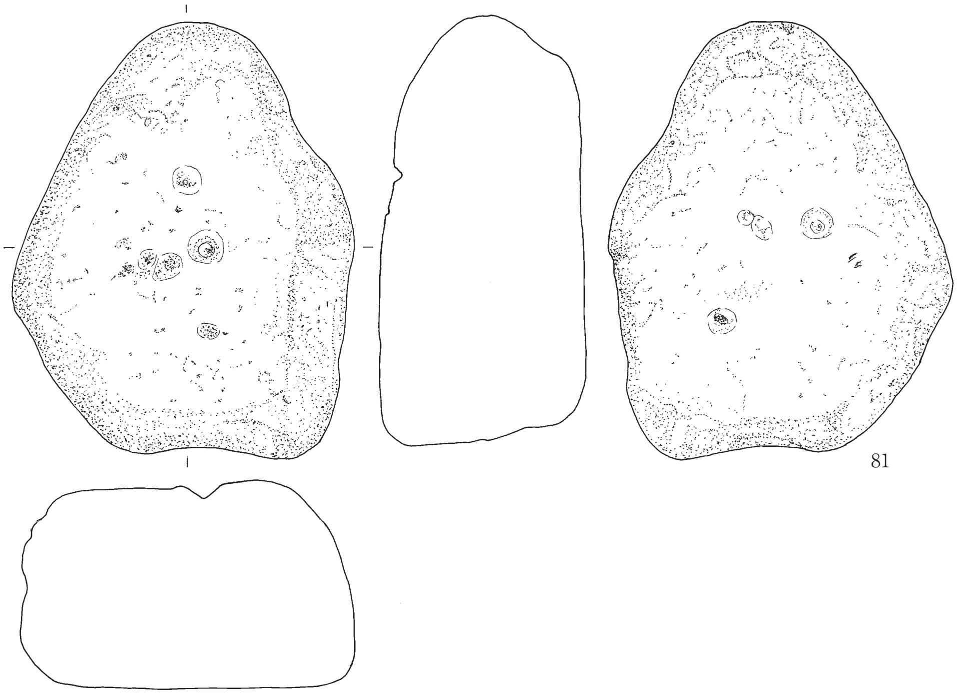


79

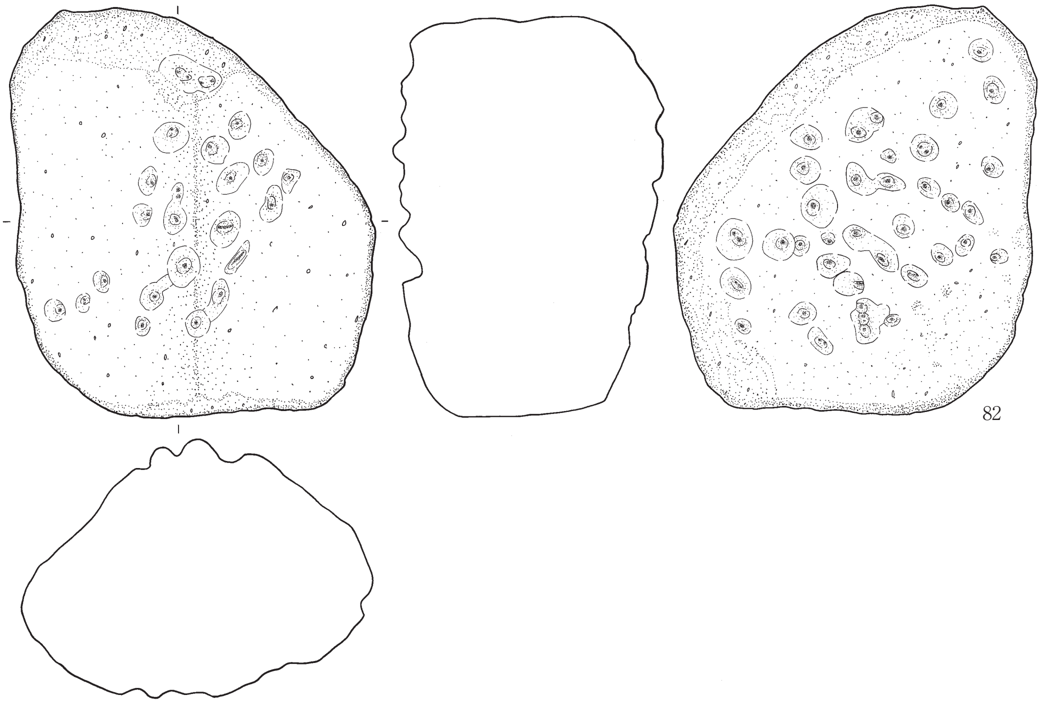
80

0　1：4　10cm

第107図　18区４号列石出土石器（17）



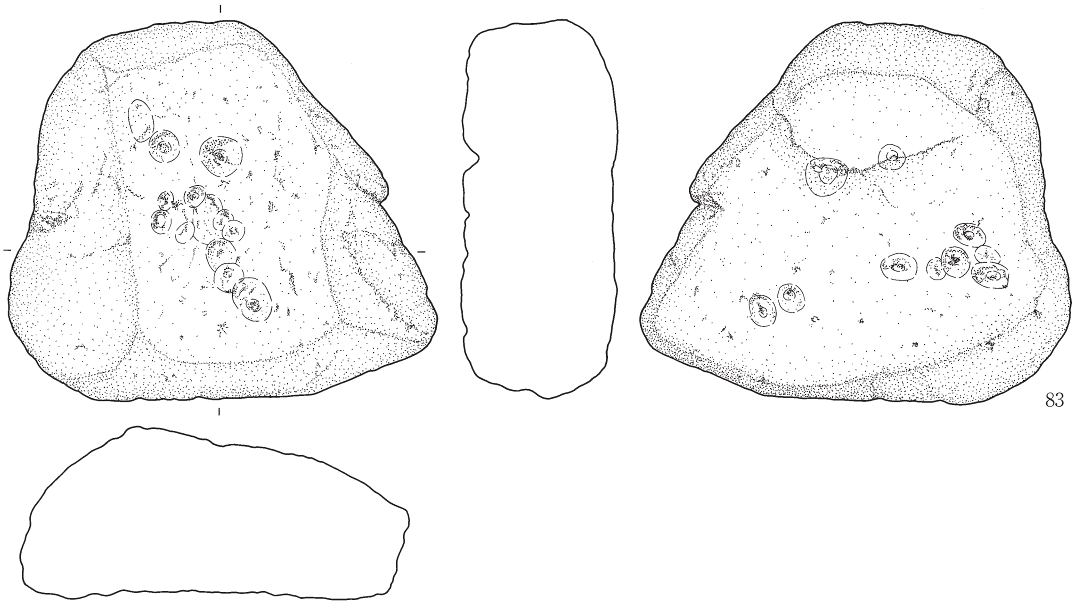
81



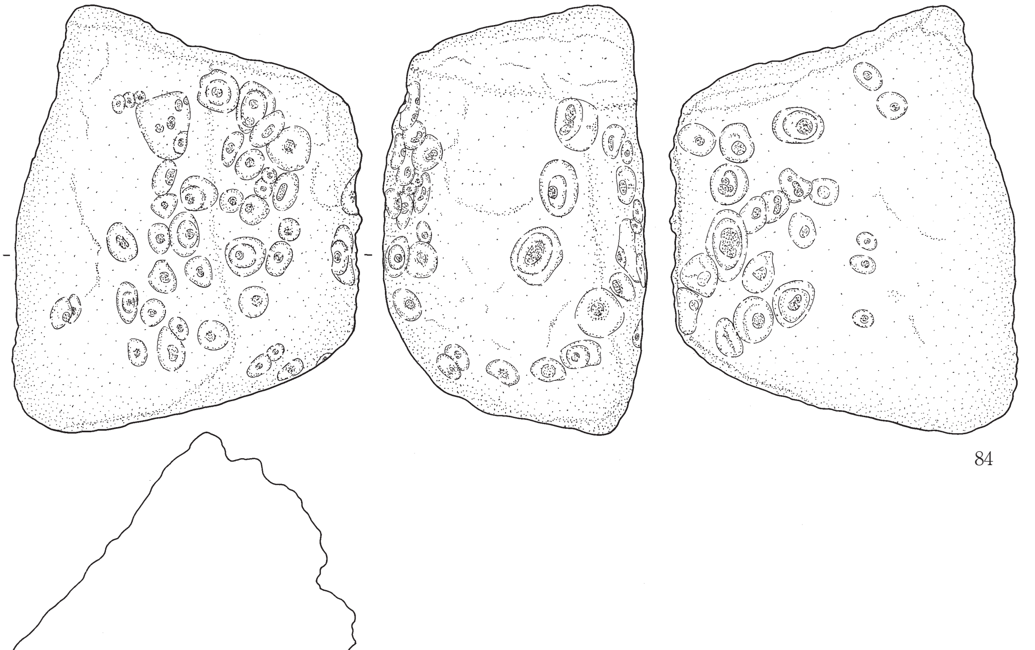
82

0　1：4　10cm

第108図　18区４号列石出土石器（18）



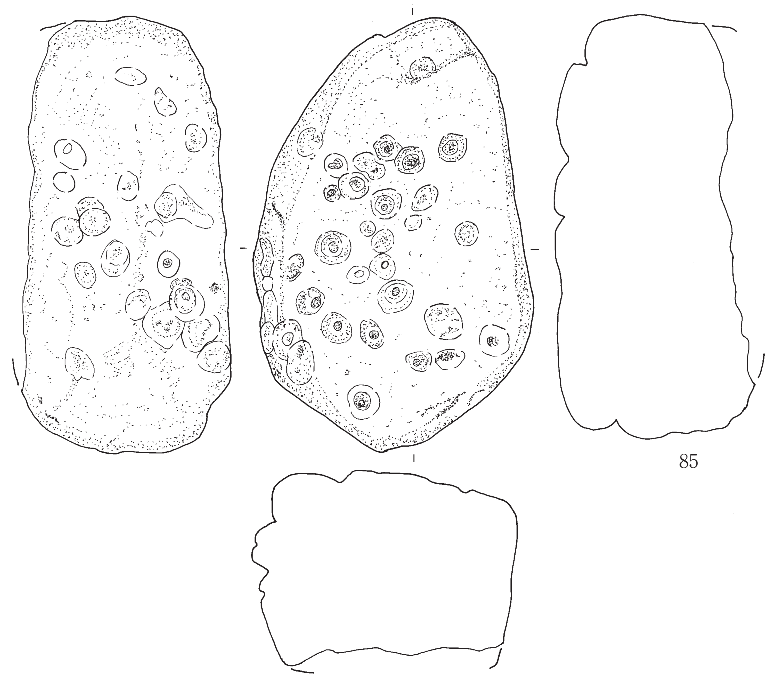
83



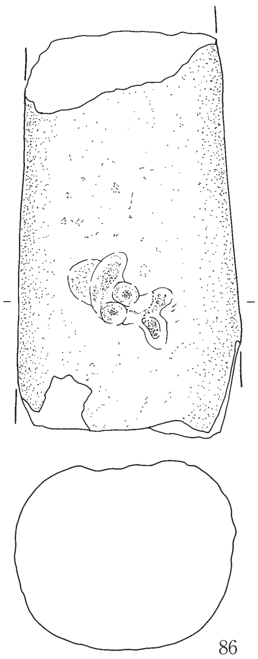
84

0　1：4　10cm

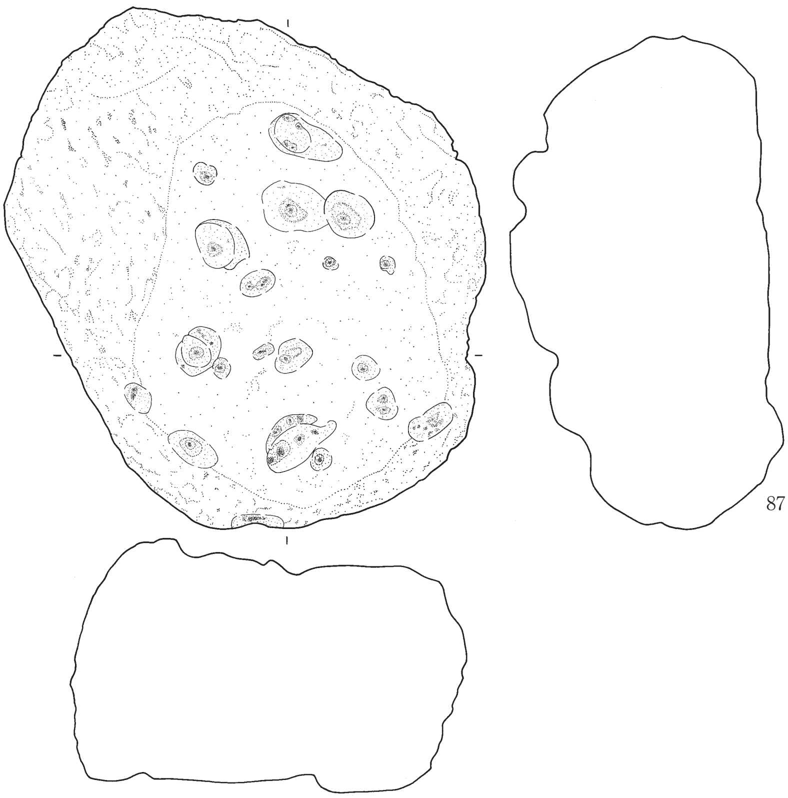
第109図　18区4号列石出土石器（19）



85



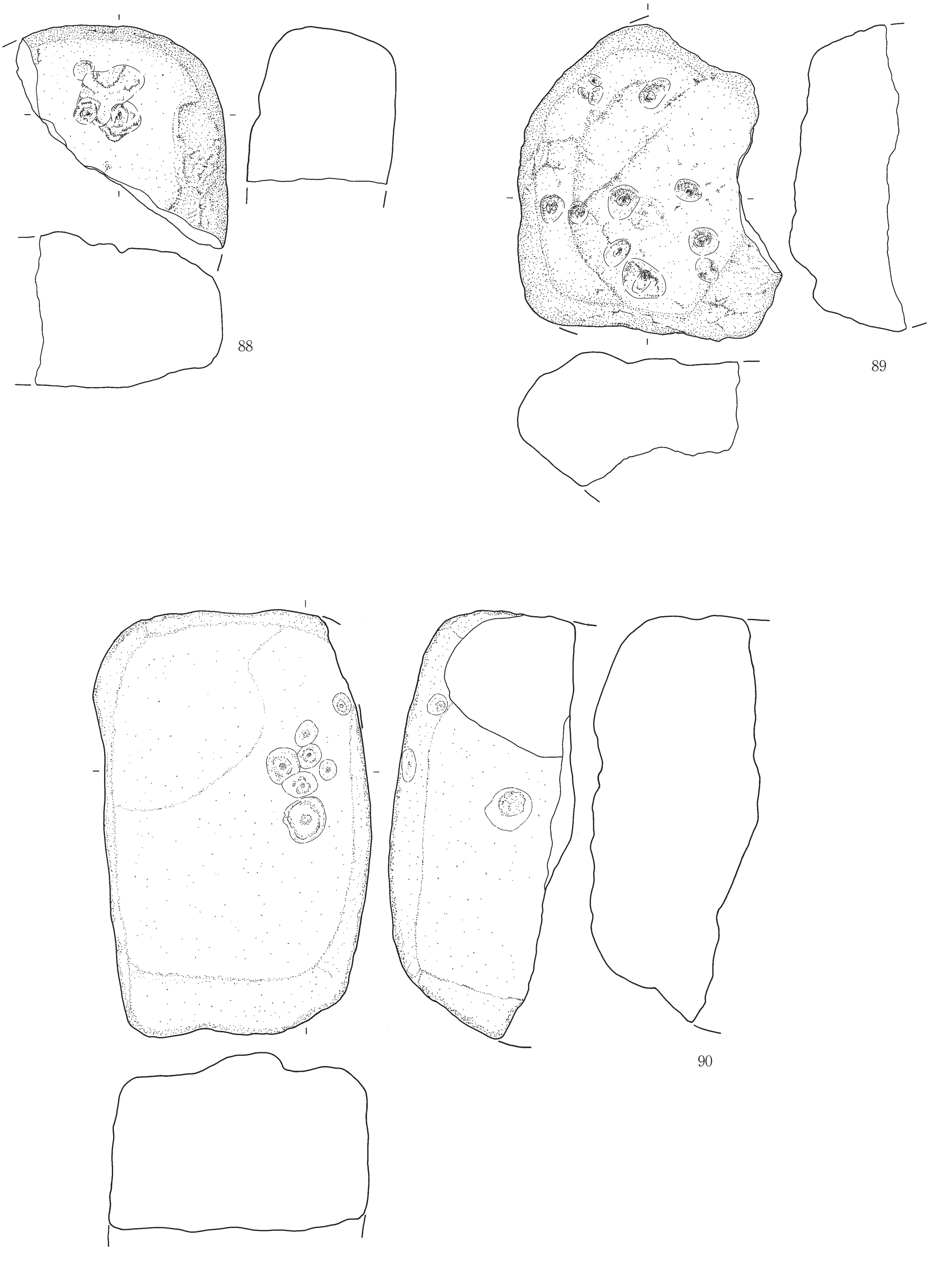
86



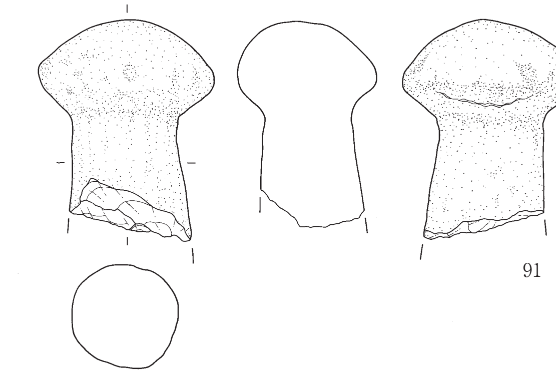
87

0　　1：4　　10cm

第110図　18区４号列石出土石器（20）

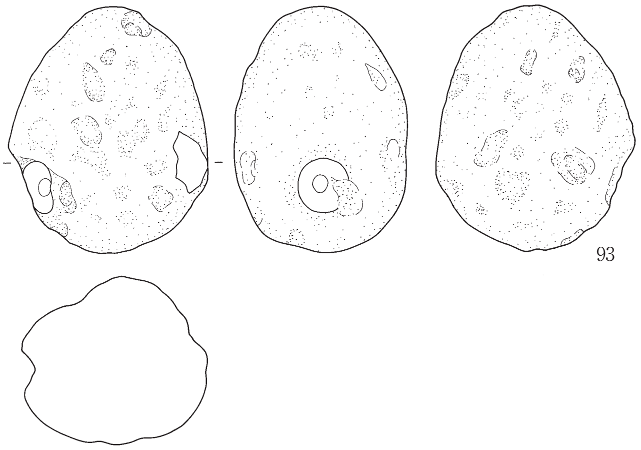


第111図　18区４号列石出土石器（21）

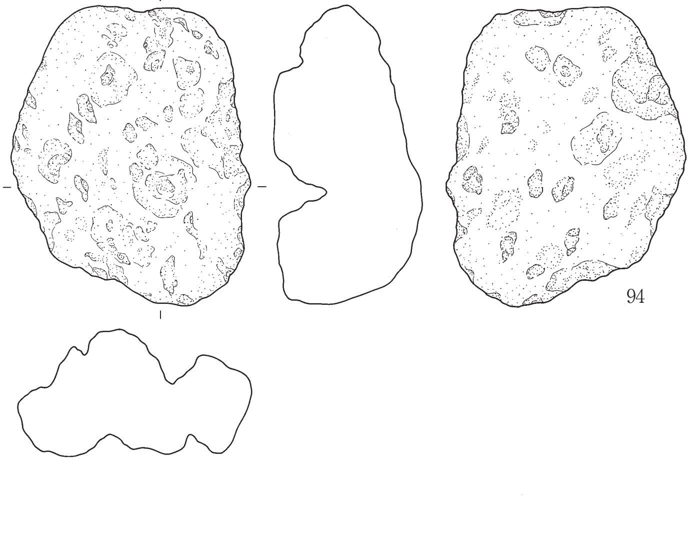


91

92



93



94

93　0　1：2　5cm

0　1：3　10cm

第112図　18区４号列石出土石器（22）

４　その他の後期配石遺構の調査

後期の調査面では、４号列石の南側で南北方向にのびる石列を確認し、24号配石とした（第28図）。また、23号配石の北側で石組み状の石列を確認し、43号配石とした。

18区24号配石（第30図～第33図、PL.17－１）

位　置　18区Ｖ－11グリッド

配　置　４号列石の南側でも石の集積された箇所をいくつか確認し、詳細調査の結果、４カ所を配石と認定したが、そのうちの３カ所は18区３号掘立柱建物の柱穴に伴うものだった。残った１カ所が24号配石で、26号配石の南側２ｍほどの距離にある（第28図）。配石のすぐ西側には、堀之内１式期の主要遺構である18区３号掘立柱建物が隣接し、あたかもその周囲に付随する施設のようにも見える。また、配石の東側には、後期前半期の18区19号土器埋設遺構が隣接する（第30図）。

形　状　長さ４ｍ、幅70㎝ほどの範囲に10～30㎝大の石を主体に配置し、北側の位置にそれに直行するように大型礫と小礫を配して、十字架のような形状を作り出している。大型の石と小さな石を組み合わせているため、上面は凹凸が生じるが、配石下面はほぼ水平を保持するように設置されている。

東西方向にのびる石列は、不揃いな部分もあるが、河道の中央をその流れに沿うようにのびており、それに直行する石列の西端は、３号掘立柱建物の北側の棟持ち柱掘り方に接している。なお、配石の下に掘り方は確認されていない。

配石に使われた石は、小さな川原石が数個含まれるが、大半は地山の亜角礫である。

遺　物　堀之内１式～同２式に比定される土器と磨石類や台石などの転用された石器類が出土しており、第31図～第33図に示した。土器は大半が小破片で、１～４・６・７は堀之内１式、５・８は堀之内２式に比定されよう。９は堀之内１式土器深鉢の無紋部を使用した土製円盤で、楕円形を呈し、周縁部は斜めの傾斜がつけられ、良く研磨されている。10～12は磨石類で、13は石皿の破片を転用した砥石、14は欠損した石皿、15・16は台石である。

18区43号配石（第43図・第44図、PL.18－５～７）

位　置　18区Ｙ－15グリッド

配　置　23号配石の北側に隣接し、23号配石よりやや下がった位置にある。19区27号住居は高い位置にあり、河道縁辺は北側に向かって緩やかに傾斜しているため、23号配石の調査当初は見えていなかった。河道縁辺の傾斜に平行して東西方向に石を並べた配石で、配石自体も北側に向かって傾いている。現存する配石が当初の形態なのか、東西にさらに続いていたものかは判然としないが、その一部は流失した可能性も考えられる。

形　状　長さ40㎝ほどの長方形の石を傾斜に平行に置き、その両側に長さ30㎝ほどの石を長軸が直行する方向で設置している。

その周囲にも小さな石があるが、これらはやや低い位置にあり、地形のものかもしれない。本配石の周囲は地山に礫が見当たらないから、これらも持ち込まれたものと考えられる。配石に使われた石は、いずれも地山に含まれる亜角礫である。なお、配石の下に掘り方は確認されていない。

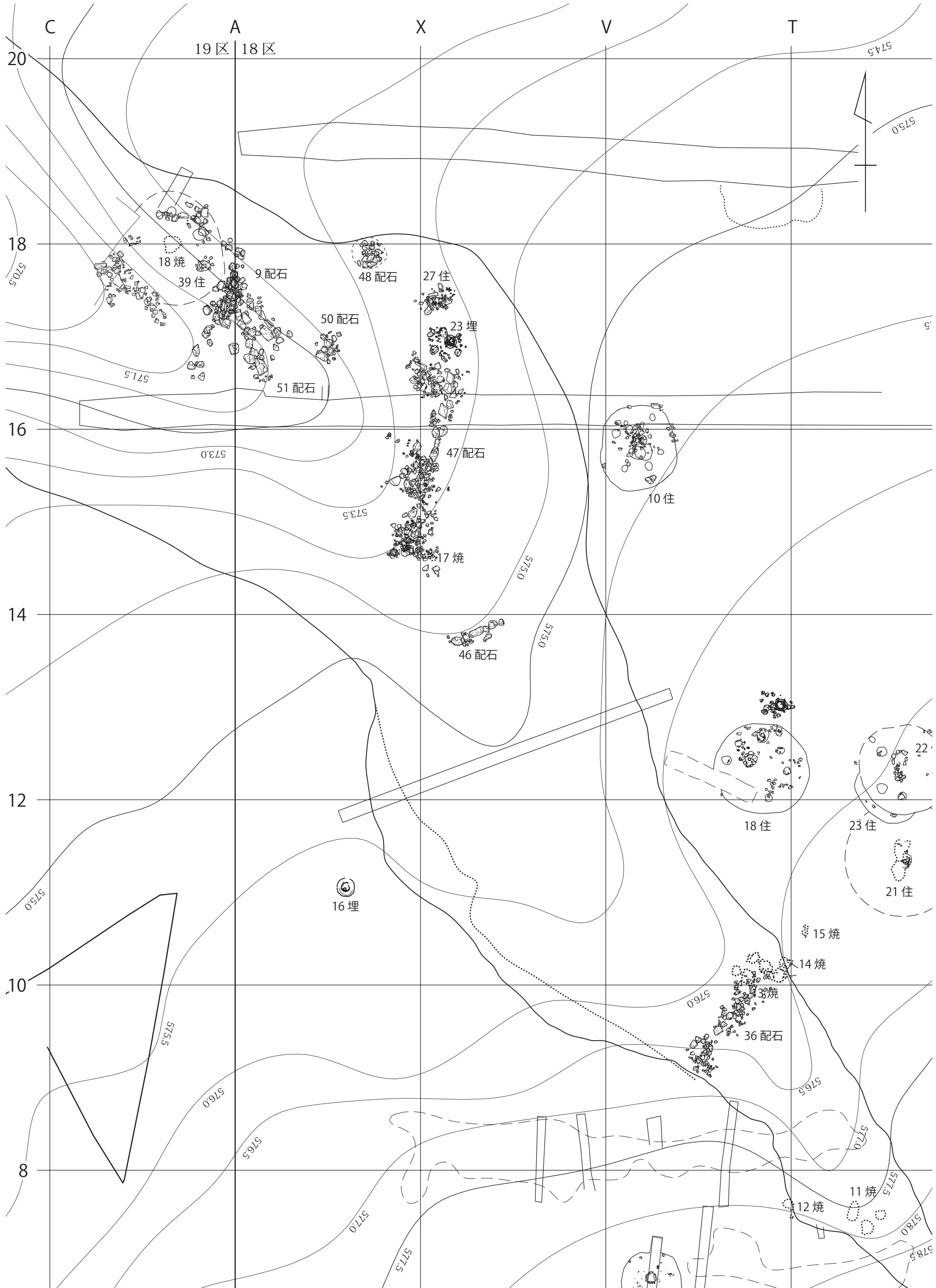
本配石の長さは80㎝ほどしかないが、細長い石を長軸を互い違いに配置する配石方法は「小牧野式」として良く知られており、本配石はそれによく似ている。

遺　物　本配石に伴う遺物は確認されていない。

５　中期配石遺構の調査

後期調査面の下層から中期に該当する配石遺構が数カ所で確認された。

先述のように本河道の調査では、後期と中期の調査面に指標となる土層の変化は認められないため、出土土器の変化を目安に調査を実施した。中期の土器は、後期面調査時から一部で加曽利Ｅ３式土器を中心に出土が確認されていたが、後期土器の出土が認められなくなった時点で中期調査面と認識し、調



第113図　18区１号埋没河道内で確認された縄文中期の遺構群

第114図　18区１号埋没河道内縄文中期土器出土状況

査を進行した。

中期調査面では加曽利Ｅ３式土器が主体的に出土し､相変わらず礫の出土は各所で多量に認められた。そうしたなかから、礫を人為的に配置したと考えられる箇所を抽出し、検討した結果、７カ所の配石を認定した（第113図・第114図)。

36号配石は、河道上流部を横断するような状態で確認された。46号配石は、後期の27号配石の下から確認された。27号配石は、河道の折れ部に広がる平坦面を横断するように、グリッドのＸラインに沿った状態で確認された。48号配石は、河道中流の右岸側縁辺で確認された。50号・51号および19区９号配石は、河道の底面が大きく落ち込む箇所の右岸側に隣接した状態で確認された。

以下、個別に詳細を報告する。

18区36号配石（第115図・第116図、PL.18－１～４）

位　置　18区Ｔ－９～10グリッド

配　置　埋没河道の上流部にあり、河道の幅が広くなる直前の位置を横断するように配置されている。中期の遺構は、南側８ｍに28号住居が、北東８ｍに21号住居がある。

形　状　埋没河道を横断するように、幅１～1.2ｍ、長さ5.2ｍの範囲に石を集積している。使われている石は、長さ30～40㎝大の比較的扁平な石を中心に、その間を小さな石で埋めている。所々に石の抜けた空白もあるが、石は水平を保持するように配されている。なお、配石の下に掘り方は確認されていない。

配石に使われた石は、いずれも地山に含まれる亜角礫である。

遺　物　大型土器を含む数多くの土器破片と共に、石鏃や石錐などが出土しているが、配石のなかに多孔石や台石などの大型石器は持ち込まれていない。

１は口縁部に隆帯で曲線的な文様を構成する。地紋はＲ撚りの撚糸文。２は頸部につまみ上げた突起が付く特異な隆帯をめぐらす土器で、口縁部には矢羽根状の刻目を施した隆線と縦位の沈線を施し、胴部に縄文ＲＬを施文する。３・６は渦巻文と楕円区画文で口縁部文様を構成する。４・５は地紋に条線を施文している。７は矢先を欠損した石鏃で、おそらく未成品であろう。８は棒状を呈する黒曜石製の小さな石錐である。

１・２は加曽利Ｅ１式に、３～６は加曽利Ｅ３式に比定されよう。

所　見　18区36号配石は、埋没河道の幅が広がる直前の場所を横断する位置にあり、大きな扁平石を主体に一定の幅で水平を保持するように配置されていることから、埋没河道を横断する通路だったと考えたい。時期は、出土土器から加曽利Ｅ３式期に該当するであろう。

縄文時代中期には、河道はほぼ埋没していたと考えられるが、雨天時やその直後はぬかるんだのではないか。その度に迂回するよりも、身近にある礫を敷いて通路を確保したと考えたい。なお、本配石の周囲は土器の散布も多く、もの送りの場としても意識されていた可能性もある。

18区46号配石（第116図・第117図、第119図、PL.20－１・２）

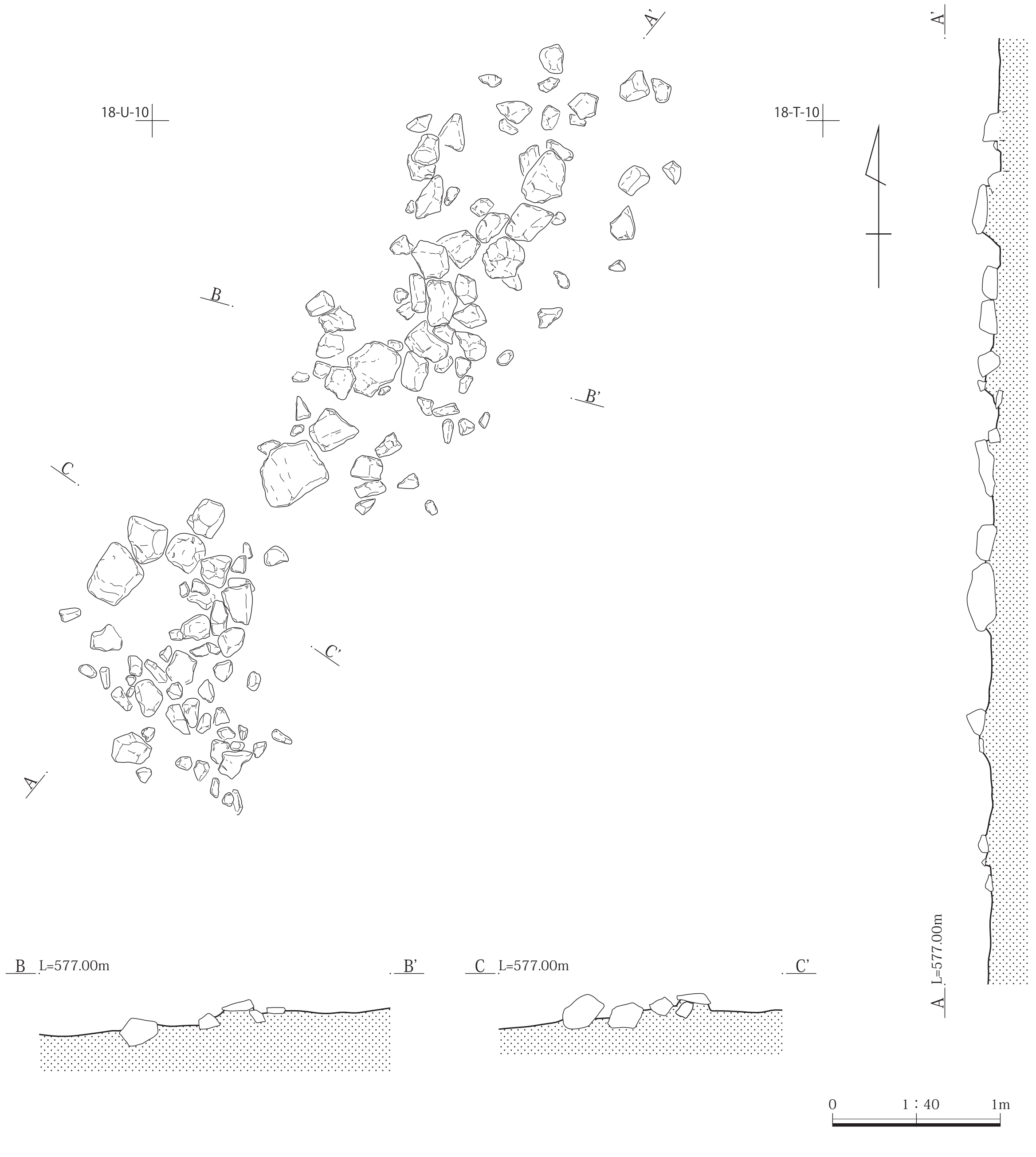
位　置　18区Ｗ－13グリッド

配　置　後期の27号配石の下から確認された。埋没河道が西側に折れて広がる直前の位置にあり、36号配石と同様に河道を横断する方向に直線的にのびているが、現存するのは河道中央部分の2.5ｍのみであった。北西にある47号配石までの距離は４ｍである。

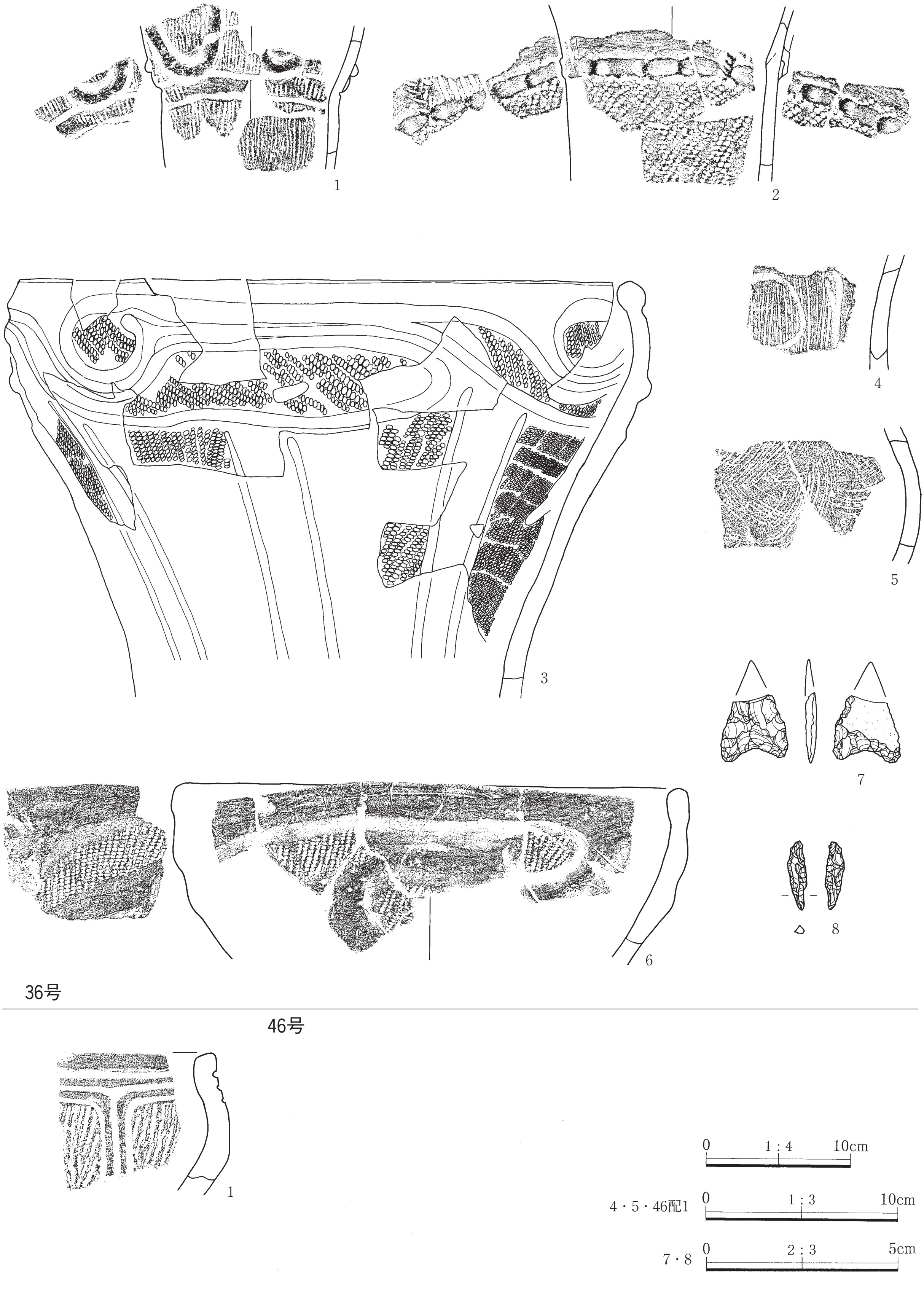
形　状　長さ40～70㎝の細長い石を縦方向に揃えて並べ、その間に30～40㎝の方形状の石を配置して、長さ2.5ｍの直線的な配石を構成している。配石は水平を保持するように設置されているが、全体として西側がやや下がっている。これは、地山の関係で後の土圧によるものかもしれない。なお、配石の下に掘り方は確認されていない。

配石に使われた石は、いずれも地山に含まれる亜角礫である。

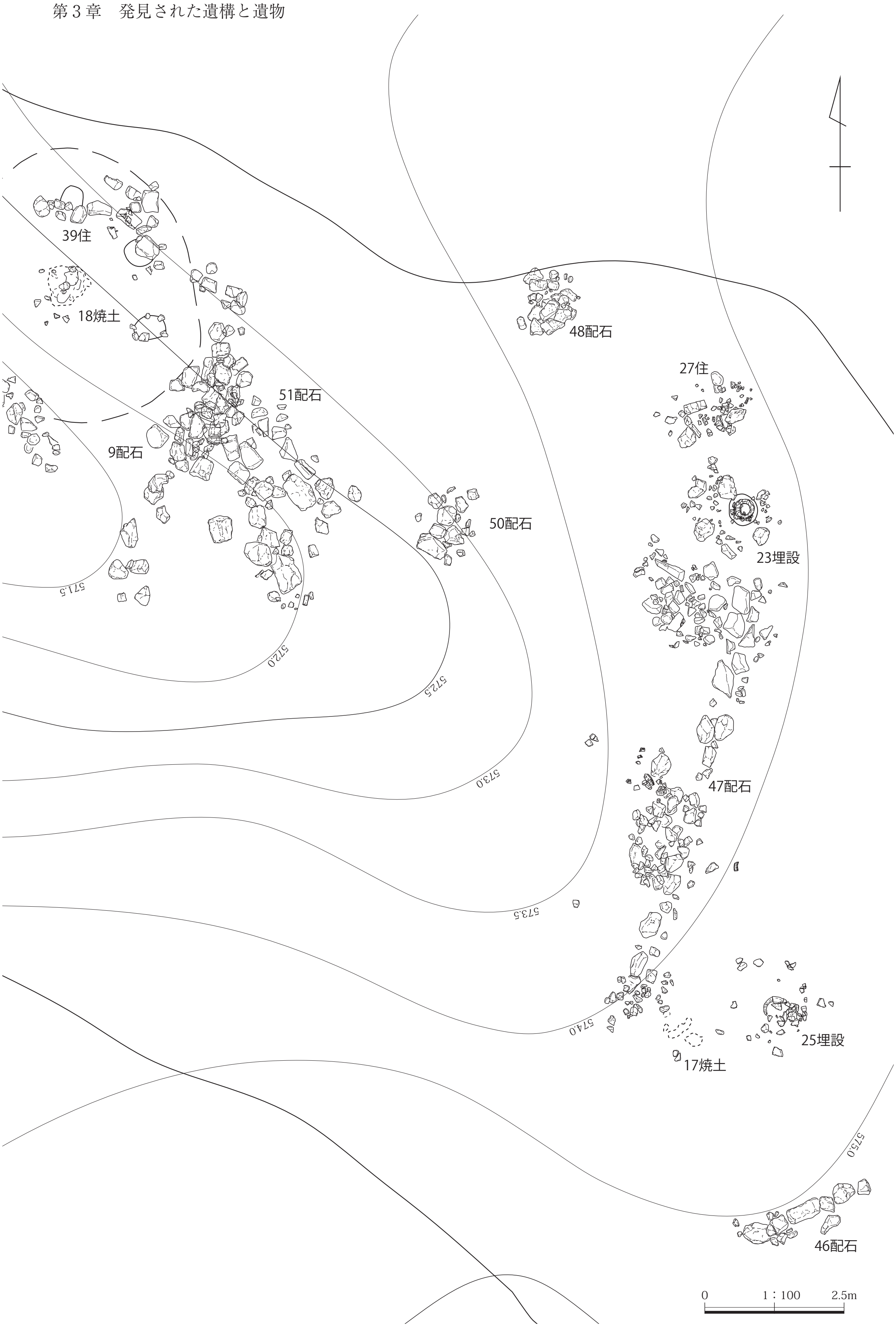
遺　物　本配石に伴う遺物はなく、また配石のなかに石器は使われていない。



第115図　18区36号配石

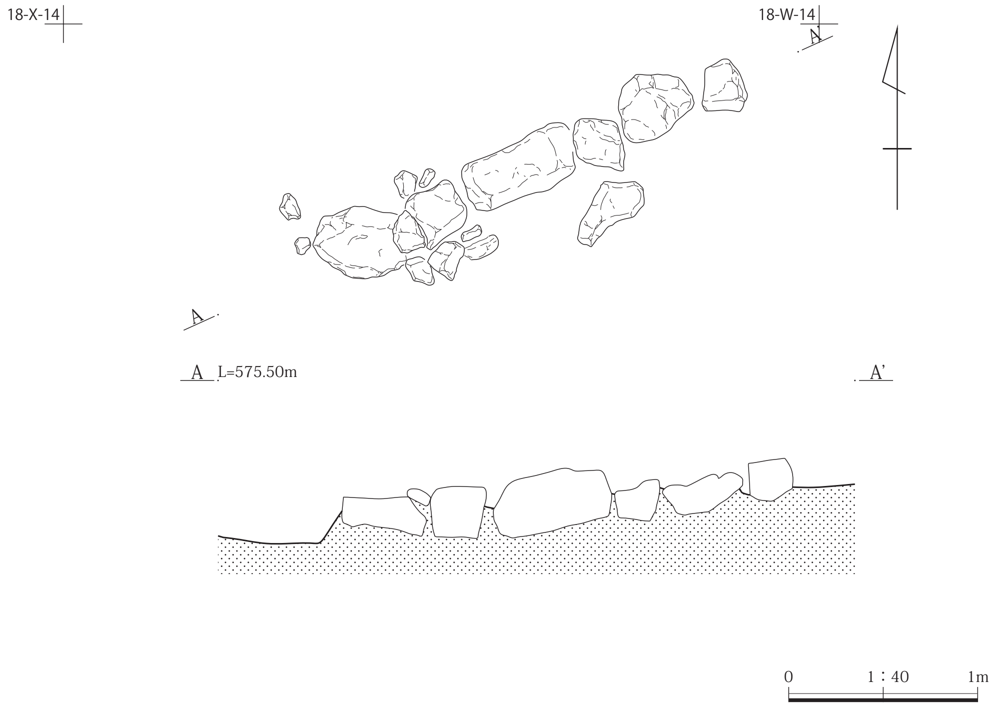


第116図　18区36号・46号配石出土遺物



第117図　18区46号・47号・48号・50号・51号配石、19区９号配石遺構配置図

第118図　18区47号配石



第119図　18区46号配石

所　見　36号配石と同様に、埋没河道の幅が広がる直前の位置にあり、しかも河道を横断する方向に直線的にのびている状況は、偶然とは思えない。しかし、配石の形態はまったく異なっており、それはむしろ後期の43号配石と類似している。

また、本配石は後期の27号配石の下で確認されたが、25号～28号配石と重ねてみると、その左右の延長上に大型の石が位置している点も、無視できない。

18区47号配石（第117図・第118図、第120図～第122図、PL.18－８、PL.19－１・２）

位　置　18区Ｗ～Ｘ－14～17グリッド

配　置　グリッドのＸラインにそうように南北方向に直線的にのびる。

配石南端の東側には中期の18区17号焼土があり、その東側には後期前半期の18区25号土器埋設遺構が位置する。また、配石北端には加曽利Ｅ３式土器を逆位に埋設した18区23号土器埋設遺構があり、その北側には加曽利Ｅ３式期の18区27号住居の石囲炉が位置する。なお、18区27号住居は未報告の住居である。

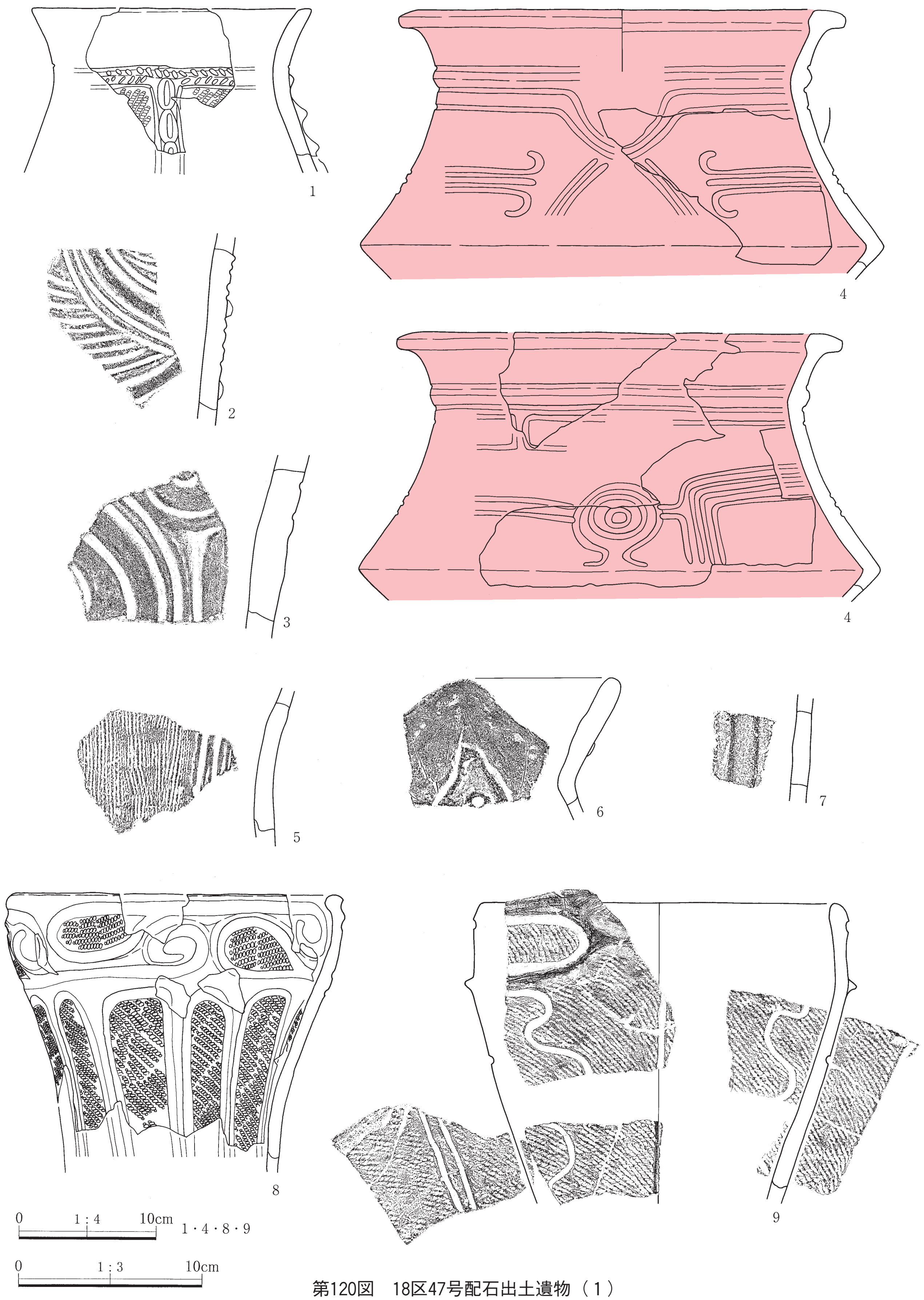
この場所は、埋没河道が西側に折れて河道幅が広がった平坦地で、本配石のすぐ西側には河道の底面が鋭角に深く落ち込む場所がある。つまり、本配石は河道が平坦地から深みへと変化する直前の位置を横断するように配置されていることになる。ただし、埋没河道は中期の段階にはかなり埋没が進んでいたと考えられるから、この遺跡の住民がこの河道の性格をよく知っていたことが前提となる。

形　状　長さ50㎝ほどの大きな石を、南北方向に長軸を揃えて約８ｍの長さに並べ、北端部とそこから南へ５ｍほどの２カ所に、石を集積した場所を配置している。石を集積した場所はいずれも石列の西側にあり、そこから土器片も数多く出土している。

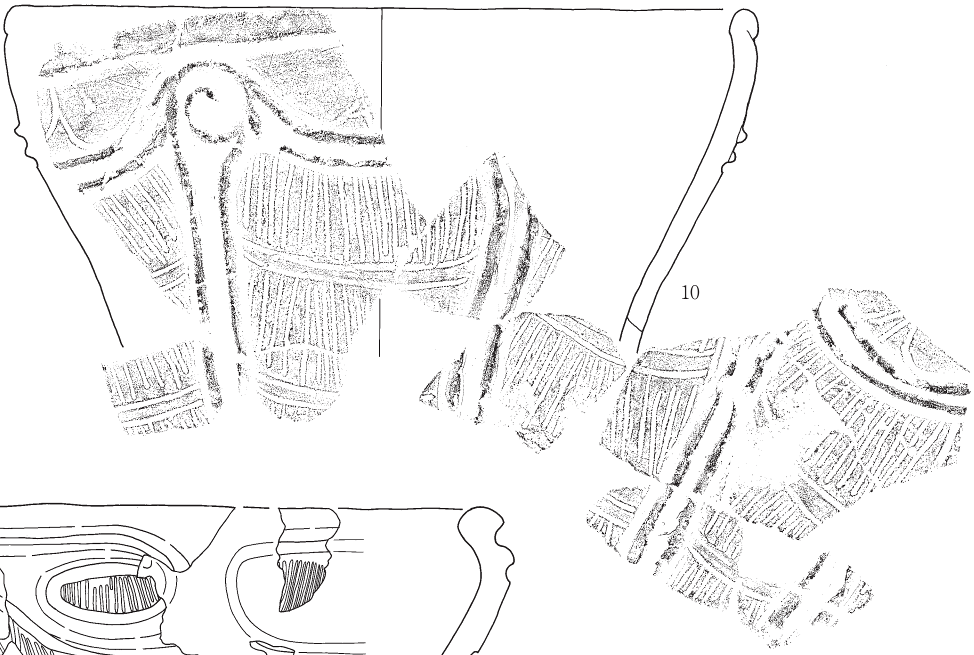
本配石がのる平坦面は、西側に向かって緩やかに傾斜しているが、配石は石の上面を水平に保持するように配置されている。掘り方は確認されていない。

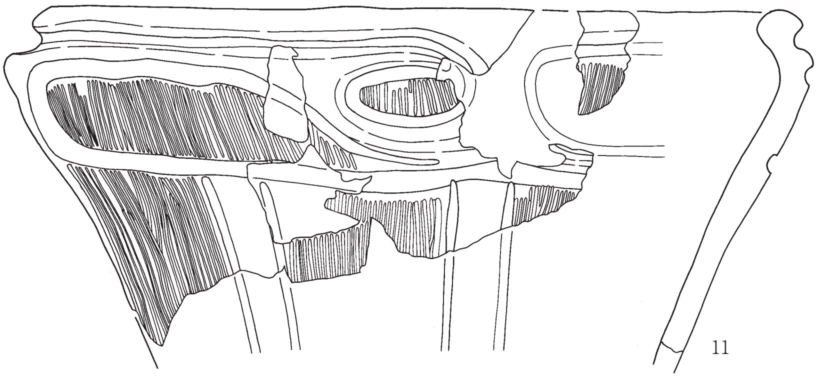
配石の北側にある18区23号土器埋設遺構の周囲にも30～40㎝大の大きな石が数個あり、本配石との間は空白となっている。両遺構の確認面はほぼ同じレベルであり、その北側にある18区27号住居の炉も同様である。

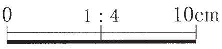
遺　物　大型土器を含む数多くの遺物が出土してい



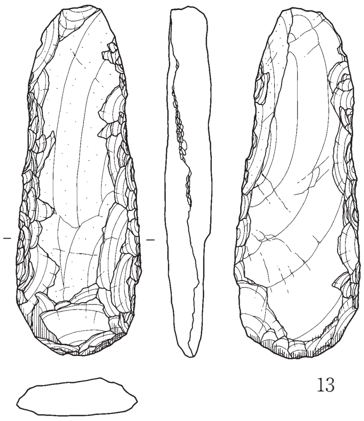
第120図　18区47号配石出土遺物（１）



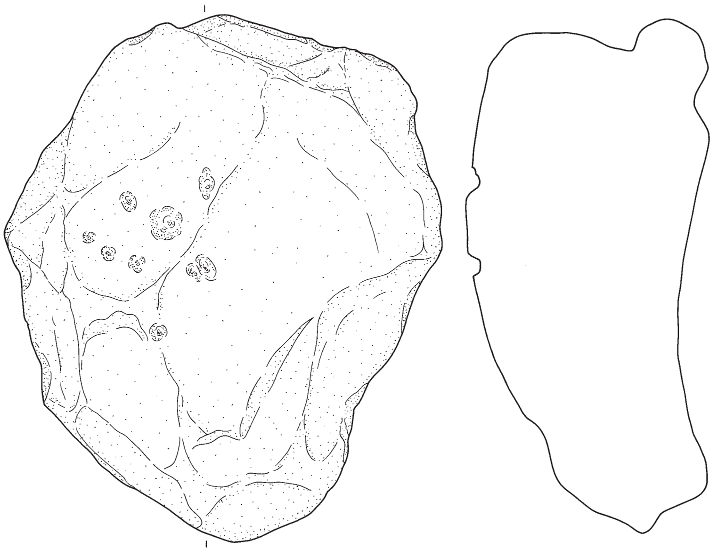




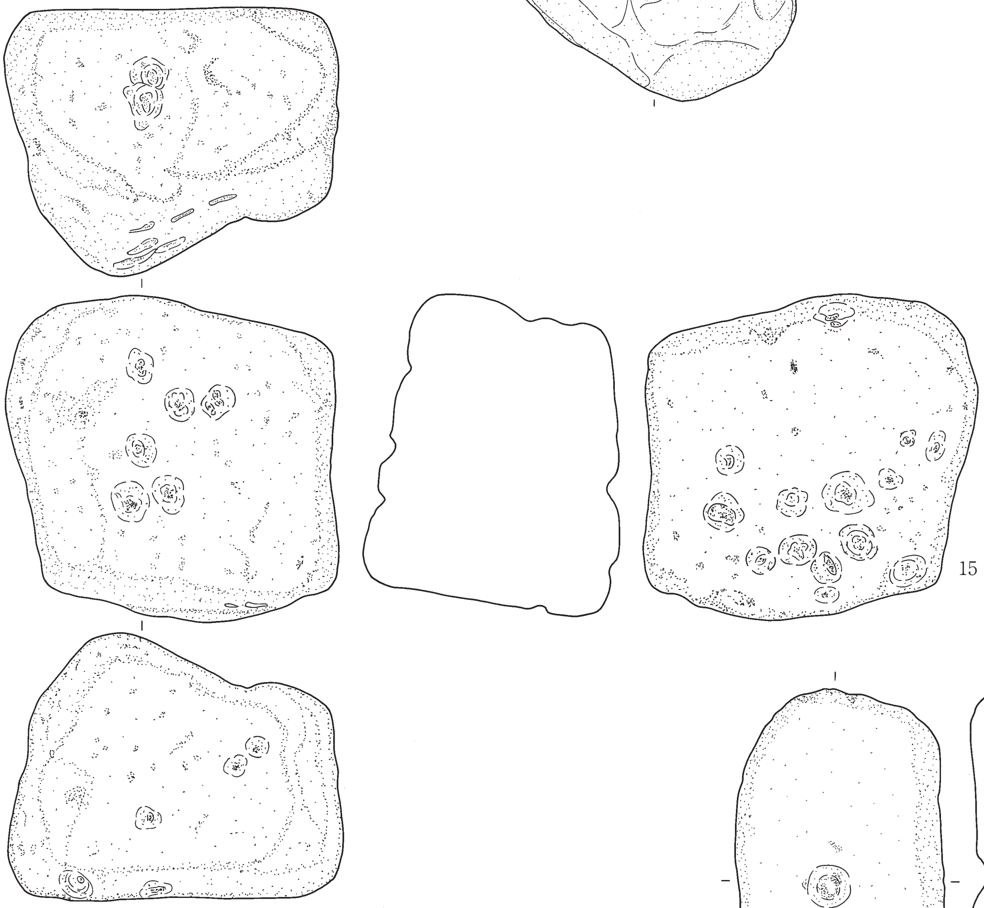
第121図　18区47号配石出土遺物（２）



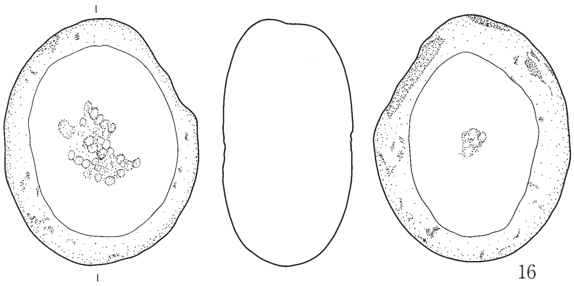
13



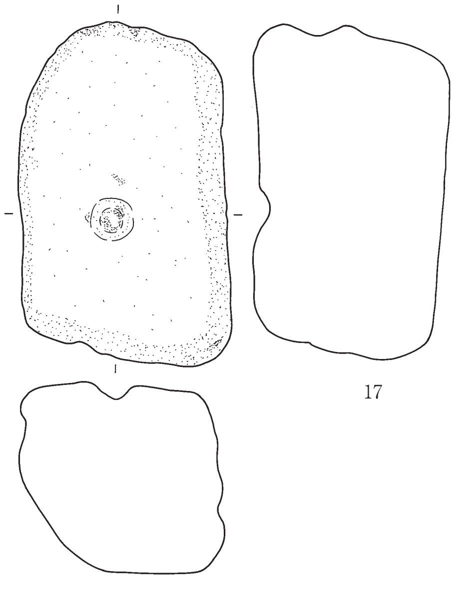
14 (1/6)



15



16

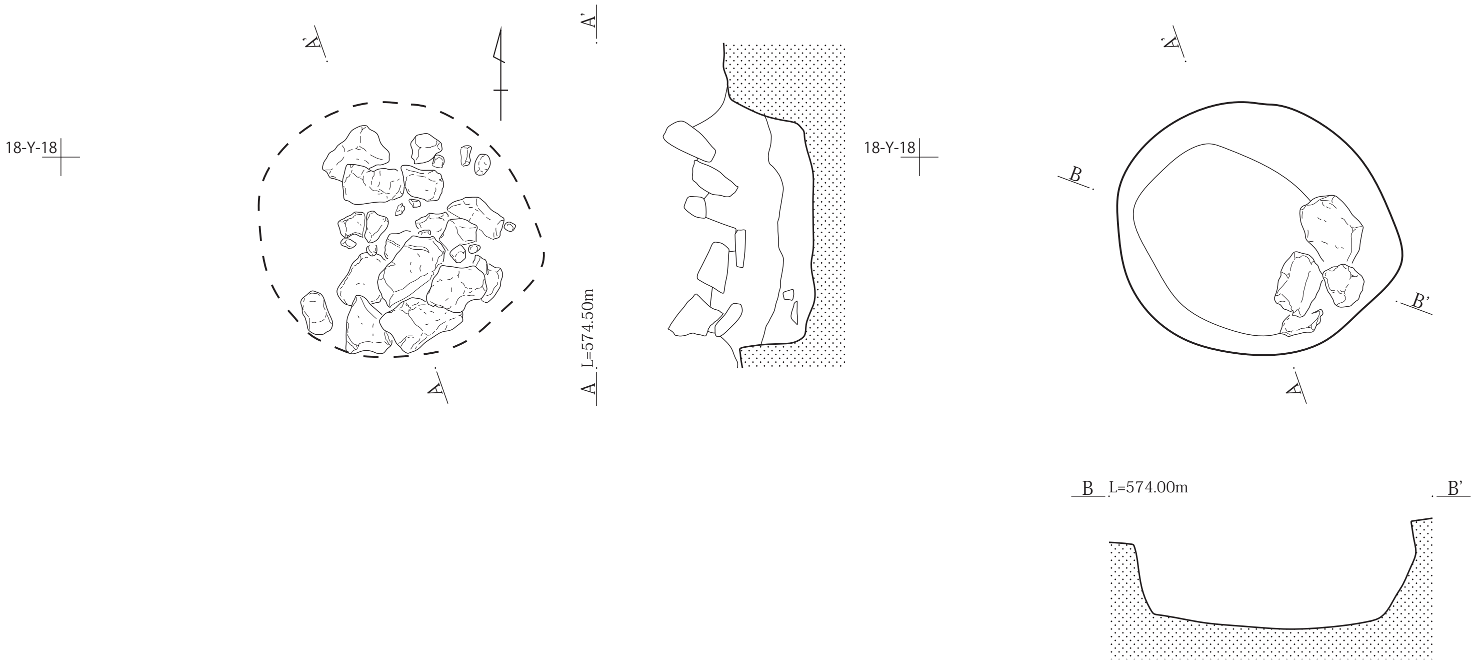


17

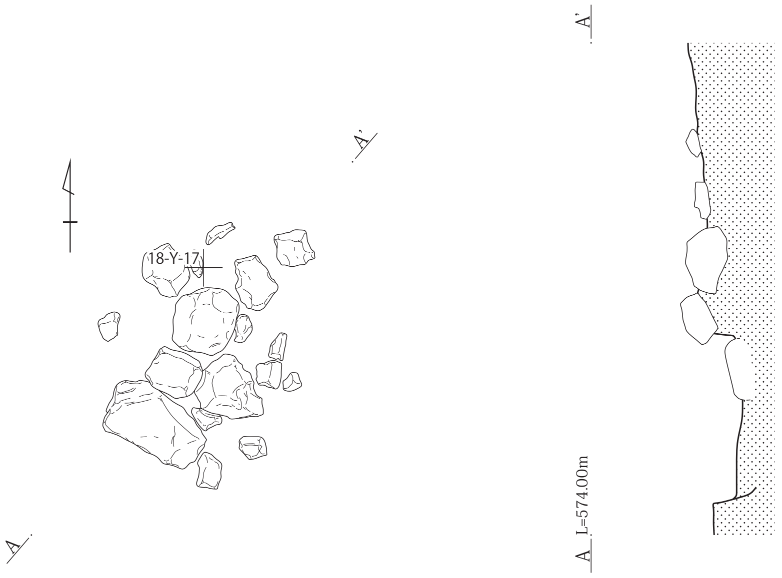
0　1：3　10cm

第122図　18区47号配石出土遺物（３）

15・17　0　1：4　10cm



48 号配石



50 号配石

第123図　18区48号・50号配石

る。その多くは石を集積した２カ所から出土しており、土器12は双方から出土した破片が接合している。

１は頸部がすぼまり、短く外反する口縁が無文となる深鉢で、隆帯による区画内に縄文を施す。２・３は隆帯と沈線で文様を描く深鉢の胴部破片である。４は胴部がくの字に屈曲して張り出す壺型の特殊土器で、口頸部に大きな貼付文があり、全面に赤色塗彩が施されている。５は撚糸文が施文された深鉢の胴部片である。６・７は微隆線で文様が構成される。８・９・11は口縁部に渦巻文と楕円区画文を構成する。10・12は隆線で区画文を構成し、そのなかを沈線で充填する。以上の土器は、２・３が勝坂３式に、１・４・５が加曽利Ｅ１式に、６・７が加曽利Ｅ４式に、８・９・11が加曽利Ｅ３式に、10・12が唐草文系土器に、それぞれ比定されよう。

13は打製石斧、16は磨石類、14・15・17は多孔石である。13・15は北側の石が集積された箇所から、14は18区23号土器埋設遺構の周囲から、16は南北にのびる配石の周囲から、17は南側の石が集積された場所から、それぞれ出土している。

所　見　埋没河道内の深みを避けて、平坦部を横断するように直線的にのびており、36号配石と同様に埋没河道を横断する施設として構築されたものと考えたい。また、２カ所の石の集積箇所からは多量の遺物が出土しており、河道を横断するための実用的な施設であると共に、もの送りの場所としての機能も兼ね備えていたものと考えられる。

南側が台地縁辺まで到達していないのは、後期の配石遺構等に石列が転用されたためであろう。また、北側に隣接する18区23号土器埋設遺構との関係を直接示す材料はないが、両者の位置関係および出土土器の時期が一致することから、一連の遺構と考えたい。

本配石の時期は、出土土器から加曽利Ｅ３式期に比定したい。

18区48号配石（第117図、第123図、PL.20－３・４）

位　置　18区Ｘ－17グリッド

配　置　47号配石の北西にあり、埋没河道の右岸側縁辺に位置する。やや大きな礫が縦位に刺さった状態で集積していることから、配石と認定した。

形　状　長さ30～40㎝大の石10数個が1.3ｍほどの範囲に集積しており、そのうちのいくつかの石は折り重なり、いくつかは縦位に刺さったような状態で確認された。

また､配石の下部から明瞭な掘り方が確認された。掘り方は長軸1.5ｍ、短軸1.35ｍ深さ50㎝の円形状を呈する土坑で、底面は平坦である。配石の石はその上面の範囲内にちょうど収まっている。

配石に使われた石は、いずれも地山に含まれる亜角礫である。

遺　物　本配石に伴う遺物は確認されていない。

所　見　時期を特定する材料は得られていないが、確認面と埋没土の観察から中期とした。円形の掘り方をもち、上面に礫を集積していることから、墓の可能性もある。

18区50号配石（第117図、第123図、PL.20－５）

位　置　18区Ｘ～Ｙ－16～17グリッド

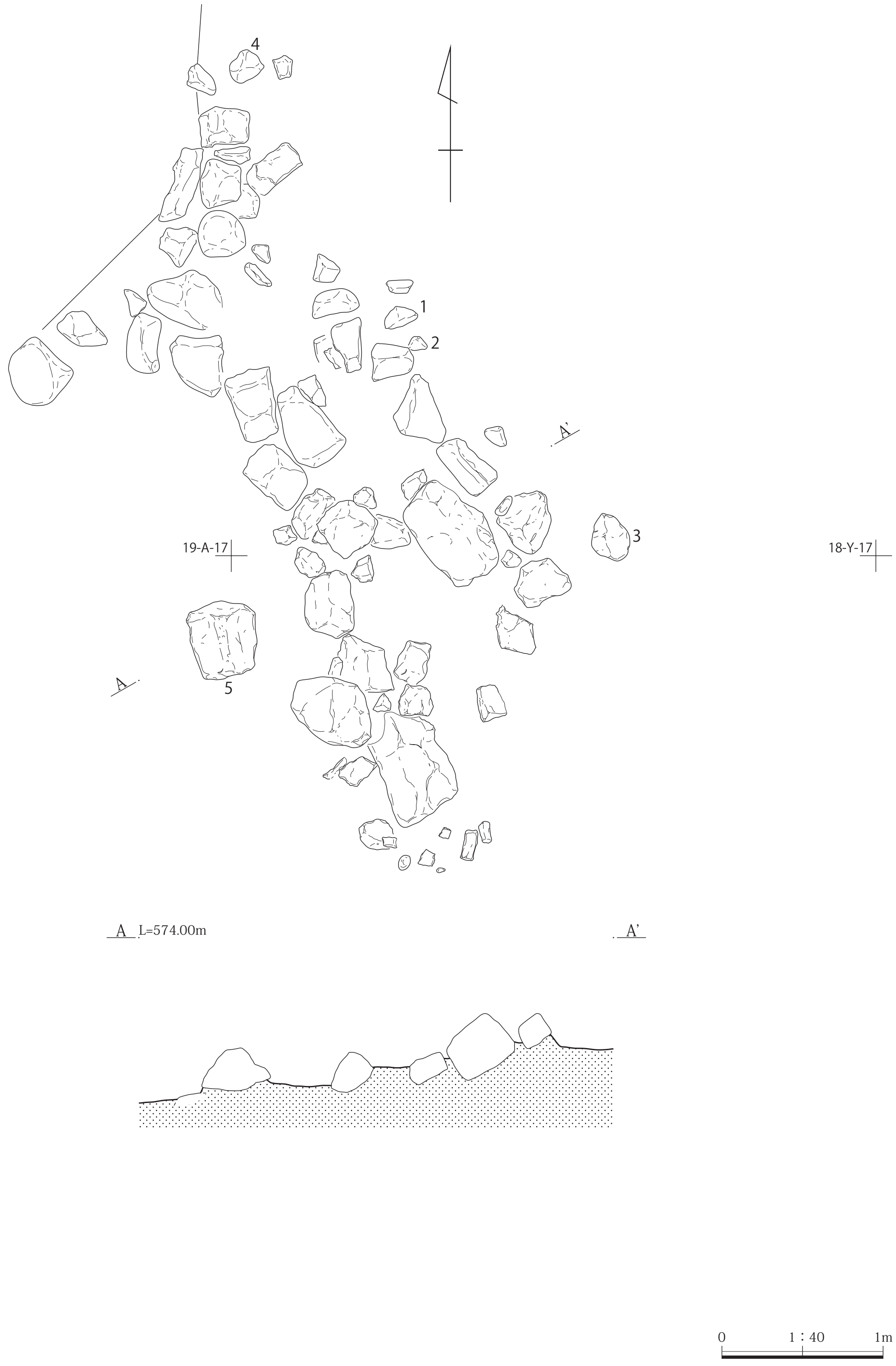
配　置　埋没河道の中央付近から確認された。48号配石の南側３ｍのところにあり、西側の51号配石とは1.5ｍに隣接する。

形　状　1.5ｍほどの範囲に30～60㎝大の扁平な石７個が接した状態で置かれており、その下や周囲に小礫が集積していた。石の形状は様々で、やや凹凸のある場所に無造作に置いたような状態であり、平坦面に敷いた状態ではない。図では小礫を表現していないため、大型の石の配置は長軸1.5ｍ、短軸１ｍほどの楕円形状を呈する。

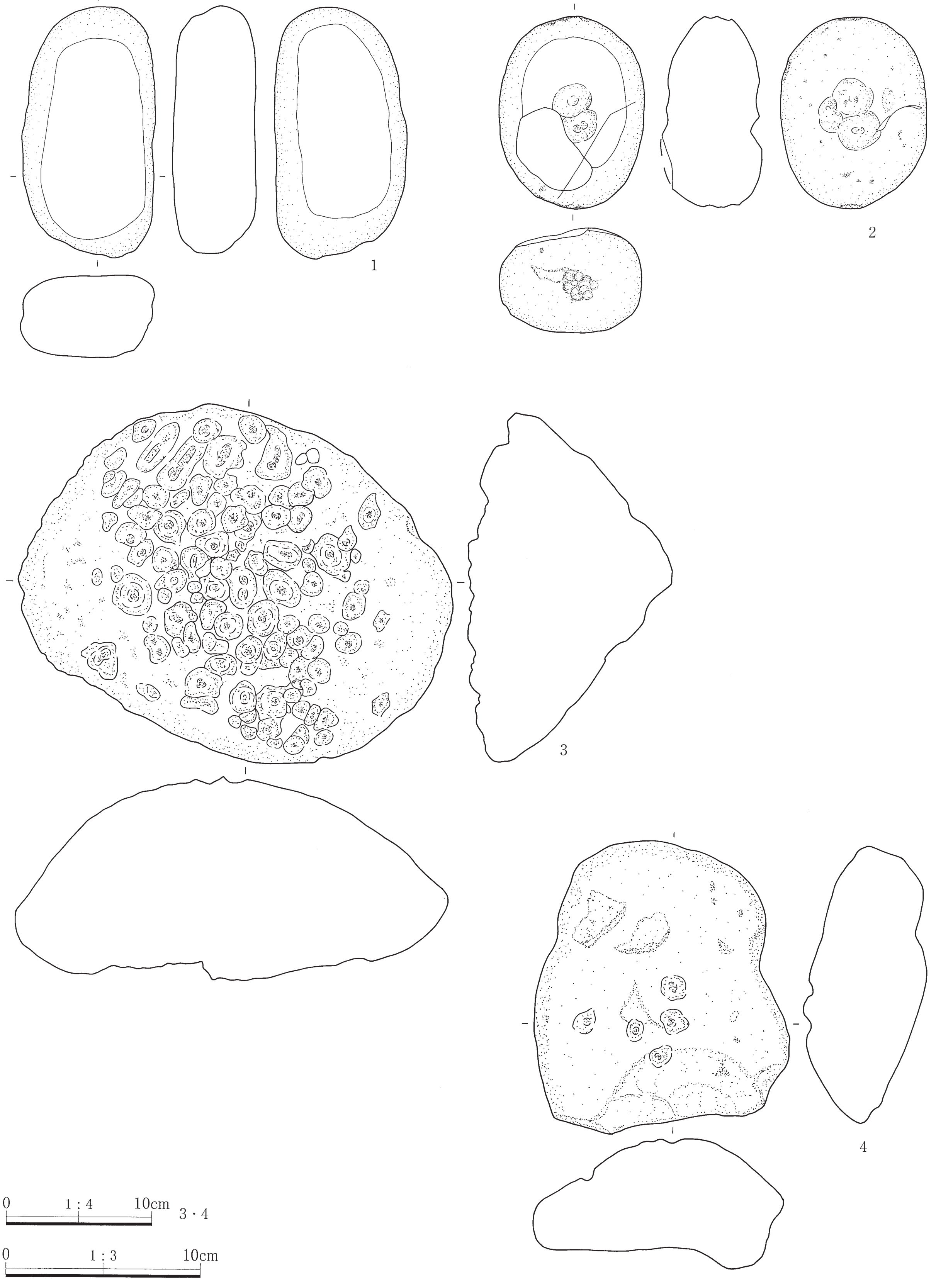
配石に使われた石は、いずれも地山に含まれる亜角礫である。

遺　物　本配石に伴う遺物は確認されていない。

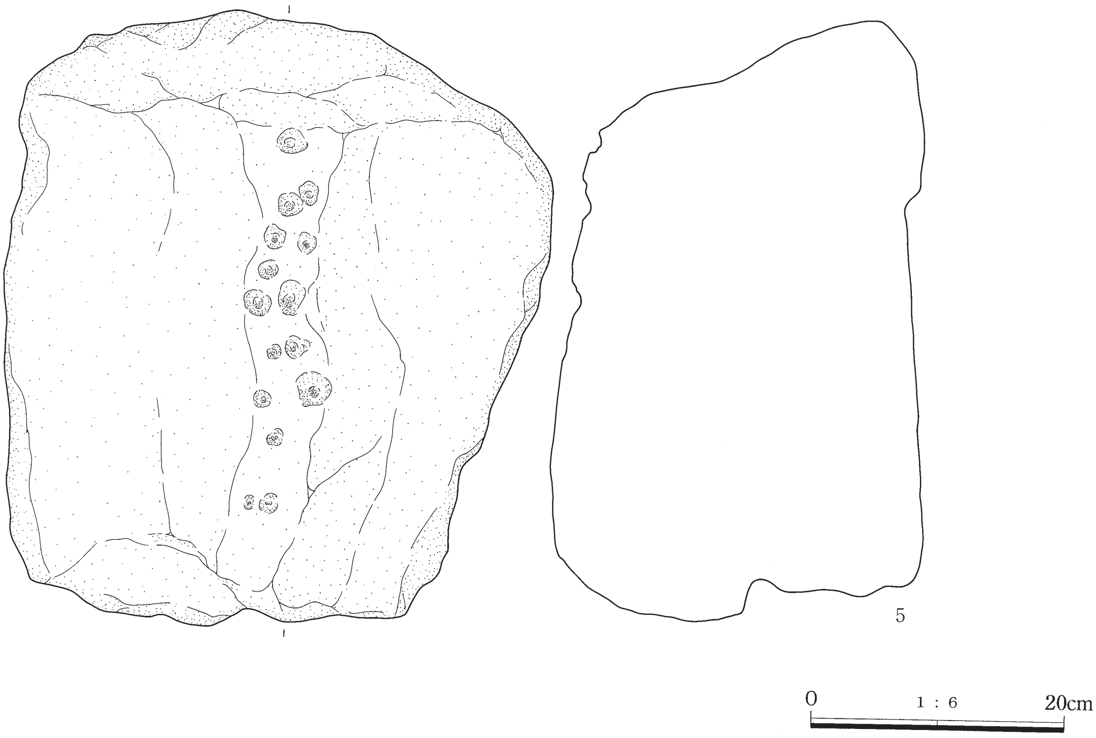
所　見　本配石の確認面は中期に該当する。大型の石をまとめて投棄したようにも見えるが、確認面は西側に隣接する51号配石とほぼ一致しており、それと一連の配石だった可能性もある。



第124図　18区51号配石



第125図　18区51号配石出土遺物（１）



第126図　18区51号配石出土遺物（２）

18区51号配石（第117図、第124図～第126図、PL.20－６）

位　置　18区Ｙ～19区Ａ－16～17グリッド

配　置　埋没河道の中央付近にあり、西側の一部を19区9号配石および19区39号住居と重複し、39号住居に切られているものと思われる。９号配石は本配石の上部にあり、切り合い関係は認められない。この場所は、埋没河道が深く落ち込んだ場所の右岸側の立ち上がりにあたっており、本配石はかろうじてその縁辺にのっているが、南西側は急激に落ち込んでいる。

形　状　埋没河道の落ち込みに沿って、長軸４ｍ、短軸2.5ｍほどの範囲に、面的に広がる石の集積が認められた。西側の一部を19区39号住居に切られており、全形は判然としない。石は30～50㎝大のものを主体に70㎝を超えるものもあり、河道縁辺の傾斜に合わせて面的に広がるが、所々に空白も認められた。

配石に使われた石は、いずれも地山に含まれる亜角礫で、形状は扁平なものや角柱状のものも含まれている。

遺　物　共伴する土器の出土は認められなかったが、配石中に石器が５点含まれていた。１・２の磨石類は中央付近の東側から､多孔石３は北東隅から、多孔石４は北側隅から、多孔石５は中央付近西側から、それぞれ出土した。

所　見　確認面の出土土器から中期後半の配石とした。一定の幅で埋没河道の縁辺に沿ってのびる配石と思われる。

19区９号配石（第113図、第117図、第127図）

位　置　19区Ａ－16～18グリッド

配　置　19区39号住居の北側上面および西側上面に重複する。西側の配石は18区51号配石の上に重なるが、切り合い関係は認められない。配石は19区39号住居の床面より30～50㎝ほど高い位置にあり、同住居を切っているものと思われるが、それを確認できる材料は得られていない。

形　状　19区39号住居の北側上面に、埋没河道に沿って3.5ｍほどの長さで直線的にのびる石列があり、その東端から南へ直角に折れて４ｍほどの長さで石列が直線的にのびている。双方の石列には１ｍほど

第127図　19区９号配石

の幅に数石の石を面的に並べた部分があり、特に南側へのびる部分では２ｍにわたって面的に配石しており、本来はこの配石が続いていた可能性もある。石は30～40㎝大のものが主体で、扁平なものや角柱状のものを含むが、大きさはよく揃っている。

配石に使われた石は、いずれも地山に含まれる亜角礫である。

遺　物　配石に伴う遺物は確認されていない。

所　見　確認面周辺の出土遺物から、中期終末頃の遺構と判断した。性格は不明である。

第５節　18区１号埋没河道内出土遺物

18区１号埋没河道では、早期後半鵜ガ島台式から晩期終末にいたる多量の土器と石器類が出土している。遺物の出土状況については前項で述べているので、ここでは出土した遺物の概要を報告する。

第128図１・２は早期後半の鵜ガ島台式土器である。いずれも内折する口頸部の破片で、内外面に横位の条痕文が施されている。１は口縁部に微隆線で区画文が施され、区画内に刺突列が充填される。２は文様を区画する隆線上に円形の刺突が施される。

第128図３～13は前期前半期の土器で、胎土に繊維を含む。３は波状口縁で、縄文を施すが、不鮮明で判然としない。４は集合沈線を施文する土器で、黒浜式段階に比定されよう。５～12はL縄３本を使用した束縄文を施文する土器で、６は口唇部に縄文を、７は口唇部に刻目を施す。いずれも内面には凹凸が認められる。13は平底の底部片で、文様の施文は認められない。

第128図14～18は前期後半の諸磯ｂ式土器で、櫛歯状施文具による集合沈線で文様が構成される。

第128図19～21は前期後半の諸磯ｃ式土器で、集合沈線による文様の上に棒状あるいはボタン状の貼付文が施される。

第128図22～25は前期後半の浮島式土器で、22は集合沈線間に貝殻腹縁の刺突を施す。24は竹管文を施文するが、地文は不明瞭。25は無節縄文Ｌであろうか。

第128図26～31は前期末葉の一群である。26は肥厚口縁に縄文ＲＬを施し、その下に３条ずつの結節浮線文と鋸歯状印刻文を横位に施す。27は縄文ＬＲを地文に、刺突を伴う浮線文を施す。28は縄文ＲＬを地文に、結節浮線文を施す。29・30は薄手硬質の土器で、29は器面全体に爪形状の刺突文を施し、30は無節縄文の撚り戻しを施文する。31は結束縄文ＲＬ・ＬＲを施文する。このうち26・28・31は十三菩提式に比定されよう。27は東海以東の土器であろうか。29は清水ノ上Ⅱ式に類似する。

第129図１～12は中期初頭の五領ヶ台式土器である。１は口唇部が肥厚する土器で、無節縄文Ｌを施す。２は細かな縄文ＲＬを施文する土器で、口縁部に卵形の貼付文を施す。３は鋸歯文と結節浮線文を簡略化した刻目文を施す。４～７・11は半裁竹管の平行沈線で文様を描く土器で、４は波状口縁を呈する。８～10・12は縄文を施文した胴部片で、８は横位の羽状縄文、９は縦位の結節縄文を施す。

第129図13～32、第130図１～25、第131図１～10は阿玉台式土器である。本遺跡では阿玉台Ⅰｂ式～同Ⅱ式土器の出土がほとんどで、同Ⅲ式以後の土器は見かけない。土器は、口縁部が内湾しながら大きく開く深鉢が主体で、口縁に山形あるいは扇状の大きな把手がつくものも多い。胎土に金雲母や片岩を含むものも多く、器面は光沢をもつ。口縁部は、隆帯による楕円区画に沿って１～２条の結節沈線をめぐらし、区画内に同結節沈線で鋸歯状や波状、および斜行線などを組み合わせた文様を施す。胴部には、文様単位に合わせて直線あるいは波状の隆帯を垂下させるものや、楕円区画を施すものがあり、横位に連続する爪形状の刺突列や押圧文、鋸歯状沈線などをめぐらす。

第131図11～24、第132図１～34は勝坂１式土器である。隆帯区画内に角押文や三角押文、キャタピラー文など文様で充填するように施文され、三叉状印刻文を伴うものもある。第131図11は三叉状印刻文

が多様された土器で、区画内を斜格子状沈線や三角押文で充填している。第132図28・30～33はキャタピラー文が多用された土器で、区画内には三叉状印刻文が施文される。第132図34は、この時期としては希な浅鉢で、口縁に隆帯で三角形区画文と弧状文を相向かいに施し、区画に沿って三角押文とキャタピラー文を施している。

第133図１～19は勝坂２式土器である。本遺跡では、同時期の焼町類型が多く出土しており、勝坂２式土器の出土量は少ない。勝坂１式を引き継ぐが、器形や単位文様が大型化・粗大化し、隆帯や把手はより立体的になる。５は抽象文のようなひれ状の幅広隆帯が施文されるもので、円形の刺突文が伴う。１・11～14・19は、キャタピラー文から変化した爪形状刺突列が施される。

第134図～第141図は勝坂３式土器である。この段階の土器は数多く出土しており、その一部は加曽利Ｅ１式古段階の土器と共存する。第134図１～19は口縁部が強く内湾する一群で、口縁部に隆帯で渦巻文などを施すものが多い。１は縄文を施文した土器で、口縁部には重三角区画文の名残をを色濃く留めている。３～７・９・12～16は口縁部を無文とする一群で、３・13はカタツムリのような貼付文が施される。８は高台がつく鉢形土器かもしれない。第135図２・３・５・６は隆帯区画内を縦位の結節沈線や刺突列で充填する。７は胴部に沈線で渦巻文を多段に構成する。第136図１・２は口縁部と頸部、あるいは胴部に眼鏡状把手を多段に施す土器で、１では把手の上下にコイル状あるいはねじった紐状の隆帯を伴う。第137図１は口唇部が鋭角に内折する波状口縁の土器で、口縁部には焼町類型と共通する隆帯区画を施し、区画内を縦位の結節沈線で充填している。胎土には多量の石英と金雲母を含む。第137図２は隆帯と沈線で横位多段に渦巻文を構成する。渦巻文の隆帯が重なる部分はヒレ状に突出しており、そこには刻目と縄文が施文されている。文様の手法などは焼町土器に近く、これも胎土に多量の石英と金雲母を含む。３は無文の口縁部が直線的に開く深鉢で、胴部に重三角区画文を２段に構成し、縦位隆帯の頸部と文様下端に眼鏡状把手を施す。第138図１・２は立体的な把手部分である。１は眼鏡状把手に三叉文が伴う。２は橋状を呈する大型のものである。第138図７～10は渦巻文を施した貼付突起で、これも数多く出土している。第139図１～13は眼鏡状把手とそれに伴うコイル状、あるいはねじった紐状の隆帯で、これらは口縁部が無文の深鉢に多様される。第141図１～６は、内湾する口縁部に縦位の隆線と波状の隆線を施す一群である。

第142図～第145図、第146図１～６は焼町類型に該当する土器である。比較的多く出土しているが、接合できないものも多く、ここには図化可能なものを掲載した。波状口縁と平縁とがあり、口縁には加飾した把手が付けられる。文様は曲隆線で渦巻文や反転する懸垂文で構成され、縄文を施文するものを含む。第142図１は三日月状の把手が付けられ、爪形文が施される。第143図１は新しい段階の土器で、環状突起や文様構成に焼町土器の特徴を残しつつ、単調化している。第144図21～26、第145図１～11、第146図１・５・６は縄文の施文を伴う一群で、第145図３～10は隆帯に沿って施される平行沈線が１条であり、新巻類型に該当するかもしれない。第145図16・17、第146図１・４は焼町類型の枠を逸脱しているが、その特徴をよく留めている。16・17・４は勝坂３式に、１は加曽利Ｅ１式古段階に比定されようか。

第146図７～14、第147図１～15は唐草文系古段階に該当する一群で、加曽利Ｅ１式～同２式に比定されるものと考える。焼町類型との深遠な関係が伺える一群で、中信地域の唐草文系土器や曽利式土器とも異なった形態をとる。文様は、隆帯による渦巻文や区画文を構成し、その間に集合沈線を充填する。また､胎土に多量の石英と金雲母を含むものが多い。第146図７～10は数条置きに結節沈線を施文する。12・14は一定の空白を置いて集合沈線を施文する土器で、12には箱状の把手が付く。

第147図16～27は東北地方南部に主分布する大木７

ｂ式土器である。薄手硬質なつくりのよく近似した一群で、同個体の可能性もあるが、隆線にそって角押文を施すものと、沈線を施すものとがある。

第148図・第149図は曽利式土器である。出土量は少ないが、Ⅰ式新段階からⅡ式古段階の出土が目立っており、Ⅲ式以後の土器は希である。縦位の沈線を施文するタイプが多い。第148図１は樽形の深鉢で文様を区画する懸垂隆帯の上方に渦巻文を施した貼付文が付く。４・15～17は頸部に斜格子状が施される。第149図１はＸ把手がつく大型の甕で、本地域では希な出土例である。

第150図～第164図、第165図１～11は加曽利Ｅ１式土器である。出土量が多く、まとまった資料が得られている。

第150図～第152図に、勝坂３式新段階から加曽利Ｅ１式古段階の多様な土器を集めた。

第150図１～11、第151図１～４・９は勝坂３式と関連する一群である。第150図１・２は口縁部が無文の深鉢で、胴部には縦位の撚糸文が施されており、曽利Ⅰ式最古段階の土器を思わせる。11も同様の土器だが、口縁部に隆帯で星形の図形と渦巻文を施文している。３はタイプが異なるが、口縁部に縦位の撚糸文を施文する。４は内湾する口縁部に短く外反する無文の口唇部が付く深鉢で、口縁部には斜縄文を地文に縦位の隆線と反弧状の貼付が施される。６は縦位の撚糸文を地文に、刻目を伴う縦位及び弧状の隆線で文様を構成し、各隆線の上端部を繋ぐように連弧状の沈線を加えている。５は一対の環状把手が付く。第151図１～４は胴部に縄文が施文された深鉢で、１～３は口縁部に隆線と縦位の沈線で文様が構成される。４は刺突を施した縦位に隆線が施文されている。９は樽形の土器で大小一対の把手が付く。把手の下には刻目がつけられた蕨手状の隆線懸垂文が施され、胴部には縦位の縄文が施文されている。

第151図５～８は焼町類型と関連する一群である。５は環状把手の一部で、渦巻文や刻目が施されている。６は波状口縁の深鉢で、波頂部には口縁部文様と一体化した透かしを伴う立体的な把手が付くが、欠損している。８は懸垂隆帯の上端に矮小化した環状把手と刻目がつく。

第152図１・２は同個体の土器である。内湾しながら大きく開く深鉢で、口唇部は強く内折する、波状口縁の波頂部に耳状の突起があり、そこから各突起を弧状の隆線でつなぎ、波頂部の間に渦巻文とそれから垂下する隆線を施す。地文には縄文を軽く施文している。この土器は器形と基本的な文様構成が第143図１と共通しており、焼町類型と関連する可能性が高い。

第152図３～16は越後・北陸地域との関連が考えられる一群である。細い竹管を使用したものが多く、口唇部にも竹管による施文が認められる。薄手硬質で丁寧なつくりの土器が多く、縄文を施文するものが多い。９・10・15・16は浅鉢になるだろう。14は北陸地方に分布する上山田・天神山式あるいは火炎土器の浅鉢であろう。大柄の渦巻文を中心に、その周囲に小さな渦巻文を配した流水文で構成されており、施文は口唇部にまで及んでいる。大柄渦巻文の上には突起が付くが、欠損している。文様の施文は、隆線と竹管による半隆起線によって巧みに構成され、胴部には縦位施文の縄文ＬＲが施される。

第152図17・18および第153図以後は加曽利Ｅ１式土器を一括した。地文は縄文と撚糸文とがあり、撚糸文は縦位施文を基本とするが、縄文は縦位施文と斜行施文とが認められる。第153図１～８、第154図５は、くの字に内折する口縁部に懸垂文を施して方形状の枠を構成する一群である。第153図10～15は、くの字に内接する口縁に外傾する口唇部がつくタイプで、口縁部に弧状区画を構成するものが多い。第154図１～４・６～11、第155図１～８は、口縁部に橋状把手や渦巻文を構成し、その間の横位沈線に交互刺突を加えて鋸歯状文を施す一群である。第154図８・10は橋状把手を横に繋いで立体化しており、所謂三原田式に類似する。11は横位沈線間に刻目を加えている。第155図13～24は内湾する口縁部に渦巻文などを構成する一群である。第156図１は撚糸文を施す大型深鉢の胴部で、上半部に竹管で横帯文を施す。

第156図２・４は無文の口縁部が短く開く深鉢で、胴部には渦巻文を伴う懸垂文が施される。５も同様だが、口縁部文様帯がつく可能性がある。第157図１・４・５は口縁部がくの字に強く内折れする特異な器形の大型深鉢で、口縁部は無文とされ、胴部に縦位施文の縄文が施される。第157図２・３は口縁部が軽く外反する大型深鉢で、２は口縁部が無文で胴部に撚糸文が施される。３は口縁部から胴部上半に沈線を加えた隆帯懸垂文を施し、頸部と懸垂文下端に渦巻文をデザイン化した横線を施して文様を構成している。無文の口縁部には沈線を加えた隆帯で弧状の文様を構成し、胴部には縦位縄文を施す。第158図１～18は細身筒形の深鉢で、大半が小型の土器である。１は一対の羽状に刻目を施した隆帯懸垂文がつく土器で、懸垂文の一方は口唇部上にのびて把手となるが、欠損している。３～５も同様の土器であろうか。４は頸部に鋸歯状隆帯を施す。７・８・13は撚糸文を施すタイプで、７は懸垂文を伴わない。第159図・第160図は頸部の資料を示した。頸部の区画は隆帯と沈線とがあり、隆帯には様々な刻目を施すもの、縄文を施文するもの、沈線が加えられるものなどがある。第161図～第164図に胴部と底部の資料を示した。

第165図12～16、第166図・第167図は加曽利Ｅ２式土器を一括した。頸部に無文帯を置いて、口縁部文様と胴部文様を分離するものを基準とした。第165図15・16は頸部をめぐる刺突列と沈線で矢印状の文様を構成し、15ではその内に渦巻文を施している。16では、胴部に２条単位の隆帯懸垂文と３条単位の沈線懸垂文を施す。この２つの土器を特徴づける矢印状の文様は、第197図に示した唐草文系土器の頸部文様と共通しており、口縁部文様がつかない可能性もある。第166図１・２は渦巻文と楕円区画文で口縁部文様帯を構成する。口縁部文様は隆線で構成され、隆線の両側を沈線で縁取っている。３の口縁部文様は、渦巻文を伴う連弧状の構成となっている。７は所謂連弧文土器であろう。大半が胴部には縄文が施文されるが、口縁部区画内には縦位・斜位の沈線で充填されるものが多い。４は波状口縁の深鉢で、波頂部と波底部には蕨手状の渦巻文が施され、口縁部区画内は羽状沈線で充填される。この土器は同部門用が不明だが、口縁部文様の構成や口唇部内面に隆線が施される点など、唐草文系土器と共通する部分が多く、注意を要する。第167図３・６～９は頸部片、10～25は胴部片である。胴部懸垂文は隆帯によるものと沈線によるものとがあり、隆帯は２条単位、沈線は３条単位のものが多い。懸垂沈線間の縄文は磨消しないことを基本とする。12・15～18の蛇行沈線や19の剣先文などもこの時期の特徴の一つである。

第168図～第189図は加曽利Ｅ３式土器を一括した。本河道内出土土器のなかで最も出土量が多い土器群である。この時期の土器を古・中・新に分けると、古段階の土器は少なく、中段階から新段階の土器が多い傾向が認められる。口縁部に山形の突起がつくものも多く、第173図２・５では突起に円孔が施され、第173図８・９では突起の上面に渦巻文が付けられている。第174図１～５の胴部文様は、第175図12・13などの口縁部文様が消失した一群との文様構成と共通しており、これらの土器が共存関係にあることを示す良好な資料となる。第176図１～７は古段階の一群である。口縁部文様の隆帯が太く、胴部の懸垂文の幅が狭く、沈線間の縄文を磨消していないものもある。第178図１は曽利式の系譜を引く土器で、全面に縦位の条線が施される。２は郷戸式大木系と言われる土器で、渦巻文を多用した大きな中空把手が付く。３は口縁部文様を描かない変わった大型土器で、口縁部に横位のナデ痕を残し、胴部には加曽利Ｅ３式の文様が施されている。４は樽形を呈する大型土器で、口縁部楕円区画内と胴部に縦位の条線を施す。第181図21～25は、胴部懸垂文の間に縄文ではなく列点文を充填する土器で、越後地域との関係が考えられる。

第183図８～15、第184図～第189図に、加曽利Ｅ３式段階の浅鉢類を一括した。第183図８～15、第184図１～10はカボチャ形の土器で、無文の口縁部が直立し、頸部には紐通し用の橋状把手がめぐり、胴部

には隆帯と凹線で大柄の渦巻文が構成されるものが多い。また、内面全体と外面隆帯部分に赤漆、外面凹線部分に生漆を塗布したものも多い。第184図11・12はジョッキ形の土器で、片側の肩部に橋状把手が付く。第185図１～６はカボチャ形の一群に類似するが、胴部文様が異なり、器形も個性的なものが多い。１・２は口縁部が片側に寄った位置につく特異な土器で、紐通し用の橋状把手は肩にめぐり、文様は上面の口縁部周囲まで及んでいる。口縁部は欠損しており、残念ながらその形態は判然としない。５は底部が大きく、胴部内湾する個性的な土器で、無文部は底部に至るまで丁寧に研磨が施される。６は小型の両耳壺で、南信以東の土器であろう。文様を構成する沈線は太く深く印刻されており、縄文が施文された区画内に鋸歯状沈線を縦位に施文している。第186図１・２は大型の浅鉢で、口径は１が63㎝、２が60㎝と推定した。１は所謂両耳壺タイプで、文様部には渦巻文が多用される。２は肩部に渦巻文を施した橋状把手がめぐるタイプである。第187図・第188図は通常の両耳壺タイプだが、第187図１・２や第188図８・10は橋状把手を伴わないだろう。第189図１～５は口縁部が内湾する鉢形の土器である。４・５は同個体で、内面に大柄の渦巻文を赤漆で描き、沈線で区画した口縁部外面には生漆を塗布している。

第190図１～２は有孔鍔付土器である。１は胴部がくの字に張り出す異形の土器で、内傾する口縁部に円孔を等間隔に施し、胴部には隆帯で円形の文様を構成する。口唇部外面が突出し、上面は平坦に調整されている。精選した胎土を使用して丁寧につくられており、入念に研磨された内外面には赤色塗彩が施されている。勝坂３式～加曽利Ｅ１式古段階に比定されよう。２は口縁部が直立し、胴部が球形を呈するタイプで、頸部をめぐる隆帯の上に２個一対の円孔が認められる。加曽利Ｅ２式期に比定されよう。

第190図３～５は有孔鍔付土器に類する小型の深鉢である。３は口縁部がやや外傾し、頸部に低い隆線がめぐる。４・５は精選された胎土で丁寧につくられた土器で、内外面とも入念に研磨され、光沢を帯びる。胴部に低い隆帯で文様が構成される。いずれも勝坂３式～加曽利Ｅ１式古段階に比定されよう。

第190図６・７は、端部が強く内湾しながら開く無文の口縁部で、勝坂３式あるいは曽利式古段階の深鉢口縁部であろう。

第190図８～13は、口縁部が内湾しながら開く小型の鉢あるいは浅鉢である。11は口縁部がわずかに肥厚し、12は口唇部外端が突出する。いずれも内外面に研磨が施されており、11・12は内外面に赤色塗彩が認められる。

第191図～第196図に、勝坂式後半～加曽利Ｅ２式までの浅鉢を一括した。赤色塗彩を伴うものも多く、まとまった資料が得られた。

第191図１～３は大型品で、いずれも内外面に赤色塗彩が認められるが、１は内面が口縁部のみ赤色塗彩のようである。１は大波状口縁のもので、口唇部外面が強く突出しており、胎土に石英と金雲母を多量に含む。阿玉台式系の浅鉢か。

第191図４・５、第192図１～５、第193図１～６、第194図１・２、第195図１～６は、隆帯あるいは貼付文で文様が施される一群である。平縁を基調とするが口唇部の形態は多様で、口縁に把手が付くもの（第191図４、第192図４・５）や、文様部に突起を貼り付けるもの（第191図５）もある。文様部では、隆帯に沈線や印刻文などを多用して立体感のある文様が構成され、さらに内外面に赤色塗彩を加えている。

第192図６、第193図７～11、第194図３～６、第196図１～４は隆帯や沈線による文様が施されない一群である。無文の浅鉢と呼ばれることが多いが、器面が入念に研磨された浅鉢のほとんどは、赤漆で文様が描かれていたと考えてよいだろう。第192図６は内外面に赤漆で文様が描かれた土器で、外面には渦巻文と鋸歯状文を組み合わせた文様、内面には渦巻文その他が確認できる。第193図９も同様で、外面に鋸歯文、内面に円形文と区画文が施されている。

第194図７～16は浅鉢の底部片、第196図５～10は胴部片である。胴部片には内外面に赤漆の文様が施されている。

第196図11～14は加曽利Ｅ２式期の浅鉢を一括した。口頸部がくの字に屈曲し、無文の口縁上端が直線的に開く形態で、渦巻文と縦位沈線で文様が構成される。

第197図～第204図に唐草文系土器を一括した。第197図１は無文の口縁部を特徴とする大型の深鉢で、くの字に内折する口唇部がつく。頸部に刺突列を伴う隆線で波状文を５単位施し、胴部懸垂文間に杉綾状沈線を充填している。無文の口縁部は曽利式の影響であろうか。第198図１～９は口縁部文様帯が不明瞭なタイプで、本地域の唐草文系土器の特徴である樽形の器形をとるものが多い。隆線による懸垂文あるいは区画文のなかを沈線で充填する。２は地文に縄文が施文された土器で、等間隔に施した横位２本線の間を縦位沈線で充填する。第199図１は第197図１と同様の土器であろう。第199図２～８、第200図１～３・６～８は口縁部文様帯の区画が明瞭なタイプで、胴部の懸垂文は沈線で施され、その間を杉綾状沈線で充填している。第200図４～５も口縁部文様帯が不明瞭なタイプに含まれようか。第201図１は所謂腕骨文を施す深鉢で、剣先文を伴うことから、越後地域の大木８ｂ式に比定されよう。第201図２～５は特異な形態の一群である。２は受け口状の口縁部が無文となる深鉢で、３は胴部上半が異様にすぼまる。４はバスケット形の把手がつく深鉢で、５は高台が付く深鉢あるいは鉢である。第201図６・７は所謂両耳壺、８～10は浅鉢で、胴部文様が唐草文系になっている。第202図～第204図は特徴的な破片資料を集成した。

第205図は台付き土器の台部を集成した。住居等の遺構ではあまり見かけなかったが、河道内からは数多く出土した。破片資料が多く、なぜか台部が付いた状態での出土はほとんどないため、どの段階の土器に付くのか明確にはできないが、胎土や造り、施文の特徴等から、その多くは勝坂式後半から加曽利Ｅ１式に含まれるであろう。円形の透かし孔を施すものも多く、希に菱形の透かし孔をもつものもある。無文のものの他に、縄文を施文するもの、文様を施すものもある。１～８・13～24・36は透かし孔がつくタイプで、２・21は菱形の透かし孔が施されている。１は胴部の文様が台部にまで及んでいる。３は透かし孔の周囲に沈線を施す。18・19・21～32は縄文が施文されるタイプで、18は下端部にも縄文の施文が認められる。20は撚糸文を施文するもので、唯一の出土である。36は施文された文様から加曽利Ｅ３式に比定される。高さが低く、脚の開きが大きな33～35は形態が36と近似しており、加曽利Ｅ３式段階に比定されよう。

第206図・第207図に加曽利Ｅ４式土器を一括した。第206図５は大波状口縁の深鉢で、波頂部の一つに鳥形の把手が付く。第206図18～21は、微隆線で渦巻文などが構成される壺型の土器で、18・20・21には紐通し用の突起が付く。いずれも器面に研磨が施されて光沢をもち、20の外面には赤色塗彩が認められた。

第208図は称名寺１式土器を一括した。１・８は縄文施文部に円形の刺突列が施される。５は頸部に鎖状隆線がめぐる。20・21は壺形の土器で、注口がつくものもある。22・23は注口付き浅鉢で、大きな橋状把手が付く。

第209図は称名寺２式土器を一括した。４・５は沈線区画内に縄文が、８～12は刺突が充填される。18～20は浅鉢で、20は波頂部に渦巻文が施される。

第210図は称名寺式に伴う素文の大型深鉢である。頸部をめぐる隆線に刻目を施すものと施さないものとがある。４・６・７は隆線の交点に刺突を伴う円形貼付文が施される。１は胴部に縦位の条線を、18・19は斜格子の条線を施文磨る。７は胴部に縄文が施文される。

第211図１～13は三十稲場式土器である。11～13では花弁状の刺突文が施されている。

第211図14～18・20・21は茂沢類型に該当する土器であろう。軽質な印象を受けるものが多く、隆線の交点には刺突が加えられる。

第211図19・22～30、第212図１～21は堀之内１式時を一括した。第211図22・24には橋状把手が付く。

23は口縁部に退化したＣ字状貼付文が付く。第212図18・19・21は大きく開く口縁部内面に渦巻文等を伴う幅広の文様帯が施される。20は口縁部に紐通し用の突起が付く瓢形土器であろうか。

第213図は堀之内２式土器を一括した。30～34は注口土器であろう。

第214図１～16は加曽利Ｂ式土器、17～20は高井東式土器、21～24は晩期終末期の一群である。いずれも出土量は少なく、この時期には埋没河道の利用は意識されなくなったと考えられる。

第215図１～11に口縁部片を、第215図12～25、第216図に底部を一括した。胎土や造りから、いずれも勝坂式終末期前後のものと考えた。胴部があまり膨らまない器形が多く、木葉痕がつくもの（第215図22）や網代痕がつくもの（第216図１・15）もある。また、底面に白色の粘土が付着するものも多いが、遺跡内の調査では白色粘土は確認していない。その使用目的を検討する上で示唆的な痕跡だが、達成できていない。

第217図～第219図は土製円盤を一括した。本埋没河道内では1,000点を超える土製円盤が出土している。第１節でも述べたように意識的に点検した結果、実は多量に出土していることがわかった。確認できたものを対象に、形態・大きさ・時期について集計してみた（表６）。

形態は、円形・楕円形・方形の３種類が認められ、楕円形と方形のタイプは大きなものが多いので、欠損している確立が高いように思う。大きさは、１㎝ほどのものから10㎝を超えるものまであり、円形タイプは２～６㎝の大きさが主体であるが、楕円形と方形タイプは５～10㎝の大きさのものが多い。時期は、中期中葉から堀之内２式まで確認できた。中期では加曽利Ｅ３式土器を使用したものが多いが、細別時期が確定できない中期中葉期も多い。中期中葉期とは、加曽利Ｅ１式を含めたそれ以前の土器群をさしている。後期では堀之内１式土器を使用したものが多いが、後期としたものはその３倍にあたる。そのなかには、粗製土器の多い堀之内２式期のもの

表６　横壁中村遺跡18区１号埋没河道内出土土製円盤　時期別形態別出土量一覧

	円形					楕円形					方形					
	1～2㎝	2～4㎝	4～6㎝	6～8㎝	8～10㎝	2～4㎝	4～6㎝	6～8㎝	8～10㎝	10㎝～	2～4㎝	4～6㎝	6～8㎝	8～10㎝	10㎝～	
阿玉台式			1													1
勝坂式	1	6	4	3	3		1					1				19
焼町		2		2				2								6
曽利古式			1													1
唐草文系古式		4				2		2				1				9
加曽利E1式		3	9	2			2									16
加曽利E2式																0
加曽利E3式		46	48	13	4	2	9	13	24					2		161
加曽利E4式																0
唐草文系新式		15	25	4			6	4	1							55
中期中葉	1	57	40	8	9	3	10	4	3			3	2	2	2	144
中期後葉		21	37	1												59
小計	2	154	165	33	16	7	28	25	28			5	2	4	2	471
称名寺式		3	11	4		1						1	2			22
茂沢類型				2								2				4
三十稲場式		1	4	1		1					1					8
堀之内１式		28	58	26	4			4					4			124
後期	1	133	155	40	3	3	14	11	2		2	8	3			375
小計	1	165	228	73	7	5	14	15	2		3	11	9			533
合計	3	319	393	106	23	12	42	40	30	0	3	16	11	4	2	1004

も含まれていると考えられるが、加曽利Ｂ式以降の土器は埋没河道内からの出土が少ないことから、後期ではやはり堀之内１式土器を使用したものが最も多いと考えてよいだろう。

なお、土製円盤の図は、わかる範囲で土器を正の位置に置いた状態に即して配置している。

第217図１～16は中期中葉期の土器を使用したものを一括した。１・７～11・14・15は楕円形のタイプで、土器を横長に切り取って使用したものが多い。９は横位の文様を横長に配置しているが、10は斜めの隆帯を横に配置しようとしたのであろう。13は胴部の特徴的な隆帯懸垂文を切り取っている。12は第136図２の勝坂３式期大型深鉢の口縁部を使用したものである。

第217図17は中期の土器を使用した方形タイプのもので、小さな円孔が施されている。

第217図18～21は加曽利Ｅ１式土器を使用したもので、胴部を使用したものが多い。

第217図22は加曽利Ｅ２式土器の胴部を使用したものである。

第218図１～14は加曽利Ｅ３式土器を使用したものである。このうち、２・７・９～13は楕円形タイプで、文様に応じて縦長・横長に切り取っている。14は方形タイプで、文様をやや斜めに切り取っている。３は口縁部の渦巻文を上手に切り取っている。

第218図15～23は唐草文系土器を使用したものである。15～17・20・21・23は楕円形のタイプで、縦長に切り取ったものが多い。20・21は特徴的な懸垂文を中央に配置して切り取っている。

第219図１～３は称名寺１式土器を使用したもので、１は円形、２は楕円形、３は方形のタイプである。

第219図４は称名寺式に伴う大型深鉢の頸部を使用したもので、頸部をめぐる隆帯を中央に配置して、横長に切り取っている。

第219図５は茂沢類型を使用したもので、渦巻文の一部を縦長の楕円形に切り取っている。

第219図６～９は三十稲場式土器を使用したもので、特徴的な胴部の刺突文の部分を選択したものが多い。６は方形のタイプである。

第219図10～16は堀之内１式土器を使用したもの、17～22は後期土器を使用したものである。17・19～21は楕円形のタイプで、横長・縦長の両方が認められる。17は深鉢の底部に近い部分を使用したもので、接合関係がなければ見落としているだろう。22は小さいが方形のタイプであろうか。

第220図～第245図に１号埋没河道出土の石器を一括した。この河道は集落内の廃棄場であり、土器と共に多量の石器類も廃棄されている。そのなかには、石器の素材となる原石類、集落内で製作されたことを示す石核・剥片・砕片、石器製作あるいは再調整に係わる工具・道具類石器類なども含まれている。これらは、大規模集落の活動内容の一端を具体的に示すもので、地域の拠点としての性格や役割をも内包する資料と言えよう。それは、本遺跡がカバーする領域内での様々な生産活動を支える物資センターとしての役割と、周辺領域との交易を支える流通センターとしての役割などが想定される。ただし、現段階では土器に対応するような細別時期を特定できる特徴は見いだせないため、これらの多くは、出土土器が主体を占める中期中葉から後期前半代の時間幅に対応する石器群と考えざるを得ない。

１号埋没河道から出土した石器類の総量および特定石材集計を表８～11（294～300頁）に示した。ここでは、そのなかから選出した石器の概要について、注視した点を交えて述べておきたい。

第220図１～18は石鏃、19～24・第221図１～６は石鏃未成品と判断したものを一括した。石鏃は総数40点が出土しているが、石鏃未成品はその倍以上の総数95点が出土している。本遺跡では、石鏃はほとんど黒曜石で製作しており、ほかにチャートと地元産出の珪質変質岩を使用したものがわずかに確認されている。珪質変質岩の石核・剥片・砕片はかなりの量が出土しているが、製作が難しいためか、製品や未成品はわずかしか見つかっていない。黒曜石が産出する八ヶ岳に近いとは言うものの、未成品の多さは注意しておく必要がある。

第221図７～15は石錐を一括した。棒状のタイプと摘みがあるタイプとがあり、いずれも使用している石材は石鏃と共通している。

第221図16・17は黒曜石の石核である。この河道では140点の石核が出土しているが、そのうち黒曜石製26点に対し、珪質変質岩製は85点も出土している。剥片と砕片の数は黒曜石が他を圧倒しているが、重量比では珪質変質岩が黒曜石の約２倍出土している。

第222図１～５は石匙で、定型的な横長のタイプと、３㎝に満たない縦長のタイプとがあるが、出土量はいずれも少ない。５は所謂異形石器であろうか。

第222図６～14、第223図１～13は削器類で、総計72点が出土している。第222図６～14は小型の削器で、石鏃や石錐と同じ石材を使用している。

第224図１～４は加工痕ある剥片、５～７は使用痕ある剥片である。５・６は、柱状節理して薄い剥片の側面に、刃こぼれ状の使用痕がつくもので、石材は緻密で硬質な粗粒輝石安山岩を使用しており、石鋸のような使い方をした可能性が高い。この石材は本遺跡の周囲で調達できるため、これと同じ形態の石器は数多く出土している。７は刃部が丸く摩耗した剥片の破片で､石材は緻密軟質の安山岩である。装身具などの擦り切り加工に使用された可能性が考えられる。

第225図～第227図に打製石斧を一括した。総計160点が出土しており、植物質食料の摂取が盛んであったことを示している。形態は、短冊形を主体に撥形と分銅形が認められる。大半が欠損品で、再調整の痕跡を残すものや、その際に剥離された小片も数多く認められた。ここでは、敢えて完形品ではなく、使用痕跡が明瞭なものや、再調整を示すものを優先的に掲載した。

第228図に磨製石斧を一括した。出土点数は総計17点と少なく、大半が欠損品である。磨製石斧は石材が希少なため、その多くが敲石等に転用されたためであろうか。５は薄手のもので、両面に強い光沢があり、1.2㎝ほどの幅で縦方向の強いスジと段差が認められる。また、被熱による亀裂や剥落が認められる。磨製石斧とするには厚みと重量が不足しており、石製品の可能性もある。

第229図～第231図、第232図１・２に磨石類を一括した。出土点数は総計164点あり、打製石斧と共に植物質食料の摂取が盛んであったことを示している。また、磨石類は中期終末に出現する敷石住居や、後期に流行する配石遺構などでその一部に転用されることも多いことから、被熱痕跡を残すものも多い。

第232図３～６、第233図１は石皿である。出土点数は総計でも14点しかなく、しかも大半が小片での出土である。また、被熱痕跡を残すものも多い。セットで使用する磨石類の量に対して引き合わないが、それはこの器種が長い期間にわたって大切に使われ、その後は転用に転用を重ねて使い切っていることを示しているのであろう。５は緑色片岩製の大型品の破片で、遠隔地から搬入されたものである。

第233図２・３は磨石の破片で、図のように接合するが、３は欠損後に敲石に転用されている。その使用痕跡は、スジ状の潰れが重畳しており、ストーンリタッチャーに認められる痕跡とよく似ている。石器製作時の台として使用されたのではないか。

第234図～第235図は敲石を一括した。総数29点が出土しており、様々な形態がある。第234図１～４は片面に自然面をもつ大きな素材剥片を使用したもので、鋭角な側面に敲打による潰れが認められる。５は棒状の円礫を使用したもの、６は小さな丸い円礫を使用したもので、両端に敲打痕を残す。７は磨石を転用したもので､周辺部に敲打痕が認められる。第235図１・２・４・６～９は棒状あるいは扁平な円礫を使用したもので、側面には磨り面や敲打痕が認められるものが多く、多目的に併用したものであろう。３・５は磨製石斧を転用したものである。

第236図１～３はストーンリタッチャーで、確認できたのはこの３点のみである。スジ状のつぶれ痕は第233図３の使用痕と同じである。

第236図４・５は礫器で総計７点が出土している。４は大型の剥片を使用したもので、下端から側面にかけて敲打による潰れが認められる。５は扁平な円

礫の周囲に敲打による潰れが認められるもので、円形に調整した石製品かもしれない。

第236図６～12、第237図～第241図は砥石を一括した。形態は様々で、磨石と同じ形態のものもあるが、磨り面の状態が植物質のものを磨った磨石と異なることから、手持ちの砥石であろうと判断した。総計51点が出土している。

第236図６～８は小さな円礫に弱い磨り痕が残るもので、土器の製作に係わるものかもしれない。第236図９～12、第237図１～10は手持ちの砥石と判断したもので、通常の磨石より小さなものが多い。磨り面は平滑で、光沢を伴うものもある。第238図１は粗い砂岩を使用したもので、側面も含めて台形状に調整されており、荒砥あるいは軽石製品の模倣であろう。第238図２は磨製石斧の欠損品を使用したもので、上下端部に粗い磨り痕が残る。第238図３・４は牛伏砂岩を使用したもので、緑色片岩と同様に遠隔地から調達したものである。第238図５は薄く扁平な砂岩製の円礫を使用したもので、両側縁に摩耗痕があり、擦り切りに使用された可能性が高い。第239図２は棒状円礫の切断面を主要な磨り面としており、反対側の自然面頭頂部には敲打痕が認められる。第239図３は多孔質安山岩の片面に多方向の磨り面が重複している。第240図１は大きな石核の切断面に明瞭な磨り面が認められる。第241図４は石皿の欠損品を転用した砥石である。

第242図に台石を一括した。総計15点が出土している。大型の台石は配石等に転用されるものが多く、ここでは小さなものを掲載した。１・３は多孔石のように見えるが、くぼみは円錐形ではなく、鍋底状を呈する。２は平坦面の片面に刃ならし様の傷が残る。４は片面に磨り面、もう一方に無数の敲打痕が残る。

第243図は軽石製品を一括した。総数23点が出土している。浅間山の周辺地域では、沢沿いに軽石が点在する場所が多い。本遺跡も浅間山に近いため、軽石の採集は比較的容易な地域である。そのためか、遺跡では軽石の源材も比較的多く出土しており、遺跡内で製作していた可能性が高い。１はやや硬質の軽石を使用したもので、上端部に円孔がつく。大珠の模造品であろうか。２～５は斧形タイプ、７～９は碗形タイプの軽石製品である。６は片側の側面が平坦に加工されている。未成品か。10は下端が方形状に加工していることから、靴形を呈する異形の軽石製品であろう。11は多孔質安山岩を使用したもので、碗形タイプの模造品であろうか。

第244図１～４は石棒を一括した。総数６点が出土している。１は粗粒輝石安山岩製のもので、頭部に荒割り調整の面を残し、頸部に敲打を施して球形の頭部を作り出している。体部は欠損しているが、頸部からの開きがやや大きく、疑問が残る。２は緑色片岩製の破片で、強く比熱しており、表面は剥落して原形を留めない。３は緑泥片岩製のもので、両端面を敲打で調整しているが、欠損品を再調整した可能性が高い。側面は敲打痕を残すものの、軽い研磨でほぼ完成段階に近い。４は粗粒輝石安山岩製のもので、両端部を欠損し、上端部のみが欠損後の調整が認められる。側面には、全面に荒割り後の敲打調整が施されており、一部に最終段階の研磨が施されている。遠隔地から調達した緑泥片岩製の石棒は完成形で搬入している可能性もあるが、安山岩製の石棒は集落内で製作していた可能性が高いと考えられる。

第245図１・２は多孔石で、総計35点が出土している。配石などで多用される石製品で、大型品が多いが、ここでは小型のものを掲載した。

以上の他に石核140点、剥片2,569点、砕片867点が出土している（表９）。小型打製石器類は、大半が黒曜石・チャート・珪質変質岩の３種の石材で作られているが、製作に伴う剥片類の出土量は、それらがこの集落内で製作されていたことを示していると考えてよいだろう（表10）。また、打製石斧を中心とする大型の打製石器類は、黒色頁岩を主体とする頁岩類と、細粒輝石安山岩を主体とする細粒安山岩類で作られており、本遺跡では細粒安山岩類がかなりの割合で優先的に使われている。これらの石器も、この集落内で製作されていたと考えてよいだろう（表11）。